埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第125集

坂戸市

中耕（なかこう）遺跡

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係

埋蔵文化財発掘調査報告

－VI－

本文編

（第１分冊）

１９９３

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

中耕遺跡航空写真（南から）

中耕遺跡航空写真（西から）

第41・42号方形周溝墓全景

第21号方形周溝墓墳丘土層断面

第21号方形周溝墓遺物出土状況（南溝）

第41号方形周溝墓木製二叉鋤出土状況

第21号方形周溝墓出土土器

第21号方形周溝墓出土土器

第58号方形周溝墓出土土器

序

埼玉県中西部の坂戸市は入間台地の北部に位置しており、多くの遺跡に恵まれております。古くは旧石器の散布地や縄文時代早期の集落跡、新しくは歴史時代の集落跡や寺院跡まで人々の連綿とした生活の営みの跡が発見されております。とりわけ古墳時代後期の前方後円墳、県指定史跡である雷電塚古墳や、西に隣接する毛呂山町にまたがり広い分布をもつ古墳時代後期の群集墳、善能寺古墳群などは著名であり、今でも礎石の残る古代寺院跡の勝呂廃寺や和同開珎の出土で脚光を浴びた若葉台遺跡など多様な遺跡が所在しています。

翻って現在の坂戸市は東京のベットタウンとして順調に発展しており、都市開発がさかんです。市北部の越辺川右岸の入西地区では住宅・都市整備公団による土地区画整理事業が計画されましたが、この予定地内の縄文時代の集落跡から中世の鋳造遺構など既存、新発見の11の遺跡について、当事業団が昭和59年度から平成２年度まで７年次に及び発掘調査を実施して記録保存の措置を講じました。

中耕遺跡はこうした遺跡の１つで、２年間の調査の過程で縄文時代の集落と古墳時代初頭の集落・墳墓の複合遺跡と判明しました。とりわけ68基もの方形周溝墓が発掘調査され当時の墓域のほぼ全体が明かとなり、多くの土器が出土し該期の墳墓研究を進める上で、たいへん貴重な資料が得られました。

このたび、ようやくその成果をまとめた報告書を上梓するはこびとなりましたが、学術そして文化財保護の資料として活用いただければ幸いです。

刊行に当り、調査の調整をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、及び調査から本書の刊行までご協力を賜りました住宅・都市整備公団埼玉西宅地開発事務所、並びに地元坂戸市教育委員会、猛暑・寒風の中、調査にまた、資料整理に直接従事いただいた補助員の皆さまに厚くお礼申上げます。

平成５年３月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　　荒　井　修　二

例　言

1　本書は、埼玉県坂戸市大字善能寺字南耕569－２ほか、に所在する中耕遺跡（遺跡略号ＮＫＫ）の発掘調査報告書である。

2　本書は本文編（第１分冊）、図版編（第２分冊）の２冊で構成されている。別冊の図版編には遺構・遺物の写真図版とともに各遺構出土遺物の実測図と古墳時代の土器観察表を収載した。

3　本遺跡の発掘調査は、住宅・都市整備公団による、坂戸入西地区土地区画整理事業に先立つ記録保存のための調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整のもと、住宅・都市整備公団の委託を受け(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　調査に関する届、通知は以下のとおりである。

発掘調査届（(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から文化庁長官あて）

平成元年３月30日付　埼埋文　第591号　（平成元年度）

平成２年３月30日付　埼埋文　第619号　（平成２年度）

文化庁指示通知（文化庁長官から(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長あて）

平成元年10月３日付　委保第5－1067号　（平成元年度）

平成３年６月７日付　委保第5－581号　（平成２年度）

5　発掘調査は平成元年４月１日から平成３年３月31日まで、報告書作成事業は平成３年４月１日から平成５年３月31日まで実施した。（それぞれの組織は2－3ページのとおり）

6　基準点測量、遺構土壌の分析、鑑定等については以下のとおり委託した。

基準点測量：中央航業株式会社、朝日航洋株式会社

土壌・出土遺物材質鑑定：パリノ・サーヴェイ株式会社（考古学研究室）

巻頭図版(土器集合写真)：折原基久

7　本書の主な部分の執筆と編集は資料部資料整理第1課 杉崎茂樹 が行ない、調査員補 山崎えり子 の協力を得た。

また、一部縄文時代の遺物を調査部 黒坂禎二 が、本製品の一部を資料部 福田聖、野中仁 が執筆分担し、（各文末に文責を明記）石製品の材質鑑定を資料部 川口潤 が行った。

8　写真撮影と図版作成、トレースの担当は下記のとおりである。

写真撮影（遺構）　各発掘担当者　　図版作成（遺構・遺物）　杉崎茂樹

写真撮影（遺物）　杉崎茂樹　　トレース（遺構・遺物）　山崎えり子

9　本書にかかわる資料は平成５年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理、保管する。

10　調査の実施から報告書の作成に至るまで下記の方々からご教示、ご指導を賜った。記して謝意を表します。(50音順、敬称略)

赤塚　次郎・伊丹　徹・伊藤　研志・今平　利幸・太田　博之・大塚　孝司・金井塚厚志
菊池　徹夫・車崎　正彦・黒崎　直・小出　輝雄・小森　哲也・小森　紀男・斉藤　彦司
桜井　清彦・清水　進一・常松　幹雄・鳥居　和郎・中島　広顕・西川　修一・根岸　昌子
橋本　博文・早川　一朗・東関千輝男・比田井克仁・松本　完・蓑島　正広・宮瀬　健司
山岸　良二・山崎　武・遊佐　和敏・弓　義明・渡辺　一
坂戸市教育委員会・鳩山町教育委員会・毛呂山町教育委員会・川島町教育委員会

凡　例

1．本書における挿図の指示は次のとおりである。

・X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表わす。

・挿図の縮尺は、住居跡1/60、方形周溝墓1/160、掘立柱建物跡1/60、土壙1/60を原則とした。

・出土遺物の実測図は図版編（第2分冊）に収載した。

・全測図等に示す遺構表記の略号は以下のとおりである。

ＳＪ…竪穴住居跡、ＳＲ…方形周溝墓、ＳＢ…掘立柱建物跡、ＳＫ…土壙、ＳＤ…溝跡、ＳＸ…その他性格不明遺構

・遺構図中に示したドットは遺物の出土位置及び接合関係を示し、ナンバーは遺物実測図のそれと一致する。ドットの種類と遺物の対応は以下のとおりである。

●：土器、○：石（自然石）、☆：石製品、□：焼土、△：炭化材（物）、✡：朱、▣：木製品

・挿図中のスクリーントーンの示すものは以下のとおりである。

：炉　：焼土　：炭化物　：粘土

：朱

（炉のトーン部分は必ずしも焼土化した範囲を示しているわけではない。）

2．出土遺物の説明は縄文時代のものについては本文中に観察を記述した。

また、古墳時代の遺物のうち、石製品や木器等は本文中に記載したが、土器については図版編（第2分冊）に観察表を作成して収載したのでそちらを参照されたい。

目　次

序
例　言
目　次
本文編（第1分冊）
Ⅰ　発掘調査の契機と経過……1
　1．発掘調査に至る経過……1
　2．発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織……3
　3．遺跡発見の経緯……4
　4．発掘調査及び整理事業の経過……5
Ⅱ　遺跡の立地と環境……6
　1．遺跡の立地……6
　2．周辺の遺跡……7
　3．事業地内の遺跡……10
Ⅲ　遺跡と遺構の概要……17
Ⅳ　縄文時代の遺構及び出土遺物……20
　1．住居跡……20
　2．土壙……42
　3．遺構外出土遺物……47
Ⅴ　古墳時代の遺構及び出土遺物……48
　1．住居跡……48
　2．方形周溝墓……151
　3．土壙……264
　4．掘立柱建物跡……273
　5．その他の遺構……278
Ⅵ　結　語……281
　1．出土土師器の分類、編年試案とその位置づけ……281
　2．古墳時代の集落と方形周溝墓群の変遷……303
　3．方形周溝墓出土木製品について……306
　4．中耕遺跡の調査の意義……311
Ⅶ　付　編……319
　1．出土遺物の自然科学分析の契機……319
　2．自然科学分析の意義……319
　中耕遺跡出土遺物の自然科学分析報告（パリノ・サーヴェイ株式会社）……320

図版編（第2分冊）
　古墳時代土器観察表……P367－424
　出土遺物実測図……P425－514
　遺構図版……図版　1－143
　遺物図版……図版144－243
　自然科学分析報告……図版244－258

挿図目次(本文編/第1分冊)

第1図　埼玉県の地形と遺跡の位置……6
(1/800,000)
第2図　中耕遺跡と周辺の遺跡分布……9
(1/100,000)
第3図　入西地区土地区画整理事業地内の遺跡分布(1/10,000、付:地形模式断面)…11
第4図　遺構全体図(1/1,600、付：遺跡の基本土層)……19
第5図　縄文時代の遺構分布(1/1,600)……21
第6図　第1号住居跡実測図……22・23
第7図　第2号住居跡実測図……25
第8図　第3号住居跡実測図……25
第9図　第4号住居跡実測図……26
第10図　第5号住居跡実測図……28
第11図　第6号住居跡実測図……29
第12図　第7号住居跡実測図……30
第13図　第8・9号住居跡実測図……31・32
第14図　第10号住居跡実測図……36・37
第15図　第11号住居跡実測図……38
第16図　第12号住居跡実測図……39
第17図　第13号住居跡実測図……40
第18図　第14号住居跡実測図……41
第19図　第1－5号土壙実測図……43
第20図　第6－10号土壙実測図……44
第21図　第11－15号土壙実測図……45
第22図　第16－21号土壙実測図……46
第23図　古墳時代の遺構分布……49
(住居跡・掘立柱建物跡・土壙他、1/1,600)
第24図　第15号住居跡実測図……50
第25図　第16号住居跡実測図……51
第26図　第17号住居跡実測図……53
第27図　第18号住居跡実測図……54
第28図　第19号住居跡実測図……55
第29図　第20号住居跡実測図……57
第30図　第21号住居跡実測図……59・60
第31図　第22号住居跡実測図……61
第32図　第23号住居跡実測図……62
第33図　第24号住居跡実測図……63
第34図　第25号住居跡実測図……64
第35図　第26号住居跡実測図……65・66
第36図　第27号住居跡実測図……68
第37図　第28号住居跡実測図……69
第38図　第29号住居跡実測図……70・71
第39図　第30号住居跡実測図……72・73
第40図　第31号住居跡実測図……75
第41図　第32号住居跡実測図……77
第42図　第33号住居跡実測図……78・79・80
第43図　第34号住居跡実測図……81
第44図　第35号住居跡実測図……82・83
第45図　第36号住居跡実測図……85・86
第46図　第37号住居跡実測図……87
第47図　第38号住居跡実測図……89・90
第48図　第39号住居跡実測図……92・93
第49図　第40号住居跡実測図……94・95
第50図　第41号住居跡実測図……95
第51図　第42号住居跡実測図……97
第52図　第43号住居跡実測図……99
第53図　第44号住居跡実測図……100
第54図　第45号住居跡実測図……101
第55図　第46号住居跡実測図……103
第56図　第47号住居跡実測図……104
第57図　第48号住居跡実測図……105
第58図　第49号住居跡実測図……107・108
第59図　第50号住居跡実測図……105
第60図　第51・52・53号住居跡実測図…110・111
第61図　第54号住居跡実測図……114
第62図　第55号住居跡実測図……114
第63図　第56号住居跡実測図……116
第64図　第57・58号住居跡実測図……117
第65図　第59号住居跡実測図……119
第66図　第60号住居跡実測図……119
第67図　第61号住居跡実測図……120・121
第68図　第62・63・64号住居跡実測図……123
第69図　第65号住居跡実測図……125
第70図　第66号住居跡実測図……125
第71図　第67号住居跡実測図……126
第72図　第68号住居跡実測図……128
第73図　第69号住居跡実測図……129
第74図　第70・71号住居跡実測図……129
第75図　第72号住居跡実測図……133
第76図　第73号住居跡実測図……133
第77図　第74号住居跡実測図……134
第78図　第75号住居跡実測図……135
第79図　第76号住居跡実測図……137
第80図　第77号住居跡実測図……137

第 81図　第78号住居跡実測図 …… 138・139
第 82図　第79号住居跡実測図……144
第 83図　第80号住居跡実測図……144
第 84図　第81号住居跡実測図……145
第 85図　第82号住居跡実測図 …… 146・147
第 86図　第83号住居跡実測図……148
第 87図　第84号住居跡実測図……148
第 88図　第85号住居跡実測図……149
第 89図　第86号住居跡実測図……149
第 90図　第87号住居跡実測図……150
第 91図　方形周溝墓の分布(1/1,600) …… 151
第 92図　第1号方形周溝墓実測図 …… 153
第 93図　第2号方形周溝墓実測図 …… 153
第 94図　第3号方形周溝墓実測図 …… 156
第 95図　第4号方形周溝墓実測図 …… 156
第 96図　第5・6号方形周溝墓実測図……157
第 97図　第7号方形周溝墓実測図 …… 159
第 98図　第8号方形周溝墓実測図 …… 160
第 99図　第9号方形周溝墓実測図 …… 160
第100図　第10号方形周溝墓実測図……161
第101図　第11号方形周溝墓実測図 … 163－165
第102図　第12号方形周溝墓実測図……167
第103図　第13号方形周溝墓実測図 … 169・170
第104図　第14号方形周溝墓実測図……172
第105図　第15号方形周溝墓実測図……172
第106図　第16号方形周溝墓実測図……173
第107図　第17号方形周溝墓実測図……175
第108図　第18号方形周溝墓実測図……177
第109図　第19号方形周溝墓実測図……178
第110図　第20号方形周溝墓実測図……179
第111図　第21号方形周溝墓実測図 … 181－191
第112図　第22号方形周溝墓実測図……193
第113図　第23号方形周溝墓実測図……195
第114図　第24号方形周溝墓実測図……195
第115図　第25号方形周溝墓実測図……197
第116図　第26号方形周溝墓実測図……198
第117図　第27号方形周溝墓実測図……199
第118図　第28号方形周溝墓実測図……201
第119図　第29号方形周溝墓実測図……202
第120図　第30号方形周溝墓実測図……203
第121図　第31号方形周溝墓実測図……205
第122図　第32号方形周溝墓実測図 … 206・207
第123図　第33号方形周溝墓実測図 … 209・210
第124図　第34号方形周溝墓実測図……212
第125図　第35号方形周溝墓実測図……213
第126図　第36号方形周溝墓実測図……215
第127図　第37号方形周溝墓実測図……217
第128図　第38号方形周溝墓実測図……217
第129図　第39号方形周溝墓実測図……218
第130図　第40号方形周溝墓実測図……218
第131図　第41号方形周溝墓実測図 … 221－225
第132図　第42号方形周溝墓実測図 … 227－231
第133図　第43号方形周溝墓実測図……233
第134図　第44号方形周溝墓実測図……233
第135図　第45号方形周溝墓実測図……234
第136図　第46号方形周溝墓実測図……236
第137図　第47号方形周溝墓実測図……237
第138図　第48号方形周溝墓実測図……238
第139図　第49号方形周溝墓実測図 … 241・242
第140図　第50号方形周溝墓実測図……243
第141図　第51号方形周溝墓実測図……244
第142図　第52号方形周溝墓実測図……245
第143図　第53号方形周溝墓実測図……247
第144図　第54号方形周溝墓実測図……248
第145図　第55号方形周溝墓実測図……251
第146図　第56号方形周溝墓実測図……251
第147図　第57号方形周溝墓実測図……252
第148図　第58号方形周溝墓実測図……253
第149図　第59号方形周溝墓実測図……254
第150図　第60号方形周溝墓実測図……256
第151図　第61号方形周溝墓実測図……257
第152図　第62号方形周溝墓実測図……259
第153図　第63号方形周溝墓実測図……261
第154図　第64号方形周溝墓実測図……261
第155図　第65・67号方形周溝墓実測図……262
第156図　第66号方形周溝墓実測図……263
第157図　第68号方形周溝墓実測図……263
第158図　第22－27号土壙実測図……266
第159図　第28－31号土壙実測図……267
第160図　第32－35号土壙実測図……268
第161図　第36－40号土壙実測図……269
第162図　第41－45号土壙実測図……270
第163図　第46－49号土壙実測図……271
第164図　第50－52号土壙実測図……272
第165図　第1・2号掘立柱建物跡実測図……274
第166図　第3・4号掘立柱建物跡実測図……275

第167図　第5号掘立柱建物跡実測図 …… 276
第168図　第6号掘立柱建物跡実測図 …… 277
第169図　第7号掘立柱建物跡実測図 …… 278
第170図　第1・2号性格不明遺構実測図……279
第171図　第1－3号溝跡実測図……280
第172図　出土土師器編年試表 …… 284－299
第173図　方形周溝墓編遷図……305
付　図　中耕遺跡全測図(1/800)

表目次

方形周溝墓の木製品……308・309
住居跡計測表……314・315
方形周溝墓計測表……316・317
土壙計測表 …… 318

Ⅰ　発掘調査の契機と経過

1．発掘調査に至る経過

首都圏における人口増加の波は著しく、全国の三分の一の人口が集中している。埼玉県ではそれに対応するため、住宅・都市整備公団等を中心に住宅対策及び地域環境整備計画が進められている。

坂戸市入西（西部）地区については、住宅・都市整備公団より区画整理方式による宅地開発事業が計画され、昭和55年度から事業が具体化して用地買収に着手した。

予定地内の埋蔵文化財について、住宅・都市整備公団では文化庁との間で取り交された『住宅・都市整備公団の事業施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書き』に基づき、埼玉県教育委員会へ「坂戸市入西（西部）地区における埋蔵文化財の取扱いについて」照会した。

県教育委員会では、埋蔵文化財遺跡地名表に基づき、昭和56年１月20日付け教文第918号をもってつぎのとおり回答した。

1　文化財の所在

名　称　坂戸市 No.99 遺跡（柊塚古墳）

所在地　坂戸市大字堀込字桑原157

種　別　古墳　　時　代　古墳時代後期

上記のほかに条里遺跡及び畑地部分に集落遺跡の所在が予想される。

2　取扱いについて

(1)　開発予定地内は事前の遺跡分布調査及び必要に応じて試掘調査を実施して、遺跡の所在を確認する必要がある。

(2)　上記の結果をもとに埋蔵文化財ができるだけ現状保存できる開発計画を策定することが望ましい。

(3)　計画上、やむをえず現状を変更する場合は、文化財保護法第57条の３第１項の規定により、事前に文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出して、記録保存のための発掘調査を実施すること。

(4)　発掘調査を実施する場合は、事前に坂戸市教育委員会及び県教育局文化財保護課と協議すること。

住宅・都市整備公団と県教育委員会では予定地内の遺跡の取扱いについて協議を重ねた結果、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託して昭和59年度から発掘調査を実施することに決定した。

文化財保護法に基づき、住宅・都市整備公団からは埋蔵文化財発掘通知、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官あて提出され調査が開始された。

中耕遺跡の発掘調査については、平成１年４月１日から平成３年３月31日まで実施した。

（教育局生涯学習部文化財保護課）

2．発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織

(1)中耕遺跡発掘調査（平成元年度）

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長	荒井　修二
副理事長	百瀬　陽二
常務理事兼管理部長	古市　芳之
理事兼調査研究部長	吉川　國男

管理部

管理課長	関野　栄一
主　事	江田　和美
主　事	岡野美智子
主　事	本庄　朗人
主　事	斉藤　勝秀

調査研究部

副部長	塩野　博
第二課長	昼間　孝次
主任調査員	杉崎　茂樹
主任調査員	富田　和夫

(2)中耕遺跡発掘調査（平成2年度）

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長	荒井　修二
副理事長	早川　智明
常務理事兼管理部長	古市　芳之
理事兼調査研究部長	吉川　國男

管理部

庶務課

庶務課長	高田　弘義
主　査	松本　晋
主　事	岡野美智子

経理課

経理課長	関野　栄一
主　任	江田　和美
主　事	本庄　朗人
主　事	斉藤　勝秀

調査部

副部長	塩野　博
第二課長	昼間　孝次
主任調査員	杉崎　茂樹
	馬橋　泰雄
	赤熊　浩一
調査員	大屋　道則
	福田　聖
	佐藤　康二

(3)整理・報告（平成3年度）

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長	荒井　修二
副理事長	早川　智明
常務理事兼管理部長	倉持　悦夫
理事兼調査部長	栗原　文蔵

管理部

庶務課

庶務課長	高田　弘義
主　査	松本　晋
主　事	長滝美智子

経理課

経理課長	関野　栄一
主　任	江田　和美
主　事	福田　昭美
主　事	腰塚　雄二
主　事	菊池　久

資料部

資料部長	中島　利治
副部長兼資料整理第一課長	増田　逸朗
主任調査員	杉崎　茂樹

(4)整理・報告書（平成4年度）

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長	荒井　修二
副理事長	早川　智明
常務理事兼管理部長	倉持　悦夫
理事兼調査部長	栗原　文蔵

管理部

庶務課

庶務課長	萩原　和夫
主　査	贄田　清
主　事	菊池　久

経理課

経理課長	関野　栄一
主　任	江田　和美
主　事	長滝美智子
主　事	福田　昭美
主　事	腰塚　雄二

資料部

資料部長	中島　利治
副部長兼資料整理第一課長	増田　逸朗
主任調査員	杉崎　茂樹

3．遺跡発見の経緯

中耕遺跡は坂戸入西地区土地区画整理事業実施予定地内の分布調査で、試掘調査を実施して新たに発見された遺跡である。

事業地内はその北方を東流する越辺川の形成する沖積地で、大半が水田となり、一部が台地にかかる南西部分に遺跡の所在の可能性が高いものと予想された。

分布調査でははたして、台地部分で土器の散布があり、金井遺跡や塚の腰遺跡、稲荷前遺跡などが発見された。しかし水田の広がる沖積地部分については、「入西条里」の条里、水田遺構の存在が予想されたものの、すでに埼玉県文化財地図登載の「柊塚古墳」とその北東に低い塚状の遺構が3基ほど所在するほか現水田の耕作土に阻まれ、表面観察のみでは遺跡の存在確認は至難であった。

そこで本格的な発掘調査が昭和60年度に開始されたのを契機に、粗略ながら重機を用いた試掘を水田部分で実施して遺跡の発見を試みた。

法切り用の平バケットを装着した重機を用い、排水の極めて悪い水田部分では表面をほんの20－30ｃｍ程の掘削でもすぐに湧水するといった状況で、遺構確認面が現表土下、最深部で１ｍに満たないとはいっても確認調査は容易でなく、しばしば重機が軟弱な地盤にキャタピラーをとられ、遺跡が発見された場合の本調査実施時の排水対策がたいへんなものになるであろうことがすでに予想された。

試掘の結果、条里に関係する遺構の発見こそできなかったが、事業地の中西部分の「柊塚古墳」の周囲とその北東地区でも遺跡の所在を確認することができた。

それまで古墳であるとの確証も得られず、中世の塚ではないかとの推定もなされていた柊塚古墳は古墳時代初頭の墳丘の遺存する大規模な方形周溝墓であり、周囲に同時期の周溝墓が群在することが判明、この遺跡は「広面遺跡」と名付けられた。

また、北東に小さな谷を隔てて発見された遺跡は南西から北東に細長く形成されたシルトまたは粘土質の再堆積ローム状土（分析結果ではロームと断定できないが、色調はロームに酷似する。以下本文中では便宜的に「ローム」と表現する）を主体とした自然堤防上に立地していることがわかった。これは広面遺跡と連続した遺跡であり、同様に古墳時代初頭の相当な数の周溝墓が存在していることが確認され、塚状の遺構は柊塚同様、墳丘をもった大規模な周溝墓で、ほぼ同時期の集落もその下に複合していることが判明した。

そしてこの遺跡はその分布する小字名をとって「中耕遺跡」と命名された。

この時点で中耕遺跡の範囲と判明した地域の北東部に住宅・都市整備公団による遊水地が造成され遺構の掘削が進行中であった。そこで急きょ住宅・都市整備公団側に掘削の中止を申入れたが、遺憾にも遺跡北部の遺構が破壊され、遺跡の平面的な広がりを厳密に把握することが不可能となってしまった。

また、この遊水地へ流入する水路の掘削と併設される工事用道路の造成は住宅・都市整備公団側のどうしても譲歩できない事業で、このため遺跡内を南西から北東に幅10ｍほどの部分を帯状に調査を先行させねばならぬという調査実施者側としては辛い状況が生じてしまった。

4．発掘調査及び整理事業の経過

(1) 平成元年度

昭和63年度に調査区北東の遊水地にとりつく排水路の造成予定部分を一部調査したが、この4月より本調査を開始。今年度は調査区を排水路の南部分15,000㎡を対象とする。地盤が軟弱なため鋼板を敷き、調査区西側から法切り用の平バケットを装着したバックホウを用い表土除去。

墳丘が遺存しない周溝墓も表土下に遺構の存在を予想、可能なものは方台部を現表土残して除去。この結果、水田耕作土下に旧表土、さらにシルト質の再堆積ロームを主体とする基盤層を検出、この層に掘込まれた周溝墓17基、竪穴住居跡9軒、土壙3基を確認するも条里遺構は検出できず。

遺構の集中する部分の南側に現在使用中の水路がある。この南は小さな谷地形とみられ、試掘するも、遺構の検出はなく、この水路から北を調査区とした。湧水に悩まされつつ9月までに調査を完了、以降、同年度中に調査予定の足洗、金井B遺跡の調査のため本遺跡の調査を中断する。

(2) 平成2年度

公団に、排水路と工事用道路を現在の南側に付け替えることを要請、遺跡の北半約20,000㎡を4月から調査を開始。昨年度同様平バケットのバックホウで表土を除去、北東部の遊水地に近い部分から調査を開始し順次西方に進捗する。遺構数は新たに住居跡70軒、方形周溝墓47基、掘立柱建物跡と思われるピット群、溝3条を確認したが条里遺構はやはり確認できない。3基あった塚状の高まりはやはり大形の方形周溝墓の遺存墳丘と判明した。一部の住居跡はプランが円形で、焼石を含む土壙なども検出、縄文時代の集落との重複を確認した。

金井B遺跡の調査の推進のため当初調査員2名体制で臨み、10月、同遺跡の調査終了にともない6名体制で急ピッチで調査、方形周溝墓のコンター作成は測量会社に委託し効率化を図る。

年末、公団による調査区西側の道路及び水路の付替え工事で土層断面に遺構を確認、住居及び方形周溝墓の一部と判断し、工事の一時中止と調査実施したい旨、要請。表土除去の結果、住居跡・方形周溝墓各4を確認、急遽調査を実施した。

年が明け、調査は調査区西部を残すのみとなるがきびしい残日程の状況は変らない。3月19日、航空写真撮影、調査も終局を迎える。小雨降る中、3月31日測量図を完成、調査を終了する。

(3) 平成3年度

2年次にわたる整理・報告書作成事業に着手。水洗、註記の大方の部分は現場でこなしていたので今年度は遺構のトレース用原図、土器の接合、実測図の作成を主に進める。遺物の実測点数は土器、石器等合計1,300点余、一部はパーソナルコンピューターを利用する。

(4) 平成4年度

遺構、土器のトレース、木製品等の実測、写真撮影等を9月までに終了、以降図版作成、原稿を執筆。年末に印刷業者を決定し年度末に報告書刊行、資料を埋蔵文化財センターに搬入する。

II　遺跡の立地と環境

1．遺跡の立地

中耕遺跡は東京都豊島区池袋と埼玉県大里郡寄居町を結ぶ東武鉄道東上線の北坂戸駅の西約3km、坂戸市と鳩山町の境を東流する越辺川右岸の水田中に位置し、行政的な地番は坂戸市大字善能寺（飛地）字南耕569－2ほかである。調査前の地目は水田で、付近の標高は約27mであった。

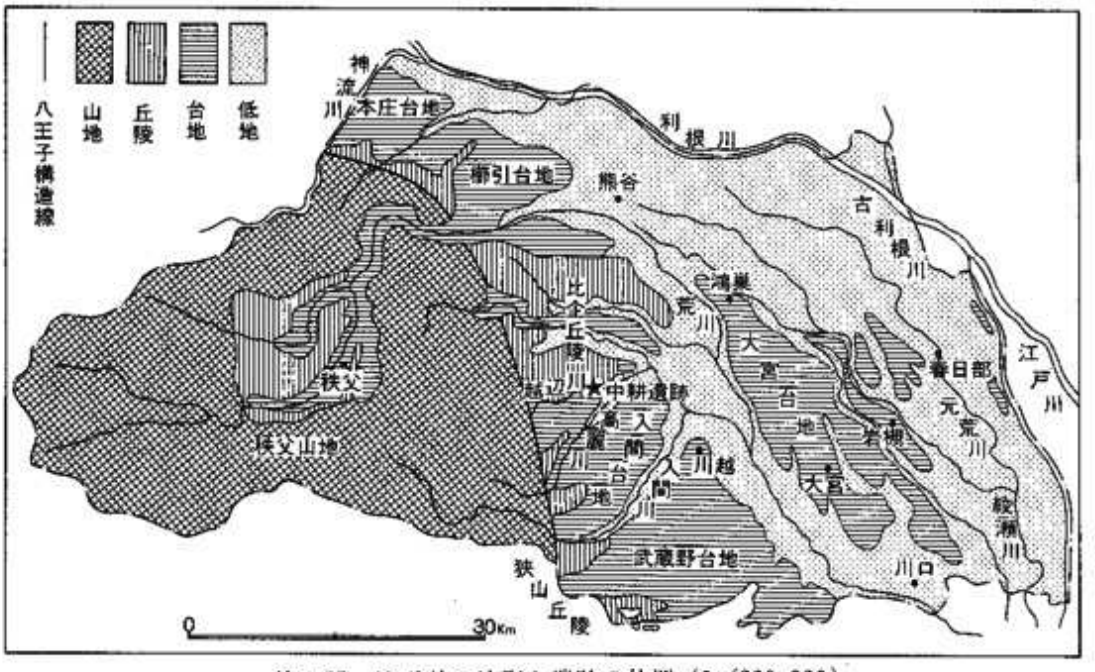
付近は肥沃な水田地帯が広がり、北には越辺川を挟み比企丘陵の南端の岩殿丘陵を、南には入間台地の北端で舌状に張出す毛呂台地を間近にできる立地である。

埼玉県西部は秩父山地が連なり、その東方に本庄台地や櫛引台地、比企丘陵、入間台地、武蔵野台地が接している。秩父山地を源流とする河川はこの台地部や丘陵を開析し、県東半部の平野を潤して東京湾へと注ぐ。代表的な河川としては北から小山川、荒川、都幾川、越辺川、高麗川、入間川（名栗川）等がある。このうち、外秩父山地の入間郡越生町笹郷付近に源を発する越辺川は、越生梅林付近まで北流した後東に向きをかえ、坂戸市上吉田付近で高麗川に合流している。

この間、坂戸市西部の入西付近では比企丘陵と入間台地とを開析し、両郡の境界となり、下流地域に肥沃な沖積地を形成し始める。

しかし、この沖積地内は現在も大雨の際、洪水が付近の住民の不安の種であるように、越辺川の流れは古来から不安定で、平坦に見える現水田面下の地形は決して単純ではなく、多くの流路跡とこれにより形成された自然堤防、そして谷地形などが複雑に入り組んでいる。そして、この自然堤防状には点々と遺跡が形成されていることは、水田中から突発的に発見される遺物から推定できる。

中耕遺跡も現在は氾濫土に埋没しているが、そうした沖積地内の自然堤防上に位置している。基盤土は基本的には二次堆積したシルト系ロームと礫からなり、その幅約100m、長さ約250mに及ぶ不整楕円形状の広がりをみせ、これがほぼ遺跡の広がりといってよい。



第1図　埼玉県の地形と遺跡の位置（1／800,000）

2．周辺の遺跡（遺跡名の後のカッコの中は第2図の地図中の位置と文献）

中耕遺跡発見の遺構は縄文時代早期末－前期前葉・中期中葉の集落、そして古墳時代初頭の集落、方形周溝墓がある。以下、本遺跡の所在する坂戸市とその周辺の関連遺跡について概括的に述べる。

現在、遺跡の発掘対象地の多くが台地上に限定されていることから遺跡発見例はほとんど台地上であり、中耕遺跡のような沖積地内の自然堤防上の集落、墳墓遺跡の調査例は皆無である。以下に記載するほとんど全ての遺跡は台地上の所在である。

旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡の調査例は坂戸市周辺ではごくわずかで、縄文早期になると周辺市町村を含め約15個所程が知られる。しかし、明確な住居の検出はなく貧弱な内容である。

早期の遺跡としては、坂戸市内の岡山遺跡で撚糸文系土器の包含層が確認されたほか（66：埼玉県教育委員会－以下「県教委」と略、1987）、東松山市立野遺跡（41：包含地、子母口、野島、茅山式も出土、今井ほか1980）や舞台遺跡（34：土壙9基、井上ほか1979）で田戸下層式土器の出土が知られている。この他は条痕文系土器の出土遺跡が多く坂戸市鶴ケ岡遺跡（92：炉穴7、打製石斧、坂戸市教委1983）、東松山市大塚原遺跡（40：水村ほか1980）、緑山遺跡（38：炉穴50、竪穴遺構4、今井ほか1982）などで茅山式土器が出土しているほか、鶴ヶ島市雷電池東遺跡（97：炉穴、鶴ヶ島町教委1985）でも鵜ケ島台・茅山下層が出土している。

前期は住居の検出例があるが、遺跡数は相変らず少ない。坂戸市内では大家小学校遺跡（68：黒浜期住居跡1、土壙3、坂戸市教育委員会1987）、多和目渡戸遺跡（71：花積下層、黒浜式土器散布、前期後半の住居跡1、集石土壙3、坂戸市教委1983）、木曽免遺跡（90：住居跡8、関山式土器、坂戸市教委1987）、附島遺跡（87：住居跡1、関山式土器、坂戸市教委1985）等が、周辺では、東松山市緑山遺跡（38：前出.住居跡3、黒浜－諸磯式土器、今井宏ほか1982）等が知られている。

中期になると遺跡数は二倍以上になり、住居跡の検出数も格段に増える。坂戸市内では城山遺跡（70：住居跡3、阿玉台・勝坂・加曽利Ｅ式土器、坂戸市教委1983）、中小坂遺跡（93：住居跡3、勝坂・加曽利Ｅ式土器、貞末1972）、花影遺跡（72：住居跡14、土壙、埋甕、阿玉台・勝坂・加曽利Ｅ式土器、谷井1974）、塚の越遺跡（56：住居跡2、加曽利Ｅ式土器、昼間1991）等がある。

隣接地では東松山市岩の上遺跡が県内屈指の加曽利Ｅ式の集落として知られているほか（11：住居跡21、野部ほか1973）、鶴ヶ島市脚折山田遺跡（94：住居跡5、加曽利Ｅ式土器、鶴ヶ島町教委1978）等の他、西方の毛呂山町や越生町でも中期の遺跡数は多い。

後期以降はまことに遺跡の発見例は少なく、市内では塚越渡戸遺跡（83：坂戸市教委1987）と足洗遺跡（63：埼埋文1990）で称名寺式土器を出土する住居跡の発見があったほか、貯蔵穴や墓壙と考えられるわずかな遺構の調査例があるのみである。

弥生文化の坂戸市周辺への波及は中期まで待たねばならない。地域的には北関東と南関東の文化の接点にあたり、両系統の土器が出土する。

中期の遺跡の坂戸市内の調査例は附島遺跡（87：宮ノ台式土器、住居跡2、方形周溝墓1、坂戸市教委1985）、木曽免遺跡（90：前出.宮ノ台期住居跡2、環壕と思われるＶ字溝－あるいは後期？、坂戸市教委1987）、塚越渡戸遺跡（83：前出.住居跡、櫛描文系土器、打製石斧、坂戸市教委1987）等

が、周辺地域では川越市登戸遺跡（103：住居跡4、宮ノ台式土器、埼玉考古学会1976、県史編さん室1982）、東松山市大西遺跡（33：宮ノ台期周溝墓6、壺棺墓2、鈴木1991）、雉子山遺跡（13：住居跡2、櫛描文系式土器、磨製石鏃）等がある。

弥生時代後期になると埼玉県中西部は縄文で装飾された独特の吉ヶ谷式土器を特徴とする文化圏が形成される。同時に中期以来の櫛描文系土器も盛行し、遺跡も増加する。

吉ヶ谷式土器を出土する遺跡は市中では鶴ケ岡遺跡（92：前出.住居跡4、坂戸市教委1983）、附島遺跡（87：前出、住居跡2、坂戸市教委1985）、新しき村遺跡（69：遺構は不明、集落？、坂戸市教委1983）などが知られ、一方、櫛描文系の土器を出土する遺跡は石井前原遺跡（80：住居跡1、坂戸市教委1988）、相撲場遺跡（75：住居跡3、南関東系土器も混在、谷井1973）等がある。

坂戸市周辺の弥生後期の遺跡では東松山市岩鼻遺跡（17：住居跡14、櫛描文系土器、磨製石鏃、土製勾玉、東松山市1981）、駒堀遺跡（42：住居跡14、吉ヶ谷式土器、少量の櫛描文系、弥生町式土器が伴出、栗原ほか1974）、杉の木遺跡（37：住居跡1、吉ヶ谷式土器、小峰1963）、滑川町屋田遺跡（2：住居4、吉ヶ谷式式土器、今井ほか1984）、川越市霞ヶ関遺跡（105：住居跡45以上、吉ヶ谷、櫛描文系土器、昼間1974、埼玉県1982）等が調査されている。

墓制の面では壺棺墓もあるが方形周溝墓も多い。坂戸市内では花影遺跡（72：前出.四隅切れ周溝墓8、吉ヶ谷式土器、谷井1974）、柊遺跡（79：四隅切れ周溝墓4、最大一辺22m、周溝内壺棺3、櫛描文系土器、埼玉県教委1989、1990）。坂戸市周辺では東松山市の観音寺遺跡（18：四隅切れ周溝墓1、主体部土壙内から銅釧、剣出土、埼玉県立埋文センター1992）、駒堀遺跡（42：四隅切れ周溝墓1、栗原ほか1974）、川越市霞ケ関遺跡（105：前出、四隅切れというが詳細不明、昼間1974、埼玉県1982）等がある。

弥生時代末（古墳出現期）になると東海系地方の強い影響が土器の器形に反映される。煮沸形態の甕形土器は有脚の台付甕に、供献形態の土器群では高杯の杯底部が有稜の直線的な器形に取って代り、小形器台や大形の坩形土器が出現するなど旧来の型式を塗り替え、古墳文化の波及を示す。

古墳出現期－古墳時代前期の遺跡は、坂戸市内では中耕遺跡の南方の稲荷前遺跡（55：住居跡10、埼埋文1988）、長岡遺跡（52：住居跡11、坂戸市教委1987、坂戸市1992）、木曽免遺跡（90：前出.住居跡13、坂戸市教委1987）等があり、周辺地域では東松山市五領遺跡（19：住居跡120、石釧片、金井塚1963）、番清水遺跡（24：住居跡23、埼玉県遺跡調査会1968）、岩鼻遺跡（17：前出、住居跡9、土製勾玉、磨製石鏃、宮島1989）、附川遺跡（15：住居跡6、今泉1974）、桜山遺跡（36：住居跡3、吉ヶ谷式土器、水村1981）、根平遺跡（35：住居跡6、吉ヶ谷式土器、水村ほか1980）、下道添遺跡（27：住居跡19、坂野1987）、代正寺・大西遺跡（33：前出、鈴木1991）、鶴ケ島市鶴ケ丘遺跡（99：住居跡37、小久保1976）、川越市女堀遺跡（104：住居跡7、立石1987）などが当該期の集落である。

この時期の墓制は方形周溝墓が主体で、中耕遺跡の他では広面遺跡（60：出現－前期周溝墓22、村田1990）、稲荷前遺跡（55：前出、出現－前期周溝墓35、埼埋文1988）東松山市下道添遺跡（27：前出、出現－前期周溝墓13、坂野1987）、川越市登戸遺跡（103：前出、周溝墓4、埼玉県1982）等で多くの調査例がある。

中耕遺跡や広面、稲荷前遺跡など面的調査のできた遺跡での各型式の周溝墓の分布状況と出土土

第2図　中耕遺跡と周辺の遺跡分布（1／100,000）

器から、周溝墓の形態が四隅切れから（一隅切れを含めた）全周形系へと出現期－古墳時代前期の古い段階で転換されていることが推定できる。また、比企地方の古式古墳である山の根（8：埼玉県1982、埼玉県教委1991）、諏訪山29号墳（31：県史編さん室1986）、根岸稲荷神社古墳（29：埼玉県教委1991）などが前方後方墳の形態で築造が開始されている状況があるが、中耕遺跡や、下道添遺跡での前方後方形と考えられる周溝墓の存在は、地域首長へと飛躍する前段階の小地域首長の析出を示すものだろう。これら前方後方墳以後、比企地方の最高位首長は、諏訪山古墳（32：金井塚1970）や野本将軍塚古墳（21：金井塚1980）のような前方後円墳を築造するが、入間台地には現在までのところ前・中期の前方後方墳、前方後円墳は発見例がない。

古墳時代後期以降は遺跡規模はさらに拡大傾向を示す。桑原遺跡（57：村田1992）や東松山市舞台遺跡（34：前出、井上1979）は後期の大集落で、坂戸市内の綱山古墳（76：金井塚1980）や雷電塚古墳（88：県教委1991）のような前方後円墳のほか石上神社（64：金井塚1980）、土屋神社（73：同左）、牛塚山古墳（91：同左）といった大形円墳のほか、善能寺・苦林古墳群（65：坂戸市教委1988、ほか）や石井・新町古墳群（74）等の大規模群集墳も形成され、ようやく入間台地の首長層の地位も比企の首長層並に向上したのではないだろうか。この時期比企丘陵の東松山市では青塚古墳（10：金井塚1964）、若宮八幡古墳（12：東松山市1981）、吉見町ではかぶと塚古墳（6：吉見町1978）等の大形円墳の他、吉見百穴横穴墓群（5：金井塚1975）のような新来の横穴墓群も出現している。

歴史時代では稲荷前遺跡（55：前出、富田1992）や入間郡役所跡と目される若葉台遺跡（82：埼玉県遺跡調査会1972、ほか）等が坂戸市周辺の拠点となっていた集落と思われる。比企丘陵では既に古墳時代後期から須恵器生産が開始されていたが、瓦製作の開始とともにわかに活発化、鳩山窯跡群（43：渡辺1988－92、ほか）に代表される、北武蔵の三大須恵器生産地の一翼を担い始め、坂戸市内では勝呂廃寺（77：坂戸市教委1981）も造立されている。

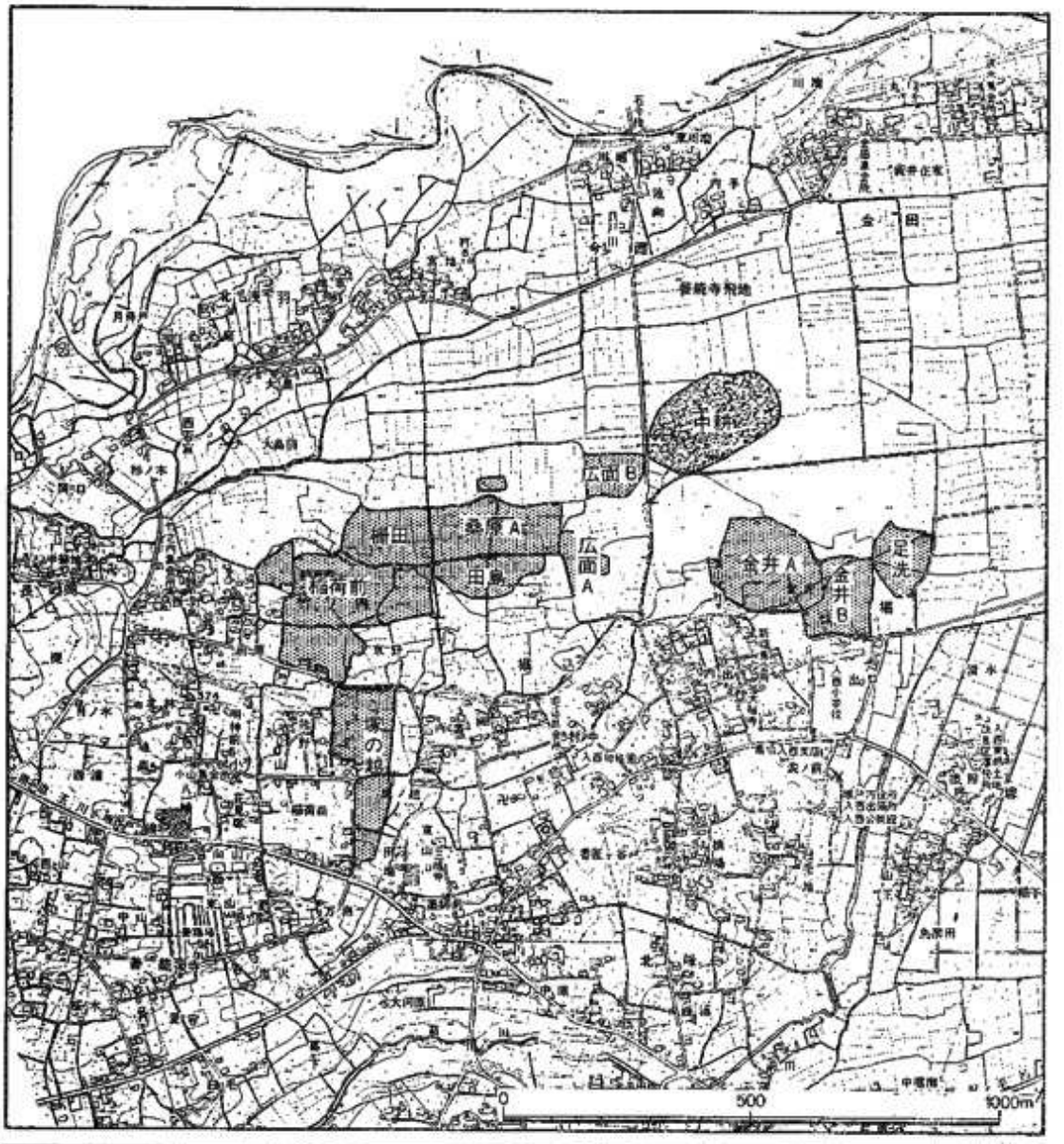
3．事業地内の遺跡

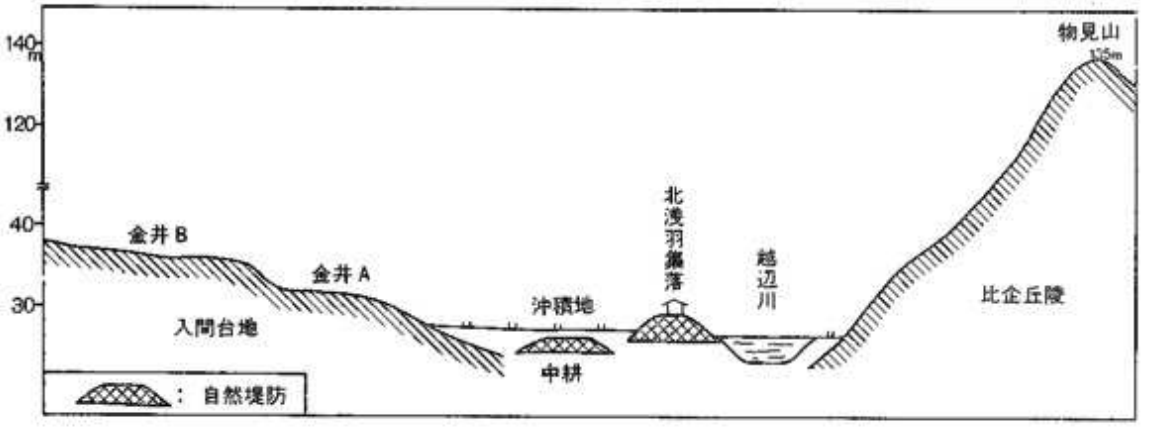
住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業地内には11の遺跡が分布する。中耕遺跡と有機的な関連を持つ遺跡もあるのでこれらを概観しておこう。

［足洗遺跡］　事業地内の東端、台地の低位面に占地、標高約28m。7世紀後半－9世紀中心の集落。住居跡40（うち縄文後期1）、掘立柱建物跡29、井戸18、土壙193。住居跡は台地中央、掘立柱建物跡は南西と北東に集中。（平成元年度調査、埼埋文1990）

［金井A遺跡］　台地低位面（一部沖積微高地）に位置、標高約27m。東西方向の2本の小支谷で島状の景観をなす。住居跡73（古墳時代後期44、奈良時代13、平安時代16）、土壙700（古墳時代後期－中世）、井戸16（古墳時代後期－平安時代）、掘立柱建物跡9他。土壙の中に鉄鍋鋳型片を廃棄したものがあり、金井B遺跡と関連。（昭和60年度調査、昼間1989）。

［金井B遺跡］　台地の高位面北東端とその斜面に立地。標高約31－28m、斜面北東は台地低位面となる。7～9世紀の住居跡21、掘立柱建物跡14、13－14世紀の溶解炉2、鋳造遺構9、掘立柱建物跡7、井戸跡8、粘土採掘坑2、土壙151、溝21。中世鋳造遺構の大規模な調査例は北武蔵初の調査例。梵鐘等仏具類・鍋鋳型、鉄滓、銅滓、椀形滓、鍛造剥片が出土。（平成元年度調査、埼埋文1990）





第3図　入西地区土地区画整理事業地内の遺跡分布（1／10,000、付：地形模式断面）

［広面A遺跡］　広面B遺跡の南の沖積微高地に位置、標高約28m。中世の溝2、土壙14。（昭和60年度調査、村田1990）

［広面B遺跡］　中耕遺跡の西方に隣接する標高約28mの沖積微高地（東西60m、南北90m）に位置。中耕遺跡と一体の遺跡。出現期－古墳時代前期方形周溝墓22、中耕遺跡のように遺構下に集落はなく、純粋な墓域を確保する。四隅切れ、全周、中央に陸橋を付設するタイプ、隅の一部が切れるタイプなどがある。周溝墓群中央のＳＺ09（柊塚）は方台部規模南北23.5×東西26m、外周規模東西52m×42m、2m程の盛土が遺存、方台部東辺と南辺に長さ3m程の張出が存在、西辺に変形した後方部状の陸橋を付設。（昭和62・63度調査、村田1990）

［桑原A遺跡］　稲荷前遺跡北東の台地低位面北端に立地。遺跡面積南北140m×東西180m、標高約28．5m。住居跡102（古墳時代78、奈良・平安時代24）、掘立柱建物跡21（奈良・平安時代～中世）、井戸20、溝23。遺構の中心は5世紀末－6世紀代の住居跡群で大量の土器、石製・土製品も出土。（昭和62年度調査、村田1992）

［桑原B遺跡］　標高約28mの沖積地。プラント・オパール調査の成果から確認調査を実施、水田跡の一部と河川跡を検出。7世紀代の須恵器が出土。（昭和59－61年度調査、村田1992）

［田島遺跡］　桑原遺跡の東南の低台地に立地、標高約29m。古墳時代後期の住居跡6、掘立柱建物跡7、土壙7、溝9、井戸9。掘立柱建物跡は中世以降か。桑原遺跡の南方から棚田遺跡に連続する溝から6世紀前半の土器が多量に出土。（昭和61－63年度調査、埼埋文1988）

［棚田遺跡］　桑原遺跡西方の沖積微高地に立地、標高約28．5m。住居跡28（6世紀前半）、溝2、畦状遺構1、歴史時代の井戸5、土壙7。住居跡はカマド導入後間もない、桑原遺跡に若干先行する時期。南限の溝は田島遺跡から桑原遺跡の南方を経由（24号溝跡）して延びたもの。（昭和63年度調査、埼埋文1989）

［稲荷前遺跡］　台地の下位面に立地、標高約31m。調査区は谷地形でA、B、Cの3区に区分。

A地区：奈良・平安時代の住居跡136、土壙295、井戸47、溝39、掘立柱建物跡31。

B地区：古墳時代前期方形周溝墓17基、古墳時代前期－奈良・平安時代住居跡85、土壙62、井戸14、溝9、掘立柱建物跡6。

C地区：古墳時代前期方形周溝墓19基、古墳時代前期－奈良・平安時代の住居跡94、土壙137、井戸跡30、溝跡30、掘立柱建物跡11。

周溝墓は沖積地に面した北縁に東西に分布、四隅切れと全周型の型式がある。8・9世紀の遺構からは鳩山窯跡群の須恵器が多量に出土する。「□尺本」・「大ヵ里郡」・「多摩郡男川」（旧武蔵国郡名）が複数書かれた8世紀中頃の墨書土器が井戸中から出土。（昭和61－63年度調査、埼埋文1988、富田1992）

［塚ノ越遺跡］　台地の上位面に立地、標高約35m。住居跡82（縄文中期2、弥生中期2、6世紀末－8世紀代78）、帆立貝式前方後円墳1（前方部のみ調査）、掘立柱建物跡9（奈良・平安時代）、土壙274、井戸跡247（奈良時代～中世）他。古墳時代後期の住居跡に屋外への排水溝をもつものが存在。帆立貝式前方後円墳の周溝から、正装男子、楯持人、女子、馬、円筒埴輪が出土、中世の火葬墓から青銅製五鈷杵、青銅製神像が出土。（昭和61年度調査、昼間1991）

周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所在	種類	文献
1	花見堂	嵐山町花見堂	縄文後・晩期集落	金井塚1976 a
2	屋田	嵐山町川島ほか	弥生後ー古墳前期集落、中ー後期古墳群	今井ほか1984
3	羽尾窯跡	滑川町羽尾	古墳後期須恵器窯跡	高橋1980
4	寺谷	滑川町羽尾	歴史寺院跡？	金井塚1959
5	吉見百穴 横穴墓群	吉見町北吉見	古墳後期横穴墓群	金井塚1975
6	かぶと塚古墳	吉見町久米田	後期円墳、横穴式石室	吉見町1978
7	和名埴輪窯跡	吉見町和名	古墳後期埴輪窯跡	吉見町1978
8	山の根古墳	吉見町久米田	前期前方後方墳	県教委1991
9	西原古墳群	東松山市上唐子	後期古墳群	金井塚ほか1976 b
10	青塚古墳	東松山市上唐子	後期古墳、横穴式石室	金井塚1964
11	岩の上	東松山市石橋	縄文中ー後期集落	野部ほか1973
12	若宮八幡古墳	東松山市石橋	後期円墳、横穴式石室	東松山市1981
13	雉子山	東松山市石橋	縄文後期・弥生後期集落	野部ほか1973
14	青鳥古墳群	東松山市石橋	後期古墳群、中世館跡	吉川國男ほか1974
15	附川	東松山市石橋	古墳前期集落・周溝墓、後期古墳群	内田ほか1972 今泉ほか1974
16	沢口	東松山市東平	古墳前期周溝墓	
17	岩鼻	東松山市松山	弥生後期・古墳前ー中期集落、後期古墳群	金井塚1972 吉島1989
18	観音寺	東松山市松本町	弥生後期周溝墓、古墳前・後期集落	東松山市1981
19	五領	東松山市柏崎	古墳前ー後期集落、前期方形周溝墓	金井塚1963、65
20	山王裏	東松山市下野本	後期古墳、歴史集落	山本1991
21	将軍塚古墳	東松山市下野本	後期前方後円墳、115m	金井塚1980
22	柏崎古墳群	東松山市柏崎	前ー後期古墳群	金井塚1968
23	天神山古墳	東松山市柏崎	前期前方後方墳？、銅鈴、小形仿製鏡	金井塚1968 県教委1991
24	番清水	東松山市古凍	古墳前期集落・周溝墓、古墳後期集落	県遺跡調査会1968
25	おくま山古墳	東松山市柏崎	後期帆立貝式前方後円墳	金井塚1968、79
26	古凍古墳群	東松山市古凍	後期古墳群	
27	下道添	東松山市古凍	出現期集落・周溝墓、後期古墳・集落	坂野1987
28	古凍根岸裏	東松山市古凍	古墳前期周溝墓、後期古墳群	村田1984
29	根岸稲荷神社古墳	東松山市古凍	前期前方後方墳	県教委1991
30	諏訪山古墳群	東松山市西本宿	前・中期古墳、後期古墳群	若松1987
31	諏訪山29号墳	東松山市西本宿	前期前方後方墳	県史編さん室1986
32	諏訪山古墳	東松山市西本宿	中期前方後円墳	金井塚1970
33	代正寺・大西	東松山市宮鼻	弥生中ー後期集落 出現期ー古墳前期集落・方形周溝墓	鈴木1991
34	舞台	東松山市田木	縄文早期ー中期集落、弥生後期集落 古墳後期集落・古墳群・須恵器窯跡群	谷井ほか1974 井上ほか1978
35	根平	東松山市田木	弥生後期・古墳中期集落 古墳後期須恵器窯跡・古墳群	水村ほか1980 b
36	桜山	東松山市田木	後期古墳群・須恵器・埴輪窯跡群	水村ほか1982
37	杉の木	東松山市毛塚	弥生後期集落	小峰1963
38	緑山	東松山市田木	縄文早・前期集落、古墳後期・歴史集落	今井ほか1982
39	田木山古墳群	東松山市田木	後期古墳群	野部1980
40	大塚原	東松山市田木	縄文早期包含地、古墳末ー歴史集落	水村ほか1980 a
41	立野	東松山市田木	縄文早・前期包含層、歴史集落	今井ほか1980
42	駒堀	東松山市田木	弥生後期集落・周溝墓、古墳後期集落	栗原ほか1974
43	鳩山窯跡群	鳩山町石坂ほか	歴史須恵器窯跡群	坂誌1977 渡辺1988 92
44	赤沼園分寺瓦窯跡	鳩山町赤沼	歴史瓦窯跡	
45	雷	鳩山町赤沼	歴史瓦窯跡	金井塚1991
46	十郎横穴墓群	鳩山町石坂	古墳後期横穴墓群	金井塚1991
47	小用廃寺	鳩山町小用	歴史寺院跡、中世鋳造遺跡	
48	小用窯跡	鳩山町小用	古墳後期須恵器窯跡	高橋1977
49	堂山下	毛呂山町川角	中世集落	宮瀧1991
50	川角古墳群	毛呂山町川角	後期古墳群	毛呂山町教委1988
51	東和田	坂戸市東和田	出現期集落？	坂戸市1983
52	長岡	坂戸市長岡	縄文早期集落、古墳前・後期集落	坂戸市教委1987

No.	遺跡名	所在	種類	文献
53	中耕	坂戸市善能寺	縄文早ー中期集落、出現期ー古墳前期集落・周溝墓	本書
54	棚田	坂戸市竹の内	古墳後期集落	埼埋文1989
55	稲荷前	坂戸市竹の内	古墳前期集落・周溝墓 古墳後期ー歴史集落	埼埋文1988 宮田1992
56	塚の越	坂戸市小山	弥生後期？周溝墓、古墳後期・歴史集落	昼間1991
57	桑原	坂戸市堀込	古墳中期ー歴史集落	村田1992
58	田島	坂戸市堀込	古墳後期集落	埼埋文1988
59	広面A	坂戸市堀込	中世	村田1990
60	広面B	坂戸市堀込	出現期ー古墳前期周溝墓	村田1990
61	金井A	坂戸市新堀	古墳後期、歴史集落	昼間1989
62	金井B	坂戸市新堀	古墳後期ー歴史集落、中世鋳造集落	埼埋文1990
63	足洗	坂戸市新堀	縄文後期集落、古墳後期ー歴史集落	埼埋文1990
64	石上神社古墳	坂戸市大塚	後期円墳	金井塚1980
65	善能寺・若林古墳群	坂戸市善能寺・ 若宮町若林	後期古墳群	今井ほか1988 坂戸市教委1988
66	岡山	坂戸市善能寺	縄文早期包含地	県教委1987
67	若宮	坂戸市成願寺	歴史集落	坂戸市教委1988
68	大家小学校	坂戸市森戸	縄文前ー後期集落、歴史集落	坂戸市教委1983
69	新しき村	坂戸市西坂戸	縄文早ー後期集落、弥生後期集落	坂戸市教委1983
70	城山	坂戸市城山	縄文中期集落	坂戸市教委1983
71	多和目渡戸	坂戸市多和目	縄文前ー中期集落	坂戸市教委1983
72	花影	坂戸市粟生田	縄文中期集落、弥生後期周溝墓	谷井ほか1974
73	土屋神社古墳	坂戸市浅羽	後期円墳	金井塚1980
74	石井・新町古墳群	坂戸市石井ほか	後期古墳群	埼玉県1982
75	和摸堀	坂戸市片柳	弥生後期集落	谷井1973
76	駒山古墳	坂戸市石井	後期前方後円墳	金井塚1980
77	勝呂廃寺	坂戸市勝呂	古墳後期集落、歴史寺院跡	坂戸市教委1981
78	勝呂神社古墳	坂戸市石井	後期円墳	金井塚1980
79	柊	坂戸市石井	弥生後期集落・周溝墓、古墳前期集落	坂戸市教委1983 県教委1989、90
80	石井前原	坂戸市石井	弥生後期ー出現期集落	坂戸市教委1988
81	山田	坂戸市片柳新田	歴史集落	谷井1973
82	若葉台	坂戸市千代田ー 鶴ケ島市若葉	歴史集落	金井塚ほか1972 鶴ケ島町教委1984
83	塚越渡戸	坂戸市塚越	縄文後期・弥生中期集落	坂戸市教委1987
84	住吉中学	坂戸市青木	歴史集落	坂戸市教委1987
85	宮町	坂戸市青木	歴史集落	大谷1991 a、b
86	清進場	坂戸市戸宮	歴史集落	坂戸市教委1987
87	附島	坂戸市小沼	縄文前、弥生中ー後期集落・周溝墓 古墳・歴史集落	坂戸市教委1985 〃 87 a、88 b
88	富電塚古墳	坂戸市小沼	後期前方後円墳、55m	県教委1991
89	小沼堀之内	坂戸市小沼	弥生中期墳墓跡	県教委1987 坂戸市教委1987 b
90	木曽免	坂戸市小沼	縄文前・弥生中・古墳前期集落	県教委1987 坂戸市教委1987
91	牛塚山古墳	坂戸市小沼	後期円墳	金井塚1980
92	鶴ケ岡	坂戸市関間	縄文早期・弥生後期集落	坂戸市教委1983、87
93	中小坂	坂戸市中小坂	縄文中期・弥生後期集落 古墳中ー後期集落、古墳後期須恵器窯跡	貞末1972 坂戸市1983
94	脚折山田	鶴ケ島市脚折	縄文中期・古墳中期・歴史集落	鶴ケ島町教委1978
95	一天狗	鶴ケ島市脚折	古墳・歴史集落	鶴ケ島町教委1981
96	大塊	鶴ケ島市藤金	歴史集落	
97	富電池東	鶴ケ島市脚折	縄文早・前・中・後期集落、歴史集落	鶴ケ島町教委1985
98	お寺山	鶴ケ島市太田ケ谷	歴史集落	玉利秀雄1985
99	鶴ケ丘	鶴ケ島市鶴ケ岡	出現期集落、後期古墳	小久保ほか1976 宍瀬ほか1985
100	下小坂古墳群	川越市下小坂	後期古墳群	川越市1972
101	下小坂3号墳	川越市下小坂	後期円墳	〃
102	どうまん塚古墳	川越市下小坂	〃	小出1963
103	登戸	川越市小坂	弥生中期集落、古墳前期集落・周溝墓	埼玉考古学会1976
104	女堀・御伊勢原	川越市笠幡	縄文早・中期集落、弥生後ー古墳前期集落	立石1987、1989
105	霞ケ関	川越市地蔵堂	弥生後期ー古墳前期集落・周溝墓	昼間1974、1988
106	牛塚古墳	川越市的場	後期前方後円墳、46m	川越市1972

文献一覧

井上肇ほか	1979	『舞台』埼玉県教育委員会
今井堯ほか	1988	『坂戸市史調査資料第14号坂戸風土記』坂戸市教育委員会
今泉泰之ほか	1974	『田木山・弁天山・舞台・宿ケ谷戸・附川』埼玉県教育委員会
今井宏ほか	1980	『見沢・立野・大塚原』埼玉県教育委員会
今井宏ほか	1982	『緑山遺跡』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
今井宏ほか	1984	『屋田・寺ノ台』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
岩瀬譲ほか	1985	『鶴ケ丘』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
内田哲人ほか	1972	『附川古墳群』考古学資料刊行会
大谷徹ほか	1989	「入間郡毛呂山町大類１号墳」『研究紀要５』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
大谷徹	1991	『宮町遺跡Ⅰ』、『同Ⅱ』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
金井塚良一	1959	「埼玉県比企郡寺谷遺跡」『考古学年報12』日本考古学協会
金井塚良一	1963	「五領遺跡Ｂ区発掘調査中間報告」『台地研究№13』台地研究会
金井塚良一	1964	『曽塚古墳』東松山市教育委員会
金井塚良一	1965	「五領Ｃ区の発掘調査」『埼玉考古第３号』埼玉考古学会
金井塚良一	1968	『柏崎古墳群』考古学資料刊行会
金井塚良一	1970	『諏訪山古墳群』考古学資料刊行会
金井塚良一	1972	『中原遺跡』中原遺跡調査団
金井塚良一ほか	1972	『千代田遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会
金井塚良一	1975	『吉見百穴横穴墓群の研究』
金井塚良一ほか	1976 a	『花見堂』嵐山町教育委員会
金井塚良一ほか	1976 b	『西原古墳群』東松山市埋蔵文化財調査会
金井塚良一	1979	「比企地方の前方後円墳」『歴史資料館研究紀要１』同館
金井塚良一	1980	「入間地方の前方後円墳」『歴史資料館研究紀要２』同館
金井塚厚志	1991 a	『十郎横穴墓群』鳩山町教育委員会
金井塚厚志	1991 b	『雷遺跡』鳩山町教育委員会
川越市	1972	『川越市史 第１巻』
栗原文蔵ほか	1974	『駒堀』埼玉県教育委員会
県遺跡調査会	1968	『番清水遺跡調査概報』
県教育委員会	1987	『埼玉県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』
県教育委員会	1989	『埼玉県埋蔵文化財調査年報 昭和62年度』
県教育委員会	1990	『埼玉県埋蔵文化財調査年報 昭和63年度』
県教育委員会	1991	『古墳群詳細分布調査概報１』
県史編さん室	1986	『埼玉県古式古墳調査報告書』
小出義治	1963	「埼玉県どうまん塚古墳調査の概要」『國学院高等学校紀要第５集』國学院高等学校
小久保徹ほか	1981	『桜山古墳群』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
小久保徹ほか	1976	『鶴ケ丘』埼玉県教育委員会
小峰啓太郎	1963	「杉の木遺跡の調査」『東松山市文化財調査報告』東松山市教育委員会
埼玉県	1982	『新編埼玉県史資料編２』
埼玉考古学会	1976	「登戸遺跡」『埼玉県土器集成４』
埼埋文	1988	『年報８』
埼埋文	1989	『年報９』
埼埋文	1990	『年報10』
県立埋文センター	1992	『埋文埼玉８』
坂詰秀一	1977	『武蔵虫草山窯跡群』鳩山町教育委員会
坂戸市	1983	『坂戸市史原始資料編』
坂戸市	1992	『坂戸市史古代資料編』
坂戸市教委	1981	『勝呂廃寺』
坂戸市教委	1985	『附島遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
坂戸市教委	1987	『附島遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
坂戸市教委	1987	『古代のさかど』
坂戸市教委	1988	『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第Ⅰ集』

坂戸市教委	1988	『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第Ⅰ集』
坂戸市教委	1988	『附島遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
貞末堯司	1972	『中小坂遺跡』ニューサイエンス社
鈴木孝之	1991	『代正寺・大西遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
高橋一夫	1977	「比企郡鳩山村出土の須恵器」『埼玉考古16』埼玉考古学会
高橋一夫	1980	『羽尾窯跡発掘調査報告書』滑川村教育委員会
立石盛詞ほか	1987	『女堀Ⅱ・東女堀』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
立石盛詞ほか	1989	『御伊勢原』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
谷井彪	1973	『山田遺跡・相撲場遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会
谷井彪ほか	1974	『南大塚・中組・上組・鶴ケ丘・花影』埼玉県教育委員会
谷井彪ほか	1974	『田木山・弁天山・舞台・宿ケ谷戸・附川』埼玉県教育委員会
玉利秀雄	1985	『お寺山遺跡』鶴ケ島町教育委員会
鶴ケ島町教委	1978	『脚折遺跡群 第二次発掘調査概報』
鶴ケ島町教委	1981	『脚折遺跡群発掘調査報告書』
鶴ケ島町教委	1984	『若葉台遺跡群A・B・B地点南』
鶴ケ島町教委	1985	『雷電池並びに周辺調査報告書』
富田和夫	1992	『稲荷前遺跡 A区』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
野部徳秋ほか	1973	『岩の上・雉子山』埼玉県教育委員会
野部徳秋ほか	1980	『田木山・弁天山・舞台・宿ケ谷戸・附川』埼玉県教育委員会
坂野和信	1987	『下道添遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
東松山市	1981	『東松山市史資料編 第1巻』
昼間孝志	1989	『金井遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
昼間孝志	1991	『塚の越遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
昼間孝次	1974	「川越市霞ケ関遺跡第3次発掘調査の概要」『第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか
昼間孝次	1988	「霞ケ関遺跡」『東日本の弥生墓制』北武蔵古代文化研究会ほか
水村孝行ほか	1980 a	『児沢・立野・大塚原』埼玉県教育委員会
水村孝之ほか	1980 b	『根平』埼玉県教育委員会
水村孝行ほか	1982	『桜山窯跡群』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
宮島秀夫	1989	『岩殿遺跡』東松山市教育委員会
宮瀧交二	1991	『粟山下遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
村田健二	1990	『広面遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
村田健二	1984	『古凍・根岸裏』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
村田健二	1992	『桑原遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
毛呂山町教委	1988	『毛呂山町の遺跡』
山本禎	1991	『山下裏・中原遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉川満男ほか	1974	『青鳥城跡』埼玉県教育委員会
吉見町	1978	『吉見町史 上巻』
渡辺一	1988-92	『鳩山窯跡群Ⅰ－Ⅳ』鳩山窯跡群遺跡調査会

III　遺跡・遺構の概要

中耕遺跡の所在する坂戸市入西地区は越辺川の沖積地が形成され、その幅は約750－1,000mである。越辺川の北は小さな段丘面をはさみ、やや起伏の急な比企丘陵が迫る。その最高所は県指定の名勝にもなっている物見山で、標高は135mを測る。沖積地の南方には比企丘陵に比べると平坦で標高の低い入間台地の支丘の毛呂山台地が延びてきており、標高は37－38.5mといったところである。

毛呂山台地上には多くの遺跡が所在するが、越辺川との沖積面に形成された低位面（小規模な段丘）上にも遺跡が形成される。

沖積地内に目を転ずると、現在の越辺川はその北の端を流れており、北浅羽、今西の集落が現流路の自然堤防（標高25－31m）上に載っており、ほぼ東西の傾斜を持つ。そして、その南側には所謂後背湿地が広がっていて、その標高は約24.5－30.5mを測り、おおむね南西から北東に傾斜を有している。

中耕遺跡はこの沖積地内の後背湿地内に所在しているがその基盤は現表土下に没した再堆積ロームの自然堤防である。調査前は水田でその標高は27.0－27.7mと平坦で微高地としての認識は不可能であった。水田耕作土は厚さ約30－40cmでその下に黒褐色の旧表土（厚いところで50cmほど）、さらにその下にシルトロームが堆積する。この土層の上面は最高所で約26.8m、厚さは約50－60cmでそのさらに下方は砂礫層が存在する。そして南西から北東方向に延びており、最大幅約120m、長さ約300mの平面的な広がりをもつ。

遺構の主要部分はこの上に構築され、微細な谷地形をはさみ近接した小規模な自然堤防状にも周溝墓群がみられるので、少なくとも古墳時代の段階までは遺構の分布する部分が微高地として認識されていたものと考えられる。

南西に隣接する広面遺跡、さらに桑原遺跡の北端部の周溝墓部分も一体の遺跡と考えられ、それらを含めた実態としての遺跡の平面規模は幅約200m、長さは550mにも達する。遺跡の北東端部分は住宅・都市整備公団の遊水池及び工事用道路敷で、南西端部分は現使用道路で調査できなかったが、ほぼ概略の部分は明かとなったものと思う。

次に中耕遺跡発見の遺構だが、縄文早期末－前期初頭及び前期前半代、中期前半代の集落、そして古墳出現期－前期（当該期の表現として煩瑣を避けるため単に古墳時代としておく）の集落及び周溝墓群がある。以下に発見された遺構の種類と数を時代順に記する。

縄文時代では住居跡が合計14軒、早期末－前期初頭、前期前半、中期前半代の時期がある。平面プランは早期－前期が不整方形や円形を基調とし中期が円形である。覆土はその主要な部分が灰色味のある黒褐色で、古墳時代の深みのある黒褐色とは異なる。確認面（再堆積ローム上面）からの掘り込みが浅く、遺存の悪いものが多く、壁や床面を完璧に把握しきれなかったものもある。他にも住居跡が相当数存在していたものと思われる。平面規模が直径（長軸長）概ね3mを越えるものを住居として報告する。住居跡以外では土壙及び集石土壙合計21基がある。土壙で時期の判明する遺物の出土したものは少ないが、覆土の色調から縄文時代と判断した。（その他晩期の土器片もあるが遺構はない。）

・住居跡　早期末ー前期初頭（条痕文、縄文系）：5軒（ＳＪ1−5）
　　前期前半　　（関山期）　　：2軒（ＳＪ6、7）
　　中期前半代　　（勝坂、加曽利Ｅ期）：7軒（ＳＪ8−14）
・土　壙　中期（勝坂、加曽利Ｅ期）　　：1基（ＳＫ10）
　　その他は詳細な時期不明のもの　　：20基（ＳＫ1−9、ＳＫ11−21）

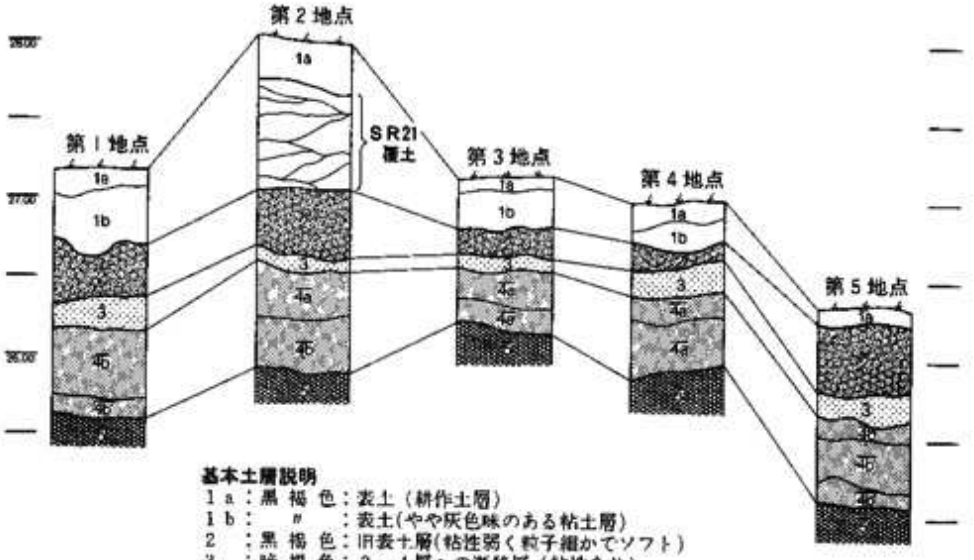
古墳時代の遺構は、住居跡72軒、方形周溝墓68基、土壙32基、掘立柱建物跡6軒、溝3基、その他不明遺構がある。住居跡は出土する土器から古墳時代前期の古い段階と時期が明らかだが、遺物の希少な土壙や建物、溝はその覆土の色が住居跡同様深い暗褐色であり、古墳時代前期初頭より新しい土器片を含まないので、同様の時期と判断した。住居については隅にわずかに丸みを持つ方形で、床面中央からやや北寄りに炉を、南壁沿いに貯蔵穴を持つのを基調とする。柱穴は4本を基本にするが、検出できないものもある。住居の中には火災に遭遇したものも多く、主に屋根材と考えられる炭化材を出土するものもある。ただし覆土断面から、炭化物は壁際の所謂三角堆積が形成された後に炭化材や焼土が堆積しており、居住時でなく、廃絶後間もない時期に被災したことがわかる。土壙は方形や不整の方形、円形のものがあるが集落か方形周溝墓群に伴うのか必ずしも明かでない。住居跡として報告したのは最低3×3m以上の規模で、炉を持つことを条件としたが、炉が未検出でも貯蔵穴や壁溝があり、十分な平面規模を有する（または推定できる）ものも含めた。重複がなく単独で存在するものが多いが、中には2軒、3軒と重複するものもある。住居跡や建物の分布での集落の範囲は後述の方形周溝墓の墓域の範囲内に包括されている。

方形周溝墓は土器から判断される時期は先行する集落とほぼ同時期としてよいが、周溝墓下で重複する住居跡との土層観察で、集落の廃絶の後に築造が開始されていることが明かである。特に墳丘を有するＳＲ41とその下で発見されたＳＪ44との重複では、ＳＪ44廃絶後、竪穴部分の空間がほぼ埋没したその上にＳＲ41の墳丘が盛土されている状況が明かとなった。隣接する広面遺跡発見分を合計すると方形周溝墓の総数は90基となる。

周溝墓の形態には四隅の切れるもの、一隅の切れるもの、全周するもの、一辺の中央を掘り残すもの、さらに前方後方形があった。各形態の分布状況から、先行する廃絶集落域を一括し墓域に確保、四隅切れの周溝墓を核にいくつかのグループを形成し造墓が開始された状況が看取できる。大形の周溝墓3基が版築状の盛土を有していたが残念ながら主体部の検出はできなかった。

また、周溝墓覆土の最上層から平安時代の須恵器片が出土するものがあり、この時期に埋没が終了したと推定でき、ほぼ現在見るような地形となったのであろう。

・住　居　跡　：73軒（ＳＪ15−87）
・土　　壙　：31基（ＳＫ22−52）
・方形周溝墓　：68基（ＳＲ1−68、形態の内訳は、四隅切れ：39、一隅切れ：3、全周：21、一辺の中央切れ：1、前方後方形：1、不明：3）
・掘立柱建物跡：7軒（ＳＢ1−7）
・　　溝　　：3基（ＳＤ1−3）
・性格不明遺構：2基（ＳＸ1、2）



基本土層説明

1 a：黒 褐 色：表土（耕作土層）
1 b：　〃　：表土(やや灰色味のある粘土層)
2　：黒 褐 色：旧表土層(粘性弱く粒子細かでソフト)
3　：暗 褐 色：2－4層への漸移層（粘性あり）
4 a：明 褐 色：再堆積ローム（礫を少量含み、やや粘性あり）
4 a：　〃　：　〃　（礫をやや多く含み、砂質気味）
4 b：暗青灰色：　〃　（暗灰褐色気味の部分）
4 b：　〃　：　〃　（粘性の強い部分）
4 b：　〃　：　〃　（砂質気味の部分）

第4図　遺構全体図（1／1,600、付：遺跡の基本土層）

Ⅳ　縄文時代の遺構及び出土遺物

1．住居跡

(1)　第１号住居跡

遺構（第6図，図版8）　G-9グリッド、縄文時代の遺構の載る微高地（自然堤防）上の北西縁部に位置する。

確認面から床面までが浅くて覆土もほとんど遺存しておらず、南東－南西をＳＲ19の南、西溝に切られており遺存状況は悪い。明確な形で壁面が検出できなかったので正確にし得ないが、平面形態は円形プランを基調とするものと思われ、規模は東西約7.3ｍ、南北は8ｍ弱と推定される。

床面はかろうじて遺存しており、覆土はやや灰色味のある暗褐色土を基調とし、良好な部分で厚さ10cm強の厚さしかない。一部検出した北壁で壁溝状の部分を検出している。床面にピットが13発見されたが、全て伴うとすれば建替えの可能性が考えられよう。

炉は床面中央やや北東に偏する位置となろうか、100×88cm、深さ7.6cmの本体部分と南に48×45cm、深さ12cmのピットを連ねている。炉の上面を確認した状態で焼土の薄い散布と土器（12－14：実測図番号、以下同じ）の出土があった。

出土遺物に完形に近いものはない。条痕文系と縄文系土器が共伴し、無茎石鏃の出土もあった。

出土遺物（第2分冊第1図，以下第2-1図と略す，図版146）　1－6は条痕文系土器である。有文土器は1－3の3点があり、すべて平縁で、口縁下に波状沈線文を廻らしている。沈線の施文は細い箆状工具の単数線施文であり、文様帯区画線を有し、口唇部に刻みが加えられる2と、双方を欠く1の、少なくとも2個体がある。4・5を含め、器面には擦痕が残り、表裏ともに条痕を残す6とは趣を異にする。

以上にともなう縄文施文系土器は7－14の8点を示した。7は口縁の直下に撚糸側面圧痕文を施文するもので、圧痕はＲ・Ｌを対として直線的に構成される。これに沿うようなかたちで2条の隆帯も観察でき、そのかたわらにも撚糸圧痕文が加えられる。

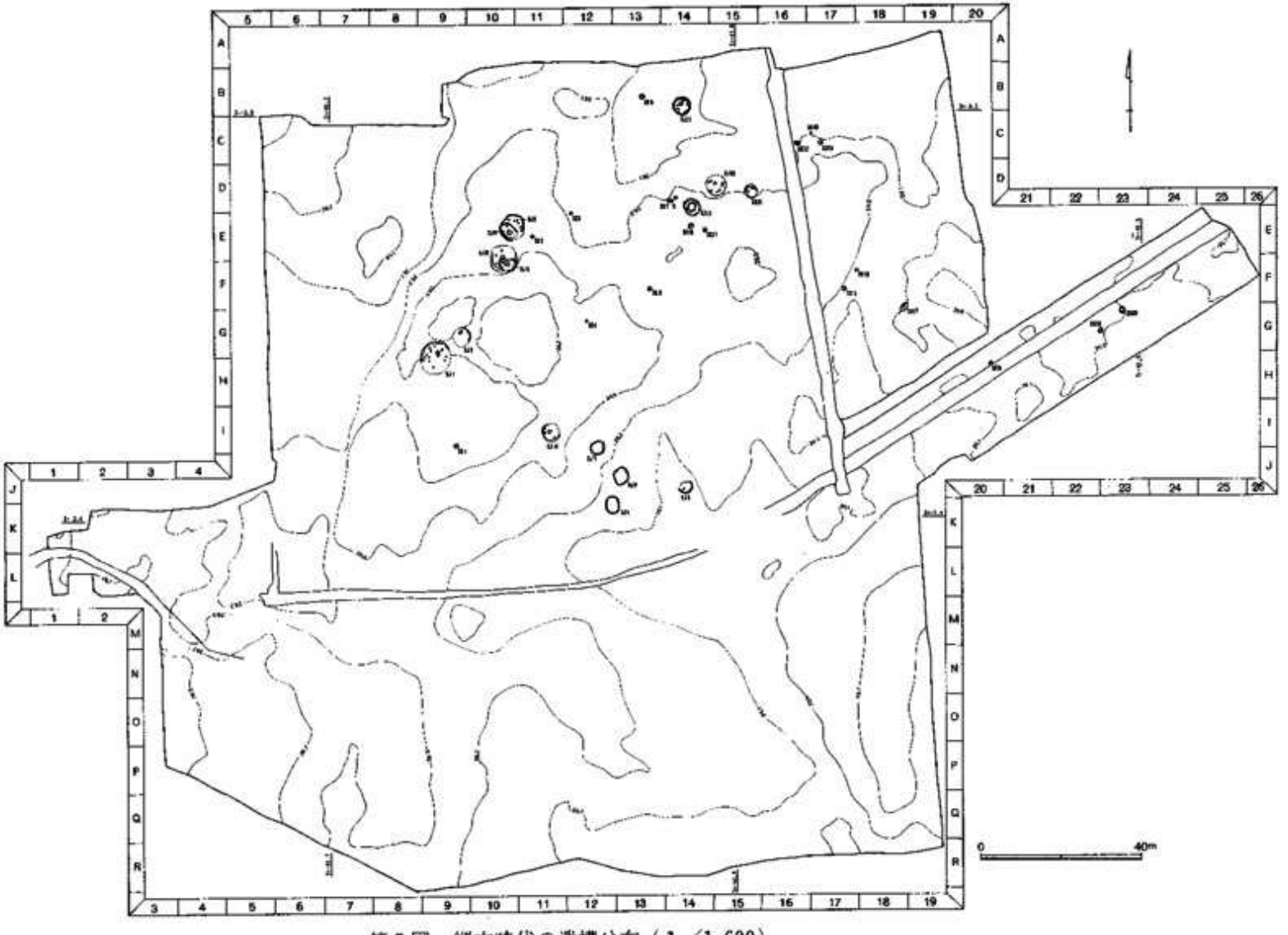
一方、胴部縄文には単節縄文と撚糸文の2種が施文されている。前者は原体ＲＬがもっぱらで、8は0段3条の原体を使用している。これに対し、撚糸文施文の12－14は、すべて原体Ｒを用いている。両者ともに構成の基本は、単一原体を用いながらも施文位の転移によってＶ字状の鋭角羽状を作出するものであり、10・11は0段2条原体を使用し横位施文を施すなど違和感が強い。

石器は15の凹基石鏃1点が出土した。一部が欠損する基部は抉入が弱く、これに合わせるかのように側縁もやや反りがはいる。石材はチャート製（1.75ｇ）。

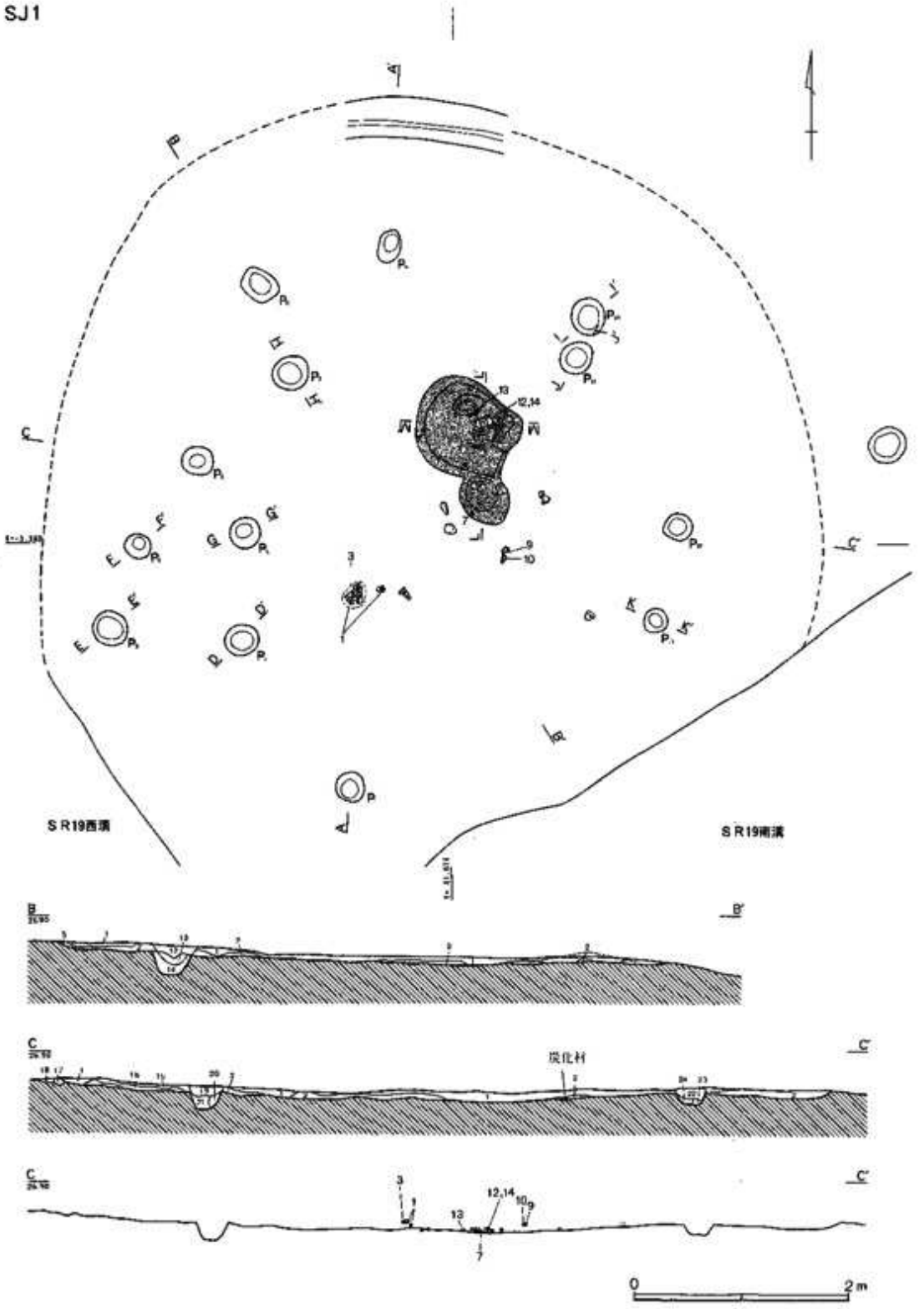
(2)　第２号住居跡

遺構（第7図，図版8）　G-10グリッドに位置、大部分をＳＲ19とＳＪ85に切られるうえに、攪乱を受け遺存は不良である。

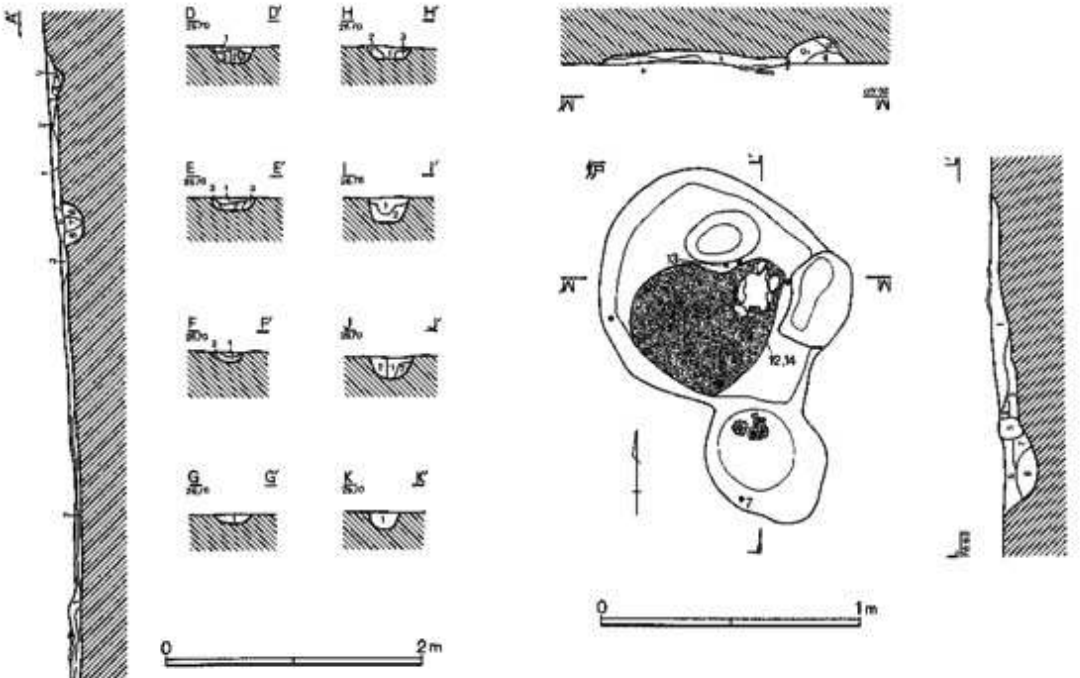
平面規模は、ＳＲ19の方台部で床の一部が確認できないので、東西幅は4ｍを越えることはないだろう。形態は不整方形と推定される。覆土は上層が褐色土を基調に、下層が地山ロームを主体とす



第5図　縄文時代の遺構分布（1／1,600）



第6図　第1号住居跡実測図(1)



土層説明

A－A'－C－C'

1　暗 褐 色：ローム粒子少量，焼土微量含む．
2　暗 褐 色：ローム粒子多量含む．
3　明 褐 色：粘質のローム粒子多量含む．
4　暗 褐 色：ローム粒子，小砂利多量含む．
5　暗 褐 色：ローム粒子，小砂利少量含む，砂質．
6　黒 褐 色：ローム粒子少量，炭化物微量含む．
7　黒 褐 色：ローム粒子多量，小砂利少量含む．
8　暗 褐 色：ローム粒子多量，小砂利少量含む．
9　暗 褐 色：ローム粒子少量，焼土微量含む，やや砂質．
10　暗 褐 色：ローム粒子多量含み，やや粘質．
11　明 褐 色：ローム粒子多量含み，粘質．
12　黒 褐 色：ローム粒子少量，炭化物微量含む．
13　黒 褐 色：ローム粒子微量含む．
14　暗 褐 色：ローム粒子多量含み，しまりゆるく，ソフト．
15　暗 褐 色：ローム粒子少量，褐色味強いローム粒少量含む．
16　暗 褐 色：ローム粒子少量，褐色味強いローム粒多量含む．
17　暗 褐 色：ローム粒子，小砂利少量，粘土微量含む．
18　暗 褐 色：やや明るく，17に近似．
19　黒 褐 色：小さめの小砂利少量含み，12に近似．
20　暗 褐 色：ローム粒子多量含み，やや粘質．
21　明 褐 色：ローム粒子多量，小砂利少量含む．
22　暗 褐 色：ローム粒子少量含み，やや粘質．
23　暗 褐 色：ローム粒子少量，炭化物微量含む．
24　明 褐 色：粘質のローム粒子多量含む．

L－L'，M－M'(炉)

1　暗 褐 色：焼土少量，炭化物微量含む．
2　暗 褐 色：ローム粒子微量含む．
3　明 褐 色：ローム粒子多量，砂少量含む．
4　黒 褐 色：ローム粒子微量含む．
5　明 褐 色：ロームブロック，小砂利を少量含む．
6　暗 褐 色：ローム粒子少量含み，やや砂質．
7　暗 褐 色：ローム粒子少量含み，やや粘質で明るい．
8　暗 褐 色：ローム粒子少量含み，やや砂質で暗い．
9　黒 褐 色：ローム粒子多量含む，炭化質の土．
10　黒 褐 色：ローム粒子微量含む，炭化質の土．
11　黒 褐 色：ローム粒子極めて多量含む．

D－D'(P2)

1　黒 褐 色：ローム粒子微量含む．
2　黒 褐 色：ローム粒子少量含む．
3　暗 褐 色：粘質ローム粒子多量含む．

E－E'(P3)

1　黒 褐 色：ローム粒子少量含む．
2　黒 褐 色：ローム粒子多量含む．
3　暗 褐 色：ローム粒子少量含む．

F－F'(P4)

1　黒 褐 色：ローム粒子，小砂利微量含む．
2　暗 褐 色：粘質ローム粒子多量含む．

G－G'(P5)

1　暗 褐 色：ローム粒子少量，焼土微量含む．

H－H'(P7)

1　黒 褐 色：ローム粒子少量，焼土微量含む．
2　暗 褐 色：ローム粒子多量含む．

I－I'(P10)

1　黒 褐 色：ローム粒子少量，焼土微量含む．
2　暗 褐 色：ローム粒子多量，焼土微量含む．

J－J'(P11)

1　黒 褐 色：ローム粒子少量，焼土微量含む．
2　暗 褐 色：ローム粒子多量含む．

K－K'(P13)

1　明 褐 色：粘質ローム粒子多量含む．

ピットデータ

(長径/短径/深さ)

P1(36/27/23)	P8(32/29/7)
P2(28/20/20)	P9(34/32/8)
P3(33/30/20)	P10(25/22/7)
P4(31/30/23)	P11(30/26/8)
P5(25/23/22)	P12(29/25/19)
P6(22/21/14)	P13(35/32/12)
P7(29/25/13)	

第6図　第1号住居跡実測図(2)

る黄褐色土である。検出できた床面は少ないが中央に向いわずかに傾斜する。壁溝、ピットとも遺存部分では確認できていない。

炉はＳＪ19とＳＪ85に切られ遺存が悪いが68×55cmの範囲で検出できた。覆土に円礫と微量の焼土を含み、底面がわずかに被熱する。点数は少ないが条痕文・縄文系土器片が出土した。

出土遺物（図版2-1図,図版146）　石器の出土はなく、図示できた土器片は少ない。1は、胎土の質からして、条痕文系の擦痕文土器というよりも、むしろ縄文系にともなう無文土器と表現するのが適当な破片である。1号住居で出土した擦痕文に比して器壁厚く、繊維の混入率が多い。縄文系は3－5の3点で、0段多条原体のＲＬ・ＬＲを持ちかえて横帯内や横帯間の羽状を構成している。その様相は第1号住居跡とほぼ同様で、条痕文系と縄文施文系土器とが共存する。

(3)　第３号住居跡

遺構（第8図,図版8）　自然堤防の東南縁部にあたるＪ－13グリッドに位置し、ＳＲ34の東溝と北溝の中間部分で検出された。

平面形態は不整方形で、壁面がややゆらいでいるが、一応住居跡として報告する。規模は南北3.58ｍ×東西3.77ｍで、検出面から床面の最深部までは約20cmである。壁溝、ピット、炉とも検出されない。

遺物はいずれも床面から浮いた状況で土器片が出土する。早期末－前期の条痕文系、縄文系の土器片があり住居の時期を示している。

出土遺物（第2-1図,図版146）　石器の出土はなく、土器も4点が図示できただけにすぎない。しかし、この対照は条痕文系と縄文施文系の共伴例を追加するに充分である。1は文様帯上下の区画線を設定する構成で、充填弧状文を追加することなく波状文だけで文様を成している。これに対し、2は0段多条単節原体の転移することによって鋭角の羽状を構成するよう意図されている。3は異なる原体を用いた横位施文によって羽状を構成する。

(4)　第４号住居跡

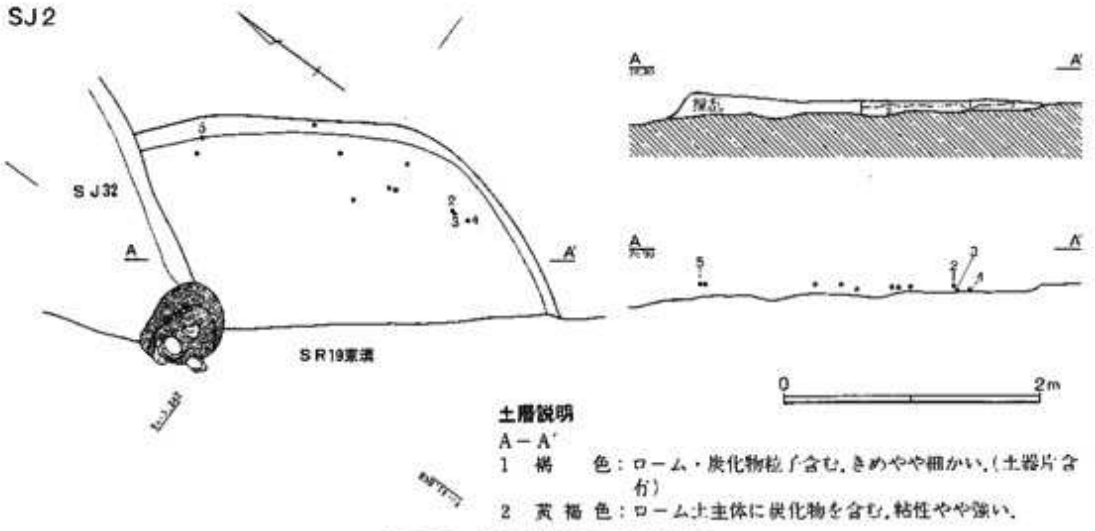
遺構（第9図,図版9）　K-13グリッドに位置、ＳＲ34の方台部下で検出した。平面形態は不整楕円形で規模は確認面で南北軸（長軸）4.30ｍ、東西軸（短軸）長3.72ｍ、南北軸はＮ－18°－Ｅ、東西軸はＥ－15°－Ｓほどの偏差がある。

床面は確認面から最深部で25cmほどの深さがあり、覆土は上・下層とも炭化物粒を含む黒褐色土を主体とし壁ぎわにはローム粒を含む暗褐色土が堆積する。壁溝、炉ともに認められず、北東から北西にかけての壁外方にピットが3基認められるが、本住居跡に伴うかどうか不明である。

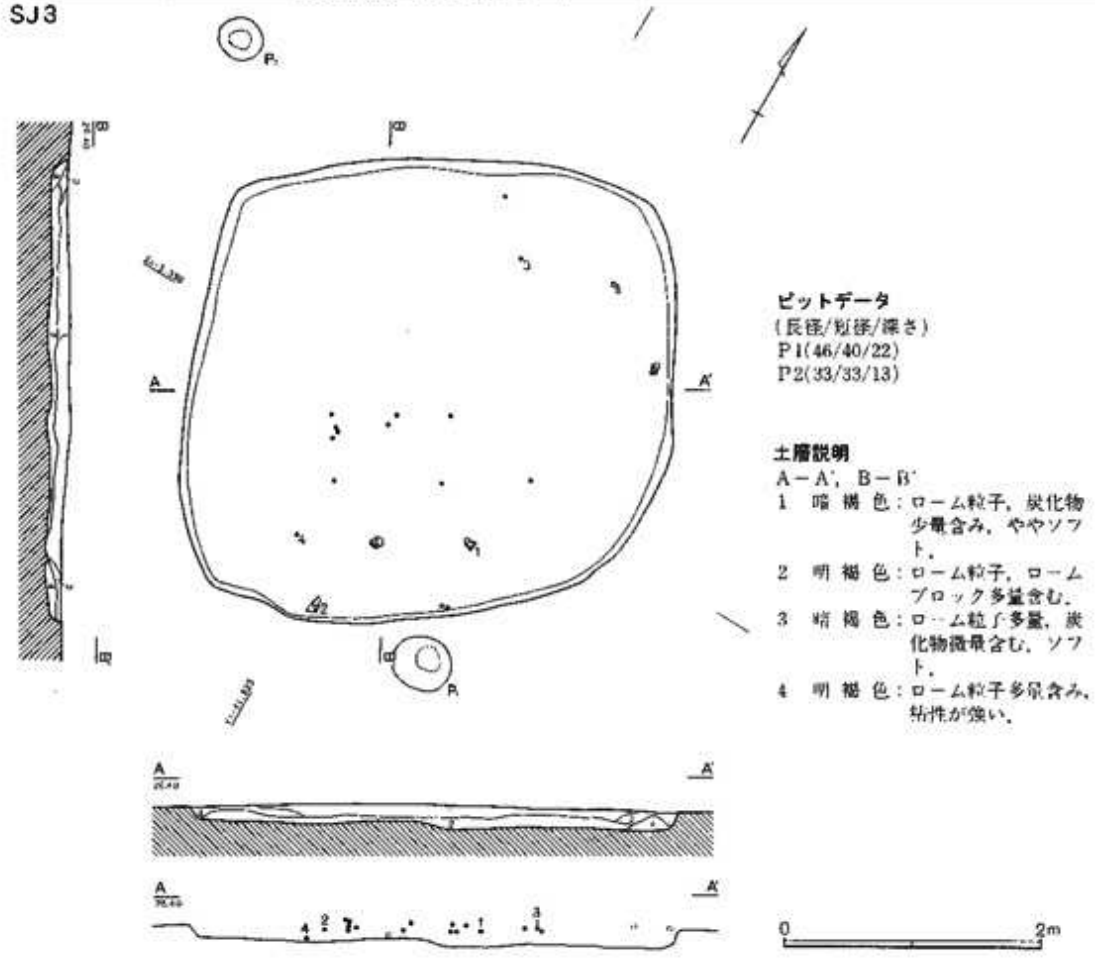
遺物としては覆土中から比較的多量の土器片が、大小の礫と共に出土している。

出土遺物（第2-1・2図,図版146、147）　縄文早期末から前期初頭にかけての5件の住居のうち、もっとも多くの土器を出土した。その反面、石器の出土には恵まれなかった。

条痕文系の破片は、擦痕と条痕を残すものに大別でき、有文土器は前者に集中する。1－3は半裁竹管で波状、もしくは類似する文様を描く個体であり、3は押引手法を用いて弧状文を構成している。

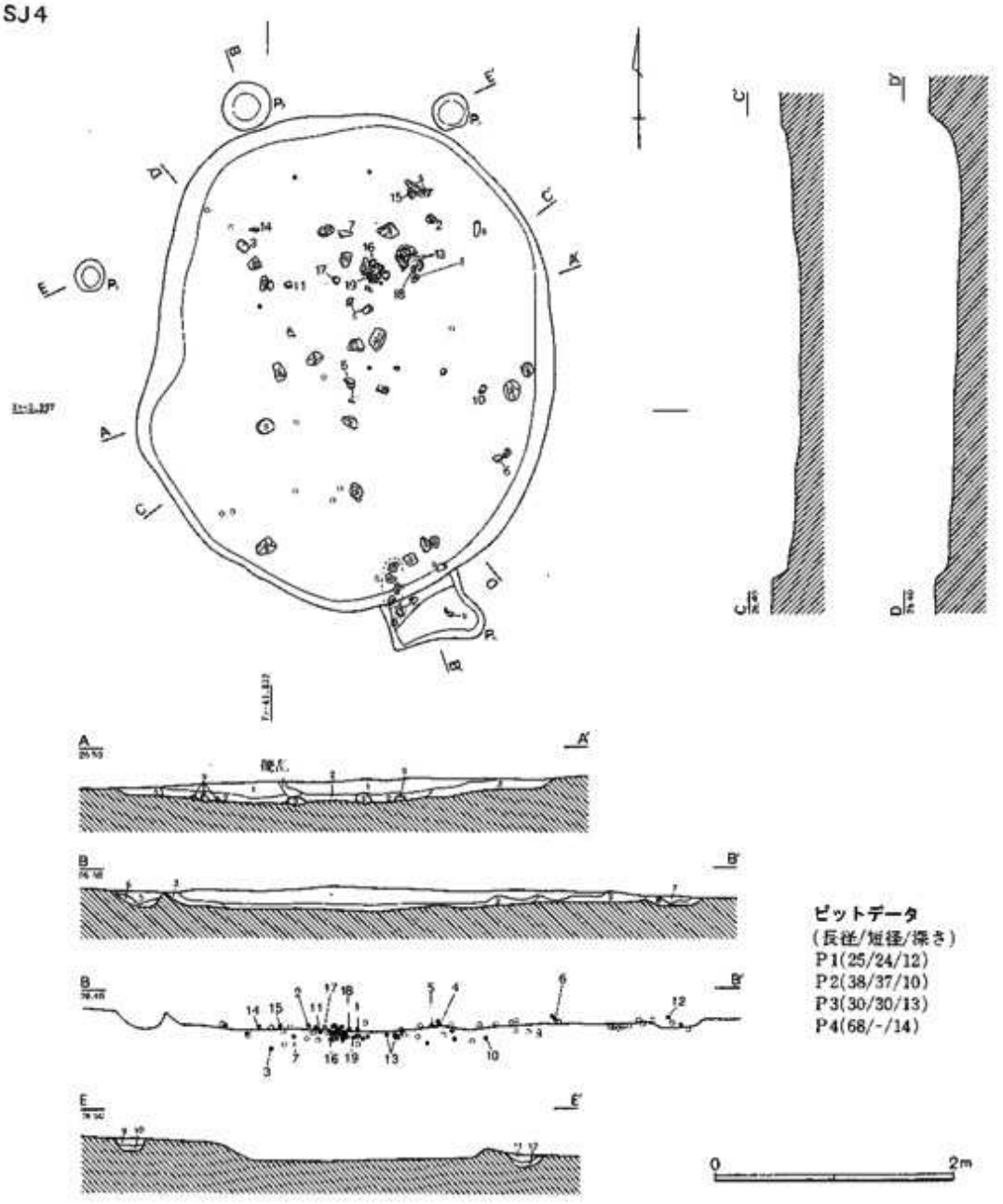


第7図　第2号住居跡実測図



第8図　第3号住居跡実測図

SJ4



土層説明

A－A′, B－B′, E－E′

1　黒 褐 色：炭化物少量含み，粘性やや有り．
2　黒 褐 色：炭化物微量含み，粘性やや有り．色調明るい．
3　暗 褐 色：ローム粒子多量，炭化物微量含む．
4　風 倒 木
5　暗 褐 色：粘質のロームブロック多量含む．
6　明 褐 色：粘質のロームブロック多量含む．
7　黒 褐 色：ローム粒子，炭化物少量含む．
8　暗 褐 色：ロームブロック少量含む．
9　暗 褐 色：ローム粒子少量含む．
10　明 褐 色：ローム粒子多量含む．
11　明 褐 色：粘質ロームブロック少量含む．
12　明 褐 色：粘質ロームブロック多量含む．

第9図　第4号住居跡実測図

これに対し、条痕が残る破片のうち、12は施文具の移動が短く、方向も定まっていない。貝殻背圧痕文が施文されたともとれるが、風化のため判断がつかない。

一方、縄文施文系では、検出できた破片すべて単節斜縄文を残すものであった。施文は、同一原体の回転方向を転移させるもの（14）や、同じく90°変化させることにより羽状を作出するもの（15）がある。単一原体で施文を終える構成の前二者でもＬＲの原体が使用されていることは、ＲＬがもっぱらの同時期の原体選択からすれば特殊である。0段の条数は2条と多条の双方がある。

(5) 第５号住居跡

遺構（第10図，図版9）　自然堤防東南縁部のＪ-14グリッドに位置、北西部分をＳＲ35の南溝に切られる。

平面形態は緩いコーナーが4箇所認められ、隅丸の6角形？となろうか。軸長は東西が3.37ｍ、南北が3.2ｍ前後であろう。覆土はシルト質の暗褐色土を基調とし、確認面から最深部で約25cmである。壁はややダラダラと立上がり、壁溝は認められない。

床面は中央がやや深く、炉は確認できなかった。ピットは5基でＰ1・2・4・5が柱穴となろうか。遺物は土器片のみで少なく、他に朱がある（隣接するＳＲ35との切合い部分の覆土の崩壊、混入か）。住居の時期は早期末から前期初頭と考えられる。

出土遺物（第2-2図，図版147）

石器の出土はなく、検出できた遺物はすべて土器である。同期の他住居跡とおなじく、条痕文系と縄文施文系とで構成される。

1－11の条痕文系のうち、1－5が波状の沈線文を口縁部文様帯に施すものである。施文は半裁竹管で行なわれ、文様帯区画は沈線と、刺突を加える隆帯の双方の個体がある。胴部の調整痕は擦痕が多く、条痕が残るのは10・11の2片のみである。

一方、縄文施文系の破片のうち構成法が観察できるものは、同一原体の回転方向を90°変化させることで羽状を作出する方法が13・14・19で判断できるのみである。施文原体の0段条数は2条と多条の二種があり、ＲＬ・ＬＲの双方の撚りがある。

(6) 第６号住居跡

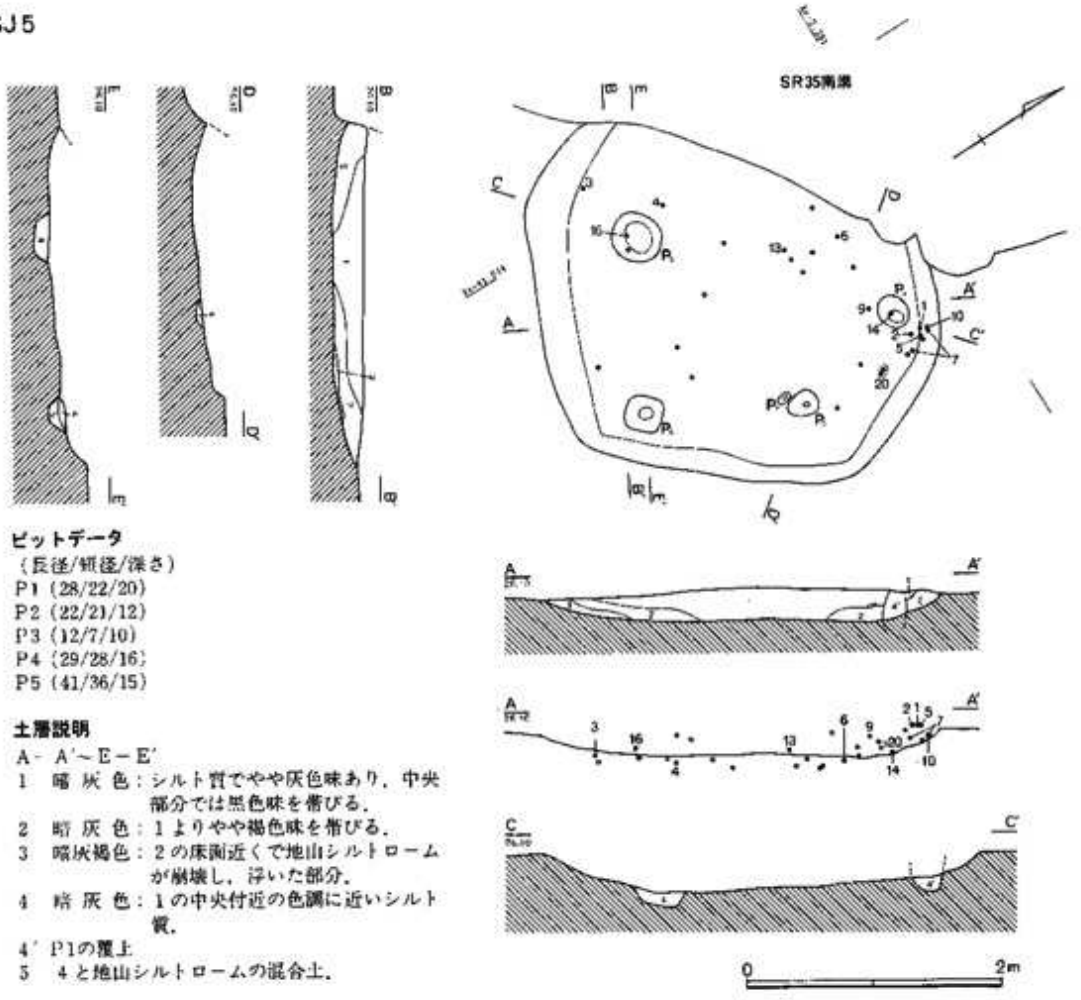
遺構（第11図，図版9）　自然堤防北西縁部のＦ-10グリッドに位置し、ＳＪ10が覆土上部を切って構築され、北壁と南壁をＳＲ24の東溝・南溝に切られる。ＳＪ10の床面で確認し、この面での規模は南北3.40ｍ、東西3.85ｍである。

平面形態は不整隅丸方形で南西のコーナーは丸みが大きい。覆土は上層が炭化物・ローム粒を含む黒色土かやや明度の高い暗褐色土、下層はローム粒を含む暗褐色土である。壁はきちんと立上がっている部分が多く、壁溝は認められない。

Ｐ5が炉跡と思われ、規模は84×48cm、覆土に焼土はほとんど含まず、底面もあまり焼けていない。出土土器は少ないが関山期の時期が考えられる。

出土遺物（第2-3図，図版147）　出土遺物は少なく、石器は出土していない。有文土器は検出でき

SJ5



第10図　第5号住居跡実測図

ず、図示したすべてが縄文のみを器面に残すものである。1・4は0段多条のＬＲをやや斜位に、2・3は逆方向に1.2条を絡げた附加条縄文とＲＬの単節斜縄文で器面を埋めている。後者の2点は原体の一致から同一個体と思われる。

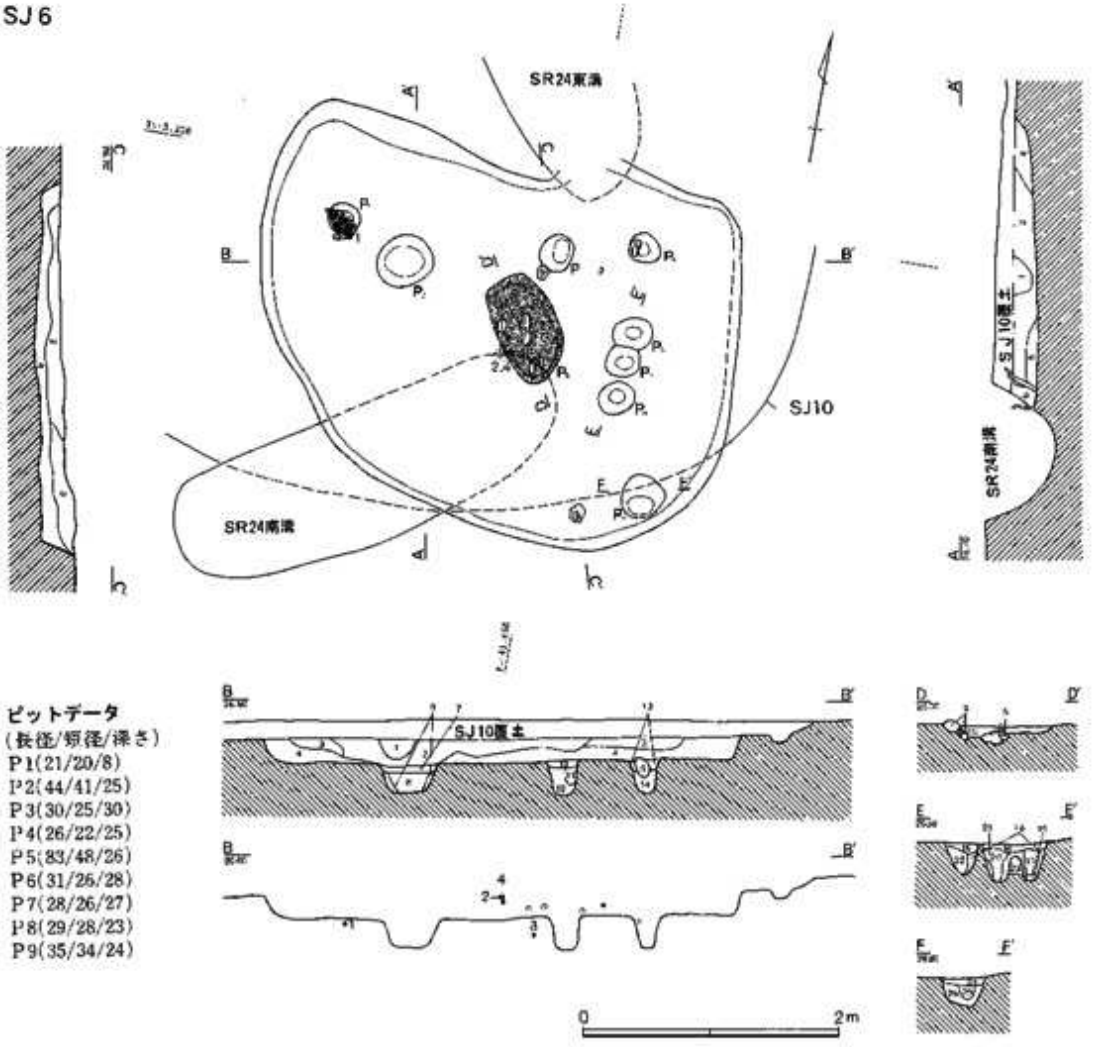
これらは、片口注口土器の存在や上げ底形態の底部から、関山式最終末の所産と判断できる。

(7) 第7号住居跡

遺構（第12図，図版10）　Ⅰ-12グリッドに位置、壁面がゆらいだり明確に確認できない部分もあったが一応住居跡として報告する。平面形態は不整円形としておく。北東－南西が長軸となり確認面での規模は長さ3.52mである。覆土は確認面から10cmほどの厚さで、上層がローム粒・ブロックを少量含む暗褐色土、下層がローム粒を多量に含む明褐色土を基調としていた。壁溝・炉ともに確認できなかった。

出土遺物（第2-3図，図版147）　土器片2点を図示できたにすぎない。ともに同一個体で、0段2条の原体ＲＬを施文するのみの破片である。ＳＪ6と同期、関山式最終末期の所産だろう。

SJ 6



ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(21/20/8)
P2(44/41/25)
P3(30/25/30)
P4(26/22/25)
P5(83/48/26)
P6(31/26/28)
P7(28/26/27)
P8(29/28/23)
P9(35/34/24)

土層説明

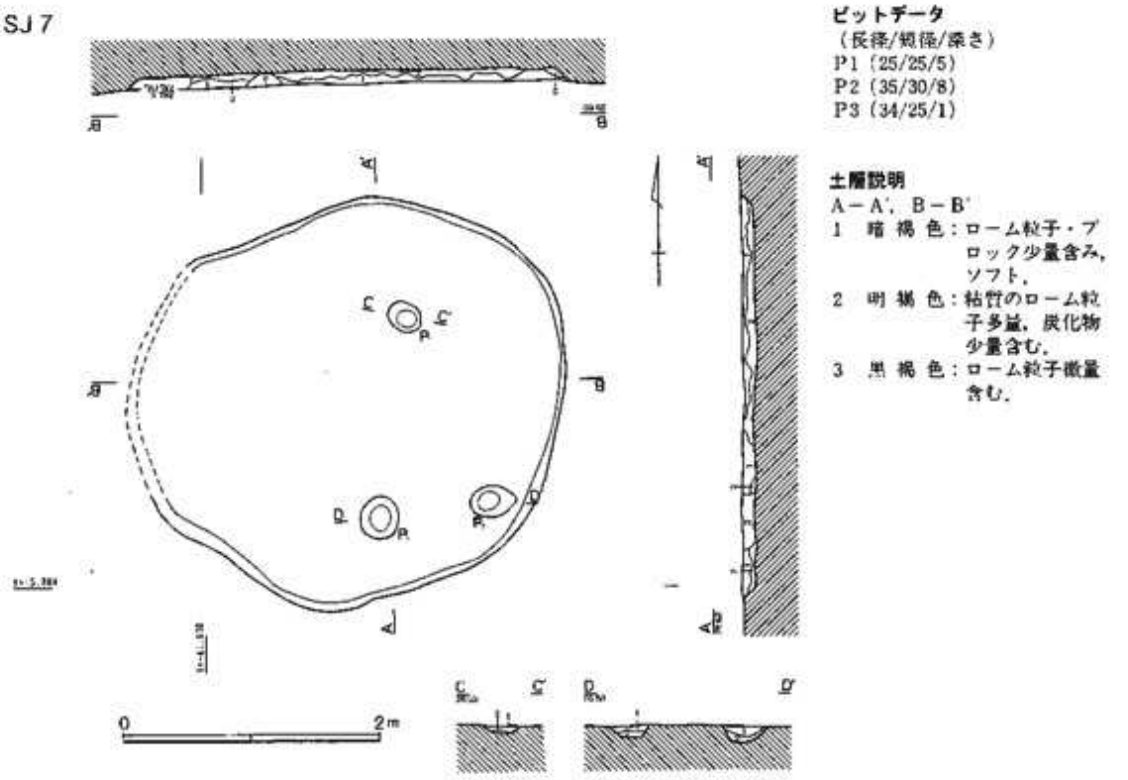
A－A'－F－F'

1　明褐色：ロームブロック含む.
2　黒褐色：炭化物ブロック粒子含む.しまり良い.
3　暗褐色：ローム粒子少量含む.
4　暗褐色：ローム粒子少量含む.
5　暗褐色：ローム粒子,炭化物少量含む.
6　暗褐色：ローム粒子少量含み,色調明るい.

(P2－P7)

7　暗褐色：ローム粒子少量,炭化物微量含み,褐色味強い.
8　黒褐色：粘質のローム粒子少量含み,粘性強い.
9　黒褐色：8に近似,絹灰色の砂を少量含む.
10　暗褐色：ローム粒子多量,炭化物少量含み,やや砂質.
11　暗褐色：ローム粒子少量含みソフト.
12　黒褐色：ローム粒子少量含む.
13　暗褐色：ローム粒子,明褐色の砂を少量含み,砂質.
14　黒褐色：ローム粒子少量含み,やや粘性有り.
15　暗褐色：ローム粒子少量含み,やや砂質.
16　暗褐色：ローム粒子,炭化物少量含み,非常に砂質.
17　黒褐色：ローム粒子礫少量含み,やや色調明るい.
18　暗褐色：ローム粒子,礫,明褐色の砂を少量含む.
19　黒褐色：ローム粒子,礫,砂を少量含む.
20　黒褐色：ローム粒子,炭化物微量含む.
21　黒褐色：炭化物,砂を少量含む.
22　黒褐色：ローム粒子,焼少量含む.
23　黒褐色：砂を少量含み,やや粘性有り.
24　暗褐色：ローム粒子少量含み,砂質.
25　黒褐色：炭化物微量含み,非常に粘質.
26　暗褐色：炭化物少量含み,非常に砂質で褐色味強い.

第11図　第6号住居跡実測図



第12図　第７号住居跡実測図

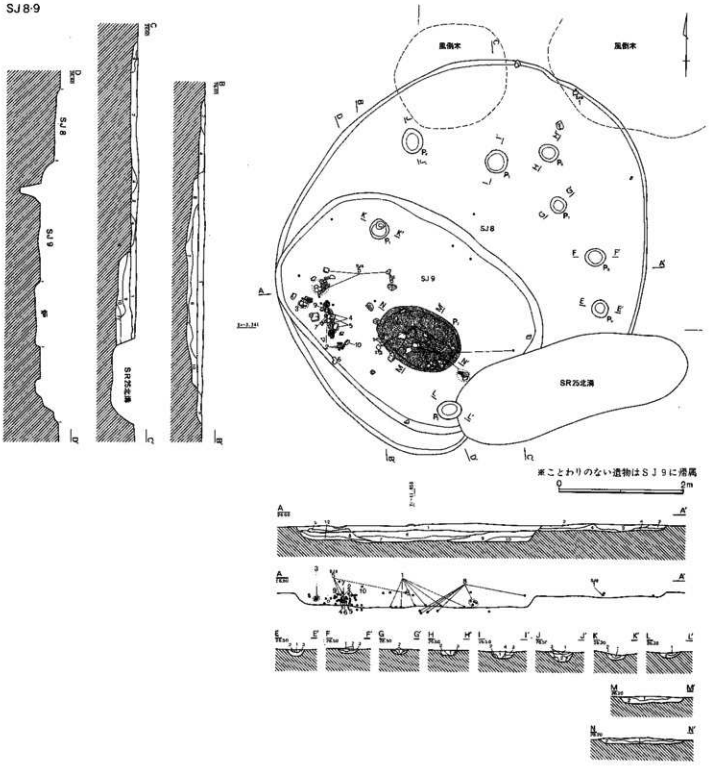
(8) 第8号住居跡

遺構（第13図，図版10）　自然堤防の北西縁部のE-11グリッドに位置する。ＳＪ9の覆土上部を切って構築されており、南部をＳＲ25の北溝に切られている。北東－南西方向にやや長い不整円形の平面プランを有し南北軸（長軸）長は確認面で6.41ｍ、短軸（東西軸）長は5.68ｍである。確認面から床面の最深部までは約10cm、壁面の遺存はあまりよくない。覆土はローム粒炭化物粒を微量含む黒褐色土、暗褐色土を基調にしており、壁溝と炉は検出できなかった。ピットは床面に6基認められた。遺物の出土は極めて少なくわずかな土器片があるだけである。

出土遺物（第2-3図，図版147）　本住居跡は、おそらく加曽利ＥＩＩ式段階に属するだろうが、普遍的なキャリパー形土器は出土していない。1は沈線充填の渦巻文を施す大甕の一部、2は曽利系の弧状文をめぐらす甕形土器だろう。4は沈線で格子状文を施すが、胎土・器壁の特徴からはこの期としか考えられない。また、3はどのような器種の一部か判断つかない。

(9) 第９号住居跡

遺構（第13図，図版10）　自然堤防の北西縁部のE-10グリッドに位置、ＳＪ8がその上に構築されて入子状になっており、東南部をＳＲ25の北溝に切られている。平面形態は隅丸の長方形、規模は確認面で長軸（東西軸）長推定で4.22ｍ、軸偏差Ｅ－37°－Ｓ、短軸（南北軸）長3.08ｍ、軸偏差Ｎ－



土層説明

A－A'～C－C'
1　黒褐色：ローム粒子，炭化物微量含む，粘性を欠き軟質．
2　暗褐色：ローム粒子少量，炭化物微量含み，しまり弱い．
3　黒褐色：ローム粒子少量含む．
4　明褐色：ローム粒子多量，炭化物微量含む．
5　黒褐色：ローム粒子，粘質ローム粒子少量含む．
6　黒褐色：ローム粒子，炭化物少量，焼土微量含む．
7　黒褐色：ローム粒子，炭化物微量含む．
8　暗褐色：ローム粒子多量含む．
9　暗褐色：ローム粒子，炭化物少量含み，ややソフト．
10　暗褐色：ローム粒子多量，炭化物少量含み，ややソフト．
11　暗褐色：ローム粒子少量含み，粘性あり．
12　暗褐色：ローム粒子，粘質ローム粒子多量，炭化物微量含む．

E－E'(P9)
1　暗褐色：ローム粒子少量含む．
2　暗褐色：ローム粒子少量含み，1よりやや明るい．
3　明褐色：粘質ローム粒子多量含み，粘性あり．

F－F'(P8)
1　暗褐色：ローム粒子少量含む．
2　暗褐色：ローム粒子多量含む．
3　明褐色：ローム粒子，ブロック多量含む．

G－G'(P7)
1　暗褐色：ローム粒子多量含む．
2　暗褐色：ローム粒子少量含む．

H－H'(P6)
1　暗褐色：ローム粒子多量含む．
2　暗褐色：ローム粒子少量含む．
3　黒褐色：ローム粒子少量含む．

I－I'(P5)
1　暗褐色：ローム粒子少量，焼土微量含む．
2　暗褐色：ローム粒子少量含む．
3　明褐色：ローム粒子多量，焼土微量含む．
4　明褐色：ローム粒子多量含む．

J－J'(P4)
1　暗褐色：ローム粒子少量含み，やや砂質．
2　暗褐色：ローム粒子少量含み，1よりやや暗い．
3　明褐色：ローム粒子多量，炭化物微量含む．

K－K'(P1)
1　明褐色：ローム粒子少量含み，やや粘性あり．
2　明褐色：ローム粒子多量含み，粘性あり．

L－L'(P2)
1　暗褐色：ローム粒子少量含み，やや砂質．
2　暗褐色：ローム粒子少量含み，やや砂質，1より明るい．

M－M'，N－N'(炉)
1　黒褐色：炭化物，焼土少量含み，やや粘性あり．
2　暗褐色：ローム粒子少量含む．

ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(32/31/39)
P2(38/27/11)
P3(68/45/10)
P4(40/35/14)
P5(37/36/9)
P6(33/29/10)
P7(27/26/7)
P8(32/29/8)
P9(29/26/10)

第13図　第８・９号住居跡実測図

36°－Eである。基盤の埋没ローム層上面から床面までの深さは約30cmで本住居の埋没後ＳＪ8が覆土上部を切って構築され、その床面からは20cmほどの深さとなるが、本遺跡の縄文時代の住居跡としては遺存はよい方である。覆土は中央部がローム粒を含む黒褐色土、周囲がローム粒を含む暗褐色土を基調とする。壁溝は認められず、ピットが床面に2基確認された。炉は中央からやや東南に偏した位置にあり稼動時の正確な大きさはつかめなかったが焼土の散布は126×84cm、掘方の範囲（図示のピット）は140×95cmで深さは10cm強であった。遺物は西部の覆土中と炉の掘方内から比較的多数の土器片の出土があった。

出土遺物（第2-3図,図版147）

主体となるのは勝坂系最終末の胴部文様帯土器で、石器は出土していない。1・2・4は隆帯区画の余白を単沈線による三叉文や区画文で充填する。また、3・7は隆帯区画があいまいで、小型円筒土器か、5のような、口縁部に素文帯を配する土器の一部となるかもしれない。このほか、10は阿玉台系土器の頸部付近の破片で、指頭痕が横位に残る。6・8は時代降る加曽利ＥＩ期の所産だろう。

⑽　第10号住居跡

遺構（第14図,図版11）　自然堤防の北西縁部のＥ-10グリッドに位置、ＳＪ6を覆うように構築され、ＳＲ24の東・南・北溝、ＳＲ25の西溝に切られる。平面形態は東南と南西にわずかに角を有するように見えるが、一応不整の円形と表現しておく。規模は確認面で長軸（東西軸）長6.40m、短軸（南北軸）長6.20m、確認面から床面最深部までの深さは13cmほどである。覆土は中央部が黒褐色土、周辺が暗褐色土を基調にし、いずれもローム粒を含む。壁溝が全周し、南部は壁と一体となりそれ以外は壁から最大10cmほど離れる部分がある。ローム粒を多量に含む暗褐色土を覆土としている。炉は床面中央やや北よりの石囲炉で、石の中に石皿の破損品(5)があり、その中央に土器が2個体（2、3）埋設されていた。さらに、床面南壁よりに埋甕の設置が認められた(1)。柱穴と考えられるピットが4基確認された。遺物は埋甕の土器など完形に近いものがあったが点数自体は少ない。

出土遺物（第2-4図,図版148）　図示した土器はすべて連弧文系土器で、4もその胴部片であろう。1（南部床面の埋甕）は波頂下を目安とした縦位区画を優先し連弧を展開した構成で、括れ部の横位線のズレを取りつくろうため1箇所のみ縦位区画を追加する。枠外の連弧は大小交互の6単位で器面を1周しており、縦位区画と下位連弧の統一からすれば、展開図中の左から4番目の縦位区画と波頂が正面となろうか。地文は櫛歯状工具による条線である。

一方、2（炉中央の埋甕）は単節ＲＬを地文として、連弧を利用した枠状文をめぐらせる。上半は7単位、下半は4単位が配され、上下の連携はない。3（2の北側の埋甕）は胴下半のみの残存で、連弧は配されず、条線と、蕨手化した懸垂文のみが展開する。

5は大型の石皿で、裏面には雨垂れ痕が18箇所に残る。中央の貫通は、度重なる使用に起因するものと思われ、石囲い炉の石材に転用されたものと考えられる。緑泥片岩製（6.99kg）。

(11) 第11号住居跡

遺構（第15図,図版12）　自然堤防の北西縁部のB-14グリッドに位置、ＳＲ43の西溝の南部に切られる。平面プランは北西と東南にわずかな隅があるように見えるが一応円形としておく。確認面での規模は東西で4.31ｍ、南北4.33ｍである。確認面から床面最深部までは約25cmの深さがあり、覆土は上層が灰茶褐色、下層が明灰褐色を基調としている。壁はダラダラと立上がっており壁溝は認められない。床面に8基、壁に接するかその外方に6基のピットが検出された。炉は床面中央から北西に偏した位置に確認された。ほぼ円形に87×77cmの範囲で最高でも数cmの深さの浅い掘りくぼみがありその南の縁に3個の礫を連ねていた。底面はあまり焼けていない。遺物は覆土上層から比較的多くの土器破片の出土があった。

出土遺物（第2-5図,図版148）　1は勝坂系の小型円筒土器である。口縁の素文部にあたり、交互刺突や弧状文が施されている。これに対し、2以下は加曽利E系の土器片で、2−6・10はキャリパー形土器の一部である。すべてが撚糸文を地文とし、口縁部文様帯は沈線分割の隆帯で渦巻様の文様を展開させる。胴部では片半裁竹管による流水文が描かれ、頸部は未分化ながら無文帯設定の意図が見える。

そのほか、7は荒い無文地に刻みもつ隆帯のみが廻らされる個体であり、勝坂系に属するものかもしれない。また、8・9も、時期的にはキャリパー形土器と伴うものながら、器形や、分割帯の扱いは同系の手法を色濃く残す素施文土器である。

石器は磨製石斧1点と打製石斧2点、さらに使用痕ある剥片が1点出土している。

11は縦長の剥片の左側縁に使用による細剥落が見える。一方、12・13の、それぞれ撥形・短冊形の打製石斧は、一次剥片を利用し、細調整が四周におよぶ点のみならず、側縁が靴形にゆがむ特徴でも共通する。

14の磨製石斧は乳棒状を呈し、肉厚で重量に富むものである。刃部は再生されて再度の使用に及んでおり、再生時の敲打痕をそのまま残すとともに、再生使用時の剥落痕も観察できる。

石材は、11が黒曜石製（1.02ｇ）、12はホルンフェルス製（29.0ｇ）、13は砂岩製（141ｇ）、14は凝灰質砂岩製（603ｇ）である。

(12) 第12号住居跡

遺構（第16図,図版12）　自然堤防北部のD-15グリッドに位置、ＳＲ46方台部下で検出、北部をその北溝で切られ、中央を東西に攪乱を被る。平面プランは南北にわずかに長い長円形で、規模は長軸（南北）長推定で5.12ｍ、短軸（東西軸）長4.38ｍである。確認面から床面最深部までは約20cm強、覆土はローム、炭化物粒を含むシルト質の灰褐色土を主体に、床面付近には明灰褐色土が堆積する。壁溝は認められず、床面にピットが8基認められた。炉は床面中央からやや北寄りに検出され、50×48cmの範囲でわずかに掘りくぼめられており、南半に3個の礫で囲いが見られた。底面はあまり焼けていない。

出土遺物（第2-5図,図版148）　出土遺物は少なく、土器3点と石器2点を図示できたにすぎない。1・2はいずれも初期の加曽利E系に属する破片である。口縁部、もしくは口唇部に幅狭の文様帯を

設定するのみで、他は縄文、撚糸文などの素文が全面に展開する構成である。

4は撥形の打製石斧で、11号住居跡12・13程ではないが、側縁にゆがみをもつ。5はわずかながら磨り痕が観察できる磨石である。石材は、4が砂岩製（75ｇ）、5は閃緑岩製（1,405ｇ）。

(13) 第13号住居跡

遺構（第17図,図版13） 自然堤防北部のD-14グリッドに位置、ＳＢ5の西側の柱穴2基に切られる。平面プランはわずかに北西ー東南に長い不整の円形の部分（確認面で4.2×3.87ｍ）とその南西外方にわずかな段差があり、その性格がわからないが、あるいは2軒の切り合いを考えた方がよいかも知れない。確認面から最深部までは約65cm強、覆土は炭化物粒子を含む黒褐色土を主体に壁から中央に向い先行してシルトロームを含む暗褐色土が堆積する。床面には中央に入子状に2つの緩い段が認められた。壁溝、炉は検出できていない。出土遺物は覆土上層部分からが多い。

出土遺物（第2-6図,図版148） 遺物の出土量はさほどではないが、口縁を欠失するのみで他は完存する小型の深鉢が出土している。1は勝坂系の小型円筒土器で、Ｊ字と菱形の隆帯構図が両面対立する形で文様が展開している。一方、2は中峠系の器形を呈するキャリパー形土器、3は口縁直下のみに隆帯をめぐらすもの、4は鉢形土器のようだが、小片のため詳しい構成は不明である。

石器は打製石斧1点のみの出土である。一次剥片を使用した撥形を呈するが、抉入部の作出には思い入れの多寡が極端になっている。安山岩製（392ｇ）。

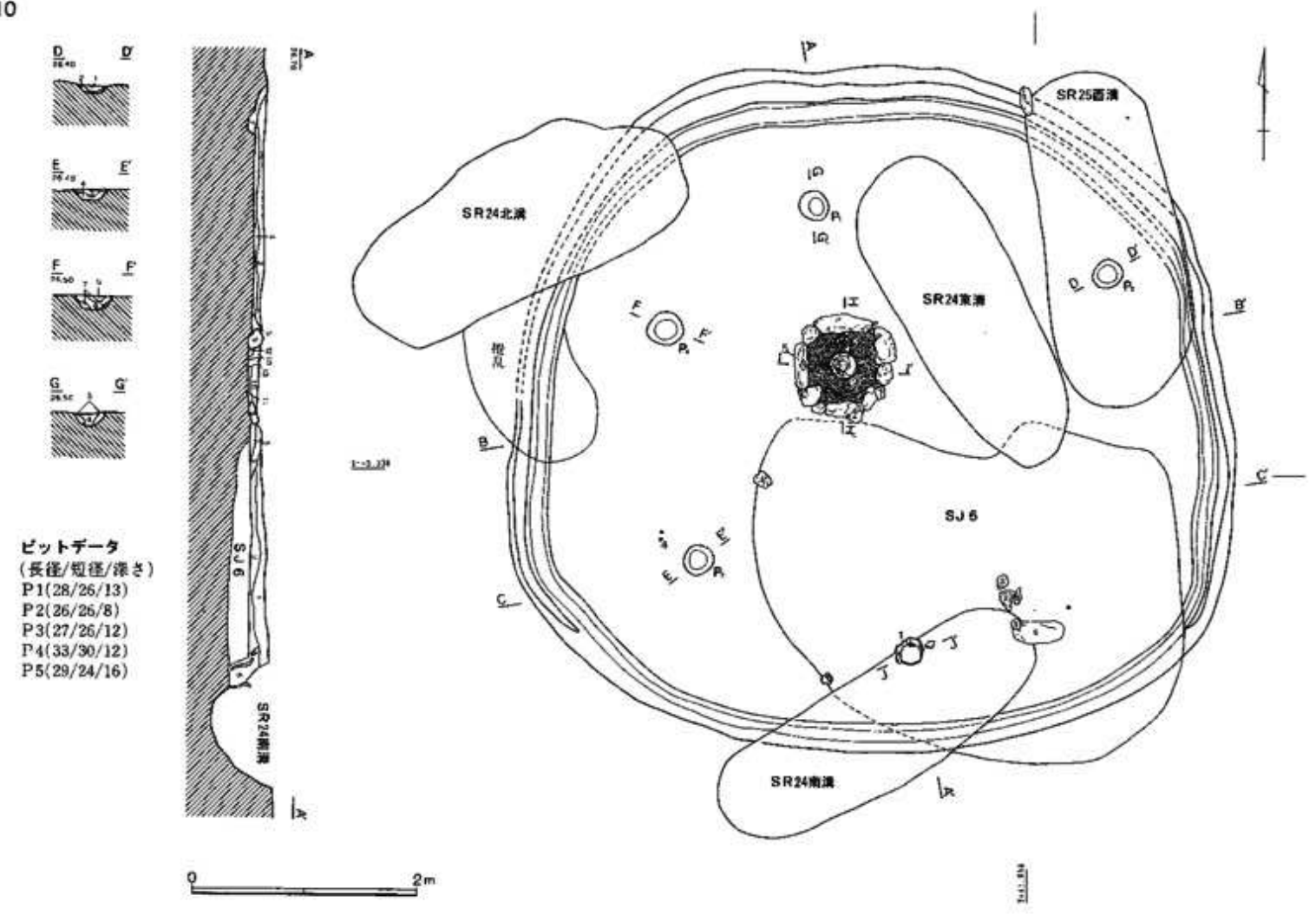
(14) 第14号住居跡

遺構（第18図,図版13・14） 自然堤防のほぼ中央部のＩ-11グリッドに位置、ＳＢ3にほぼ重なるように切られ、ＳＲ31南溝、ＳＲ32の北溝に切られる。平面形態は北西ー東南にわずかに長い円形で、長軸（南北軸）長4.25ｍ、短軸長は推定で3.75ｍ前後程度であろう。確認面から床面最深部までの深さは20cm強、覆土はローム粒、炭化物粒を含む暗褐色土で壁に近い部分には先行し茶褐色土、壁ぎわには黄褐色土が堆積する。ピットは床面に7基検出されたが、壁溝は検出されなかった。炉は床面中央やや北西よりに検出された。径約70cm深さ15cmの掘方を半分ほどローム主体土で埋め、その中に埋甕を設置する。

出土遺物（第2-6・7図,図版148） 図示した土器はすべて類似の構成を呈する加曽利Ｅ系キャリパー形土器である。1・2は同一個体で、撚糸文地に横Ｓ字の変形渦巻文と、附加的な刺先文が展開する。対して、4は同じような構成ながら、小渦巻を附加する類型だろう。その胴部には隆帯による蛇行懸垂文が加えられている。実測図を示した両個体ともに頸部無文帯を設定している。

石器は打製石斧の破損品1点のみが出土している(5)。分銅形の大型品で、刃部は偏刃となる。石材はチャート製（414ｇ）。

SJ10



ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(28/26/13)
P2(26/26/8)
P3(27/26/12)
P4(33/30/12)
P5(29/24/16)

第14図　第10号住居跡実測図(1)

土層説明

A－A′～C－C′

1　黒褐色：ローム粒子微量含み，色調暗い，しまりやや弱い．
2　黒褐色：1に近似するが，色調が明るい．
3　暗褐色：ローム粒子少量，炭化物微量含む．しまりやや強い．
4　暗褐色：ローム粒子少量，粘質ロームブロック少量含む．粘性がある．
5　暗褐色：粘質ローム粒子少量含む．やや砂質．
6　暗褐色：3に近似するが，色調が暗い．（J－J′の1に対応．）
7　暗褐色：粘質ローム粒子，炭化物少量含む．やや粘性有り．
8　暗褐色：7に近似するが，やや砂質．
9　暗褐色：ローム粒子微量含み，やや砂質でしまり弱い．
10　黒褐色：ローム・炭化物粒子微量含む．
11　黒褐色：10に近似し，色調がやや明るい．
12　暗褐色：ローム粒子少量含む．
13　暗褐色：粘質のローム粒子多量に含む．

＊10～13　炉

D－D′～G－G′

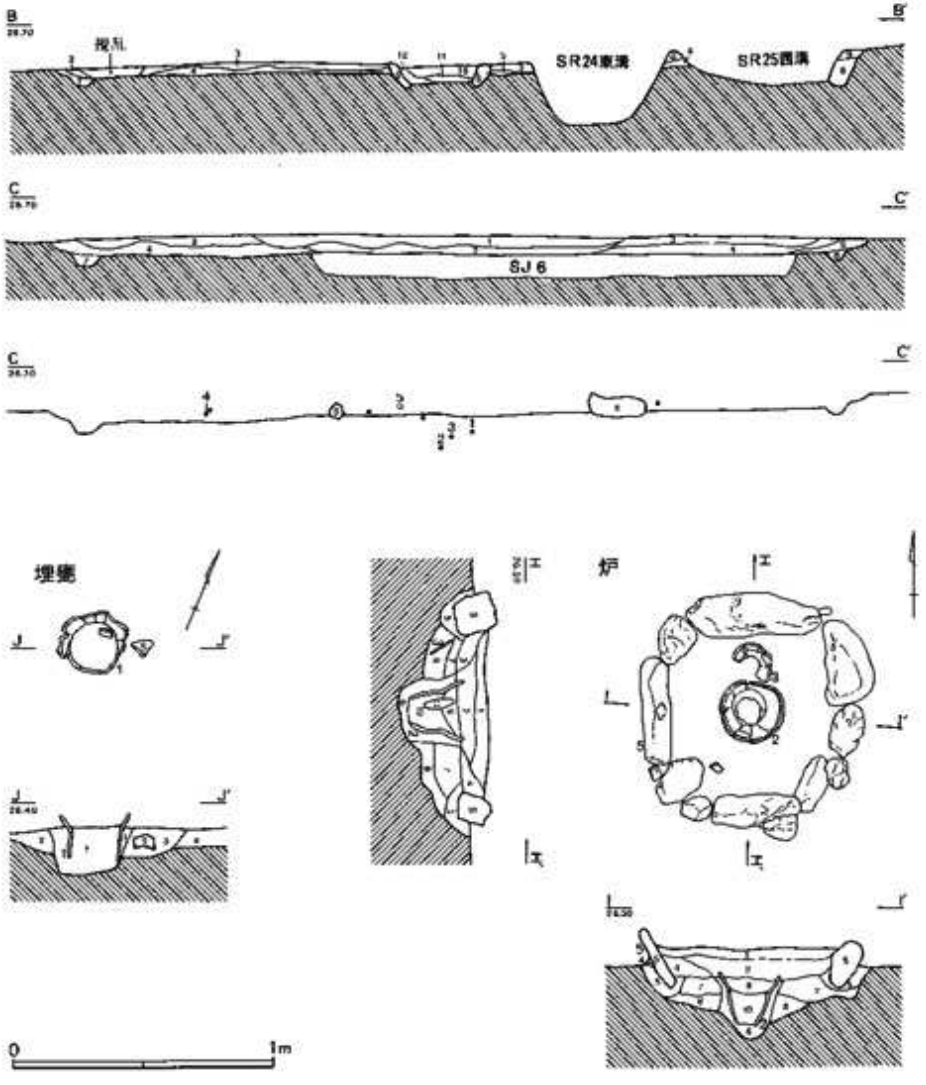
1　黒褐色：ローム粒子，炭化物少量含む．
2　暗褐色：ローム粒子多量含む．
3　暗褐色：粘質のロームブロック少量含む．
4　暗褐色：粘質のローム粒子多量含む．
5　明褐色：ローム粒子少量含む．
6　暗褐色：ローム粒子少量含む．
7　明褐色：ローム粒子多量含む．
8　暗褐色：ローム粒子微量含む．
9　明褐色：ロームブロック含む．

H－H′，I－I′（炉）

1　黒褐色：ローム粒子，炭化物微量含む．
2　黒褐色：1に近似するが，やや暗い色調．
3　暗褐色：ローム粒子，小砂利少量含む．
4　暗褐色：ローム粒子少量含む．
5　暗褐色：ローム粒子微量含み，やや暗い色調．
6　暗褐色：ローム粒子，焼土少量含む．やや砂質．
7　暗褐色：ローム粒子，焼土少量含む．やや暗い色調．
8　暗褐色：ローム粒子多量含み，やや砂質．
9　暗褐色：ローム粒子少量，炭化物微量含む．
10　暗褐色：ローム粒子含む．やや砂質．
11　明褐色：砂質，ローム混じりの砂を多量含む．

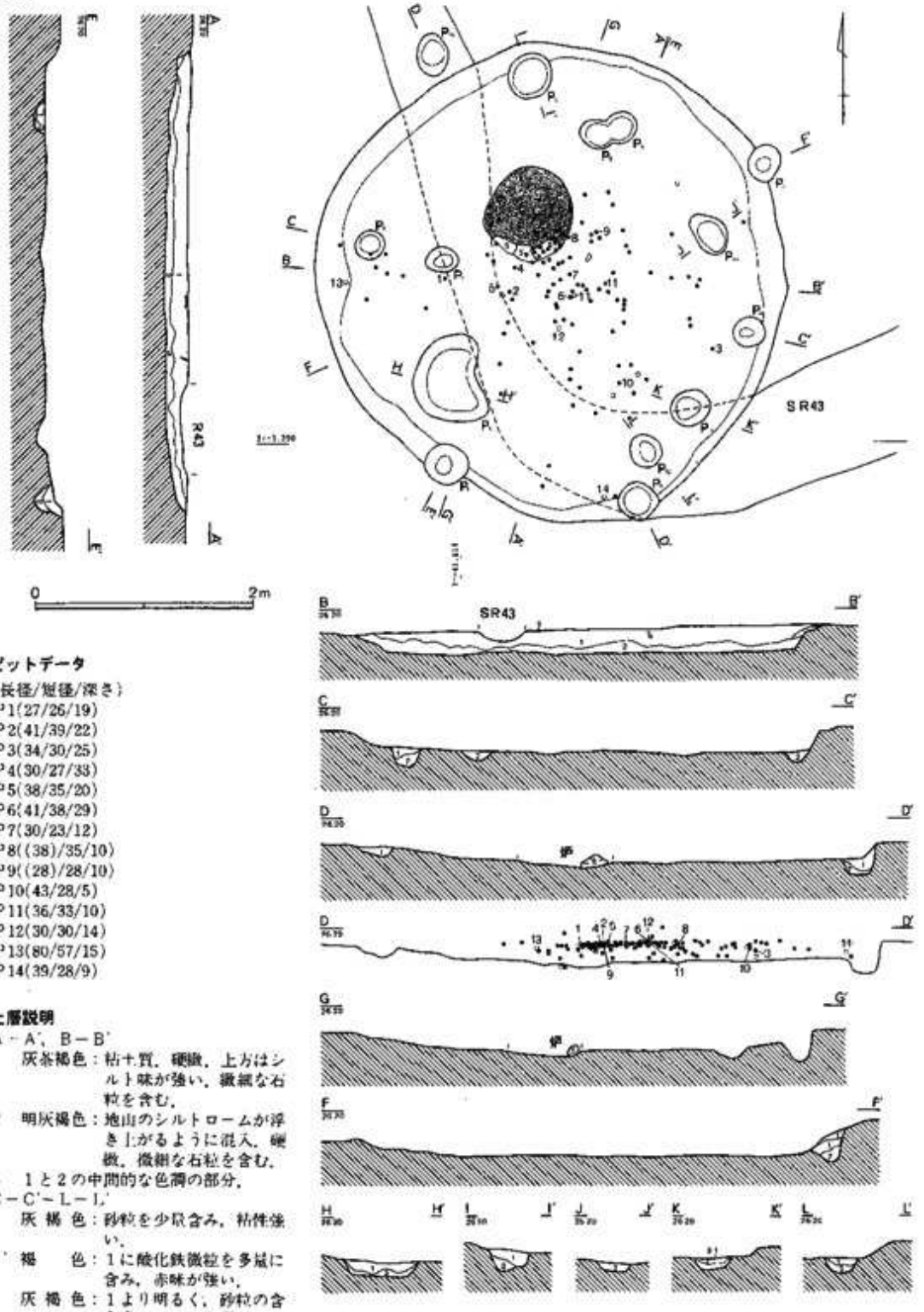
J－J′（埋甕）

1　黒褐色：炭化物少量含み，やや粘性がある．
2　暗褐色：炭化物，ローム粒子少量含む．
3　黒褐色：炭化物微量含み，ソフト．
4　黒褐色：炭化物微量含み，ソフトで色調が暗い．



第14図　第10号住居跡実測図(2)

SJ11



ピットデータ

（長径/短径/深さ）
P1(27/26/19)
P2(41/39/22)
P3(34/30/25)
P4(30/27/33)
P5(38/35/20)
P6(41/38/29)
P7(30/23/12)
P8((38)/35/10)
P9((28)/28/10)
P10(43/28/5)
P11(36/33/10)
P12(30/30/14)
P13(80/57/15)
P14(39/28/9)

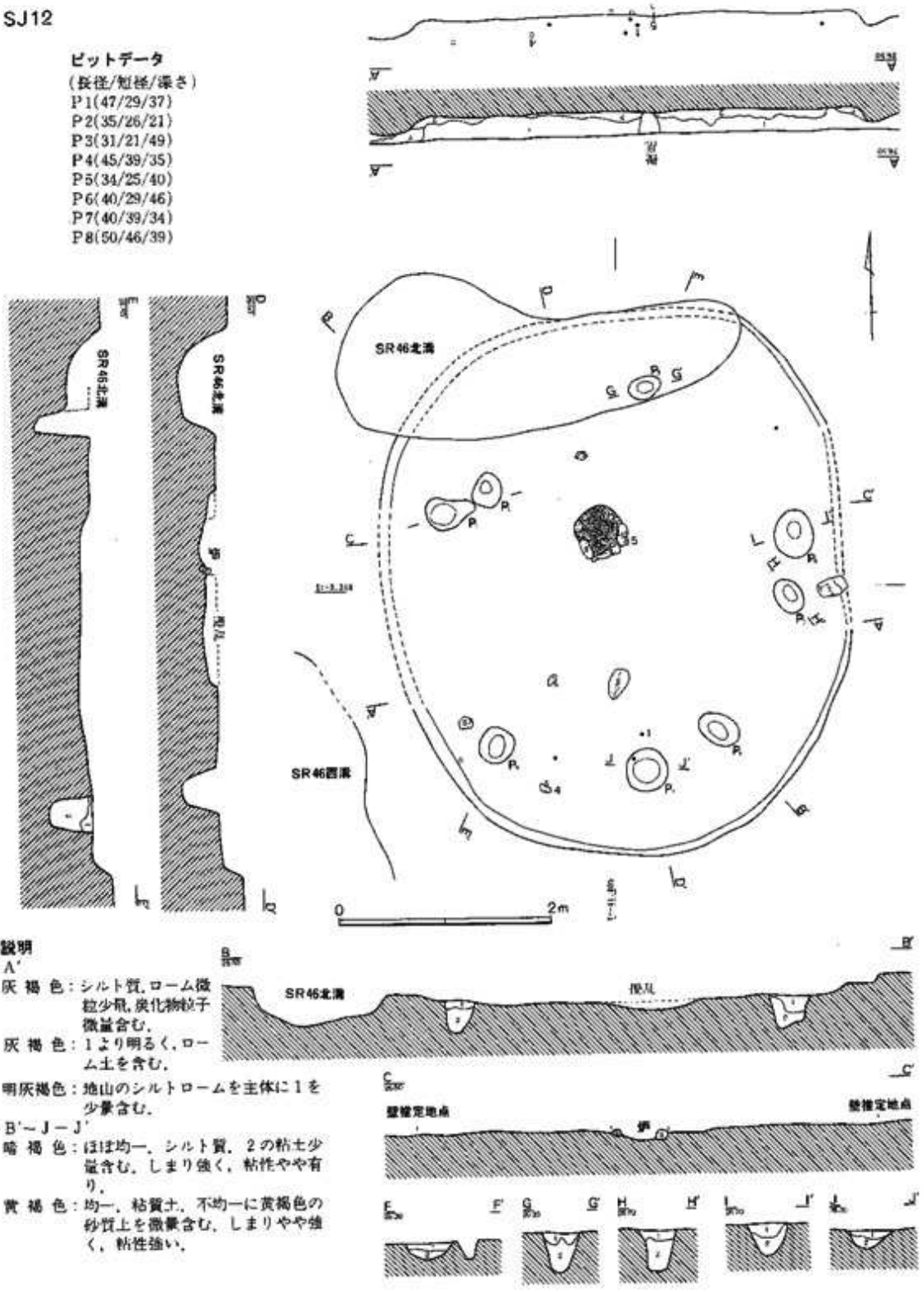
土層説明

A－A'、B－B'
1　灰茶褐色：粘土質、硬緻、上方はシルト味が強い、微細な石粒を含む。
2　明灰褐色：地山のシルトロームが浮き上がるように混入、硬緻、微細な石粒を含む。
3　1と2の中間的な色調の部分。
C－C'－L－L'
1　灰褐色：砂粒を少量含み、粘性強い。
1'　褐　色：1に酸化鉄微粒を多量に含み、赤味が強い。
2　灰褐色：1より明るく、砂粒の含有多い、シルト質。
3　1と地山の灰黄色シルトの混合土。

第15図　第11号住居跡実測図

SJ12

ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(47/29/37)
P2(35/26/21)
P3(31/21/49)
P4(45/39/35)
P5(34/25/40)
P6(40/29/46)
P7(40/39/34)
P8(50/46/39)



土層説明

A－A'

1　灰褐色：シルト質，ローム微粒少量，炭化物粒子微量含む．

1'　灰褐色：1より明るく，ローム土を含む．

2　明灰褐色：地山のシルトロームを主体に1を少量含む．

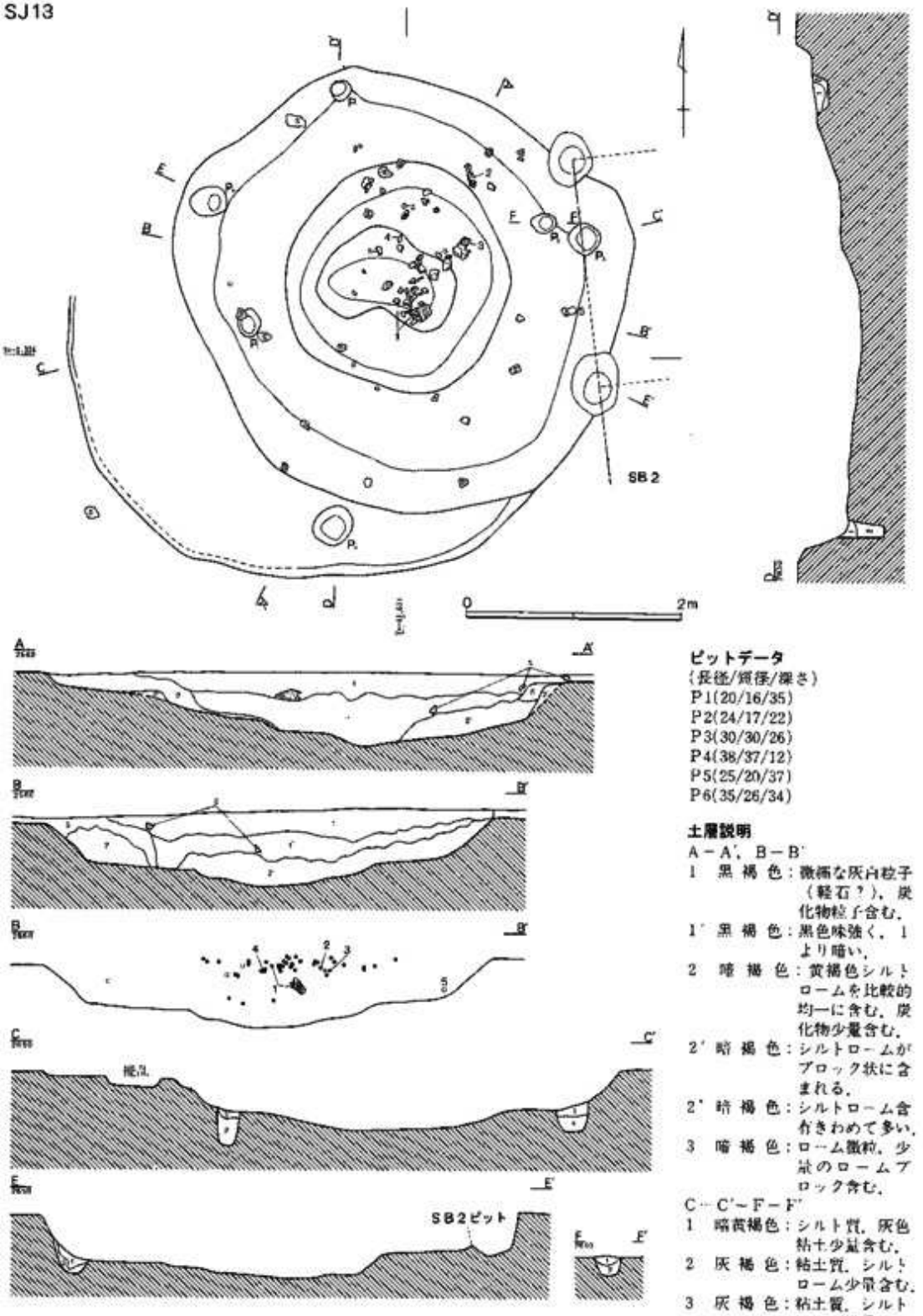
B－B'～J－J'

1　暗褐色：ほぼ均一，シルト質．2の粘土少量含む．しまり強く，粘性やや有り．

2　黄褐色：均一，粘質土．不均一に黄褐色の砂質土を微量含む．しまりやや強く，粘性強い．

第16図　第12号住居跡実測図

SJ13

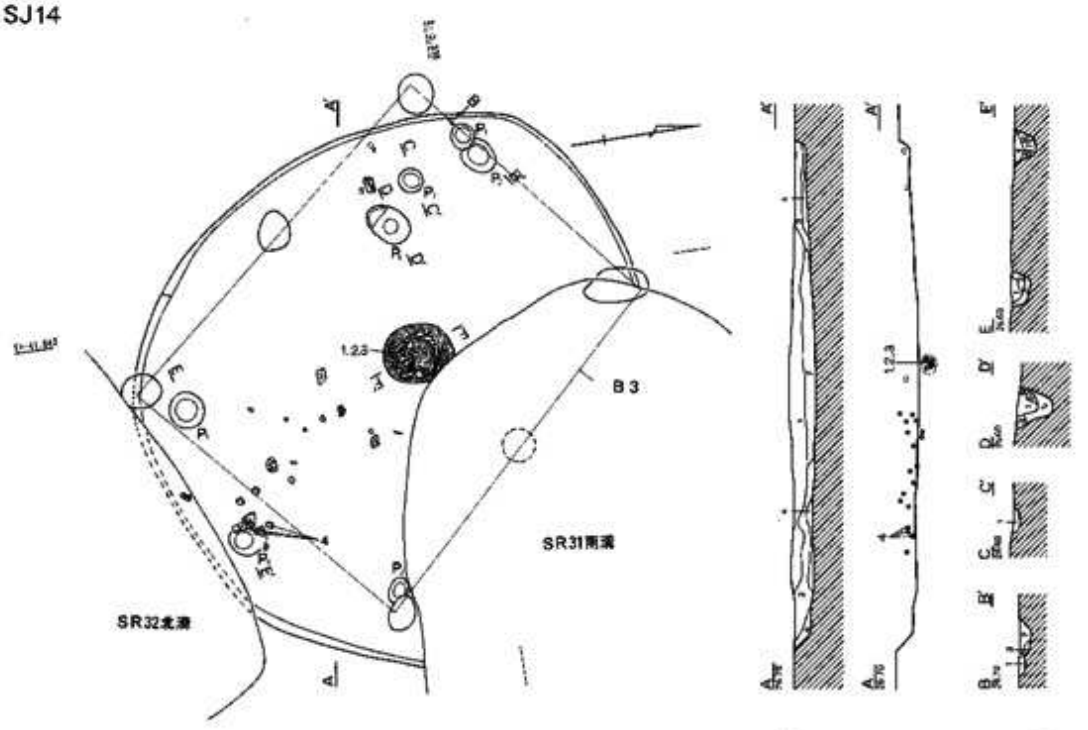


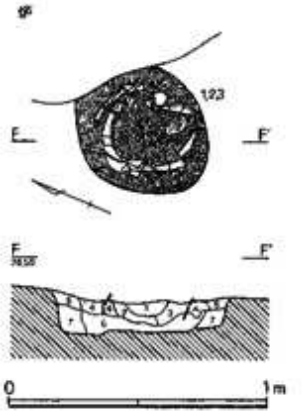
ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(20/16/35)
P2(24/17/22)
P3(30/30/26)
P4(38/37/12)
P5(25/20/37)
P6(35/26/34)

土層説明
A－A′，B－B′
1　黒褐色：微細な灰白粒子（軽石？），炭化物粒子含む．
1′黒褐色：黒色味強く，1より暗い．
2　暗褐色：黄褐色シルトロームを比較的均一に含む．炭化物少量含む．
2′暗褐色：シルトロームがブロック状に含まれる．
2″暗褐色：シルトローム含有きわめて多い．
3　暗褐色：ローム微粒，少量のロームブロック含む．
C－C′～F－F′
1　暗黄褐色：シルト質，灰色粘土少量含む．
2　灰褐色：粘土質，シルトローム少量含む．
3　灰褐色：粘土質，シルトローム微量含む．
4　暗黄褐色：シルト質，灰色粘土微量含む．

第17図　第13号住居跡実測図

SJ14





土層説明

A－A′
1　暗 褐 色：ローム・炭化物粒子含む．しまり持つ．
2　暗 褐 色：ローム・炭化物・焼土粒子多く含む．しまり・粘性やや強い．
3　茶 褐 色：ローム粒子混在．粘性もつ．
4　黄 褐 色：ローム土を多くブロック状に含み．しまり・粘性やや強い．

B－B′（P1，2）
1　黒 褐 色：ローム粒子少量含む．
2　暗 褐 色：ローム粒子少量含む．
3　黒 褐 色：ローム粒子微量含む．

C－C′（P7）
1　暗 褐 色：ローム・炭化物粒子少量含む．

D－D′（P6）
1　暗 褐 色：ローム・炭化物粒子少量含み．色調やや暗い．
2　暗 褐 色：1に近似するが色調やや明るい．
3　黒 褐 色：ローム・炭化物粒子少量含む．
4　暗 褐 色：ローム粒子多量含む．
5　暗 褐 色：粘質ローム粒子少量含む．粘性あり．

E－E′（P5）
1　暗 褐 色：ローム粒子少量含み．粘性ややあり．
2　黒 褐 色：ローム粒子少量含む．
3　黒 褐 色：ローム粒子少量．ブロック多量含む．
4　暗 褐 色：ローム粒子少量含む．
5　黒 褐 色：ローム粒子少量．炭化物粒子微量含む．
6　黒 褐 色：ローム粒子少量含む．粘性ややあり．
7　暗 褐 色：粘質ローム粒子多量含む．粘性あり．

F－F′（炉）
1　黄 褐 色：ローム・炭化物粒子含む．
2　黄 褐 色：ロームブロック含む．しまりなし．
3　褐　　色：ローム土4より多く含む．
4　暗 褐 色：ローム粒子と若干の炭化物粒子含む．
5　黄 褐 色：ローム粒子・ブロック主体．床面
6　黄 褐 色：ローム土主体に僅かに黒褐色土含む．
7　黄 褐 色：ローム土主体．地山．

ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(18/(18)/7)
P2(28/24/11)
P3((18)/15/11)
P4(30/25/21)
P5(28/25/12)
P6(38/26/30)
P7(20/18/6)

第18図　第14号住居跡実測図

2．土　壙

(1)　遺構（第19-22図，図版15－19）

縄文時代と判断した土壙は21基あり、礫が充塡される、いわゆる集石土壙と、性格がいまひとつ明かでないものがある。

集石土壙は加熱した石を利用した石蒸し調理用の土壙と考えられているもので、ＳＫ1－15、18、19の合計17基があった。平面形態はいずれも円形を基本としており、最大はＳＫ6の長径2.24m、最小がＳＫ8の60cmである。深さはＳＫ14の55.6cmを最大とし最小はＳＫ15の13.7cm（いずれも確認面から）であった。いずれの土壙も、明らかに被熱した痕跡は確認できず、壙内での直接の火の使用は検証できなかった。

集石の石材はチャート系の礫が多く選択されており、大きさは鶏卵から握り拳大ほど、重量は100－300ｇ程度の円礫を基本に、大きなものは小さく小割りに（あるいは使用中に割れたか？）しているが、ＳＫ2の礫の中に5.65ｋｇのものがあった。礫の中には赤色に変色し明らかに被熱した状況を示すものも多く、土壙覆土中には炭化物、炭化物粒を多量に含んでいるものが多い。出土礫の総重量はＳＫ2が最高で実に87.8ｋｇに達し、以下ＳＫ14の38.7ｋｇ、ＳＫ11の19.4ｋｇ、ＳＫ13の12.1ｋｇの順となっている。

時期の決め手となる土器を出土する遺構が少ないがＳＫ10では中期の土器の出土があり時期が判明した。ＳＪ10との位置的な近接性及び出土土器の時期的な近接性からすると集石土壙の大方の時期は中期前半代の可能性が強くはなかろうか。

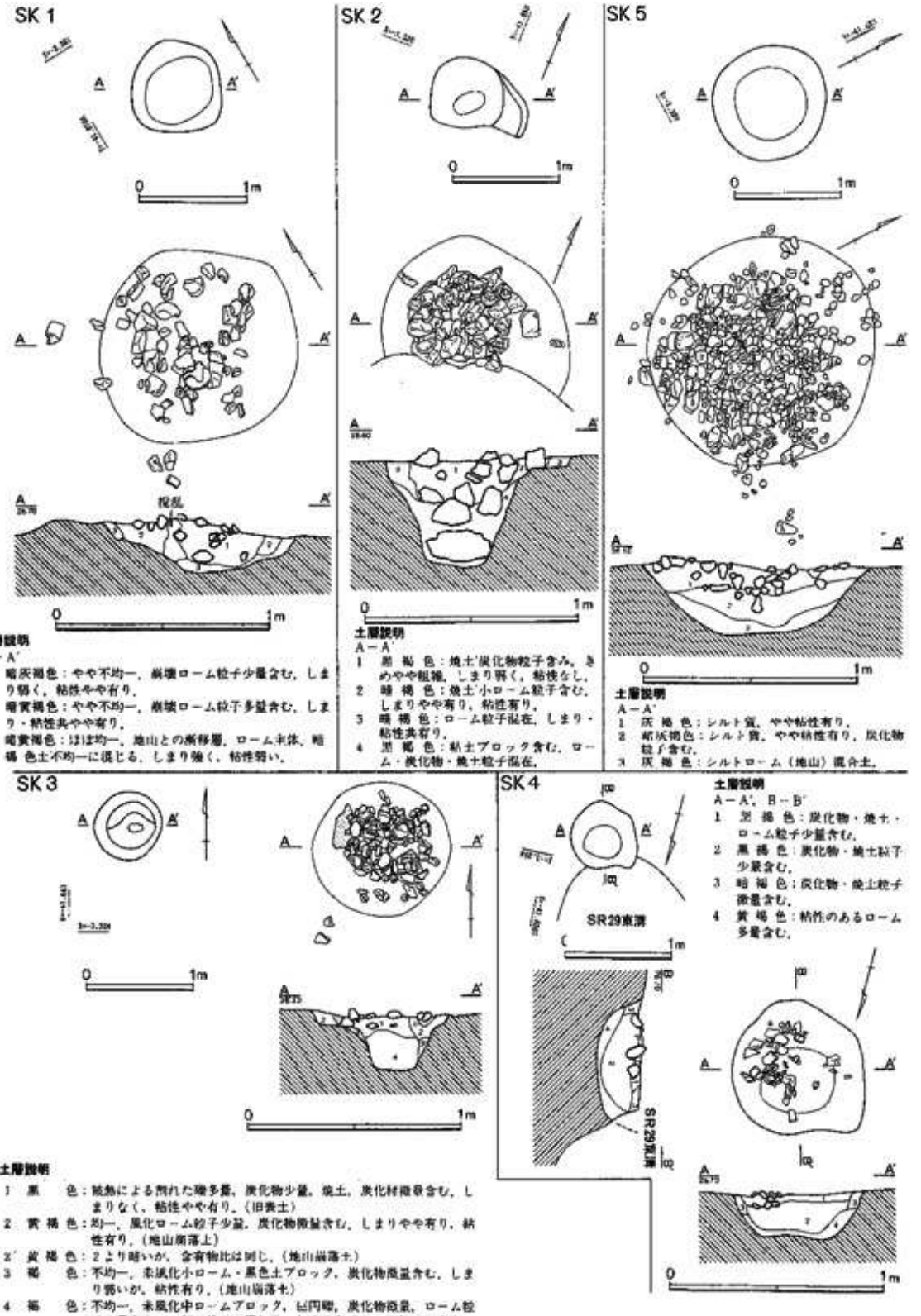
以下に、主要な集石土壙出土礫の計測値を掲げておく。（単位＝ｇ）

土壙名	ＳＫ２	ＳＫ３	ＳＫ４	ＳＫ５	ＳＫ７	ＳＫ11	ＳＫ12	ＳＫ13	ＳＫ14
個　数	241個	109個	39個	33個	299個	272個	51個	101個	684個
総重量	89768	7650	2980	5170	914.9	19392	7480	12080	38684
平均重量	372.5	70.2	76.4	156.7	3.1	71.3	146.7	199.6	56.6
最　大	5650	510	240	980	100	1679	1770	1100	1650
最　小	13	20	20	30	0.1	0.2	10	20	0.1

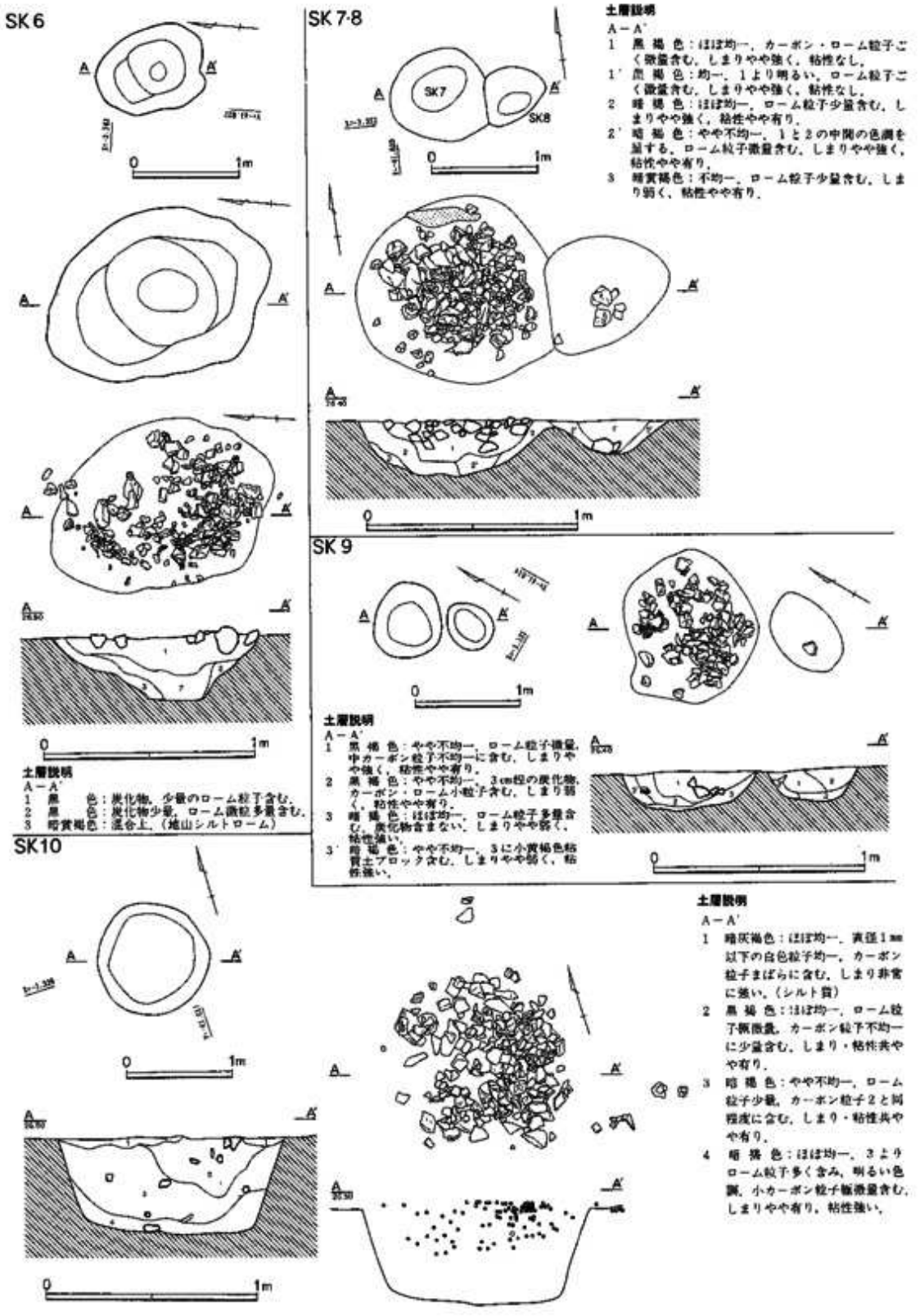
(2)　遺　物

第10号土壙出土遺物（第2-7図，図版148）

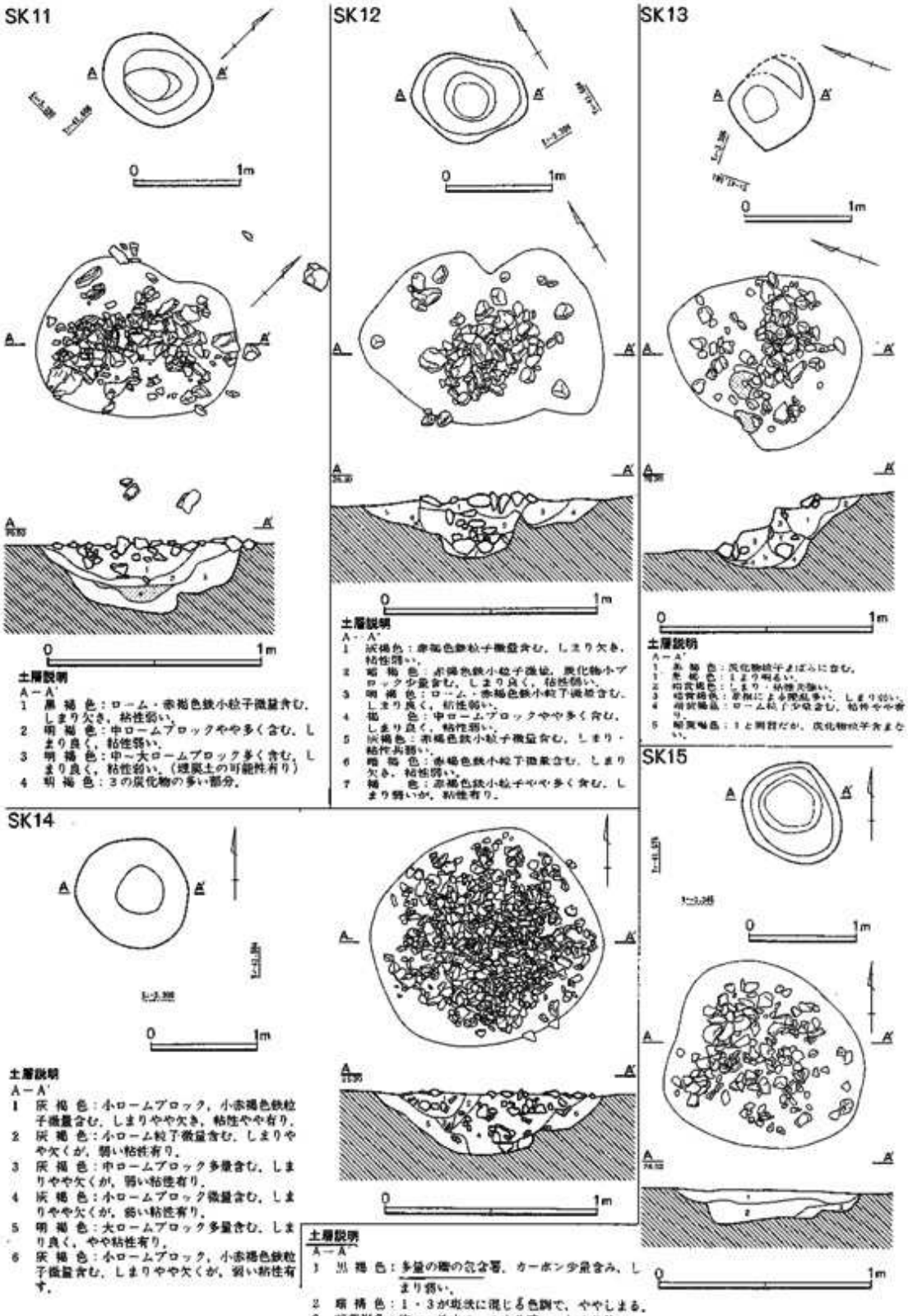
図示した資料はすべて土器で、石器は出土していない。1－3は胴部文様帯土器で、1はＪ字状を、3は渦巻を基調とした隆帯が構成展開の基本となるようだが、詳しい構成は不明である。そして、4－6は口縁上端のみに横位線列の文様帯を設定、ほかを縄文などの素文でまかなう型である。一方、7・8は浅鉢片で、前者は頸部の文様帯部に相当する。以上は、大方は勝坂系に属するものだが、4は加曽利Ｅ系に共伴することが多い類型である。



第19図　第1－5号土壙実測図



第20図　第6－10号土壙実測図



土層説明

A－A'

1 黒 褐 色：ローム・赤褐色鉄小粒子微量含む。しまり欠き，粘性弱い。
2 明 褐 色：中ロームブロックやや多く含む。しまり良く，粘性弱い。
3 明 褐 色：中～大ロームブロック多く含む。しまり良く，粘性弱い。（埋戻土の可能性有り）
4 明 褐 色：3の炭化物の多い部分。

土層説明

A－A'

1 赤 褐 色：炭化物粒子ほぼ全に含む。
2 明 褐 色：1より明るい。
3 暗黄褐色：草根による間隙多い。しまり弱い。
4 明黄褐色：ローム粒子少量含む。粘性やや有り。
5 暗黄褐色：1と同質だが，炭化物粒子含まない。

土層説明

A－A'

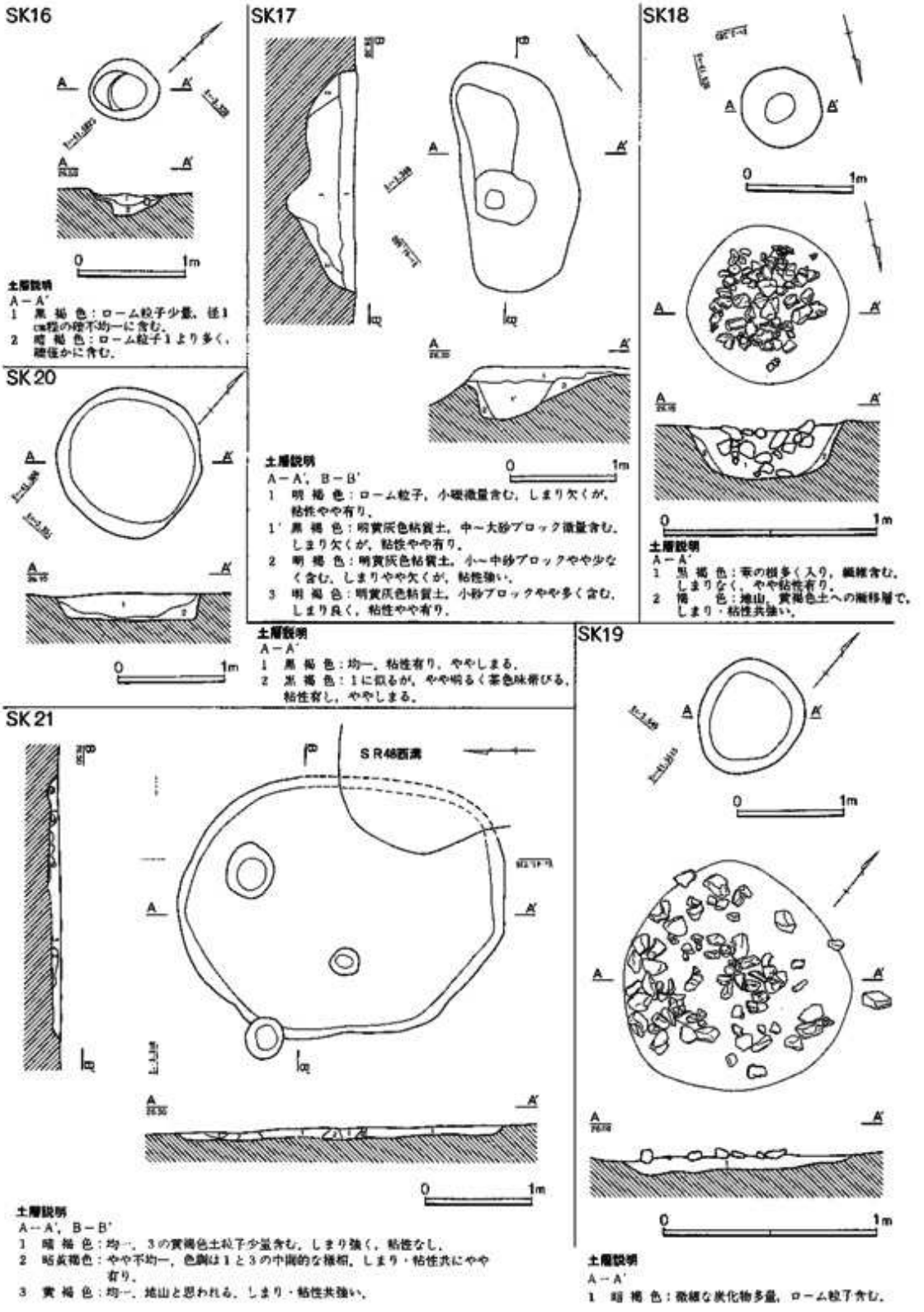
1 黒 褐 色：多量の砂の含含等，カーボン少量含み，しまり弱い。
2 暗 褐 色：1・3が既状に混じる色調で，ややしまる。
3 暗黄褐色：均一，地山ロームより暗い，しまり強い。

土層説明

A－A'

1 灰 褐 色：小ロームブロック，小赤褐色鉄粒子微量含む。しまりやや欠き，粘性やや有り。
2 灰 褐 色：小ローム粒子微量含む。しまりやや欠くが，弱い粘性有り。
3 灰 褐 色：中ロームブロック多量含む。しまりやや欠くが，弱い粘性有り。
4 灰 褐 色：小ロームブロック微量含む。しまりやや欠くが，弱い粘性有り。
5 明 褐 色：大ロームブロック多量含む。しまり良く，やや粘性有り。
6 灰 褐 色：小ロームブロック，小赤褐色鉄粒子微量含む。しまりやや欠くが，弱い粘性有り。

第21図　第11－15号土壙実測図



第22図　第16－21号土壙実測図

3．遺構外出土遺物（第2-8－10図，図版149・150）

遺構外、あるいは方形周溝墓など後世の遺構に混在、出土した縄文土器の製作期は、少ないながら、縄文早・前・中・晩期におよぶ。これに対し、石器は大方が中期の所産になると思われる。

1－13は早期末葉から前期初頭にかけての土器である。1－4は条痕文系の系譜を直接に引くもので、器面に擦痕を残し、1では隆帯区画の口縁部文様帯に半裁竹管を施文具とする波状文が描かれている。一方、5－13は条痕文系末葉に伴う縄文施文系の破片である。斜縄文の施文原体はすべてＲＬ、羽状の作出は斜転移施文（9・10）と縦横位施文（7）の2種類が判別できる。13は撚糸Ｒを施文したものである。

14－26は前期に属する破片で、14は花積下層式の撚糸側面圧痕による構成を沈線で代えたものである。また、15－25は関山Ⅱ式から黒浜式初頭に属する破片で、15・16に半裁竹管による口縁部文様帯文様が、17では多段のループ文、さらに、23では無節斜縄文が観察できる。そして、26に示した浅鉢は諸磯ａ式に比定できるだろう。

27－29は中期前葉の所産で、27・28の勝坂系破片は、それぞれ口縁部文様帯型と、胴部文様帯型の口縁素文部である。対して、29は阿玉台系の頸部破片で、突隆の断片が観察できるが、詳しい構成は不明である。30－42は中期後葉の所産で、42を除き、関東系に属する。30－36が加曽利Ｅ系キャリパー形土器で、ＥⅠ中から新期の特徴を兼ね備えている。この中で、35は、37と同じような、もっぱら胴部に施された半裁竹管文を構成の主体とする類型に属するかもしれない。38・39は連弧文系土器の同一個体片で、条線を地文とした連弧は他に変化を求めず、独立して施文されている。また、浅鉢は文様帯を擁する40と、赤彩型の41が出土している。そして、これらに伴うであろう42は、同心弧文を口縁に配する曽利系甕の口縁部片である。

43・44は晩期に属し、単沈線による三叉文などが観察できる。安行Ⅲｂ式に属するだろうか。

一方、石器は石鏃、スクレイパー、打製石斧、礫器、磨石、石皿などが出土している。45・46の石鏃は、凹基のみならず、基部がまるみを帯びて内湾する形態的特徴までも共通する。ともにチャート製（1.47ｇ，1.53ｇ）。47・48のスクレイパーはいずれも自然面を残した剥片の一部に細剥離を施し機能部とするが、加工は雑で、応急的な製作の所産と思われる。ともにチャート製（52.16ｇ、26.24ｇ）。打製石斧は49－54の6点を示した。当地における石材調達の困難さを表しているのか、49を除けば比較的小型品の部類に属する。形態は分銅形（49－51）と撥形（52－54）に二分でき、素材選択も自然礫から（51・54）と一次剥片の二態が、さらに加工面も片面（52・54）と両面がある。石材は49・50・52・54が砂岩製（359ｇ、141ｇ、79ｇ、76ｇ）、51が緑泥片岩製（75ｇ）、53がホルンフェルス製（169ｇ）。55の礫器は、加工の頻度からすれば打製石斧的である。しかし、四辺すべてが機能部を意図したとも取れる端部の鋭さがあり、打製石斧と同じ用途が付託されたとは思えない。泥岩製（102ｇ）。磨製製品は二点のみの出土であった。56はわずかだが磨痕が観察できる磨石、57は粉砕部を同面で二ヶ所設けた石皿である。56は閃緑岩（749ｇ）、57は緑泥片岩製、ＳＲ21の北溝出土。（8.18kg。）

（本章の遺物部分の文責：黒坂　禎二）

V　古墳時代の遺構及び出土遺物

1．住居跡

古墳時代に属する住居跡はその床面や覆土中の土器がいずれもその出現期段階のもので、ほかに時期の下るものを含まない。このことからこれらの住居跡群はこの時代の比較的短い期間に形成されたものと判断された。細かな先後関係は次章以下にゆずるとして、以下に記述する住居跡の時期についてはいちいち記述しないでおく。

(1)　第15号住居跡（第24図・第2-11図・図版20・151）

遺跡の主要部分ののる再堆積ローム自然堤防の西部には微小な谷地形が形成さている。本住居跡はこの谷の西側部分に位置し、グリッドはL-3である。中央をＳＲ2の南溝に、南西のコーナーを工事用の水路に削平され遺存は悪い。

平面プランはわずかな隅丸の方形で、厳密には北壁長3.6m、南壁4.4mなので隅丸の台形という表現が適切かもしれない。長軸（南北軸）長は4.58m、軸偏差はN－32°－W、短軸（東西軸）長はさだかでないが、推定で4.34mほど、軸偏差はE－33.5°－N前後となろう。覆土は確認面から最高で約12－13cmの厚さがあり、上層が炭化材（炭化物）・焼土を含む不均質な灰褐色土、下層がローム粒・円礫を含む灰褐色土を基調とする。

壁溝は認められず、貼床もない。床面のピットはP3が貯蔵穴、他は柱穴と思われる。炉は確認できていない。

遺物は貯蔵穴北側の覆土中の出土が比較的多いが、いずれも小破片である。台付甕、大形の壺のの破片があった。覆土中－上層からは炭化材や焼土の出土があり、その出土状況からすると住居廃絶後の埋没する比較的早い段階で上屋が火災を被ったものと思われる。

(2)　第16号住居跡（第25図・第2-11図・図版20）

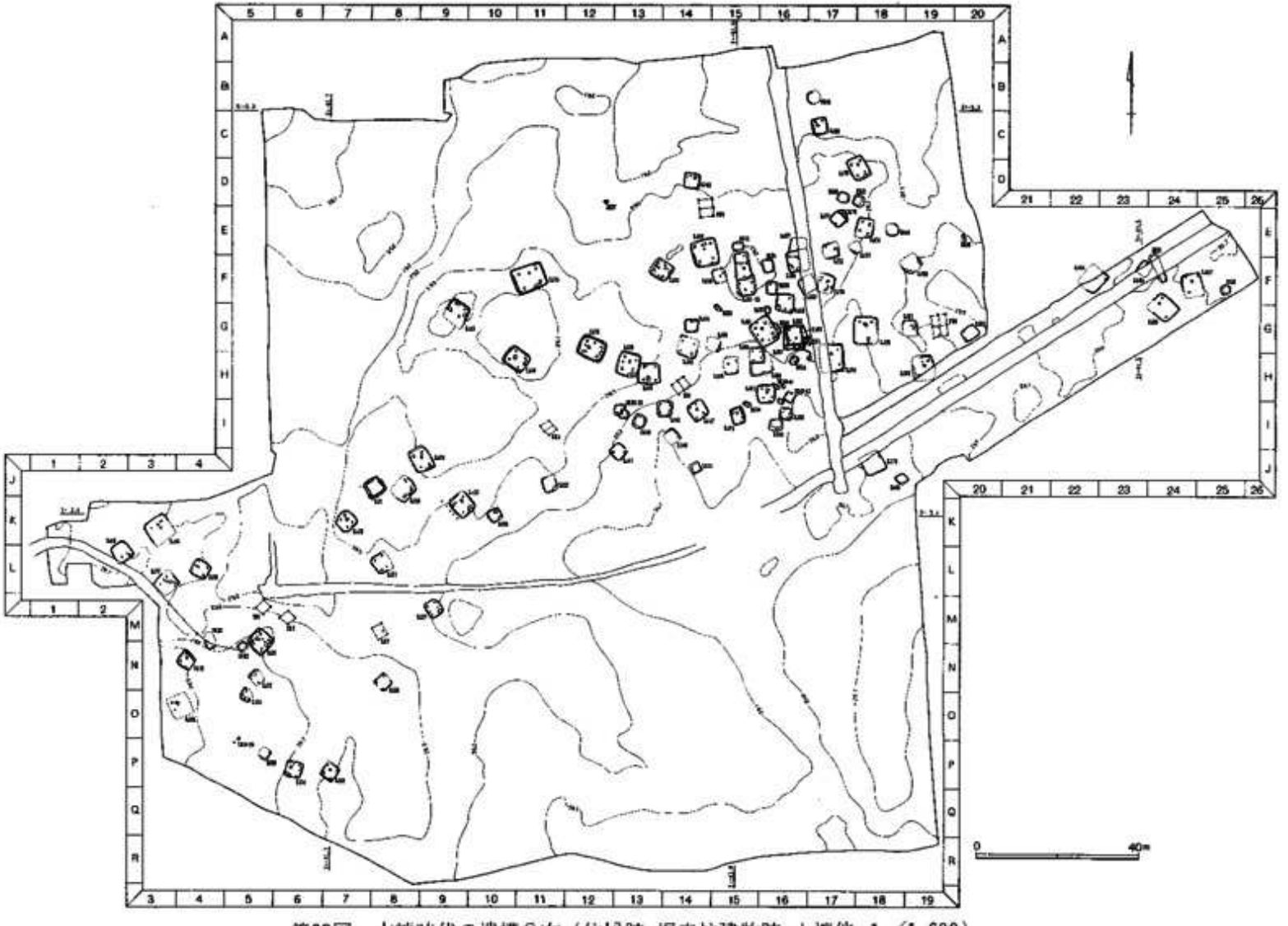
K-3グリッド、ＳＪ15と約5mの間隔をおきその北東に位置する。北西コーナーと南壁、東壁南部をそれぞれＳＲ2の東溝、ＳＲ3の北溝と攪乱壙により破壊され、遺存は悪い。

平面プランは北東コーナーにわずかに丸みがあり隅丸方形のプランとなろう。南北軸が長軸で6m前後となろうか、軸偏差はN－33°－Wである。東西軸（短軸）長は6.00m、軸偏差はE－35°－Nである。覆土は最深部で約20cmと浅く、ローム粒を少量と礫を多量に含む茶褐色土またはローム粒を多量に含む黄褐色土を基調にしていた。

床面にピットが6基認められ、P3－P6が主柱穴と考えられる。壁溝、貯蔵穴は検出されない。

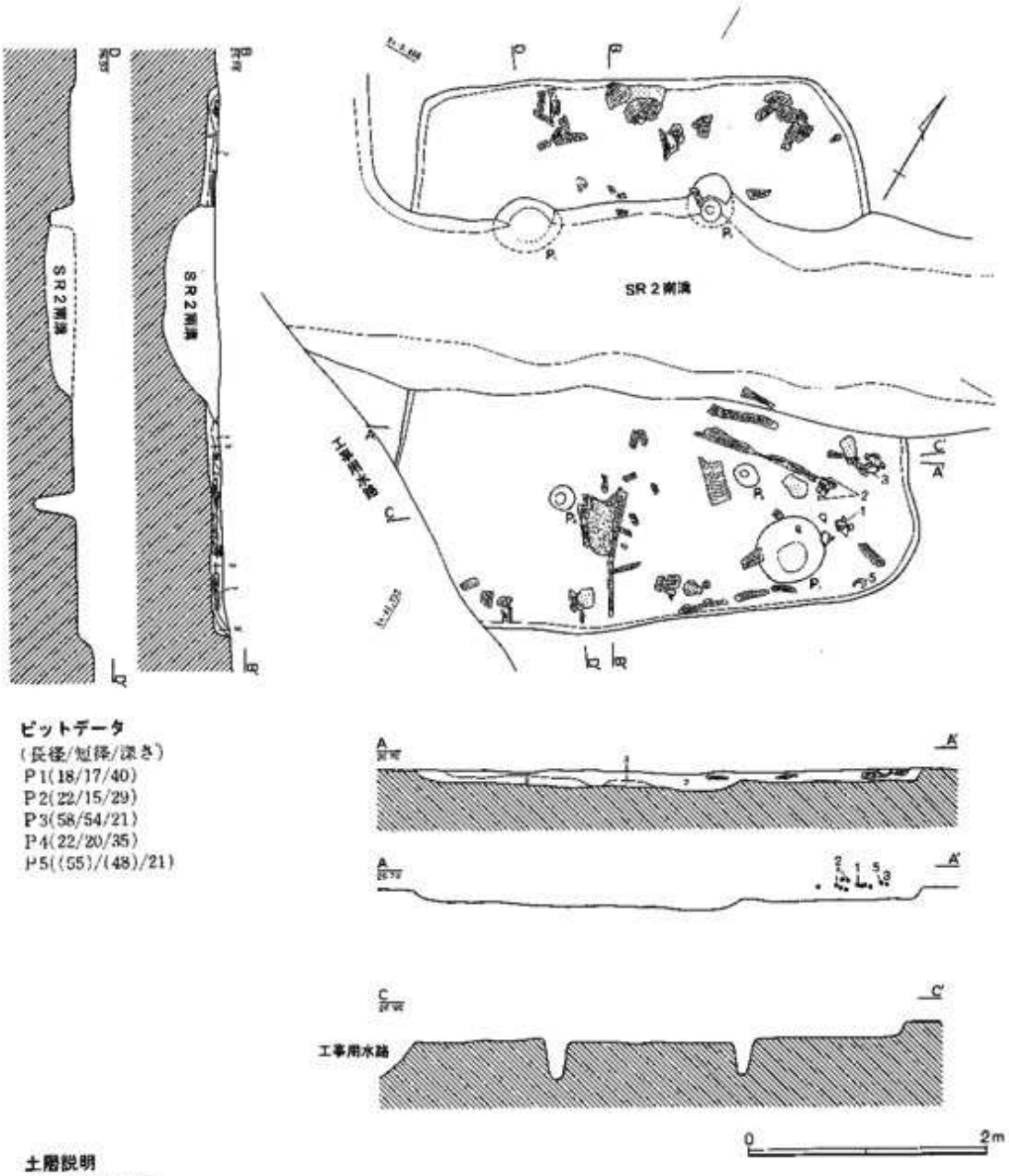
炉は中央からやや北に偏して検出され、48×42cmの不整円形の範囲がわずかにくぼんで底面が薄く焼土化しており、このくぼみの東南の部分に所謂枕石の礫が4個検出された。

出土遺物の土器片は覆土中のものが多く、台付甕の台部や大形の折返口縁壺の口縁部、高杯の脚破片等があった。また、炭化材の出土は火災を被っていることを示している。



第23図　古墳時代の遺構分布（住居跡・堀立柱建物跡・土壙他、1／1,600）

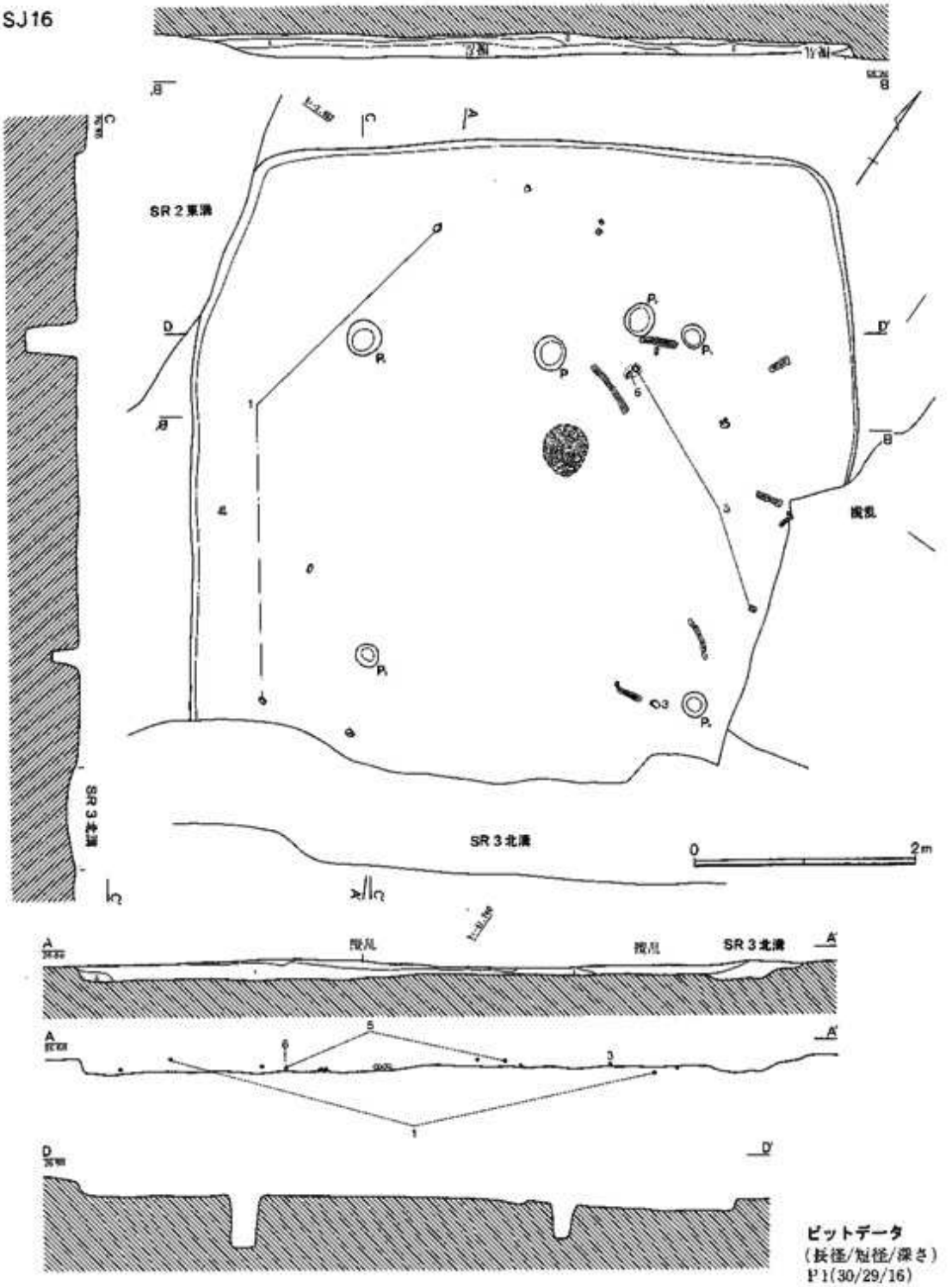
SJ15



ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(18/17/40)
P2(22/15/29)
P3(58/54/21)
P4(22/20/35)
P5((55)/(48)/21)

土層説明
A－A′，B－B′
1　灰褐色：不均一，炭化材含有土層，ローム漸移層を基とし，炭化物少量，焼土微量含む．
2　灰褐色：不均一，炭化材含有土層，ローム漸移層を基とし，炭化物，焼土，小礫を多量含む．
3　灰褐色：やや不均一，ローム漸移層を基とし，風化中ローム粒子，円礫多量含む．
3′　灰褐色：3に似るが礫を含まない．

第24図　第15号住居跡実測図



土層説明

A－A', B－B'

1　茶 褐 色：均一，逆流入土層，風化小ローム粒少量，小礫多量，未風化小炭化物粒少量含む．

2　黄 褐 色：均一，逆流入土層，未風化小ローム粒子多量，小礫，未風化小炭化物粒少量含む．

3　黄 褐 色：均一，逆流入土層，地山を基とし，未風化小ローム粒子少量，小礫少量含む．

ピットデータ

（長径/短径/深さ）

P1(30/29/16)
P2(30/26/14)
P3(22/20/30)
P4(24/22/25)
P5(22/20/25)
P6(32/32/48)

第25図　第16号住居跡実測図

(3) 第17号住居跡（第26図・第2-11図・図版21・151）

調査区西部、前記2軒の住居との同様の立地でL-4グリッドに位置する。ＳＲ3に北西コーナーを切られ、東壁中央から南壁西部までを工事用水路に切られ、遺存はあまりよくない。確認面から床面までは、最深部で約20cmと浅い。

遺存が悪いが、平面形態は隅丸の方形と考えられ、南西コーナーの角度がやや鋭角的かつ北壁・西壁も鋭角的な交差が予想されるので、ＳＪ16と同様、厳密にはわずかな台形のプランと思われる。東壁長は4m、西壁は4.8m前後になろうか。東西軸が長軸となり、長さ4.8m、軸偏差はＥ－33°－Ｓ、南北軸（短軸）長は4.4m前後、軸偏差はＮ－44°－Ｅとなろう。

覆土は上層がローム粒を多量に含む灰黒色土、下層は焼土を主体とする赤褐色土である。住居の中央部から西壁にかけての床面及び覆土中から比較的多くの炭化材や炭化物粒、焼土塊の出土があり、住居廃絶後間もない時期に火災を被っていると思われる。

床面にピットが8基確認され、主柱穴となる可能性のあるのはＰ2、Ｐ3、Ｐ8であろう。また、東壁の中央からやや北寄りに接した位置のＰ5は貯蔵穴で、深さは約30cm、その周囲には幅15－40cm、高さ15cmの周堤を築いていた。壁溝は住居の遺存部分については確認されていない。

炉は床面中央からやや北東に偏した位置にあり、56×50cmの不整の円形に床面を浅く掘りくぼめており、底面の地山が薄く焼土化していた。

遺物は台付甕、直口壺、広口壺、高杯等があった。1の台付甕は主に貯蔵穴内からの破片が接合、4の広口壺、5の直口壺、8の瓢形と思われる壺は貯蔵穴北側のピット内から、9の高杯はＰ8の北東の床面からやや浮いて出土した。これらはいずれも住居とともに廃棄されたか、住居廃絶後間もなくその位置にもたらされたものと思われる。

(4) 第18号住居跡（第27図・第2-12図・図版21・152）

ＳＪ17の北東に4m弱の間隔でL-4グリッドに位置している。立地基盤も前記3軒と同様である。確認面から床面までは最深部で約10cm強を測る。

南壁がややゆらいでおり、北東と南東のコーナーの丸みが強いが、平面形態は隅丸方形の範疇である。確認面での東西軸（長軸）長は4.36m、軸偏差はＥ－32°－Ｓ、南北軸（短軸）長は4.25m、軸偏差Ｎ－29°－Ｅである。

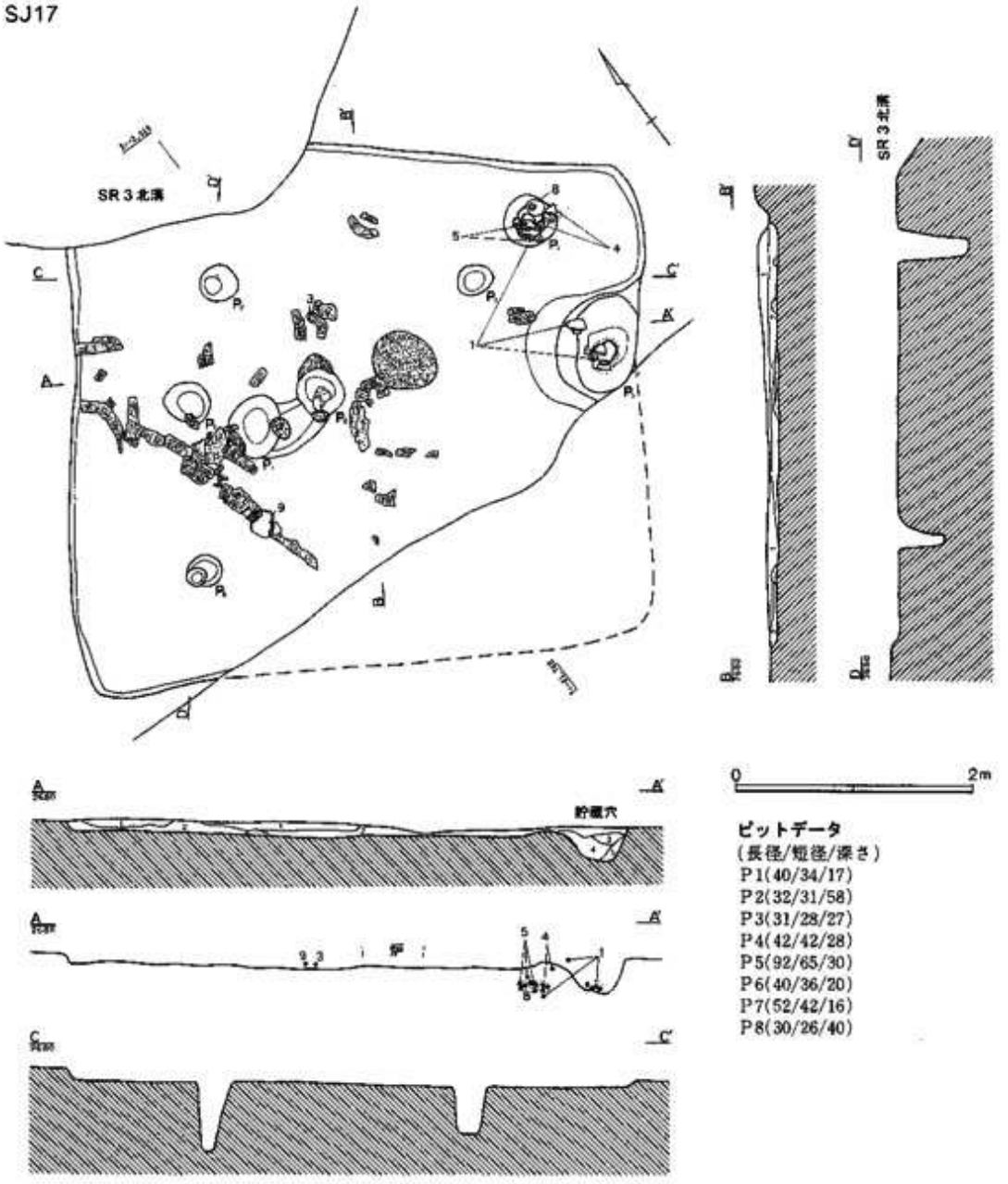
覆土は中央に近い部分の上層に地山ロームを含む淡褐色の（人為的？）埋め戻し土が見られたほかは概ね黒色土が主体となっている。

床面にはピットが合計11基認められたがＰ2－Ｐ4、Ｐ9が主柱穴となろう。いずれも50cmを越える深さがある。また、Ｐ3は42×33cm、Ｐ4は42×42の浅い堀方を有している。壁溝は認められなかった。

炉は中央から西壁寄りに偏して検出され、径約54×41cmの不整円形の浅い掘りくぼみで、底面が薄く焼土化する。東の部分に長さ15cmほどの枕石が1個検出されている。

出土遺物には台付甕、壺、高杯等の土器がある。4－7は北東コーナーとＰ3の間の床面から出土、8は炉の西に接する位置の床面からの出土である。

SJ17



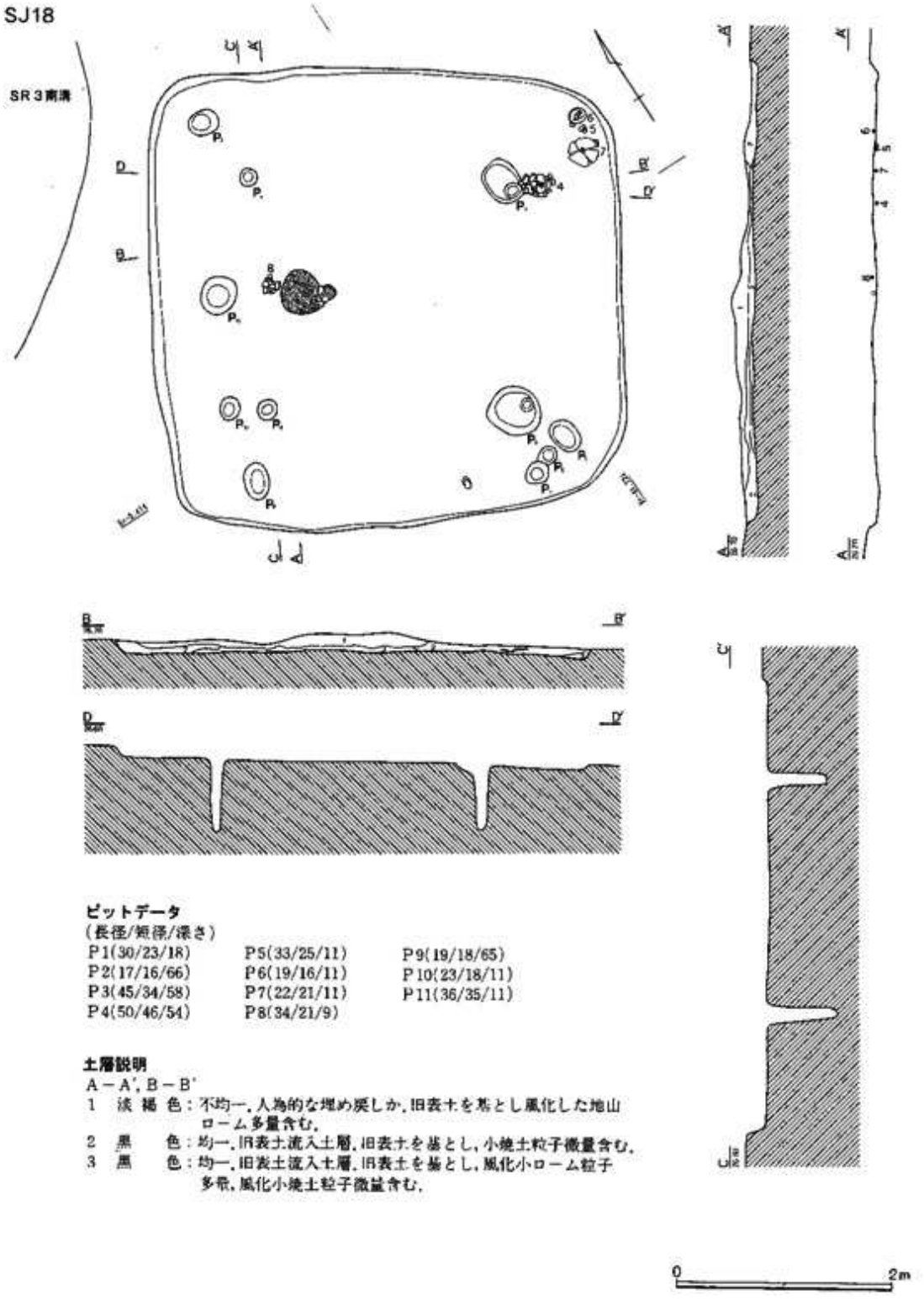
ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(40/34/17)
P2(32/31/58)
P3(31/28/27)
P4(42/42/28)
P5(92/65/30)
P6(40/36/20)
P7(52/42/16)
P8(30/26/40)

土層説明

A－A′, B－B′

1　灰 黒 色：やや不均一，周堤の逆流入土層，旧表を基とし，未風化小－中ローム粒多量に含む．
2　赤 褐 色：不均一，焼土を基とした三角堆積層，床直の焼土層に炭化物含み，一部床を焼く．
（1に多量の焼土が混合したもの）
3　灰 黒 色：均一，灰色粘土を基とし，風化小ローム粒子多量，焼土粒子微量含む．
4　灰 黒 色：不均一，灰色粘土を基とし，風化小ローム粒子より多量，焼土粒子微量含む．
5　灰 黒 色：不均一，灰色粘土を基とし，風化小ローム粒子3，4よりさらに多量，焼土粒微量含む．

第26図　第17号住居跡実測図

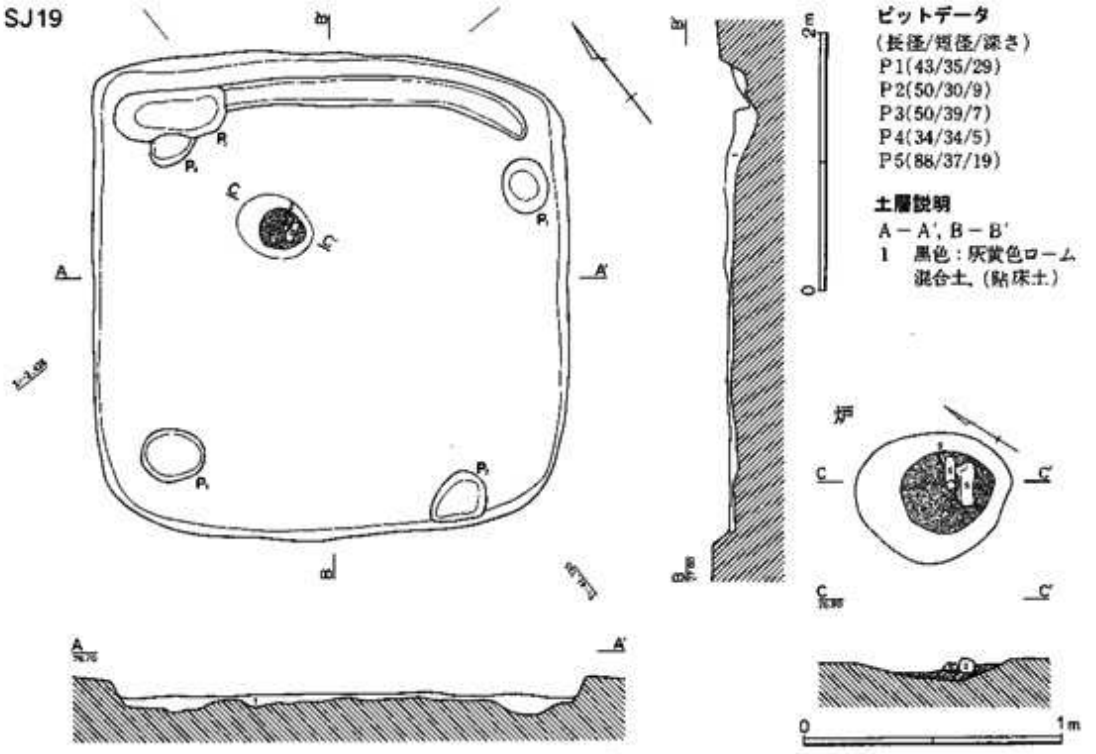


ピットデータ
（長径/短径/深さ）

P1(30/23/18)	P5(33/25/11)	P9(19/18/65)
P2(17/16/66)	P6(19/16/11)	P10(23/18/11)
P3(45/34/58)	P7(22/21/11)	P11(36/35/11)
P4(50/46/54)	P8(34/21/9)	

土層説明
A－A′, B－B′
1　淡 褐 色：不均一，人為的な埋め戻しか，旧表土を基とし風化した地山ローム多量含む．
2　黒　　色：均一，旧表土流入土層，旧表土を基とし，小焼土粒子微量含む．
3　黒　　色：均一，旧表土流入土層，旧表土を基とし，風化小ローム粒子多量，風化小焼土粒子微量含む．

第27図　第18号住居跡実測図



第28図　第19号住居跡実測図

(5) 第19号住居跡（第28図・第2-12図・図版22）

主要な遺構部分ののる微高地の西縁部分に位置する。ＳＪ15－18を乗せる部分とは微小な谷を隔てて対峙する。グリッドはＮ-4で調査範囲の南西端部分にあたる。

平面形態は南東と南西の隅が緩いカーブを描き、南壁は外方にわずかに膨らむが隅丸方形の範疇である。規模は確認面で南北軸（長軸）長が3.76ｍ、軸偏差Ｎ－38°－Ｅ、東西軸（短軸）長3.70ｍ、軸偏差Ｅ－36°－Ｓで、やや小規模な部類にはいる。

覆土は黒褐色土を基調としており、確認面から床面までは約20cm弱の深さである。また、ほぼ全面が貼床となっており、一度最高で床面下20cmまで粗掘りしてから、ロームと旧表土由来の黒色土を混合して埋め戻し水平に床面を調整している。

床面にはピットが5基認められたがＰ1、Ｐ5以外はいずれも深さ10cm以内で浅い。北壁の内側約10cmに壁溝が検出された。幅は20－25cm弱で深さは約10cmである。

炉は中央から北西コーナーに偏して検出した。61×47cmの不整円形で約10cmの深さに掘りこまれており、36×31cm、厚さ約5cmで床面が焼土化していた。

出土遺物には台付甕の破片等があるが量は少ない。図示したのはいずれも覆土中の出土である。

(6) 第20号住居跡（第29図・第2-12図・図版22・153）

調査区南西端部のO-4グリッドに位置する。ＳＲ5の方台部の精査中に焼土が検出されたため、さらに精査したところ、住居の炉跡ではないかと判断するに至ったからである。

覆土はローム層上面の確認面では全く確認できず、床面のレベルは確認面（ローム状土上面）とほとんど同一と思われる。したがって壁面の検出できた部分はなく平面形態は不明といわざるをえないが、平面的にはＳＲ5の方台部・南壁とほとんど重なるものと思われる。住居の一辺は5.5－6mの間になろうか。

ピットは7基検出され、ＳＲ5の南周溝内検出のピット（P2）はその位置からすると、本住居の貯蔵穴でその下半部が遺存したものと思われる。

炉は63×46cmの不整円形で、ほとんど掘りくぼみもなく、地山が厚さ5－6cmの厚さで焼土化している状況であった。

遺物の出土は当然少なく、貯蔵穴残存部内から壺が1個体出土しただけである。また、貯蔵穴内からは炭化材が土器と共に出土しており、ほかの火災住居の炭化材のあり方からすると、本住居も火災を被っている可能性が強いものと思われる。

(7) 第21号住居跡（第30図・第2-12・13図・図版23・152・153）

調査区の南西部、M-5グリッドに位置する。主要な遺構ののる微高地の西縁にあたり、ＳＪ15－18を乗せる小さな島状の部分とは微小な谷を隔てて対峙する。

平面形態は西壁がごくわずかに外方に膨らむが、隅丸の方形としてよい。確認面のローム上面から床面までは最高で15cmほどと浅い。確認面での規模は東西軸（長軸）長5.43m、軸偏差Ｅ－40°－Ｓ、南北軸（短軸）長5.0m、軸偏差はＮ－41°－Ｅで本遺跡の住居のうちでは比較的大形の部類である。

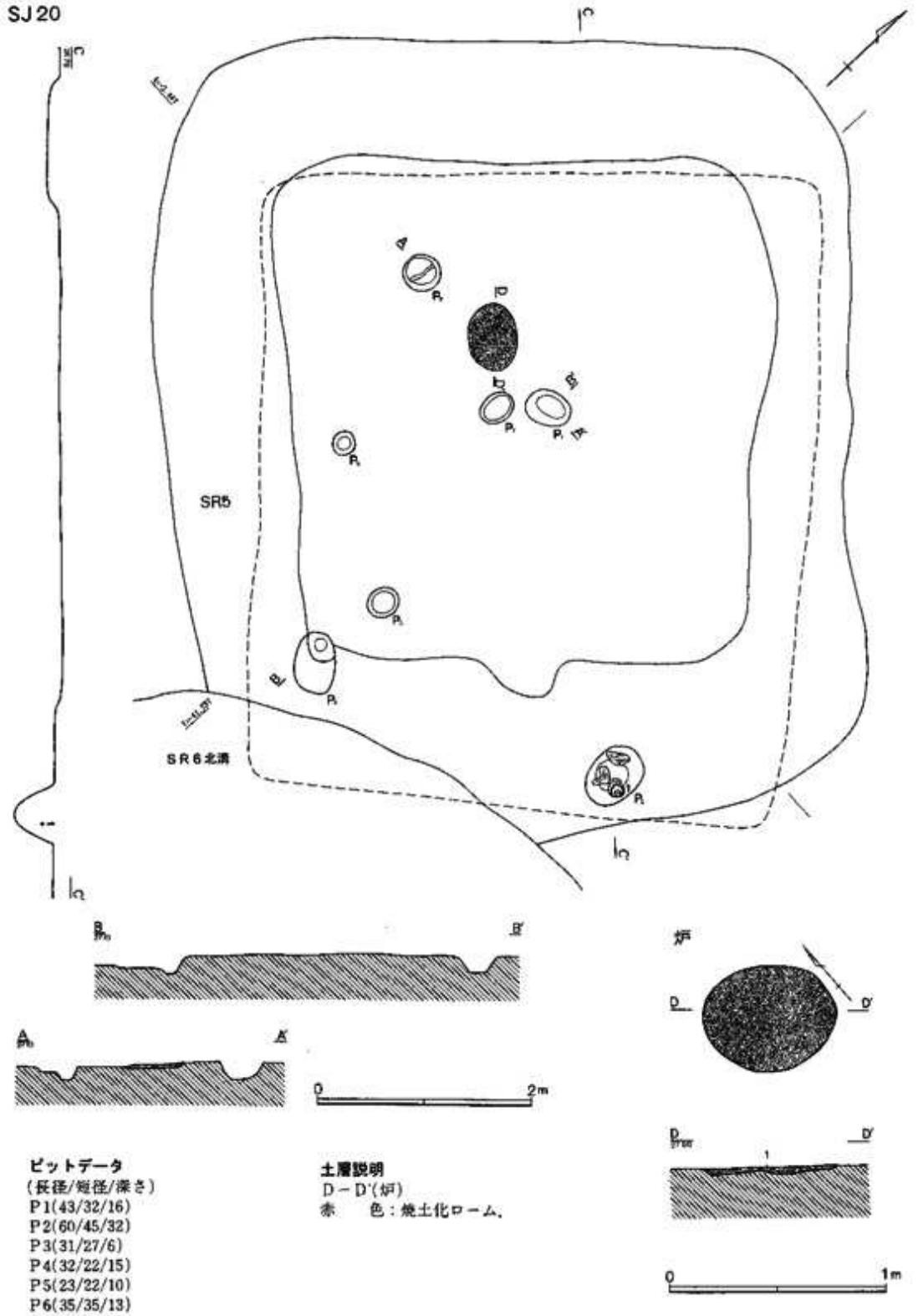
覆土は中央部分がロームブロック、ローム粒を含む暗褐色土を基本に、周囲にこれに先行し褐色土が堆積する。床面は壁に沿うように幅数10cm、深さ最高15cm弱で粗掘りし、ローム粒を混ずる暗褐色土で水平に埋め戻して貼床としている。

床面にはピットが17基認められ、P1、P6、P9、P12が主柱穴となろう。壁溝は認められない。

炉は中央から西壁寄りに検出され、長径75cmと45cm、深さ約5cmの2基のピットを連ねるような形で掘られており、平面形態は不整形を呈し、炭化物粒や焼土粒を含む土を覆土としている。東南部分に長さ17cmと15cm、6cmの礫の枕石を設置しておりその下面が特に焼土化している。

出土遺物は量的には本遺跡の当該期の住居としては多い方で、器種としては台付甕、直口壺、頸部に凸帯のある壺や器台等があった。1は西壁ぎわの北西コーナーよりの床面からわずかに浮いて、2はP2上やや浮いた状態、7は中央床面からわずかに浮いた状態で、13はP1の南側床面直上からの出土、5・4・12は貼床内の出土である。

また、北壁付近や東南コーナー付近での炭化材が出土しており、火災を被っているものと考えられる。



ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(43/32/16)
P2(60/45/32)
P3(31/27/6)
P4(32/22/15)
P5(23/22/10)
P6(35/35/13)
P7(32/26/9)

土層説明
D－D'(炉)
赤　色：焼土化ローム.

第29図　第20号住居跡実測図

(8) 第22号住居跡（第31図・第2-13図・図版23・153）

調査区南西部のN-5グリッドに位置する。東南部分と西壁南半をそれぞれＳＲ11の北西コーナー部分とＳＲ7東溝に切られており、住居の約半分が失われている。

平面形態は遺存部分から隅丸方形と思われ、規模は確認面で南北軸（長軸）長が3.2m、軸偏差はＮ－43°－Ｗ、東西軸が短軸になると思われ3m強、軸偏差はＥ－44°－Ｎとなろうか。当該期の住居のうちでは小規模な部類にはいる。

覆土はシルト系の黒褐色粘質土を基調としており、確認面から床面までは約12－13cmの深さである。

床面には柱穴と思われるピットが3基認められた。遺存部分に貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

炉は中央から北東コーナーに偏して検出した。35×33cmの不整形で約5cmの深さに床面を掘り込んでいる。

出土遺物には台付甕、壺等の破片がある。1は北壁ぎわの床面からわずかに浮いた状態、3は覆土中の出土である。

(9) 第23号住居跡（第32図・図版23）

調査区南西部のO-5グリッドに位置し、北東部分をＳＲ7の東溝に切られている。

平面形態は全体がわからないが遺存部分のコーナーが丸みをもち、南・西壁ともにわずかに外方に膨らんでいる。隅丸方形の範疇としてよいだろう。規模は確認面で南北軸（短軸）長が2.72m前後、軸偏差Ｎ－28°－Ｅ、東西軸（長軸）長2.75m前後、軸偏差Ｅ－34°－Ｓで、最も小規模な部類にはいる。

覆土は黒褐色土を基調としており、確認面から床面までは約10cm強の深さである。また、中央部をのぞき貼床で、いったん最高で床面下10cm強粗掘りしてから、暗褐色土とロームを混合して埋め戻して床面を調整している。

床面にはピットが5基認められた。Ｐ1、Ｐ2、Ｐ5が主柱穴と思われる。

炉は中央から北西コーナーにかなり偏した位置にある。67×39cmの不整形で掘りこみはほとんどなく、厚さ約5cm強で床面が焼土化していた。

出土遺物には土師器破片が少量あったが図示に耐えられるものはない。

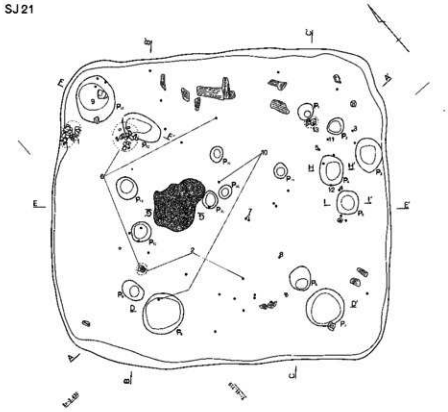
(10) 第24号住居跡（第33図・第2-13図・図版24・153）

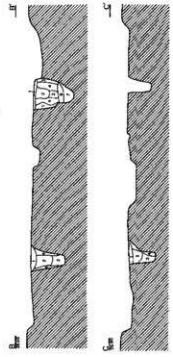
調査区南西のＰ-6グリッドに位置する。当該期の遺構ののる自然堤防の東南の縁部に位置する。

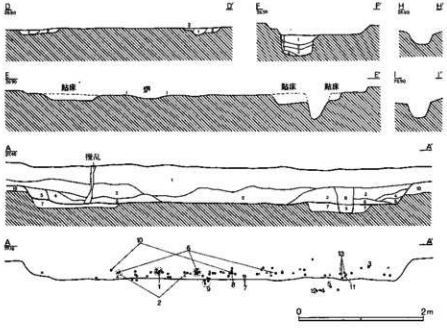
平面形態は四隅とも比較的しっかりとした角をもって検出され、北壁が南壁に比べわずかに短いが方形としてよいだろう。規模は確認面で南北軸（短軸）長が3.40m、軸偏差Ｎ－20°－Ｅ、東西軸（長軸）長3.88m、軸偏差Ｅ－20°－Ｓである。

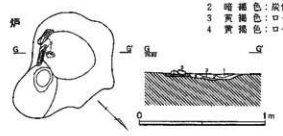
確認面から床面までは約20cm強の深さで、覆土は上層が黒褐色土、下層が暗黒褐色土を基調としている。また、埋没の過程で火災を受けていると思われ、炭化材のほか各所に屋根材に起因の考えられる焼土の薄い堆積が見られた。

SJ21









土層説明

A－A'
1　表土
2　暗 褐 色：ローム粒子・ブロック含み，ややしまる。
3　褐　　色：ローム・粘土粒子混在，しまりやや弱く，一部に焼土・炭化物粒子含む。
4　黄 褐 色：ローム，粘土主体，しまり・粘性あり。（壁崩落土）
5　黒 褐 色：黒 褐 色土を主体とし，焼土・炭化物粒多く含む，きめ細かい。
6　明 褐 色：ローム・粘土粒子混在，しまりやや弱い。
7　暗 褐 色：ローム・粘土粒子混在，（貼床土）
8　黒 褐 色：ローム粒子含む，きめ細かい，柱穴中の土。
9　黄 褐 色：ローム粒子・ブロック混在，しまり有り。
10　黒 褐 色：旧表土。

B－B'，C－C'
1　暗 褐 色：ローム・炭化物粒子含み，きめ細かい。
2　黄 褐 色：ローム・炭化物粒子混在，しまりやや弱い。
3　黄 褐 色：ローム粒子を含み，きめ細かい，しまりやや有り。
4　黄 褐 色：ローム粒子・ブロック（1～2cm）を多く含み，しまり・粘性を持つ。
5　暗 褐 色：ローム粒子・ブロック（0.5～1cm）を含む。
6　青 灰 色：ロームブロック，粘土を主体とする。
7　黒 褐 色：ローム粒子を含む。

D－D'
1　黄 褐 色：ローム粒子・ブロック（2～3cm）を混在，ややしまる。
2　暗黒褐色：ローム粒子を含み，きめ細かい。

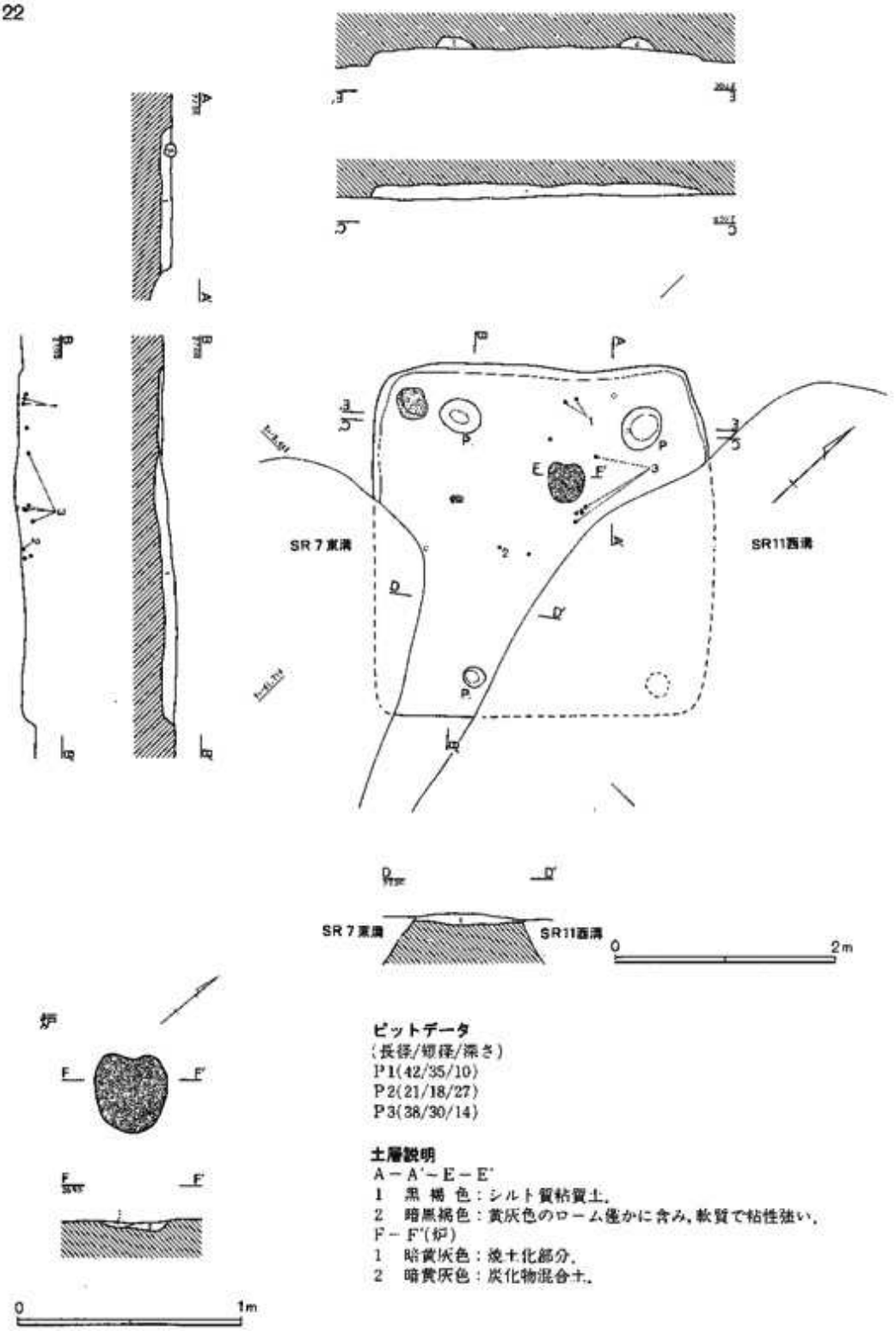
F－F'
1　黄 褐 色：ローム粒子多く含む，しまりやや持つ，炭化物粒子混在。
2　暗 褐 色：ローム粒子多く含む，しまりやや持つ，炭化物粒子混在。
3　暗 褐 色：ローム粒子多く含む，しまり持つ，焼土粒子を多く含む。
4　暗 褐 色：粘土粒子混在，しまりやや持つ。
5　黄 褐 色：ローム粒子多く含む，粘性・しまり持つ。

G－G'（炉）
1　黒 褐 色：炭化物・焼土粒子含む。
2　暗 褐 色：炭化物・焼土粒子混在，しまりやや持つ。
3　黄 褐 色：ローム・焼土粒子多く含む。
4　黄 褐 色：ローム粒子・ブロックを主体に含む。

ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(30/25/38)
P2(29/26/17)
P3(55/42/24)
P4(48/37/14)
P5(38/35/26)
P6(38/33/48)
P7(62/57/15)
P8(70/64/10)
P9(40/26/54)
P10(34/32/11)
P11(37/33/9)
P12(68/37/39)
P13(75/51/37)
P14(26/20/10)
P15(29/23/5)
P16(24/20/7)
P17(25/20/5)

第30図　第21号住居跡実測図

SJ 22

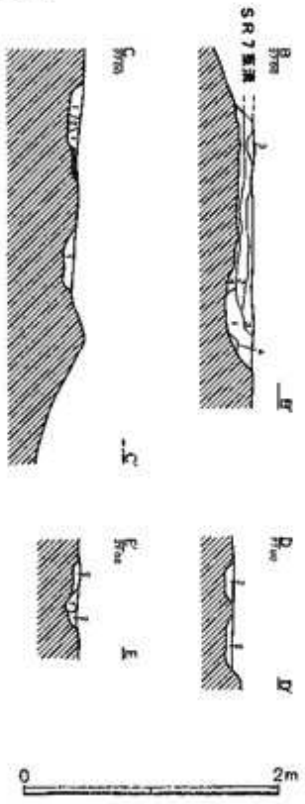


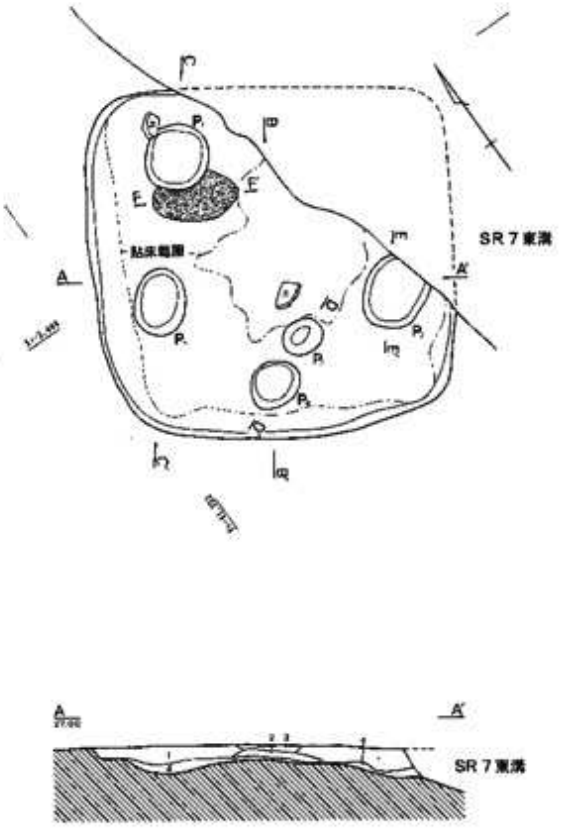
ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(42/35/10)
P2(21/18/27)
P3(38/30/14)

土層説明
A－A'～E－E'
1　黒 褐 色：シルト質粘質土.
2　暗黒褐色：黄灰色のローム僅かに含み,軟質で粘性強い.
F－F'(炉)
1　暗黄灰色：焼土化部分.
2　暗黄灰色：炭化物混合土.

第31図　第22号住居跡実測図

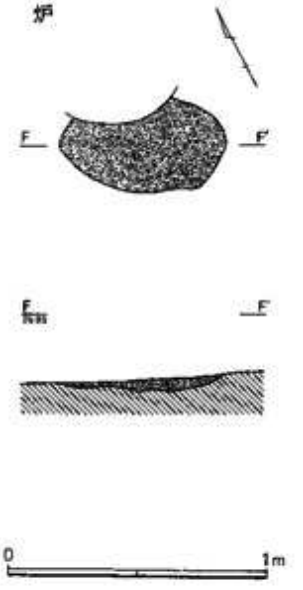
SJ 23





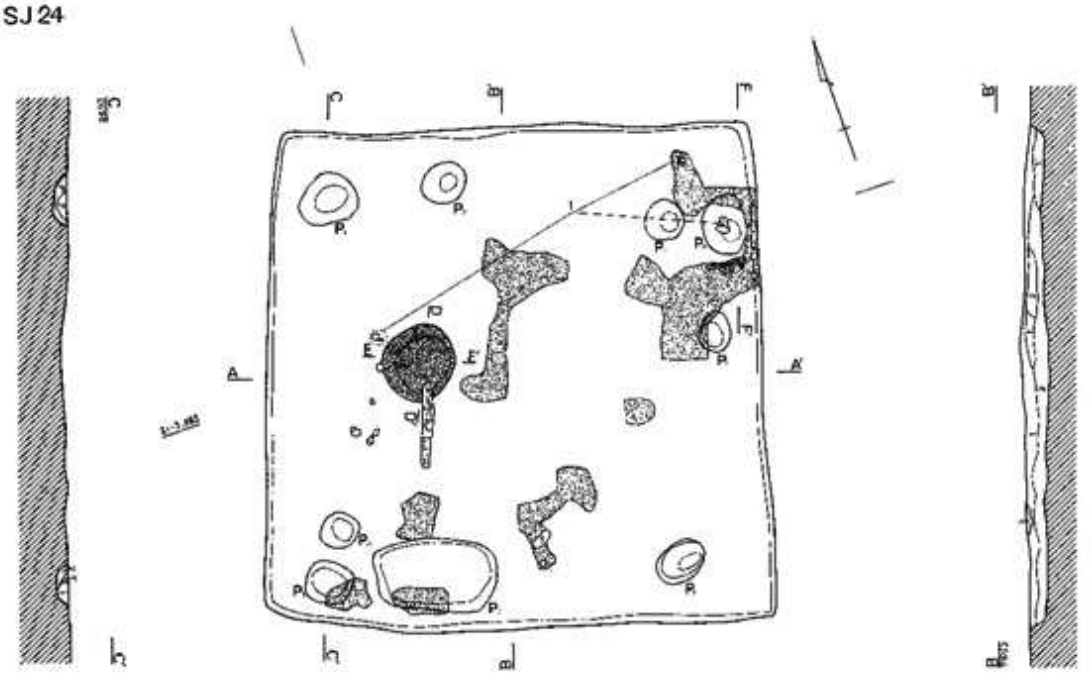
ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(51/50/13)
P2((60)/48/7)
P3(33/26/13)
P4(43/35/9)
P5(51/38/12)

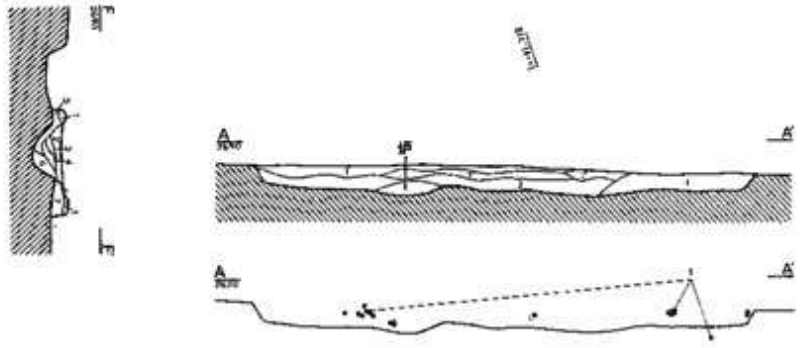
土層説明
A－A′～E－E′
1　黒 褐 色：ローム粒子含む，しまり欠くが粘性大．
2　黒 褐 色：ローム土含む，しまり欠くが粘性大．
3　黒 褐 色と黄灰色ローム混合土．
4　暗灰褐色と黄灰色ローム混合土．(貼床土)



第32図　第23号住居跡実測図

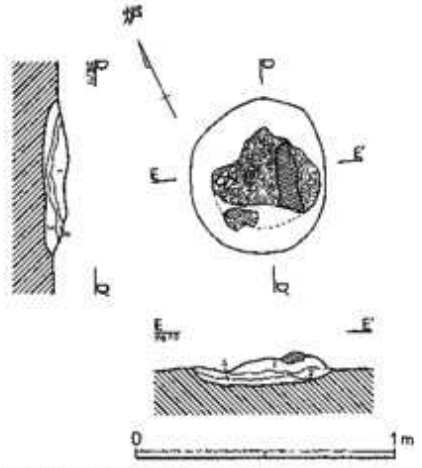
SJ 24





ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(47/40/15)
P2(36/31/15)
P3(32/31/26)
P4(47/34/26)
P5(32/25/13)
P6(41/29/12)
P7(98/56/14)
P8(33/27/11)
P9(40/31/10)

0　2m

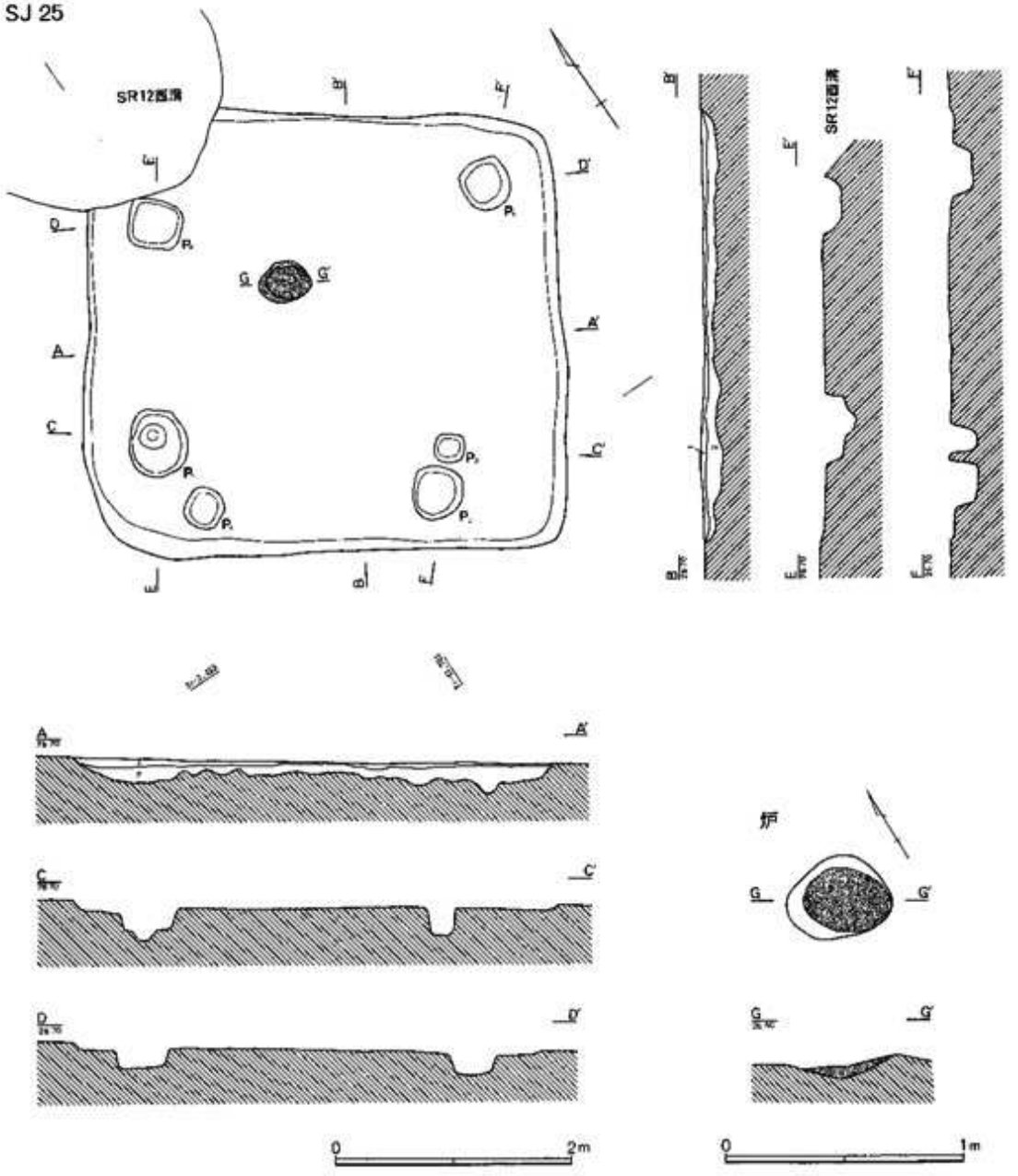


0　1m

D－D′，E－E′（炉）
1　赤　　色：焼土，炭化物含む．
2　暗褐色：砂質ローム少量含む．
3　黄褐色：砂質ローム多量含む．

土層説明
A－A′，B－B′
1　黒褐色：しまりがゆるくソフト．
1′黒褐色：しまりがゆるくソフト，焼土ブロックまばらに含む．
1″黒褐色：しまりがゆるくソフト，焼土ブロック・粒子含む．
2　赤　　色：焼土．
3　暗黒褐色：シルト質，軟質でしまり欠く．
3′暗黒褐色：軟質でしまり欠く．
4　黄褐色：ロームブロック，砂利多量含む，粘性を帯び，固くしまる．
C－C′
1　黒褐色：しまり欠く．
1′黒褐色：砂質ローム含む．
2　暗褐色：砂質ローム多量含む．
2′暗褐色：砂質ローム多量含む，粘性に富む．
F－F′（貯蔵穴）
1　焼　　土
2　黒褐色：固くしまる．
3　暗褐色：ローム粒子含み，しまり欠く．
4　暗褐色：焼土粒子少量含み，3よりやや赤い．
5　黄褐色：砂質ローム含む．
6　暗黒褐色：焼土粒子多量含む．
7　灰　　色：ロームブロック含む粘土．

第33図　第24号住居跡実測図

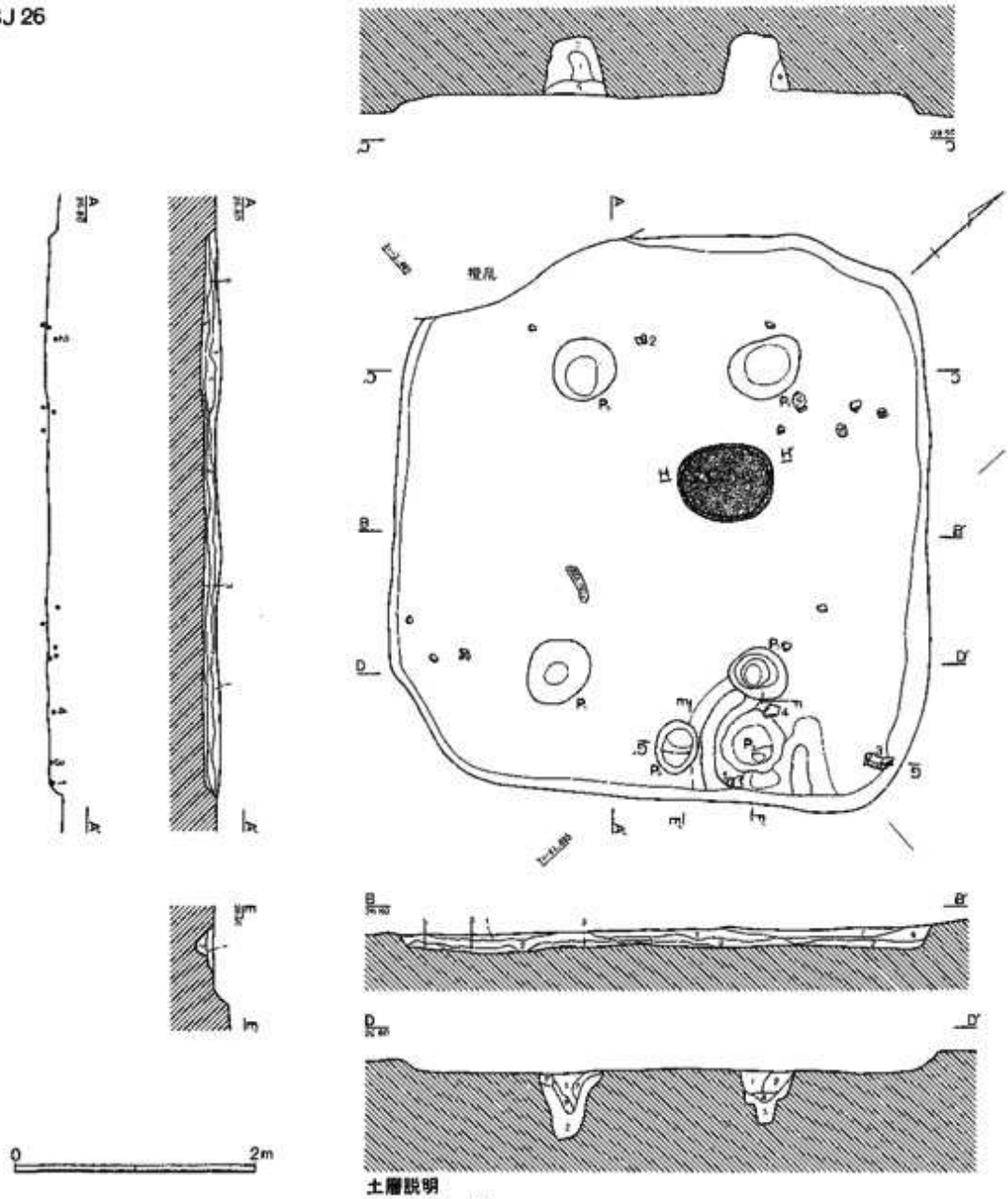


ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(46/42/11)
P2(46/43/12)
P3(25/24/12)
P4(34/32/13)
P5(56/48/20)
P6(45/42/10)

土層説明
A－A′, B－B′
1　黒　　色：シルト質で，砂質ローム僅かに含む．
2　黒　　色：シルト質ローム混合土，上面が硬質で，床面，(貼床土)

第34図　第25号住居跡実測図

SJ 26



ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(61/48/49)
P2(45/42/50)
P3(56/53/23)
P4(41/35/19)
P5(58/50/60)
P6(51/50/54)

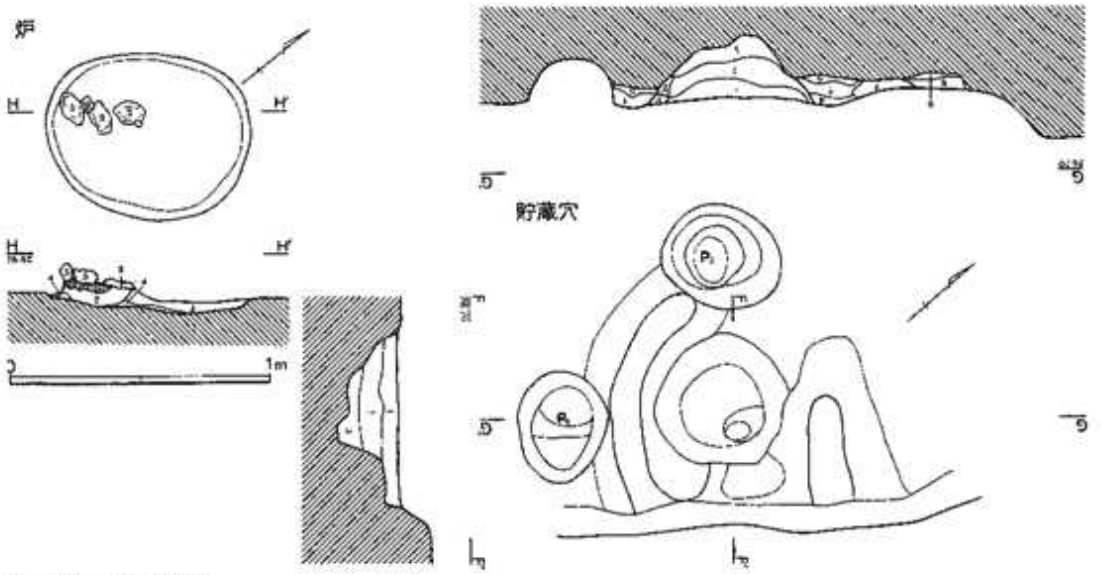
土層説明

A－A′, B－B′
1　暗 褐 色：ローム・炭化物粒子, 砂利を含む.
2　黄 褐 色：中ロームブロック, 砂利(砂礫, 粒子)含む. きめ粗雑だがしまり強い.
3　暗 褐 色：焼土・炭化物粒子含み, ローム粒子と砂利混在. しまりやや弱い.
4　暗 褐 色：焼土・炭化物・ローム粒子含む. きめ細かく, しまりやや弱い.
5　黄 褐 色：ローム粒子・中ブロック, 砂利含み, しまりやや持つ.
6　暗 褐 色：ローム・炭化物粒子, 焼土塊含み, しまりやや弱い.
7　褐　　色：焼土・炭化物粒子多く含み, しまり・粘性共弱い.

C－C′, D－D′(P1, 2, 5, 6.)
1　黒 褐 色：焼土・炭化物粒子微量含む. 小礫混在. しまり弱い.
2　黄 褐 色：ローム粒子・ブロック含む.
2′　黄 褐 色：2に比べやや暗い.
3　黒 褐 色：砂粒, 礫多く含み, きめやや粗い.
4　黒 褐 色：ローム粒子, 小礫含み, きめやや細かい.
5　暗 褐 色：礫多く含む. ローム粒子混在. しまりやや有り.
6　暗 褐 色：ロームブロック含む.(粘床土)

E－E′(P4)
1　暗 褐 色：砂利を多く含む.
2　褐　　色：砂利を多く含み, ローム粒子混在.

第35図　第26号住居跡実測図(1)



F－F'、G－G'(貯蔵穴)
1　暗 褐 色：ローム・炭化物粒子混在、しまりやや弱く、きめ粗い。
1'　暗 褐 色：1に比べ暗い。
2　黒 褐 色：ローム粒子・ブロック多く含み、粘性・しまり共やや有り。
2'　黒 褐 色：2に比べ明るい。
3　黒 褐 色：1よりローム・炭化物粒子多く含む、粘性やや弱い。
4　黒 褐 色：ローム粒子・ブロック混在、砂利含むが、しまり有り。
5　黒 褐 色：ローム粒子含む、しまりやや有り。
6　黄 褐 色：ローム粒子・ブロック主体とする。
7　黒 褐 色：ローム粒子・ブロックやや多く含む。
＊4～7　貯蔵穴周堤盛土
8　暗 褐 色：ローム・炭化物粒子含む、しまり有り。
9　黄 褐 色：ローム粒子・ブロックを主体とする。
＊8、9　貼床土
＊6、9　地山か？
H－H'(炉)
1　焼　　土：炭化物を微量含む。
2　暗 褐 色：ローム中粒子、炭化物、焼土少量含む。
3　黒 褐 色：ロームブロック、焼土粒子少量含む。
4　黒 褐 色：焼土ブロック、炭化物少量含む。

第35図　第26号住居跡実測図(2)

床面にはピットが9基認められ、このうち東壁北部に接した位置のP4が貯蔵穴と思われ、47×34cmの規模で、床面からの深さは26cm、中から器台(1)が出土している。

炉は床面中央から西壁に偏して検出された。60×57cmの不整円形で約5cm強の深さに掘りこみ、暗褐色土と黄褐色土で埋めて調整する。上層部に45×37cm、厚さ約5cmの焼土化した部分が認められた。

出土遺物は1の器台以外図示に耐えるものがない。

(11)　第25号住居跡（第34図・図版24）

調査区南西部のP-7グリッドに位置、前述のＳＪ24の東に4m強の間隔をおいており、北西コーナー部分をＳＲ12の西溝に切られる。

平面形態は隅丸方形で南西コーナーは丸みが強い。規模は確認面で南北軸（短軸）長が3.67m、軸偏差N－35°－E、東西軸（長軸）長4.08m、軸偏差E－35°－Sである。

覆土は黒色土を基調としており、確認面から床面までは最高で10cmと浅い。また、ほぼ全面が貼床となっており、いったん最高で床面下25cmほど粗掘りし、黒色土とシルト質のロームを混合して埋め戻し水平に床面を調整している。

床面にはピットが6基認められた。P1、P3、P5、P6が主柱穴となろうか。

炉は中央から北西コーナー寄りに検出された。46×34cmの不整円形でわずかに掘り窪みがあり、38×27cm、最高で厚さ約6cmで底面が焼土化していた。

出土遺物には台付甕の口縁、台部の破片があるが図示に耐えるものがない。

(12) 第26号住居跡（第35図・第2-14図・図版24）

調査区中西部のK-7グリッドに位置する。微高地の西縁部にあたる位置で、ＳＪ27、ＳＪ31とは北西から南東にほぼ一線に並んでいる。

南西コーナーは丸みをもち（西壁側が角ばるのは攪乱によるものか？）、北壁の西半部は攪乱を受け遺存が悪いが、平面形態は隅丸方形である。規模は確認面で南北軸（短軸）長が4.40m、軸偏差N－43°－E、東西軸（長軸）長4.65m、軸偏差E－42°－Sである。

覆土は暗褐色土を基調としており、ローム粒を含む黄褐色土を間にはさんでいる。確認面から床面までは約20cm弱の深さである。

床面にはピットが6基認められた。P1、P2、P5、P6が主柱穴、P3は貯蔵穴で56×53cmの大きさで深さは23cmほどで、その周囲には幅約30cm、高さ約10cmの、黒色土を主体とする周堤が認められた。

炉は中央から北西コーナー寄りに偏して検出した。80×64cmの楕円形で約5cmの深さに掘りこまれており、上層に44×32cm、厚さ約5cm弱の焼土がのっていた。さらに、この焼土上に枕石である4個の礫が出土している。

出土遺物には広口壺や小形台付甕の破片等があったが、完形にまで復原できる大きさの土器の出土はなかった。

(13) 第27号住居跡（第36図）

調査区中西部のL-8グリッド、前述のＳＪ26とは約8mの間隔を置きその南東に位置する。北東コーナーから南東コーナーにかけての約1/3の部分をＳＲ18の西溝に切られている。

平面形態は隅丸方形と考えてよいだろう。規模は確認面で南北軸長が4.54m、軸偏差N－37°－W、東西軸長は不明だが軸偏差はE－36°－Nである。

覆土は黒褐色土を基調としており、確認面から床面までは約10cm弱の深さで遺存は悪い。

床面にはピットが9基認められ、P1、P2・3、P6、P8が主柱穴となろう。

多量の炭化材から、火災を受けているのが明らかだが土器の出土に恵まれていない。時期の考定は平面形態から古墳時代初頭と見て誤りないだろう。

(14) 第28号住居跡（第37図・第2-14図・図版25）

調査区南西部のN-18グリッドに位置、中央部分をＳＲ14の北溝に切られ、遺存は悪い。

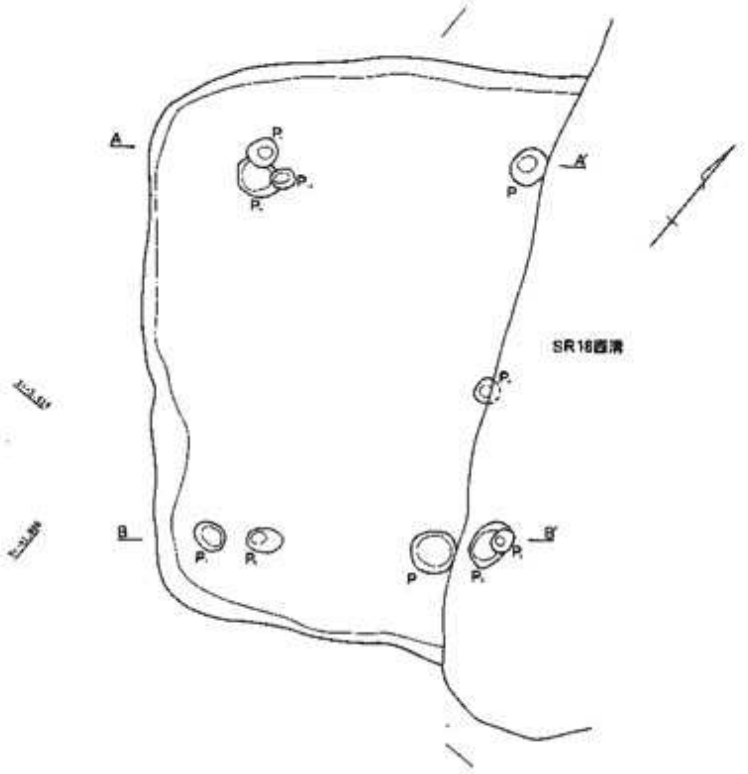
平面形態は隅丸方形で、規模は確認面で南北軸（短軸）長が3.27m、軸偏差N－42°－E、東西軸（長軸）長3.28m、軸偏差E－43°－Sである。

覆土は黒褐色土を基調とし、確認面から床面までは約10cm弱の深さである。また、壁ぎわを除いてほぼ全面が貼床で、最高で床面下5cm弱掘り、灰褐色土とロームを混合し埋め戻している。

床面にはピットが6基認められた。炉・貯蔵穴は検出できていない。

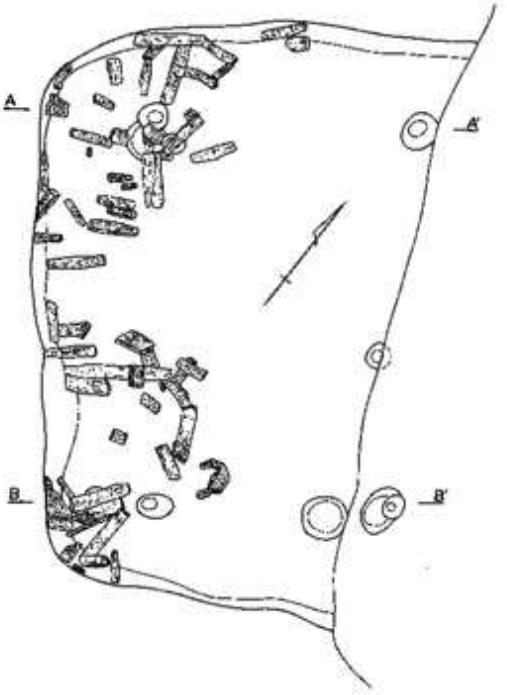
出土遺物には台付甕等の破片があり、図示したのは覆土中の出土である。また、多量の出土を見た炭化材から、火災を被っているのが明かである。

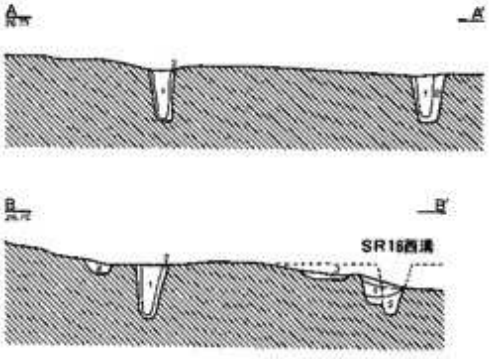
SJ27



ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(30/20/35)
P2(20/15/33)
P3(39/25/23)
P4(20/20/13)
P5(35/35/9)
P6(26/18/42)
P7(26/20/5)
P8(24/22/40)
P9(35/28/4)
P10(17/15/18)

炭化材出土状況





0　2m

土層説明
A－A'，B－B'
1　黒　　色：ローム粒子，炭化材多く含む．
2　暗褐色：ローム粒子，砂粒含み，ややしまる．
3　褐　　色：ローム・炭化物粒子含む．

第36図　第27号住居跡実測図

(15) 第29号住居跡（第38図・第2-14図・図版25・153）

調査区中西部のJ-9グリッド、当該期の遺構ののる自然堤防の北西の縁部に位置する。

平面形態は北東、東南コーナーが緩いカーブを描き、南西コーナーが崩れを見せるが、隅丸長方形である。規模は確認面で南北軸（長軸）長が6.07m、軸偏差N－29°－W、東西軸（短軸）長4.84m、軸偏差E－27.5°－Nである。

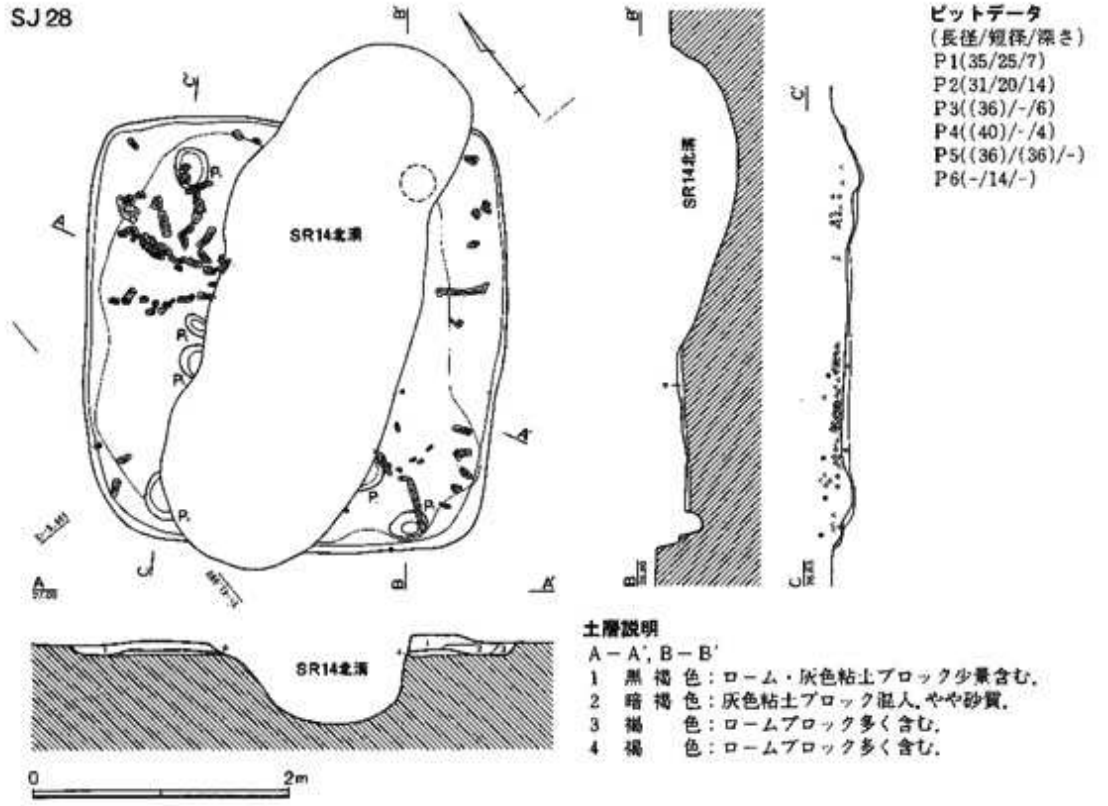
覆土は黒褐色、暗褐色土を基調とし、中央部の床面に炭化物と灰層を含む黒褐色土の薄い堆積が見られた。炭化材の出土状況などから、床面が埋没する早い段階で火災を受けている状況が看取できる。確認面から床面までは約25cm弱と本遺跡の住居としては深いほうである。

床面にはピットが9基認められ、P1、P4、P5、P9が主柱穴であろう。北壁と西壁に壁溝が検出されており、幅は12－18cm、深さは最高で約10cmである。

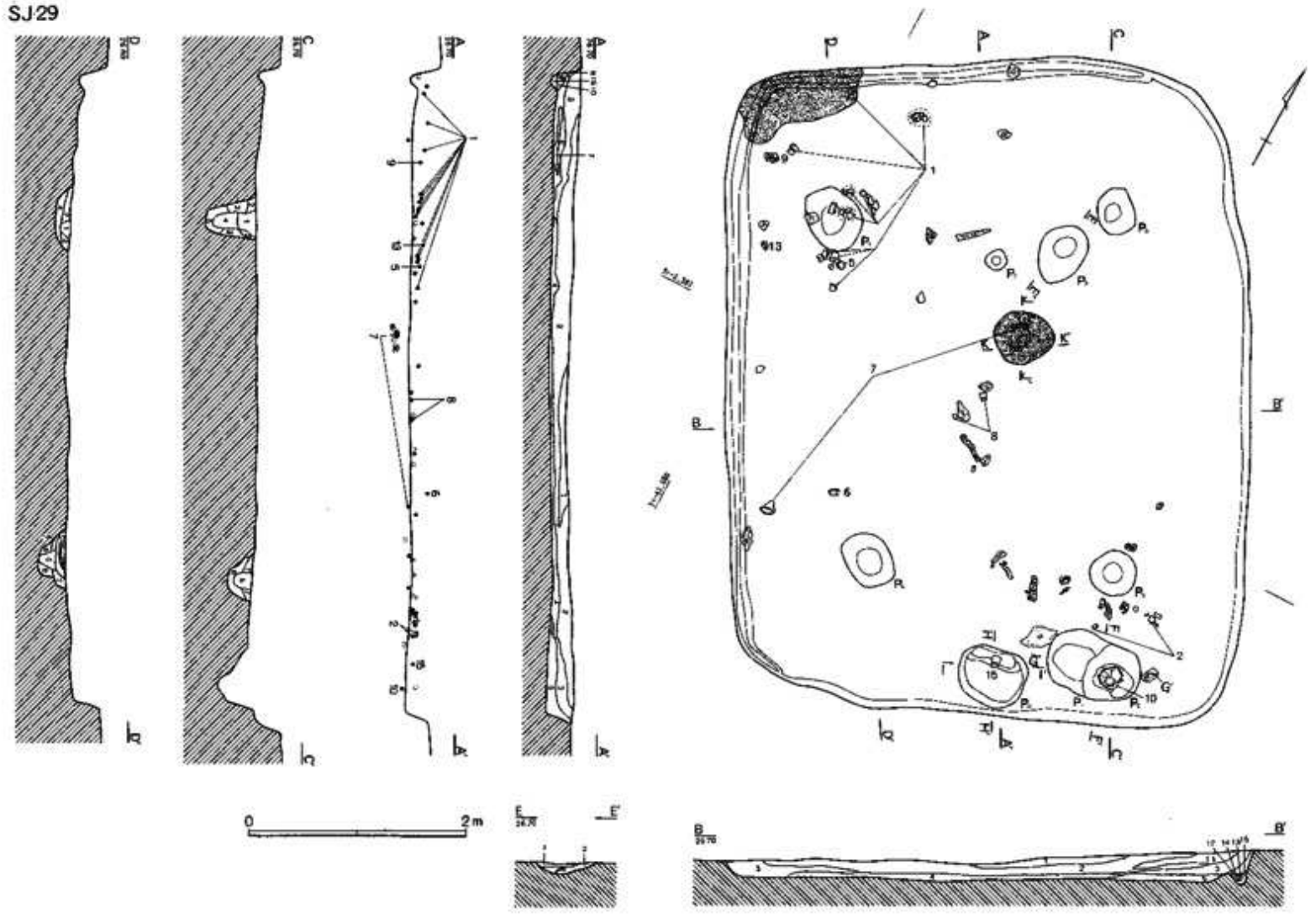
炉は中央からわずかに北東コーナー方向に偏して検出した。58×52cmの不整方形で約6cmの深さに掘りこまれており、南半が51×33cm、厚さ約3cmで底面が焼土化していた。確認面に枕石と思われる大小の礫が10数個検出されている。

貯蔵穴は南壁東半部分で2基検出した。1基はP6・7とピットを2基連ねている。

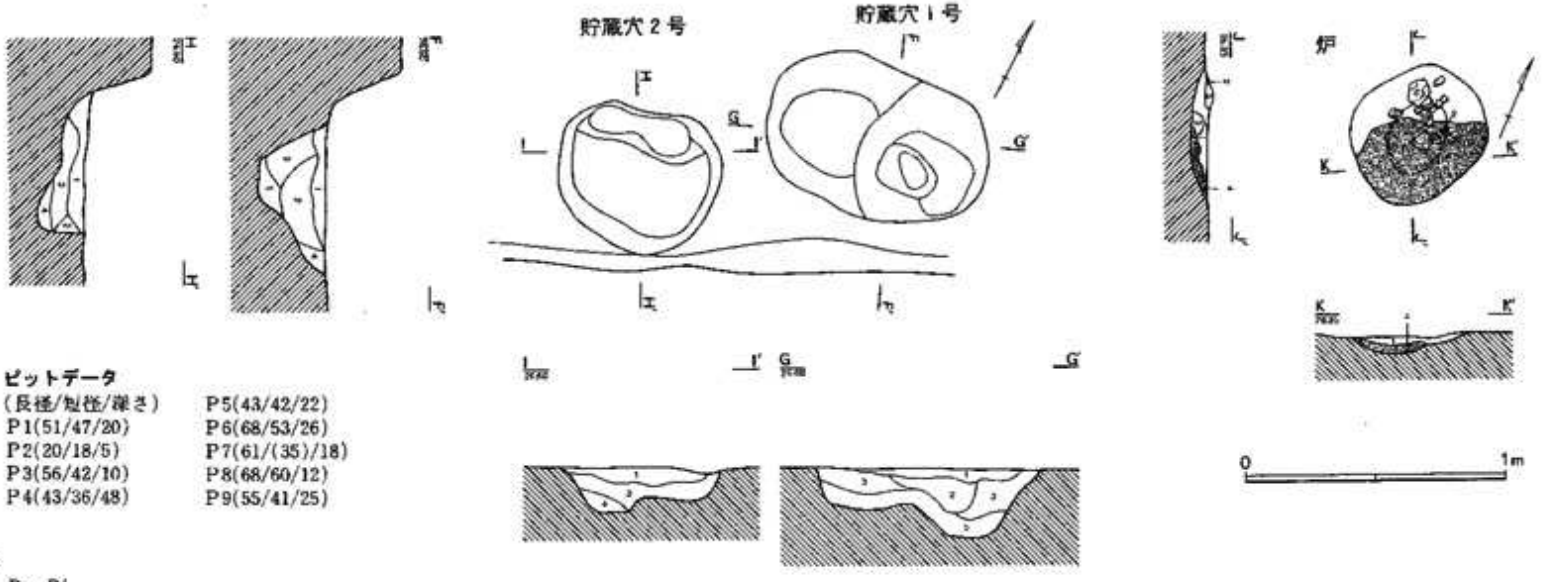
出土遺物は台付甕の破片が多いが、壺、高杯片もある。1はP1付近の覆土下部から、10はP6の貯蔵穴中からの出土である。



第37図　第28号住居跡実測図



第38図　第29号住居跡実測図(1)



ピットデータ

(長径/短径/深さ)	
P1(51/47/20)	P5(43/42/22)
P2(20/18/5)	P6(68/53/26)
P3(56/42/10)	P7(61/(35)/18)
P4(43/36/48)	P8(68/60/12)
	P9(55/41/25)

土層説明

A－A′，B－B′

1　黒褐色：ローム・焼土粒子少量含む．
2　暗褐色：ローム粒子・ブロック多量，炭化物少量含む．
3　黒褐色：ローム粒子，炭化物少量含み，４に似る．
4　黒褐色：炭化物多量含む灰層．
5　黒褐色：ロームブロック，粘質ローム多量含む．
6　暗褐色：粘質のローム粒子・ブロック多量，焼土，炭化物少量含む．
7　黒褐色：ローム粒子少量含む．灰層である．（４に近似）
8　黒褐色：ローム粒子少量含む．
9　黒褐色：ローム粒子微量含む．
10　暗褐色：粘質のローム粒子，小砂利多量含み，ややしまり良い．
11　暗褐色：ローム粒子少量含み，２に近似する．
12　黒褐色：ローム粒子微量含み，３に近似する．
13　暗褐色：ローム粒子多量，炭化物微量含む．やや砂質．
14　暗褐色：ローム粒子少量，炭化物微量含む．やや砂質．
15　明褐色：ローム粒子・ブロック多量含む．
16　暗褐色：ローム粒子，炭化物，小石少量含み，砂質．

C－C′（P4，5）

1　黒褐色：ローム粒子・炭化物微量，小砂利少量含む．
2　暗褐色：ローム粒子，粘質ローム粒子，小砂利少量含む
3　明褐色：炭化物微量，砂利多量含む．
4　暗褐色：炭化物微量，粘土，砂利少量含む．
5　黒褐色：炭化物，砂利少量含む．
6　暗褐色：粘質ローム粒子，炭化物多量含む．
7　暗褐色：粘質ローム粒子，炭化物少量含む．
8　黒褐色：炭化物・材片，ローム粒子少量含む．やや粘性がある．

D－D′（P1，9）

1　黒褐色：ローム粒子多量，炭化物少量含む．
2　暗褐色：ローム粒子，炭化物少量含む．
3　黒褐色：粘質のローム粒子多量，炭化物少量含む．
4　黒褐色：粘土粒子少量含む．
5　暗褐色：ローム粒子，炭化物・材少量含む．
6　黒褐色：炭化物，粘土粒子少量含む．
7　暗褐色：粘質のローム粒子多量，炭化物少量含む．
8　暗褐色：粘土粒子少量含む．

E－E′（P3）

1　暗褐色：ローム粒子，炭化物少量含む．
2　黒褐色：炭化物多量，焼土微量含む．

F－F′，G－G′（貯蔵穴1号）

1　黒褐色：粘質のローム粒子，粘土粒子，炭化物少量含み，粘性がある
2　暗褐色：粘質のローム粒子，ブロック多量含む．
3　暗褐色：粘質のローム粒子，炭化物少量含み，粘性なし．
4　暗褐色：粘土粒子多量含み，粘性がある．
5　暗褐色：粘土粒子多量，粘質のローム粒子少量含む．

H－H′，I－I′（貯蔵穴2号）

1　黒褐色：ローム粒子微量，炭化物少量含む．
2　暗褐色：ローム粒子多量，炭化物微量含む．
3　黒褐色：粘土粒子，炭化物少量含む．
4　黒褐色：粘土粒子多量，炭化物微量含む．

J－J′，K－K′（炉）

1　黒褐色：炭化物多量，焼土・ローム粒子少量含み，やや粘性持つ．
2　暗褐色：ローム粒子少量含む．
3　黒褐色：炭化物・ローム粒子少量，焼土微量含む．
4　赤　色：焼土．

第38図　第29号住居跡実測図(2)

S J 30

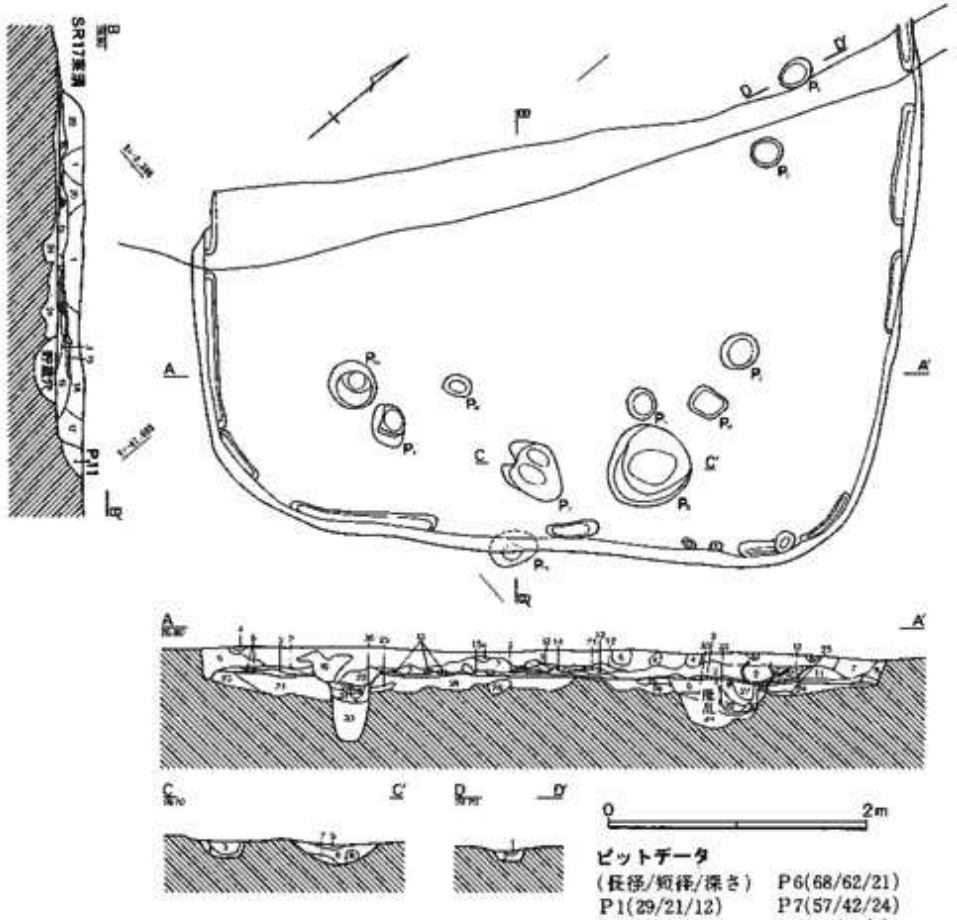
土層説明

A－A′, B－B′

1　灰黄褐色：シルト，未風化の中ロームブロック，粘土塊，小石，ローム粒多く含む，粘性やや有り，しまり欠く。
2　褐 灰 色：粘性シルト，炭化物，4～5cmの炭化材，ローム粒子多量，中粘土塊少量，焼土微量含む，粘性やや有り，しまりやや欠く。
3　褐 灰 色：粘性シルト，風化した小粘土・中ローム粒子少量含む，2より暗い，粘性やや有り，しまりやや欠く。
4　明黄褐色：小石多量に含む粘土，粘性・しまり共有り。
5　褐 灰 色：粘土，粘性・しまり共有り。
6　灰黄褐色：1に多量の焼土粒子を含んだもの。
7　黒　　色：シルト，風化した小ローム粒少量含む，粘性なく，しまりやや有り。（表土の流れ込みと思われる）
8　黒　　色：シルト，未風化中ローム・暗黄色粘土粒子多く含む，粘性なく，しまりやや有り。
9　灰黄褐色：シルト，風化した中ローム粒子少量含む，粘性ほとんどなく，しまりやや欠く。
10　灰黄褐色：1に多量の粘土ブロックを含む，小石少量含む。
11　灰黄褐色：シルト，未風化小ロームブロック多量に含む，粘性ほとんどなく，しまりやや欠く。
12　黒　　色：シルト，未風化中ローム粒子，焼土少量含む，粘性・しまりほとんどなし。
13　赤 褐 色：焼土，一部黒 褐 色土を混入，粘性，しまりやや欠く。
14　黒　　色：シルト，焼土微粒含む，粘性有り，しまりやや有り。
15　黒 褐 色：シルト，炭化材多く含む，粘性有り，しまりやや有り。
16　黒 褐 色：シルト，3より黒味強い，粘性有り，しまりやや有り。
17　褐　　色：シルト，未風化小ローム粒子少量，小石微量含む，粘性・しまり共あまりなし。
18　褐　　色：シルト，未風化小ローム粒子，未風化小粘土ブロック多量含む，炭化物，焼土少量含む，粘性・しまり弱い。
19　褐　　色：粘土質シルト，小石，未風化の小粘土ブロックを多く含む，粘性有り，しまりやや欠く。
20　褐　　色：シルト，未風化中ローム粒子多量，暗黄色粘土塊少量含む，粘性やや有り，しまりやや欠く。
21　黒 褐 色：シルト，未風化中ローム粒子，焼土少量含む，粘性・しまりほとんどなし，12より赤色味帯びる。
22　褐　　色：シルト，未風化中ローム粒子，粘土ブロックを多量に含む，粘性やや有り，しまりやや欠く。
23　黄 褐 色：未風化中黒色土ブロック少量含む，粘性有り，しまりやや欠く。
24　褐　　色：粘床，未風化中ローム粒子・ブロックを多量，未風化小黒色土ブロック，小礫少量，炭化物微量含む，粘性有り，しまりやや欠く。
25　黒　　色：未風化小ローム粒子少量含む，粘性やや有り，しまり欠く。
26　黒 褐 色：炭化物少量，焼土微量，未風化小ロームブロック，小～中礫を多量に含む，粘性有り，しまり欠く。
27　黒 褐 色：風化中ローム粒子多量，炭化物・小礫微量含む，粘性欠く，しまりやや有り。
28　黒 褐 色：ローム粒子多量，炭化物，焼土少量含む，粘性欠く，しまりやや有り。
29　黒 褐 色：未風化中ロームブロック多量，炭化物少量，焼土微量含む，粘性欠く，しまり有り，28より明るい。
30　黒　　色：風化小ローム粒子少量含む，粘性やや有り，しまり欠く。
31　黒 褐 色：風化小ローム粒子少量，未風化中粘土ブロック微量含む，粘性やや有り，しまり欠く。
32　明黄褐色：中礫多量含む，粘性有り，しまりやや欠く。
33　黒　　色：焼土，炭化物微量，未風化小ローム粒子・小礫少量含む，粘性有り，しまりやや欠く。
34　明 褐 色：礫層，小礫多量含む。

C－C′（貯蔵穴），D－D′（P1）

1　黒 褐 色：未風化中ローム粒子多量，炭化物微量含む，粘性欠く，しまりやや有り。
2　黒 褐 色：未風化中ローム粒子少量含む，粘性・しまりやや有り，1よりも暗い。
3　黒　　色：未風化中ローム粒子少量，炭化物微量含む，粘性やや有り，しまり欠く。
4　黒 褐 色：未風化中ローム粒子ブロック多量，炭化物微量，小石少量含む，粘性やや有り，しまり欠く。
5　黒 褐 色：風化小ローム粒子少量，炭化物，焼土微量，小石少量含む，粘性欠く，しまりやや有り。
6　黒 褐 色：未風化小ロームブロック，小石少量，未風化中ローム粒子微量含む，粘性やや有り，しまり欠く，5より明るい。
7　黒 褐 色：小石少量含む，粘性有り，しまり欠く，色調暗い。
8　黒　　色：しまり・粘性共に欠く。

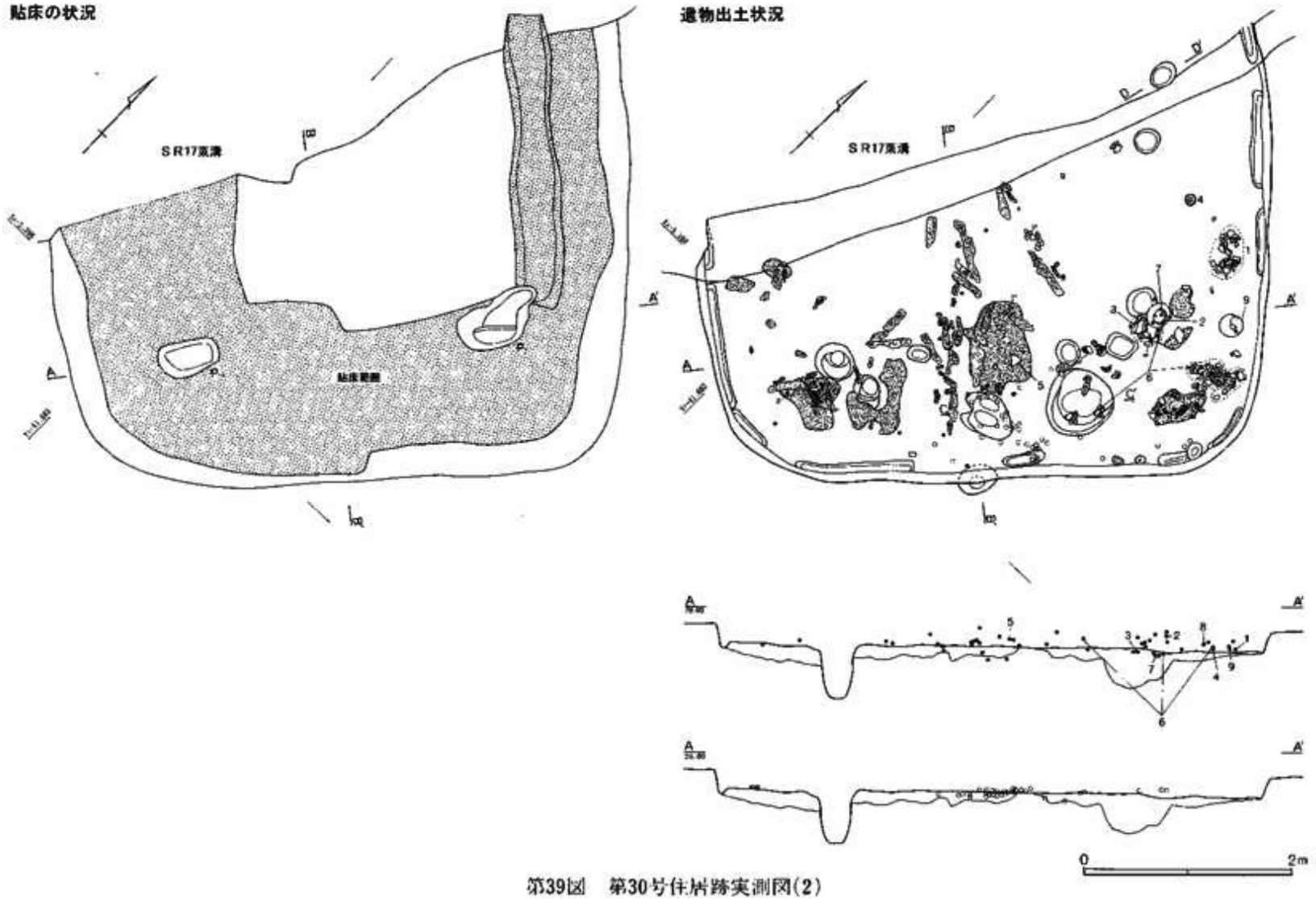


ピットデータ

（長径/短径/深さ）

P1(29/21/12)	P6(68/62/21)
P2(25/23/10)	P7(57/42/24)
P3(31/26/22)	P8(22/17/7)
P4(31/23/10)	P9(59/29/20)
P5(25/23/9)	P10(37/36/36)
	P11(37/-/12)

第39図　第30号住居実測図(1)



第39図　第30号住居跡実測図(2)

(16) 第30号住居跡（第39図・第2-15図・図版25・26・153・154）

調査区中西部のＪ-8グリッドに位置、西壁側2/5がＳＲ17の東溝に切られる。

平面形態は隅丸方形と考えて良く、規模は南北軸長が5.50ｍ、軸偏差Ｎ－44°－Ｅである。

覆土は上層が粘土塊を含む灰褐色土を基調とし、その下に炭化材と焼土を含む褐灰色ないし黒褐色土等が見られ、さらに床面直上には褐灰色土が堆積する。上層の堆積状況は不整合を見せる部分があり、人為的な埋没行為も考慮しておく必要があろう。確認面から床面までは約20cm弱の深さである。また、壁面に沿って幅70－170cmで、一度最高で床面下35cm程度を粗掘りして、褐色土と黄褐色土で埋め戻して水平に床面を調整する。

床面にはピットが10基認められた。主柱穴はＰ1、Ｐ3、Ｐ10となろうか。Ｐ11は住居より古いピットである。壁溝は壁に接し各所で検出したが、連続した状況ではない。

出土遺物には台付甕、壺、高杯等の比較的大きな破片があり、個体数も本遺跡の住居跡中では多い方である。1・9は北壁に近い部分の床面からやや浮いた状態で、3・6はＰ3に近い床面直上のものが中心に接合した。

(17) 第31号住居跡（第40図・図版27）

調査区南西部のＭ-9グリッドに位置、ＳＪ26・27とは一線上に並んでいる。

平面形態は北西コーナーを除き丸みがあり、南壁に比べ北壁がわずかに短く厳密には隅丸台形だが、隅丸方形の範疇としてよいだろう。規模は確認面で南北軸（長軸）長が4.04ｍ、軸偏差Ｎ－33°－Ｗ、東西軸（短軸）長3.54ｍ、軸偏差Ｅ－38°－Ｎである。

覆土は黒褐色土を基調とし、確認面から床面まではきわめて浅かった。

床面にはピットが8基認められ、主柱穴はＰ2、Ｐ3、Ｐ7、Ｐ8となろうか。

炉と壁溝は確認されなかった。

出土遺物には台付甕や壺底部の小破片があるが図示に耐えるものがない。

(18) 第32号住居跡（第41図・第2-15図・図版27・154）

調査区中西部のＧ-9グリッドに位置する。縄文時代のＳＪ2を切り、南西部分をＳＲ19の東溝に切られて、かつ、床面に達する攪乱や風倒木の攪乱を被っており、遺存はあまりよくない。

平面形態は全容が把握できていないが隅丸方形と思われ、規模は確認面で南北軸長が5.2ｍ以上となり、軸偏差はＮ－29°－Ｅ、東西軸長は5.44ｍ、軸偏差はＥ－35°－Ｓで、本遺跡の当該期の住居としては大形の部類に入ろう。

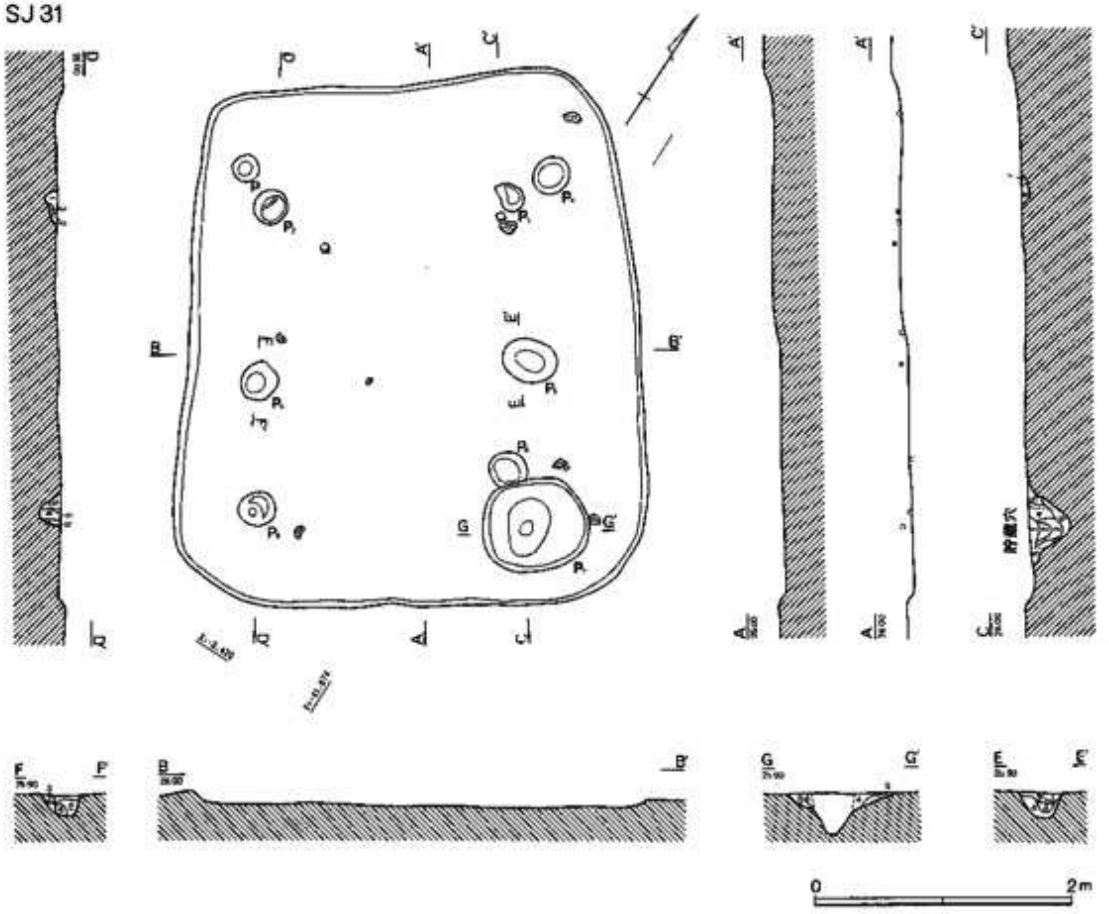
覆土は暗褐色土を基調とし、壁面に近い部分にはローム粒を多く含む暗褐色土や褐色土が堆積する。確認面から床面までは約25cm弱、またピットに沿って帯状にわずかな貼床調整が見られた。

壁溝は西壁北部から北壁、そして東壁の中央部まで掘られている。幅は15－30cm、深さは10cm前後の部分が多い。

床面にはピットが6基認められ、Ｐ2、Ｐ4が主柱穴となろうか。なお、炉は確認できていない。

出土遺物には壺等がある。1は床面からわずかに浮いた状態、2・3は床面からの出土である。

SJ 31



土層説明

C－C′, G－G′(貯蔵穴, P3)
1　黒 褐 色：ローム粒子微量含む、やや粘性あり。
2　暗 褐 色：ローム粒子多量、炭化物微量含む。
3　暗 褐 色：ローム粒子少量含む、粘性強い。
4　黒 褐 色：ローム粒子混在。
5　黒 褐 色：ローム粒子含み、粘土粒混在。
6　灰 褐 色：粘土ブロック混在。
7　黒 褐 色：ローム粒子、炭化物微量含む。
8　緑灰白色：粘土多量、ローム粒子少量含み、粘性が強い。

D－D′(P2, 8)
1　黒 褐 色：ローム粒子少量含み、やや粘質。
2　黒 褐 色：1に近似、やや明るい。
3　暗 褐 色：ローム粒子多量含む。
4　黒 褐 色：ローム粒子、炭化物少量含む。
5　暗 褐 色：ローム粒子多量、炭化物微量含む、しまり良い。
6　暗 褐 色：ローム粒子多量含む、粘性有り。

E－E′(P5)
1　黒 褐 色：ローム粒子微量含む、粘性あり。
2　暗 褐 色：ローム粒子・ブロック少量含む。
3　黒 褐 色：ローム粒子、焼土、炭化物微量含む、粘性あり。
4　暗 褐 色：ローム粒子・ブロック多量含む。

F－F′(P9)
1　暗 褐 色：ローム粒子少量含み、やや粘質。
2　黒 褐 色：ローム粒子多量含む、しまりややよい。
3　暗 褐 色：ローム粒子多量含む。
4　黒 褐 色：ローム粒子少量含む。

ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(21/20/9)
P2(27/25/6)
P3(22/17/7)
P4(30/27/3)
P5(40/34/22)
P6(30/28/9)
P7(83/70/34)
P8(26/26/9)
P9(28/27/16)

第40図　第31号住居跡実測図

⒆ 第33号住居跡（第42図・第2-16図・図版27・28・29・155）

調査区中央やや南西よりのK-10グリッドに位置、北東及び南東コーナーをＳＲ22の西、南溝に切られている。

平面形態はコーナーを2個所で失うが隅丸方形としてよいだろう。規模は確認面で南北軸（長軸）長が5.39ｍ、軸偏差Ｎ－39°－Ｗ、東西軸（短軸）長4.64ｍ、軸偏差Ｅ－42.5°－Ｎである。

覆土はローム粒子や炭化物、焼土粒子を含む黒褐色土ないし暗褐色土を基調としており、床面上には炭化物を多量に含む黒褐色土が比較的広範囲に薄い堆積を見せる。確認面から床面までは約30cm弱と、本遺跡の当該期の住居の中では深いほうである。

床面にはピットが7基認められ、このうちのＰ1、Ｐ3、Ｐ10、Ｐ16が主柱穴となろう。そして特筆すべきこととして東壁と西壁面に5個所ずつ南壁面に3個所のピットが検出されている。

主柱穴と思われるピットが小径で柱材も頑丈なものが選択できなかったことが推定でき、このため垂木材の固定のための柱材等の樹立が不可欠となったのかも知れない。確定的なことはいえないが可能性を提示しておきたい。

また、西壁上面から70－115cmの間隔をおきその外方に列をなして検出された4基のピット（Ｐ18、20、22、26）も本住居に伴うものと考えられ、廂状の構造物を考えておきたい。

炉は中央から北東コーナーに偏して検出した。93×67cmの不整長円形で約7－8cmの深さに掘り、ローム系の土で浅く埋め戻しており、北西側の部分が薄く焼土化していた。炉の北から西側にかけてはさらにごく浅いくぼみが認められ、この部分に薄く焼土の散布も確認されている。

貯蔵穴は2基検出された。南壁の東コーナーよりのは60×34cm、深さ21cmで、幅30cm、高さ5cm弱の周堤をめぐらせる。一方、西壁ぎわのＰ23も貯蔵穴と思われ、68×54cmの不整円形で深さは25cmであった。

また、西壁の中央に、間仕切と思われる浅い溝も検出されている。壁と直角に幅10cm強、長さ105cm、深さ約8cmを測るものであった。

出土土器には台付甕、壺、器台、台付の椀等の破片があるが、破片の量が多い割合に完形にまで復原できた個体は少ない。

北西コーナー付近では1・4が床面直上もしくはやや浮いた状態で、9・12・13は同じくやや浮いた状況での出土である。

⒇ 第34号住居跡（第43図・第2-16図・図版29・154・155）

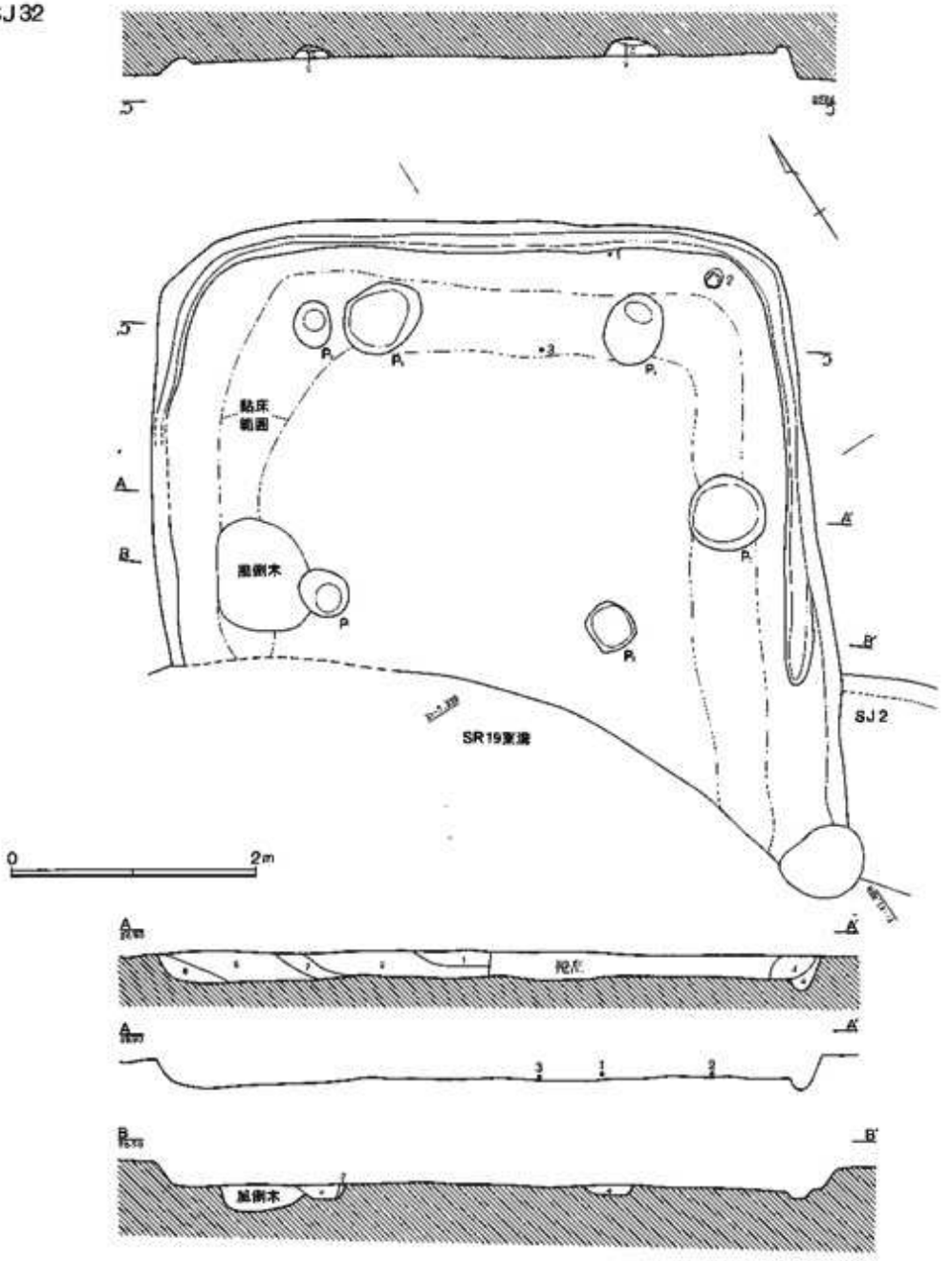
調査区中央部やや南西寄りのK-10グリッド、前述のＳＪ33の東南約3ｍに位置している。

平面形態は東壁をのぞく各壁がわずかに外方に膨らむ傾向が認められるが、隅丸方形の範疇としてよいだろう。規模は確認面で南北軸（短軸）長が3.02ｍ、軸偏差Ｎ－34°－Ｗ、東西軸（長軸）長3.09ｍ、軸偏差Ｅ－33°－Ｎである。

覆土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色土を基調とし各層に炭化物（粒）が含まれる。確認面から床面までは最高20cm弱の深さである。

床面にはピットが4基認められ、このうちＰ4が貯蔵穴で62×50cm、深さは20cmである。Ｐ1は炉を

SJ32



土層説明

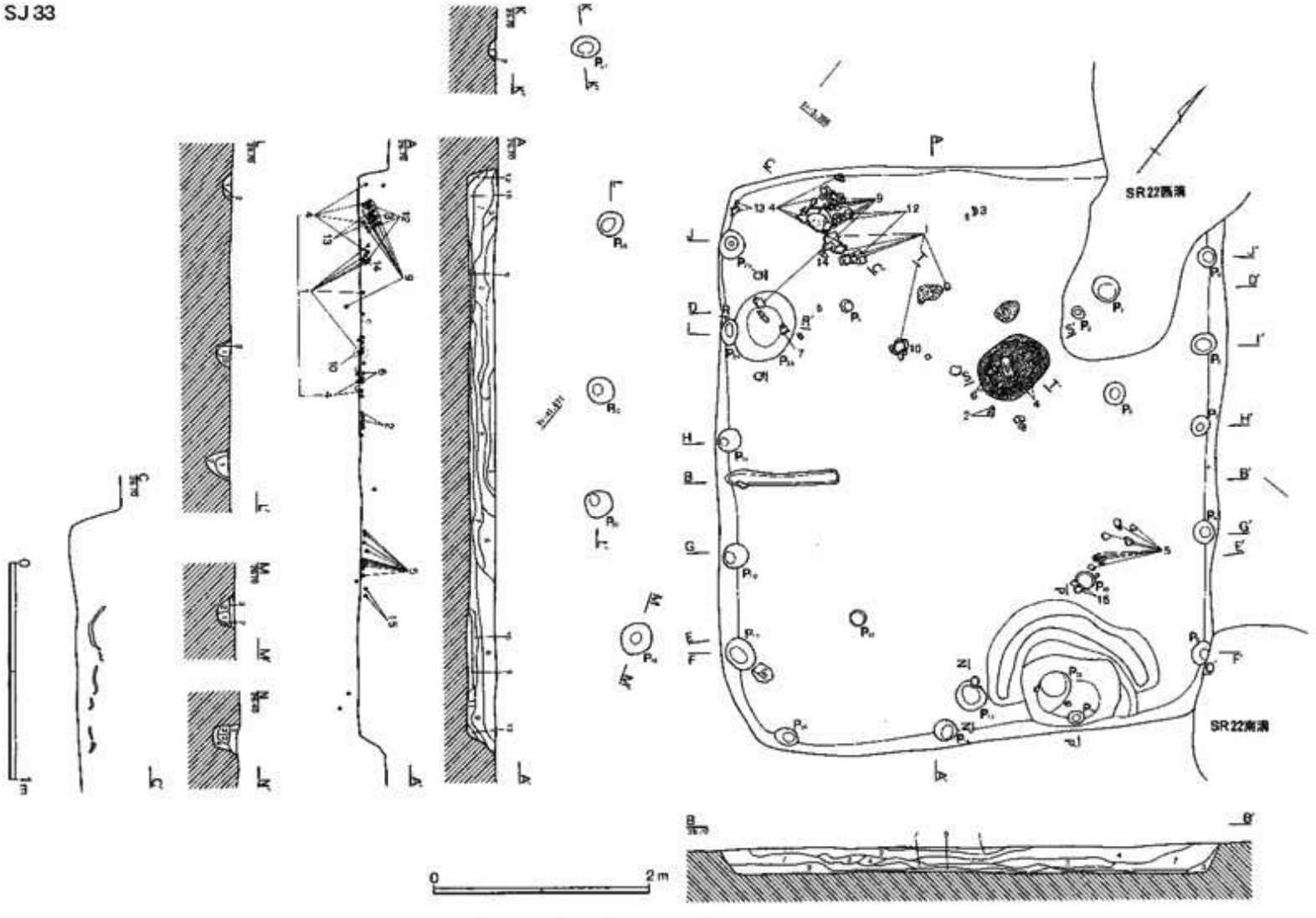
A－A'～C－C'

1　暗褐色：ローム粒子，炭化物微量含む．きめ細かい．
2　暗褐色：ローム粒子，炭化物少量含む．しまり弱い．
3　褐　色：ローム粒子，炭化物少量含む．きめ細かい．
4　黄褐色：ローム粒子多量含む．しまり弱い．
5　砂礫土．
6　暗褐色：ローム粒子，小砂利含む．（風倒木攪乱土）
7　黄褐色：ローム土を主体とする．（風倒木攪乱土）
8　褐　色：ローム粒子含む．（風倒木攪乱土）

ピットデータ

（長径/短径/深さ）
P1(33/31/16)
P2(35/31/17)
P3(66/54/13)
P4(57/46/17)
P5(61/59/15)
P6(43/38/9)

第41図　第32号住居跡実測図



第42図　第33号住居跡実測図(1)

ピットデータ

(長径/短径/深さ)

P1(12/11/50)	P14(22/18/20)
P2(13/10/7)	P15(24/16/10)
P3(25/24/33)	P16(16/14/52)
P4(20/16/12)	P17(30/25/16)
P5(24/20/8)	P18(31/28/17)
P6(21/20/6)	P19(24/23/24)
P7(19/17/9)	P20(26/24/23)
P8(22/19/8)	P21(22/21/17)
P9(22/(16)/18)	P22(26/24/65)
P10(17/17/30)	P23(68/54/25)
P11(15/13/3)	P24(24/15/11)
P12(60/34/7)	P25(27/23/16)
P13(29/25/28)	P26(24/23/9)
	P27(27/20/8)

土層説明

A－A′, B－B′

1　黒 褐 色：ローム粒子, 焼土少量含み, やや色調が暗い.
2　黒 褐 色：1に近似, やや色調が暗い.
3　暗 褐 色：ローム粒子・ブロック多量含む.
4　暗 褐 色：ローム粒子多量含む.
5　暗 褐 色：ローム粒子・炭化物少量含む.
6　暗 褐 色：ローム粒子・ブロック, 炭化物少量含み, やや色調が暗い.
＊1～6　ローム土多く含み, 堆積する(粒子・ブロック)
7　黒 褐 色：ロームブロック, 炭化物少量含む.(自然堆積土)
8　暗 褐 色：ローム粒子・ブロック, 小礫少量含み, 色調が明るい.(1～6に近似)
9　黒 褐 色：炭化物多量含み, やや粘性がある.(床直上に炭化物層堆積)
10　黒 褐 色：ローム粒子多量, 焼土粒子少量含む.
11　黒 褐 色：ローム・焼土粒子少量含む.
12　黒 褐 色：ローム粒子多量含む.
13　黒 褐 色：ローム粒子微量含む.

F－F′～J－J′

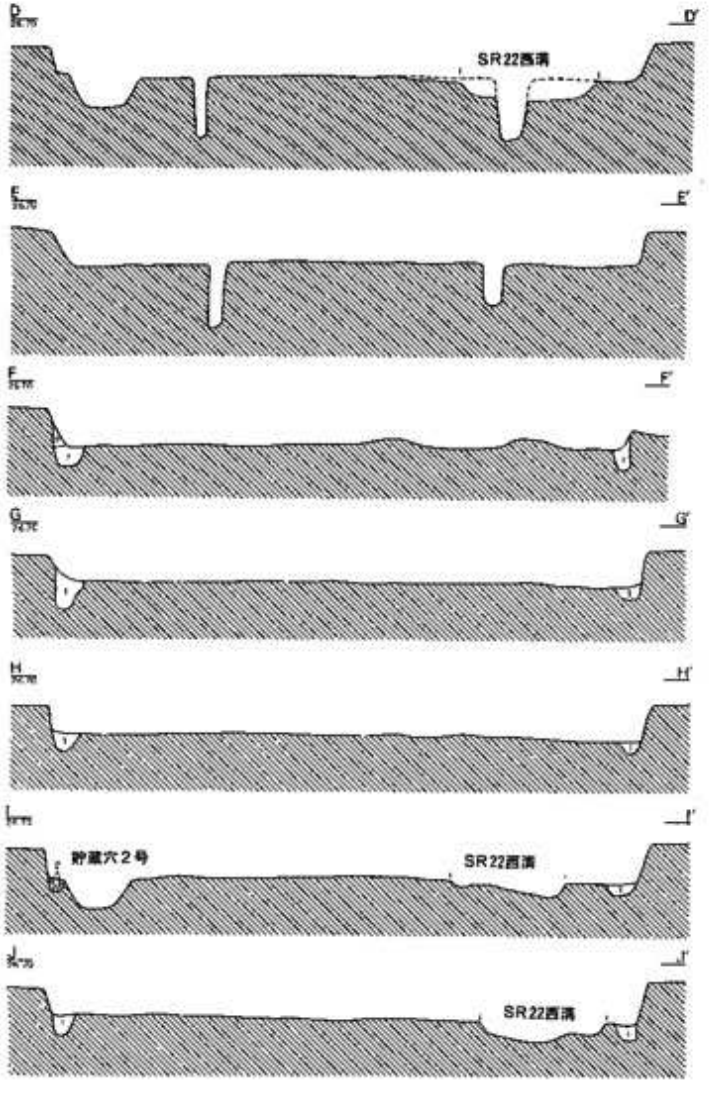
1　黒 褐 色：炭化物, 微量のローム粒子含む.
2　黄 褐 色：ローム粒子, 粘土を主体とする.

K－K′～M－M′

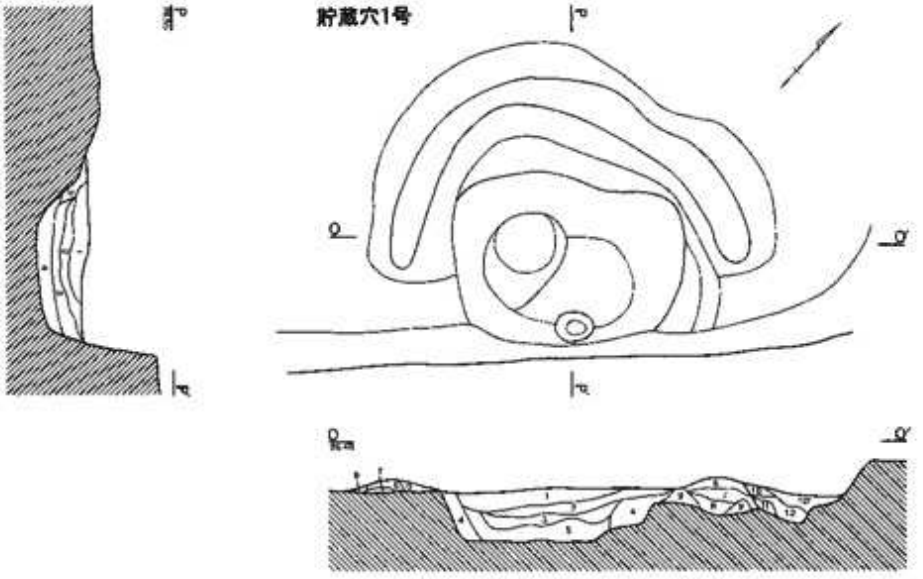
1　黒 褐 色：黒色土にローム粒子微量含む. しまり弱い.
2　黄 褐 色：ローム土主体に黒 褐 色土を少量含む.
3　黒　　色：砂粒子, 小石含み, ザラザラするが, しまり有り.

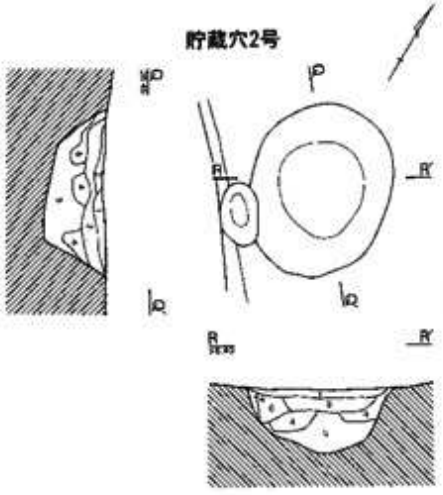
N－N′

1　黒 褐 色：小砂利含む.
2　赤 褐 色：酸化鉄粒子, 小石含む.
3　黒　　色：きめ細かく, ローム粒子含む.
4　灰 褐 色：粘土, 小砂利含む.
5　黒 灰 色：シルト粘土含み, しまり・粘性持つ.
6　赤 褐 色：酸化鉄粒子含む. しまり弱い.

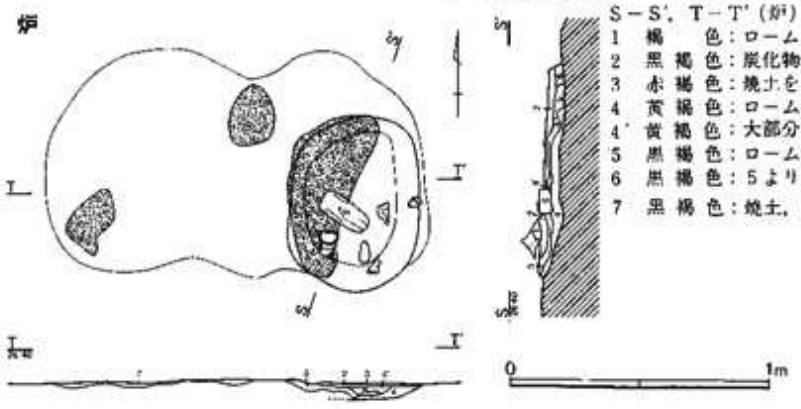


第42図　第33号住居跡実測図(2)





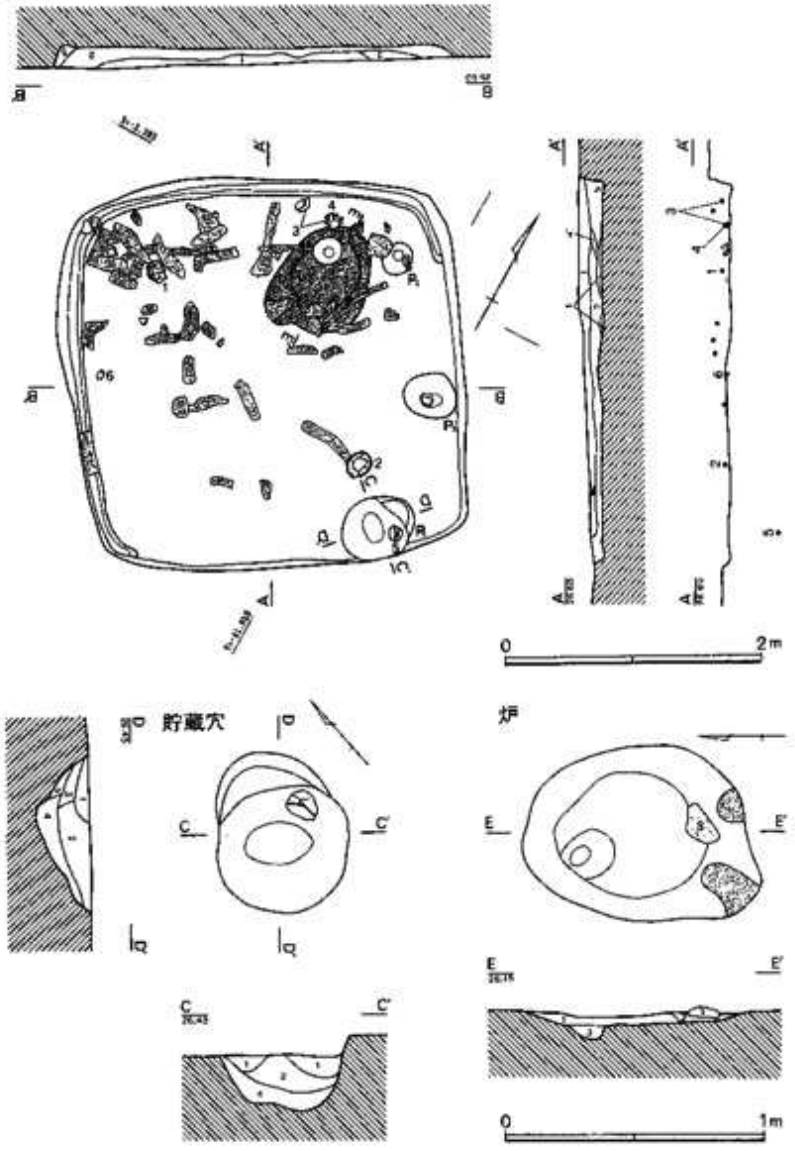
O－O'，P－P'（貯蔵穴1号）
1　暗褐色：ローム・粘土粒子均一に含む。
2　黒褐色：焼土・炭化物粒子含む。
3　暗褐色：ローム・粘土粒子含み，しまり弱い。
4　青灰色：ローム粒子含み，きめ細かい。
5　青白色：粘土，砂粒子，砂利含む。
＊1～5　貯蔵穴覆土
6　灰褐色：粘土を主体とし，砂利を含む，ローム土，黒褐色土混入。
7　黒褐色：黒褐色土を主体とし，ローム粒子少量含む。
8　黒褐色：ローム粒子2よりやや多く，明るい。
9　黄褐色：ローム土を主体とし，砂利を含む。
＊6～9　周堤
10　黄褐色：ローム粒子・ブロック主体とする。（貼床層）
10　黄褐色：ローム粒子・ブロック含み，しまり有る。（貼床層）
11　黒褐色：ローム土を主体とし，黒褐色土を混在。
12　黄褐色：黒色土を主体とし，ローム粒子含む。
＊10～12　掘方埋戻土
Q－Q'，R－R'（貯蔵穴2号）
1　黒褐色：ローム・炭化物粒子含む，しまり弱い。
2　黒褐色：1に比べやや明るい。
3　黒褐色：焼土・炭化物粒子含む，ローム粒子混在。
4　明褐色：焼土・ローム粒子多く含む，きめやや粗い。



S－S'，T－T'（炉）
1　褐　色：ローム・炭化物・焼土粒子多く含む。
2　黒褐色：炭化物粒子多く含む。
3　赤褐色：焼土を主体とする。
4　黄褐色：ローム土を主体とする。
4'　黄褐色：大部分ローム。
5　黒褐色：ローム粒子・ブロック含み，しまりやや持つ。
6　黒褐色：5よりブロック少ない。
7　黒褐色：焼土，炭化物粒子主体。（灰のかき出しか？）

第42図　第33号住居跡実測図(3)

SJ34



土層説明

A－A′，B－B′

1　暗 褐 色：ローム・炭化物粒子含む．しまりやや弱い．最終的に北側より堆積する．
2　黒 褐 色：ローム・炭化物粒子含む．きめ細かく．しまり弱い．
3　黒 褐 色：1よりきめ細かく．しまりやや強い．
4　黒　　色：炭化層．（炉跡）
4′　黒　　色：4にローム粒子少量含む．
5　黒 褐 色：焼土・炭化物粒子やや多く混在．きめ細かく．しまり弱い．（自然三角堆積）

C－C′D－D′（貯蔵穴）

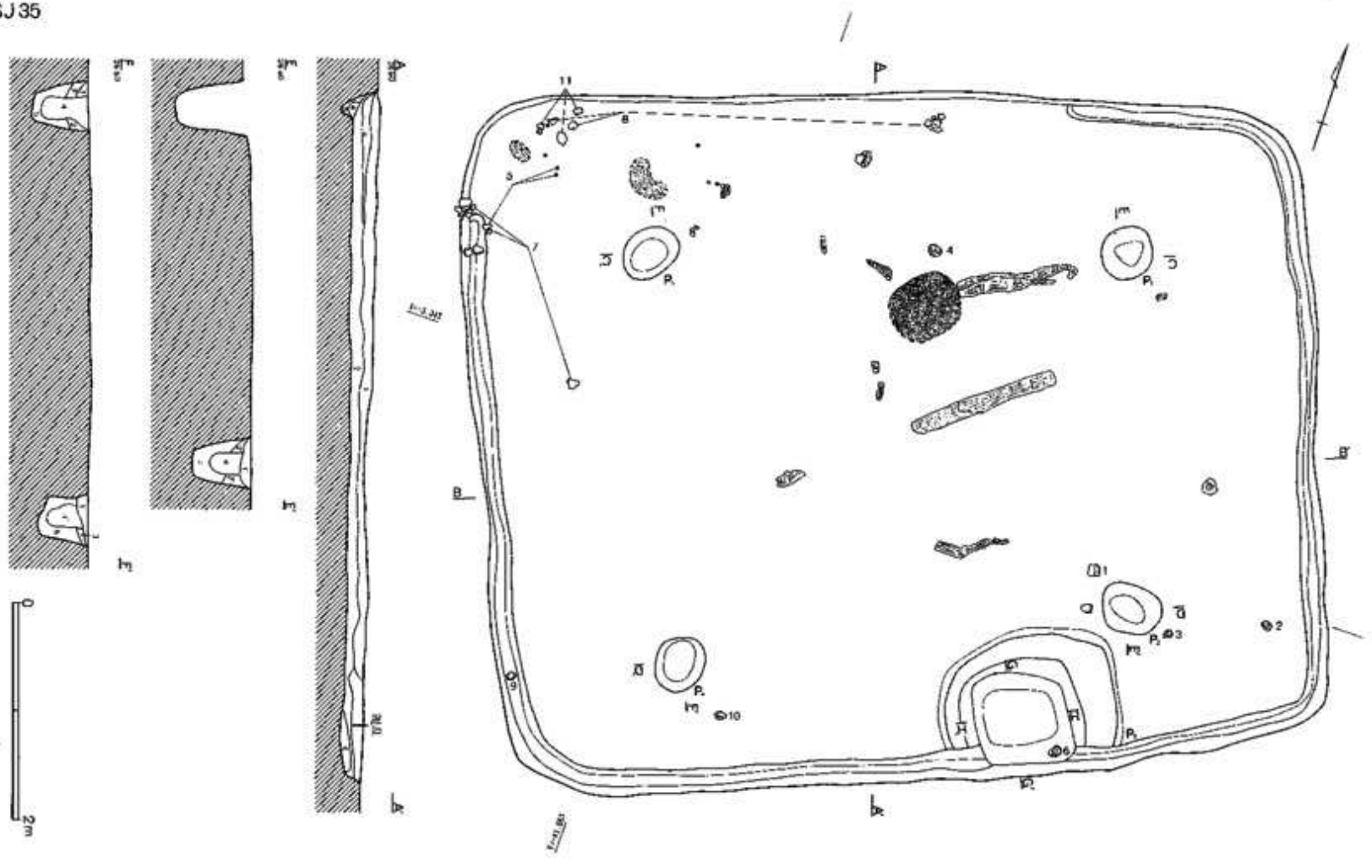
1　褐　　色：粘土質で砂粒多く含み．きめ粗い．
2　黒 褐 色：砂利含み．ローム・炭化物粒子混在．きめ粗い．
3　黒 褐 色：砂利多く．2より暗い．
4　黒 褐 色：ローム・炭化物粒子．砂含む．2よりやや明るい．
5　黄 褐 色：ローム粒子．砂利多く含む．

E－E′（炉）

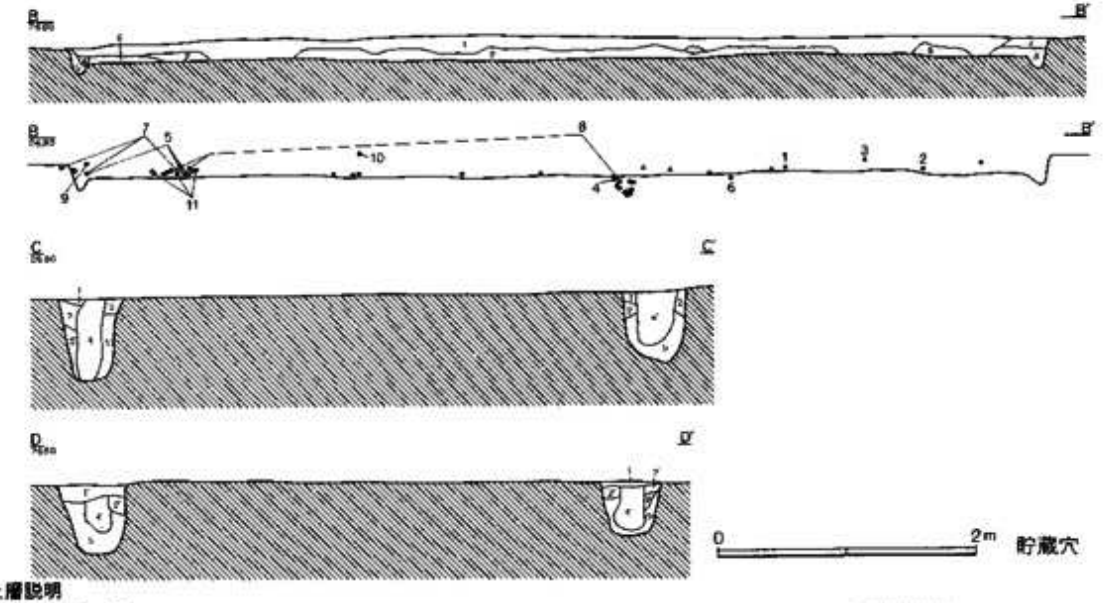
1　黒 褐 色：炭化材．焼土粒子含む．しまり弱い．
2　黒　　色：炭化材・粒子．焼土ブロック・粒子多く含む．
3　黒 褐 色：砂利混在．1に近似．

第43図　第34号住居跡実測図

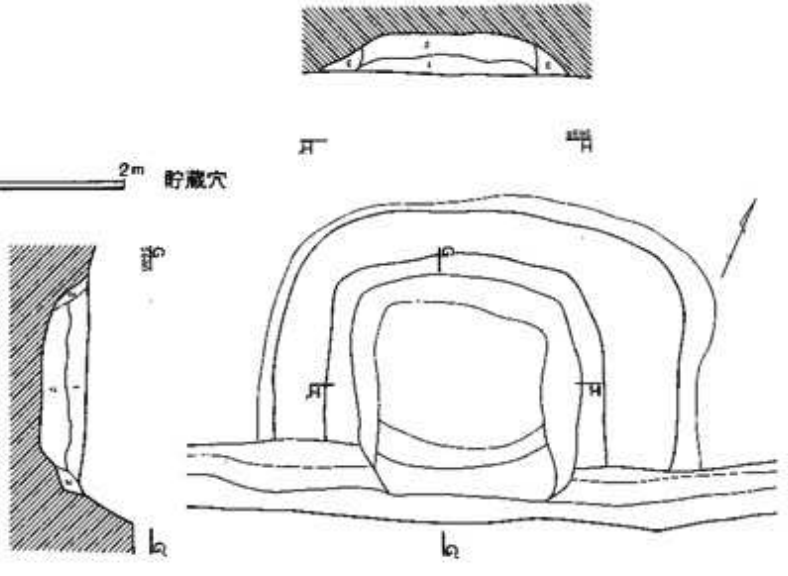
SJ35



第44図　第35号住居跡実測図(1)



ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(48/47/66)
P2(56/44/58)
P3(87/87/17)
P4(49/46/61)
P5(56/42/64)



土層説明

A－A′，B－B′

1　黒 褐 色：ローム・炭化物粒子少量，地山礫多少含む．ソフトでやや明るい．
2　黒 褐 色：ローム粒子少量含む．ソフトでやや暗い．ロームはさほど風化が進行していない．
3　黒 褐 色：ローム粒子微量，炭化物ブロック含み，1に近似．
4　暗黒色土：ローム粒子多量，焼土粒子少量含む．
5　暗 褐 色：ローム粒子多量含み，砂質．
＊4，5とも黒色土と黄色ローム粒子のコントラストがはっきりしている．
6　暗 褐 色：ローム粒子少量含み，やや砂質．
7　暗 褐 色：ローム質粘土少量含む．粘性やや有り．
8　暗 褐 色：ローム質粘土多量含む．粘性強い．

C－C′～F－F′

1　黒 褐 色：ローム粒子，炭化物少量含み，やや粘性がある．
1′　黒 褐 色：ローム粒子，炭化物少量，礫多量含む．やや砂質．
2　暗 褐 色：砂質ローム多量，炭化物少量含み，砂質．
2′　暗 褐 色：砂質ローム多量，炭化物少量含み，やや砂質．
3　黒 褐 色：砂質ローム，礫少量含み，やや砂質．
4　黒 褐 色：砂質ローム，ローム粒子，炭化物，焼土少量含み，やや砂質．
4′　黒 褐 色：砂質ローム，ローム粒子，炭化物，焼土，礫少量含む．
5　暗 褐 色：砂質ローム，砂，小礫多量含む．
5′　暗 褐 色：砂質ローム，砂，小礫少量含み，非常に砂質．

G－G′，H－H′(貯蔵穴)

1　黒 褐 色：ローム粒子，炭化物微量含み，しまり良い．
2　黒 褐 色：1に近似，色調やや暗い．
3　暗 褐 色：ローム粒子，小砂多量含む．やや砂質．

0　1m

第44図　第35号住居跡実測図(2)

切っており攪乱の可能性が強い。

北壁と西壁に壁溝が検出されている。幅は10m前後で浅い部分が多い。

炉は中央から北東コーナーに偏した位置にあり、96×70cmの不整形で約5cm弱の深さに掘りこまれていた。焼土粒を含む黒褐色、黒色土が堆積しており、その上面が60×45cmで薄く焼けており、南側に枕石の礫が1点検出されている。

出土土器には台付甕、壺、椀の破片がある。1・2は床面からやや浮いた位置、3・4はほぼ床面直上、5は貯蔵穴内の出土である。また、6（第32図）は石製の垂飾で、直径4mmの両面穿孔の小孔を有する。長さ4.1cm、最大幅2.82cm、緑泥片岩製で6.41g、覆土上層の出土である。

多量の炭化材のあり方から、本住居も火災を被っているものと思われる。

(21) 第35号住居跡（第44図・第2-17図・図版30・156）

調査区中央やや北西よりのF-11グリッド、遺構群ののる微高地の西縁部に位置する。

平面形態は東壁が西壁に比べやや短く、厳密には隅丸の長台形だが、隅丸長方形として差支えなかろう。規模は確認面で南北軸（短軸）長が6.38m、軸偏差N－21°－W、東西軸（長軸）長7.67m、軸偏差E－20°－Nで、規模の判明している当該期の住居跡群中最大である。

覆土は旧表土に近い土質の黒褐色土（第1・2層）を基調としており、壁ぎわには暗褐色土が堆積する。確認面から床面までは最深部で約25cm弱の深さである。

床面にはピットが5基認められ、P3が貯蔵穴、他は柱穴であろう。柱穴には柱痕が観察できた。

北壁の東部から北西コーナーにかけ壁溝が検出されている。幅は12－20cm弱で深さは約10cmほどである。

炉は中央から北壁方向に偏して検出された。67×56cmの不整円形でわずかに掘りくぼめられており床面が薄く焼土化していた。

貯蔵穴は南壁中央からやや東壁寄りに検出された。南側は壁の下部を切込んでおり、平面形態は87×87cmの方形のプランで、深さは最深部で17cmほどである。そしてその周囲には幅30－45cm、高さ5cm前後の周堤をめぐらせていた。

出土土器には台付甕、有段口縁壺、甑形坩、装飾器台や小形椀等の破片がある。

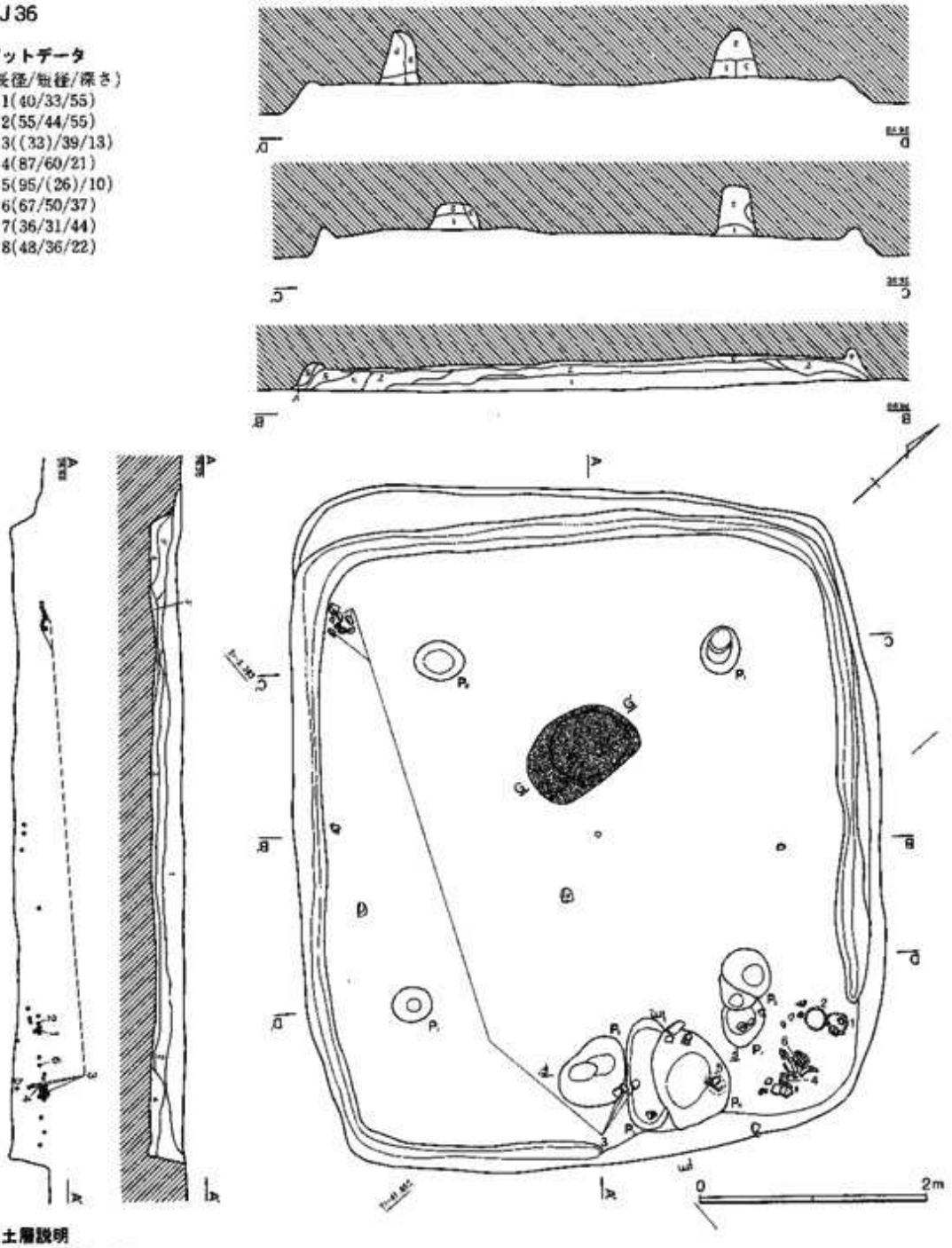
1・2はP2周辺の床面からやや浮いた状態で、4は炉の北側の床面直上、5は北西コーナー付近の床面からやや浮いた状態、6は貯蔵穴覆土中、7は西壁北部で壁にかかる状況と床面からやや浮いた状況の破片が接合、8は北壁沿いの床面直上あるいはやや浮いた状況のものが接合した。11の装飾器台は、所謂結合土器とは器形を異にし、北西コーナー付近の床面からやや浮いた状態で出土した。SR29から同一個体と思われる脚部小破片が出土しており、一緒に図上復原を試みておいた。

その他、9・10については覆土中の比較的高い位置での出土である。

炉の東－東南の床面からやや浮いた状態で炭化材が平行に出土したほか、床面各所で炭化材の小片が出土しており、本住居も廃絶後の埋没開始後の早い過程で火災を被ったものと思われる。

SJ36

ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(40/33/55)
P2(55/44/55)
P3((33)/39/13)
P4(87/60/21)
P5(95/(26)/10)
P6(67/50/37)
P7(36/31/44)
P8(48/36/22)



土層説明

A－A′，B－B′
1　暗褐色：焼土・炭化物粒子含み，砂，小石混在，しまり・粘性弱い，（自然堆積土層）
2　黒褐色：焼土・炭化物粒子1よりやや多く含むが，色調は暗い，しまりやや有り．
2′黒褐色：ローム粒子2より多く含む．
3　黒　色：炭化物層，床直上の炭化物主体土層．
3′黒　色：炭化物層，ローム粒子3より少ない．
4　黄褐色：ローム粒子やや多く含む，しまり有り．（住居跡周壁の崩落土の可能性有り．）
5　黄褐色：やや小石，砂利多く含み，4に似る．
5′黄褐色：ローム粒子5よりやや少ない．
5″黄褐色：ローム粒子5より更に少ない．

C－C′，D－D′
1　褐　色：ローム粒子，粘土ブロック，砂利含む，しまりやや有り．
2　褐　色：きめ細かく，焼土，炭化物含む，しまり有り．
3　黄褐色：ローム粒子・ブロック含む，しまりやや有り．

第45図　第36号住居跡実測図(1)

(22) 第36号住居跡（第45図・第2-17・18図・図版30・31・156・157）

調査区中央部やや西よりのH-11グリッド、再堆積ロームの最高所にあたる位置である。

平面形態は北壁が南壁よりやや短く、厳密には隅丸の台形だが、隅丸方形の範疇としてよいだろう。規模は確認面で南北軸（短軸）長が5.21m、軸偏差N－38°－E、東西軸（長軸）長5.95m、軸偏差E－36°－Sである。

覆土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色土を基調としている。壁面に近い部分を除く床面の広範囲に炭化物を比較的密に含む黒色土が覆っており、火災を被っている可能性がある。確認面から床面最深部までは約25cmと、本遺跡の当該期の住居跡では深い方である。

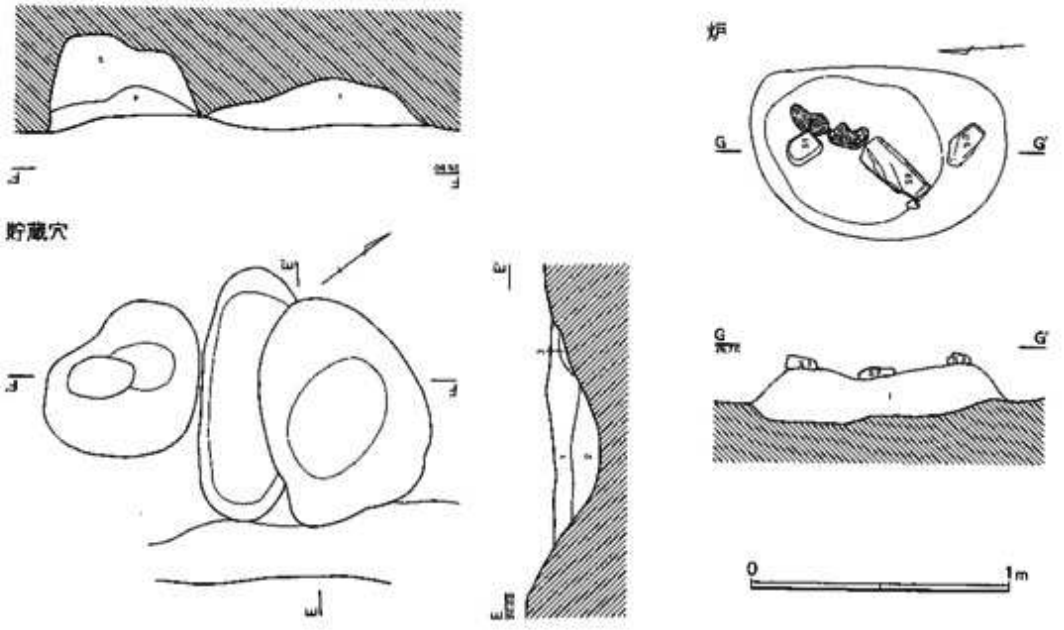
床面にはピットが8基認められ、P1、P2、P7、P8が主柱穴と考えられる。

2連のピット、P4、P5は貯蔵穴と考えられ、P4は87×60cm、深さ21cm、P5は長さが95cm、深さは10cmと浅い。南壁側のP6も貯蔵穴に関連するものかも知れない。

壁溝は北東コーナーと貯蔵穴付近を除き全周する。西壁では最高30cmの幅で床面がベッド状となっておりその下段部分をまわっている。幅は最高で25cm弱、深さは約10cm内外である。

炉は中央から西壁に偏した位置に検出し、99×65cmの不整長円形で、最高約7cmの深さに掘りこまれ、覆土の上面がわずかに焼けていた。枕石と思われる礫が3個検出された。

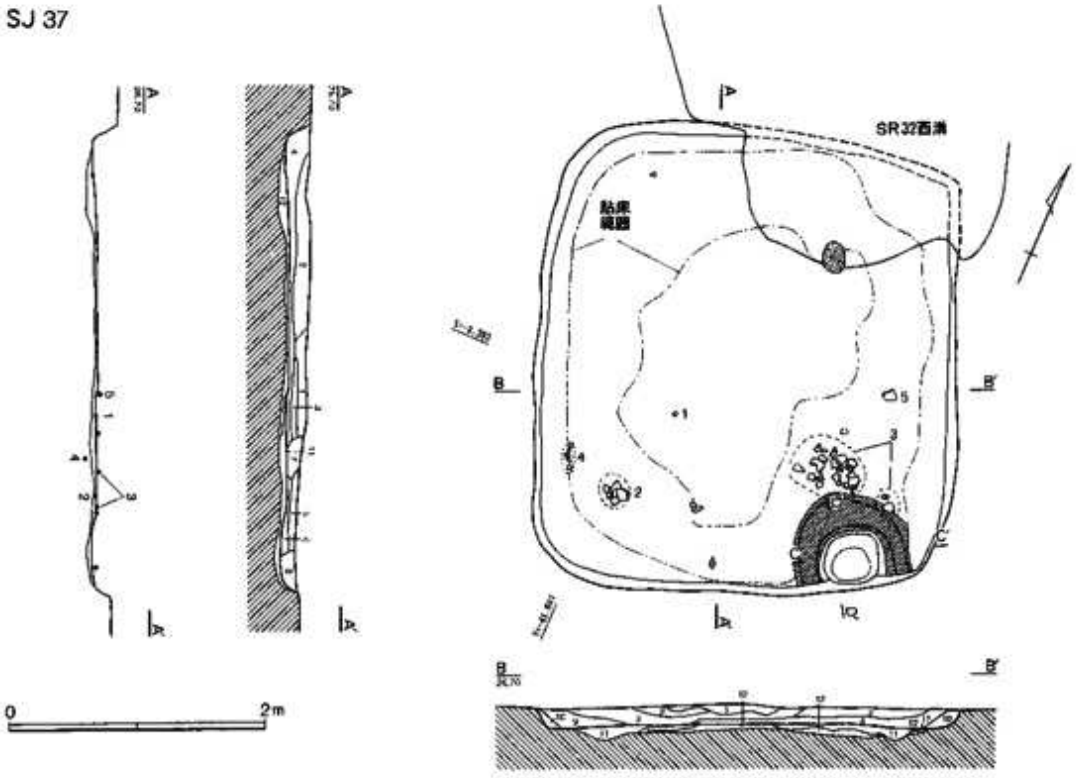
出土土器は壺、高杯のほか、特筆されるものに手焙形土器があった。1・2・6・4は北東コーナーの覆土中の比較的高い位置、5は床面からわずかに浮いた位置の出土、3は貯蔵穴南と南西コーナーの覆土中の高い位置出土の破片が接合した。



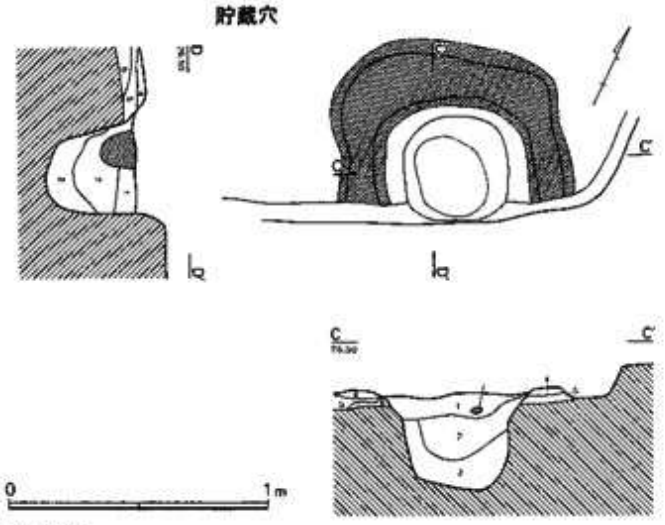
E－E'、F－F'（貯蔵穴）
1　黒褐色：微量の炭化物・焼土粒子含む。しまり弱い。
2　黒褐色：炭化物・焼土粒子1より多い。
3　黄褐色：砂利、ローム主体とする。
4　暗褐色：炭化物・焼土粒子含む。しまりやや有り。
5　暗褐色：炭化物・焼土粒子含む。砂利やや混。
G－G'（炉）
1　暗褐色：ロームブロック含む。

第45図　第36号住居跡実測図(2)

SJ 37



貯蔵穴



ピットデータ
(長径/短径/深さ)

P1(52/45/36)	P4(89/(75)/35)
P1(53/35/67)	P5(91/76/36)
P2(44/39/16)	P6(59/55/68)
P3(22/18/65)	P7(27/25/28)
	P8(52/46/65)
	P9(28/24/11)

C－C′，D－D′（貯蔵穴）
1　暗 褐 色：ローム粒子，焼土少量含む，粘性やや有り．
2　黒 褐 色：ローム粒子少量含む．
3　黒 褐 色：ローム粒子多量含む．
4　明 褐 色：ロームブロック多量含む粘土．
5　暗 褐 色：炭化物，ローム粒子少量含む粘質土．
6　暗 褐 色：粘質ロームブロック少量含む．
＊4，5，6　貯蔵穴周壁

土層説明

A－A′，B－B′
1　暗 褐 色：ローム粒子，中ブロック含む．しまりやや有り．
2　黄 褐 色：ローム粒子，ブロック主体的に含み，粘性・しまり持つ．
3　明 褐 色：ローム粒子，中ブロック，炭化物粒子含み，しまりやや弱い．
3′明 褐 色：ローム粒子含有量3よりやや少なく，暗い．
4　黒 褐 色：ローム・炭化物粒子含み，しまり弱い．若干の焼土粒子混在．
5　黄 褐 色：ローム土多く含み，2に似るが，きめやや粗雑．
6　暗 褐 色：ローム粒子4よりやや多く明るい．
7　暗 褐 色：ローム・炭化物粒子含み，きめ細かい．
8　暗 褐 色：ローム粒子，炭化物含み，7に似る．
9　暗 褐 色：ローム粒子・ブロック，炭化材含み，きめ細かい，しまりやや弱い．
10　暗 褐 色：ローム粒子含み，きめ細かい，しまり弱い．
11　暗 褐 色：ローム粒子，粘質ロームブロック少量含み，粘性有り．
12　明 褐 色：粘質ロームブロック多量含む．
＊11，12は貼床層

第46図　第37号住居跡実測図

(23) 第37号住居跡（第46図・第2-18図・図版31－32）

調査区中部やや南よりのJ-11グリッドに位置、北東コーナー付近をＳＲ32西溝に切られる。

平面形態は北西、南西コーナーの丸みが強い隅丸方形である。

規模は確認面で南北軸（長軸）長が3.61ｍ、軸偏差Ｎ－16.5°－Ｗ、東西軸（短軸）長3.30ｍ、軸偏差Ｅ－19.5°－Ｎである。

覆土は各層ローム粒を含むが中央上部に暗褐色土、その周囲に黄褐色土、明褐色土、床面付近は黒色土等、多彩な色調が見られた。確認面から床面までは約15cm前後の深さである。また、ほぼ全面が貼床となっており、一度10cm前後掘ってからロームブロックを含む暗褐色土、明褐色土を混合して埋め戻し、水平に床面を調整している。

炉は中央から北東コーナーに偏した位置の、ＳＲ32の壁面にかろうじて検出した。25×16cmの不整円形の範囲がわずかに焼土化している状況であった。

貯蔵穴は南壁の南東コーナー部分で検出した。52×45cm、深さ36cmで、壁を切込んで掘られている。そして15－30cm幅で高さ6cm前後の粘土の周堤を築いていた。

出土土器には台付甕、大形の直口壺等の破片等がある。1・2・3・5は床面直上、4は貼床内の出土である。

(24) 第38号住居跡（第47図・第2-19図・図版32）

調査区ほぼ中央のG-12グリッドに位置する。

平面形態は西壁がゆるく外方に膨らむが、隅丸長方形と呼んでよいだろう。規模は確認面で南北軸（短軸）長が5.29ｍ、軸偏差Ｎ－25°－Ｅ、東西軸（長軸）長が6.66ｍ、軸偏差Ｅ－28°－Ｓを測る。

覆土は壁ぎわを除き黄褐色土を基調としており、主に周堤の崩壊土に由来する土であろう。最下層には炭化物を主体とする黒褐色土が堆積するが、敷物が火災等で被熱炭化したことに由来するのだろうか。確認面から床面までは最深部で約25cm弱の深さである。

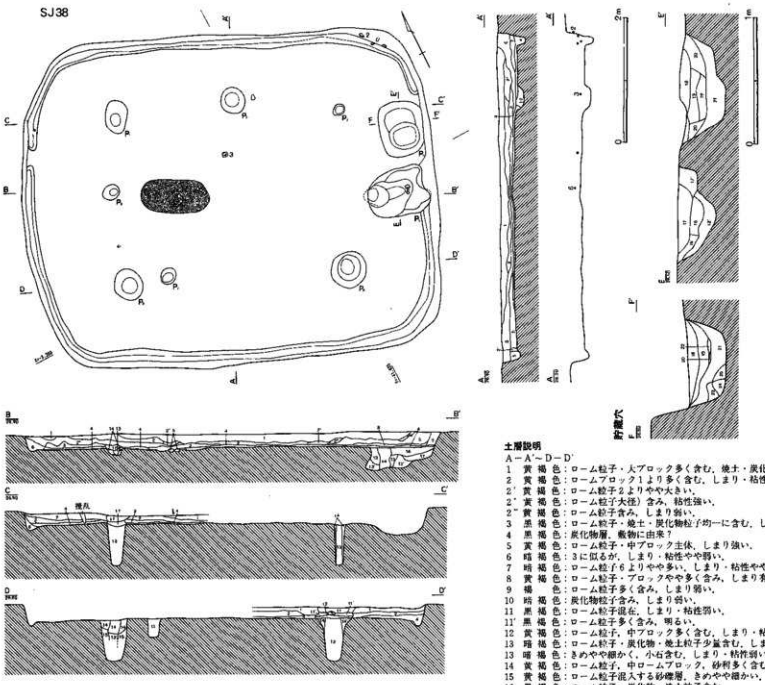
床面にはピットが9基認められた。主柱穴はＰ1、Ｐ3、Ｐ6、Ｐ8と考えられ、Ｐ4は貯蔵穴と判断した。Ｐ5は覆土の断面から判断すると、床面の形成時にはすでに埋められていることがわかるが、性格については不明である。

壁溝は西壁の一部と貯蔵穴部分を除き検出された。幅は15cm前後、深さは最深部で15cmほどである。

炉は中央から西壁方向に偏して検出した。平面形は102×54cmを測る不整長円形で、床面を浅く掘りこんでおり、底面が薄く焼土化していた。大は長さ15cm、小は径3cmほどの枕石の礫が7個底面上で検出されている。

貯蔵穴は東壁の北東コーナー寄りに検出された。大きなピット（89×75cm、深さ21cm）の中に小さなピット（46×42cm、深さ35cm）を入子状に掘っている。

出土土器は台付甕や広口壺、小形の椀等の破片があった。2は北東コーナー部分の壁面上部に接するように出土、3、6は床面から少々浮いた状況での出土である。



ピットデータ

(長径/短径/深さ)	
P1(60/55/25)	P6(78/44/8)
P2(42/38/16)	P7(30/23/18)
P3(68/61/22)	P8(65/61/26)
P4(21/20/-)	P9(36/33/14)
P5(65/48/28)	P10(52/51/34)
	P11(37/33/22)

土層説明

A－A'～D－D'

1　黄褐色：ローム粒子・大ブロック多く含む，焼土・炭化物粒子混在，しまりやや有り。
2　黄褐色：ロームブロック1より多く含む，しまり・粘性やや有り。
2'　黄褐色：ローム粒子2よりやや大きい。
2"　黄褐色：ローム粒子大径）含み，粘性強い。
2"　黄褐色：ローム粒子含み，しまり弱い。
3　黒褐色：ローム粒子・焼土・炭化物粒子均一に含む，しまり・粘性やや有り。（自然堆積土）
4　黒褐色：炭化物層，載物に由来？
5　黄褐色：ローム粒子・中ブロック主体，しまり強い。
6　暗褐色：3に似るが，しまり・粘性ややヂ弱い。
7　暗褐色：ローム粒子6よりやや多い，しまり・粘性やや有り。
8　黄褐色：ローム粒子・ブロックやや多く含み，しまり有り。
9　褐　色：ローム粒子多く含み，しまり弱い。
10　暗褐色：炭化物粒子含み，しまり弱い。
11　黒褐色：ローム粒子混在，しまり・粘性弱い。
11'　黒褐色：ローム粒子多く含み，明るい。
12　黄褐色：ローム粒子，中ブロック多く含む，しまり・粘性有り。
13　暗褐色：ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量含む，しまり・粘性やや有り。
13　暗褐色：きめやや細かく，小石含む，しまり・粘性弱い。
14　黄褐色：ローム粒子，中ロームブロック，砂利多く含む，しまり・粘性有り。
15　黄褐色：ローム粒子混入する砂礫層，きめやや細かい。
16　黒褐色：ローム粒子，炭化物・焼土粒子含む。
16'　黒褐色：ローム粒子やや多く含む。
17　黒褐色：ローム粒子・焼土粒子，中ロームブロック含む。
17'　黒褐色：ローム粒子やや少ない。

E－E'，F－F'（貯蔵穴）

18　黒褐色：ローム・炭化物粒子混在，しまり有り。
19　黒褐色：ローム粒子少量含む，きめ細かく，しまり弱い。
20　黄褐色：ローム粒子・ブロック多く含み，しまり・粘性持つ。
21　黒褐色：ローム・炭化物粒子均一に含む，しまりやや弱く，粘性欠ける
22　暗褐色：ローム・焼土粒子混在，しまり弱い。
23　黒褐色：ローム粒子・ブロック，焼土粒子僅かに含む。
24　黄褐色：ロームブロック主体。
25　黒褐色：2，3に似るがややローム粒子多い。

第47図　第38号住居跡実測図

(25) 第39号住居跡（第48図・第2-19・20図・図版32・157・158）

調査区中央部のH-13グリッド、前述のＳＪ38とは約4ｍの間隔で、その南東に位置する。

平面形態は隅丸方形で、規模は確認面で南北軸（長軸）長が5.98ｍ、軸偏差Ｎ－15°－Ｅ、東西軸（短軸）長5.27ｍ、軸偏差Ｅ－15°－Ｓである。

覆土は上層が黒褐色土、下層がローム粒と、火災に起因する炭化物、焼土粒を含む暗褐色土を基調としている。壁ぎわには所謂三角堆積のローム粒を含む黄褐色土が堆積する。確認面から床面までは約30cm弱と本遺跡の当該期の住居としては深いほうである。

床面にはピットが7基認められた。主柱穴はＰ1、Ｐ3、Ｐ5、Ｐ7。Ｐ4は貯蔵穴で104×83cm、深さは31cmである。

壁溝は西壁の北部と、南東コーナーから南壁西部部分を除き検出された。幅は10－18cm、深さは約10cmほどである。

炉は中央から北壁方向に偏して検出された。50×47cmの不整円形で床面がわずかに掘りこまれており、厚さ約5cmで床面に焼土が堆積していた。

出土土器は多い方だが完形に復原できたのは僅少である。器種には、台付甕や、小形の直口壺のほか、頸部に凸帯のある壺（7）や結合土器と思われる椀状の部分の破片（16）があった。出土位置は、1が北壁北東コーナー寄りとＰ3上のやや浮いた位置のものとが接合、3は北壁の北西コーナー寄りのやや浮いた位置、4はＰ2付近の床面直上とやや浮いた位置の破片が接合、8はＰ1周辺の覆土中、9・11はＰ3付近で床面からやや浮いた位置の出土である。そして7は東南部の覆土中、10は同じく東南部の床面直上と貯蔵穴覆土中の破片が接合した。

覆土中から多量の炭化材と焼土が出土し、火災に遭っていることが明らかで、北東コーナー付近に住居外上方から、屋根材に由来する可能性が強い灰白色粘土が落ち込むように出土している。

(26) 第40号住居跡（第49図・第2-20図・図版33）

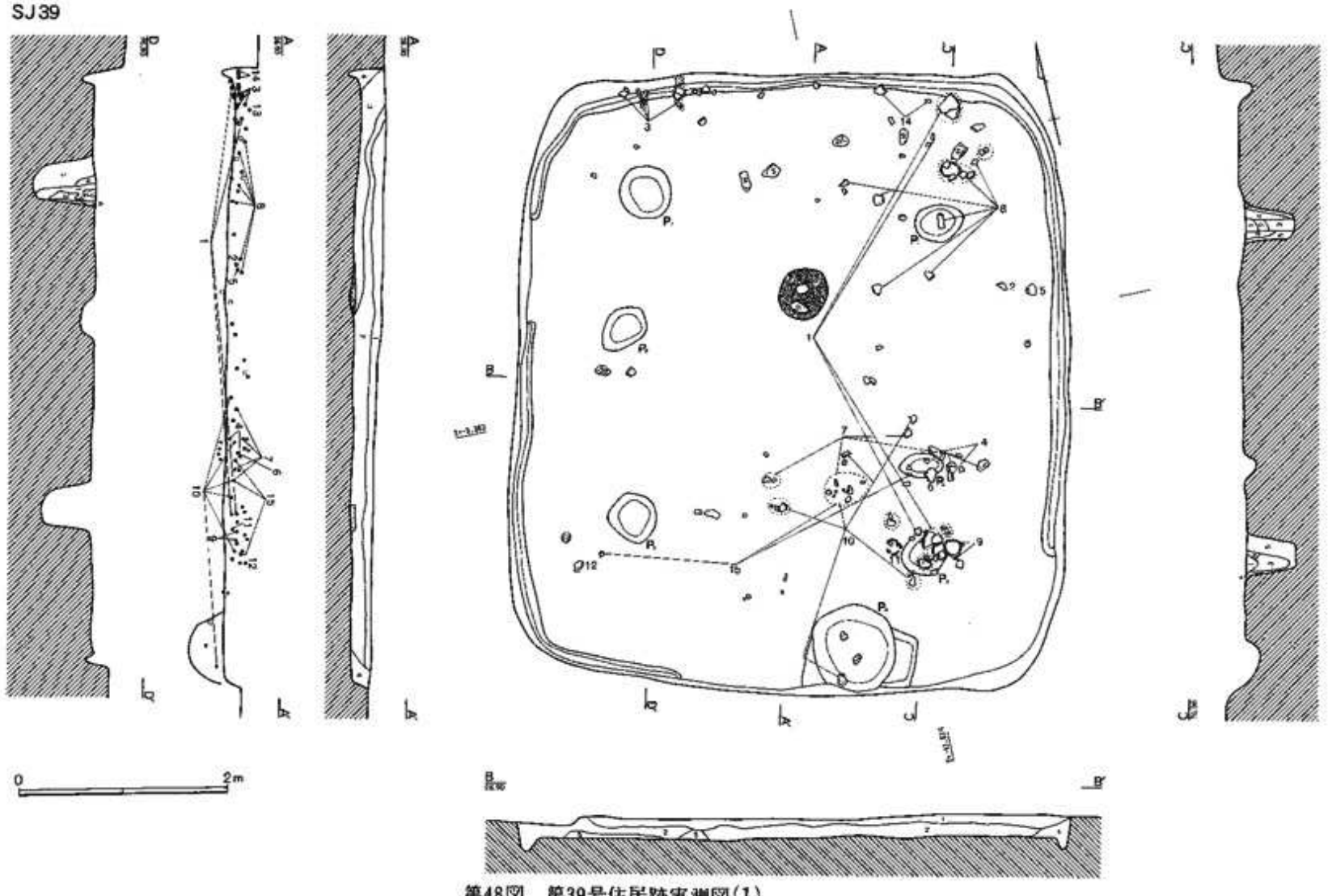
調査区中央部のH-13グリッド、前述のＳＪ39のすぐ東南に接するように所在している。西壁は南西コーナーのやや北から内側に屈曲し、築造時すでにＳＪ39が存在し、これを避けるための措置かも知れない。平面形態は厳密には隅丸の5角形とするべきかも知れないが、一応隅丸方形としておく。規模は確認面で南北軸（短軸）長5.08ｍ、軸偏差Ｎ－0－Ｅ°、東西軸（長軸）長5.27ｍ、軸偏差Ｅ－0－Ｓ°である。

覆土は上層が暗褐色土、下層が茶褐色土を基調とし、確認面から床面までは約10cm弱と浅い。

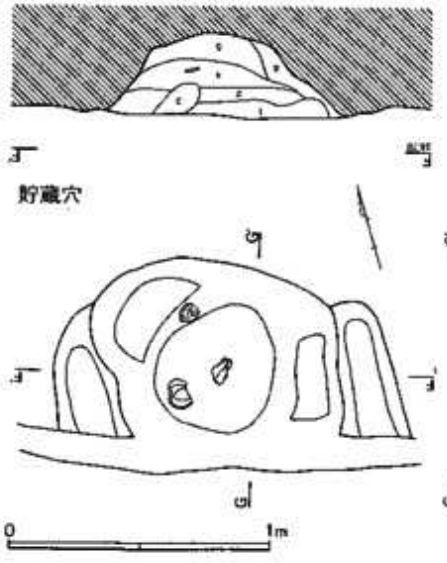
床面にはピットが5基認められた。主柱穴はＰ1－Ｐ4、北壁を切込むＰ5は貯蔵穴と思われ、93×78cmの規模で、深さは最大34cmである。

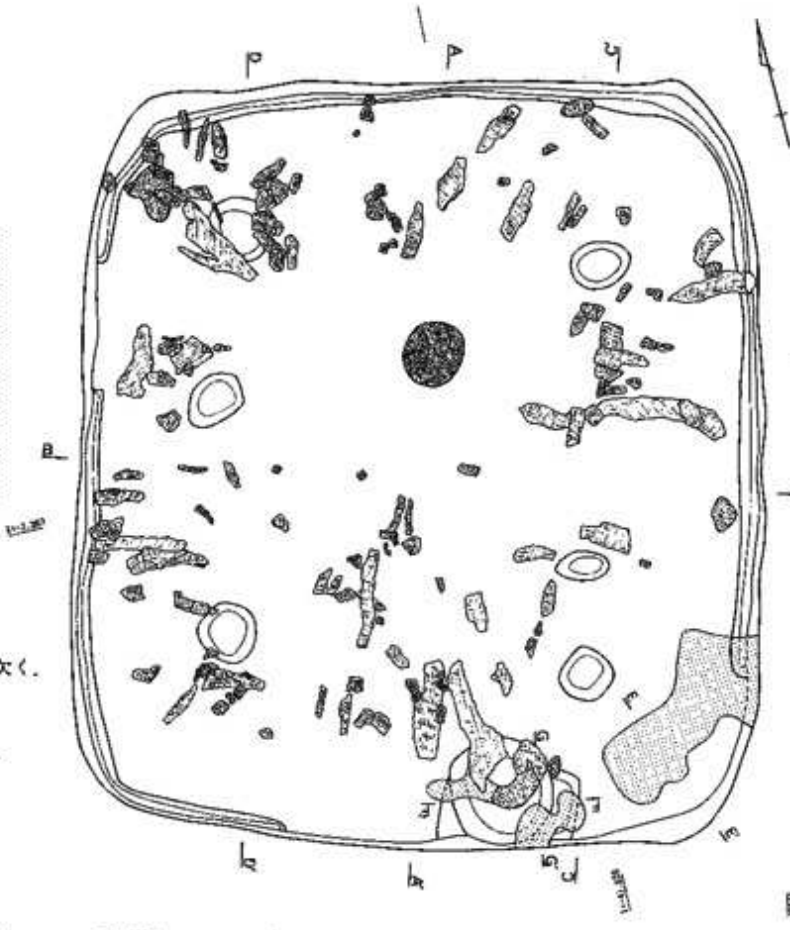
床面中央から南壁に偏して検出したＰ6は115×90cmの不整形で約5cmの浅い掘りくぼみで、確認面に幅7cmのＬ字形の焼土化面があり炉跡と推定しておきたい。

出土遺物の1は炉の西側の床面直上、2はやや浮いた出土である。3（第2-32図）は石製の垂飾で、長さ2.7cm、最大幅2.4cm、両面穿孔の径1.3mmの小孔を有し緑泥片岩製、重さ3.78ｇである。



第48図　第39号住居跡実測図(1)





ット データ
(長径/短径/深さ)
P1(47/37/49)
P2(43/22/15)
P3(43/42/50)
P4(104/83/31)
P5(68/61/22)
P6(50/35/12)
P7(51/50/57)

0 2m

土層説明

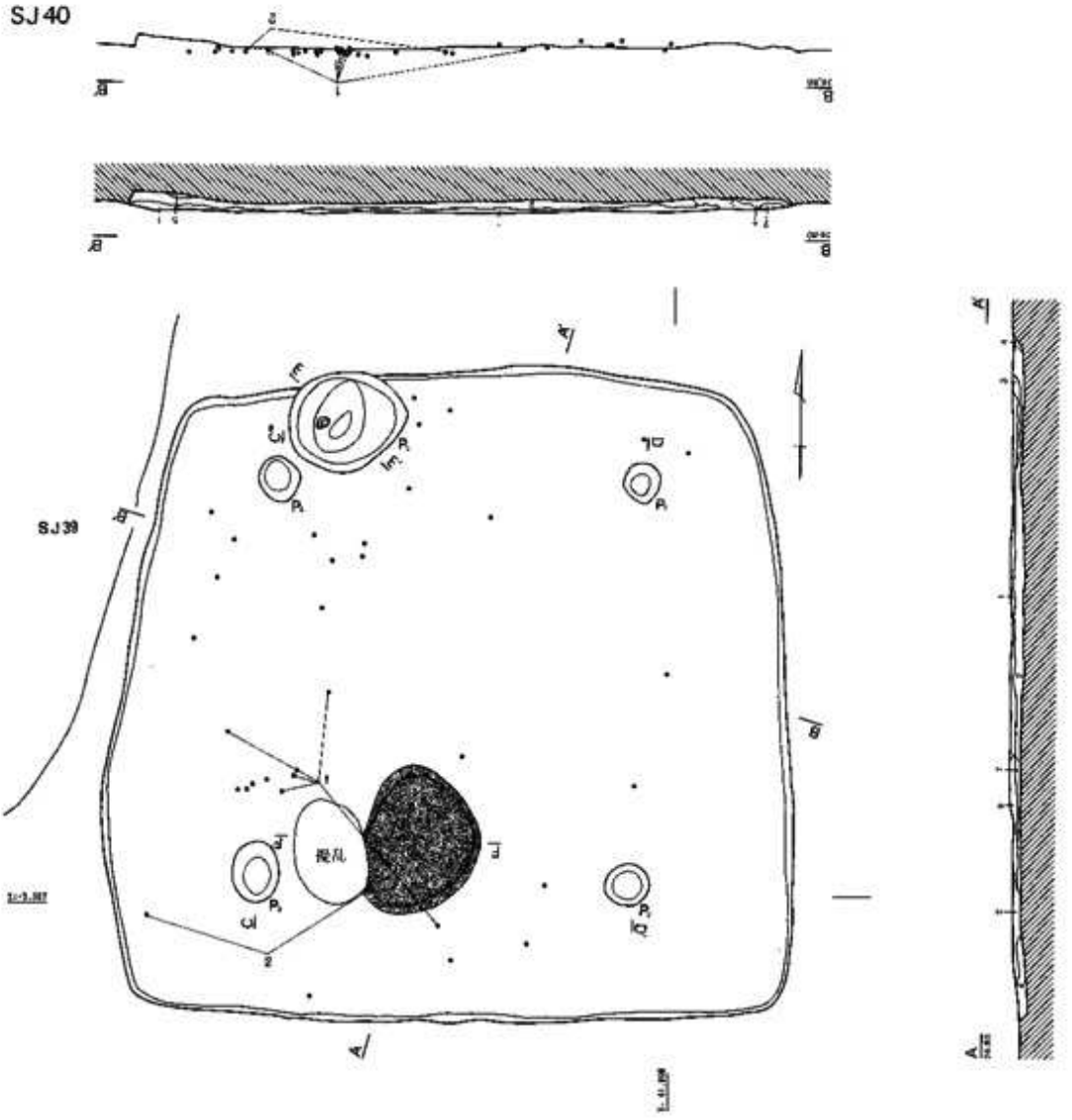
A－A′，B－B′
1　黒 褐 色：炭化物・焼土粒子混在，しまり弱い．
2　暗 褐 色：炭化物・焼土・ローム粒子含み，粘土ブロック（1～2cm）混在．
3　褐　　色：炭化物・焼土・ローム粒子均一に含む，しまりやや有るが，粘性に欠く．
4　黄 褐 色：ローム粒子やや多く含み，しまりやや弱い．
5　黄 褐 色：粘性の強いソフトローム主体とする．

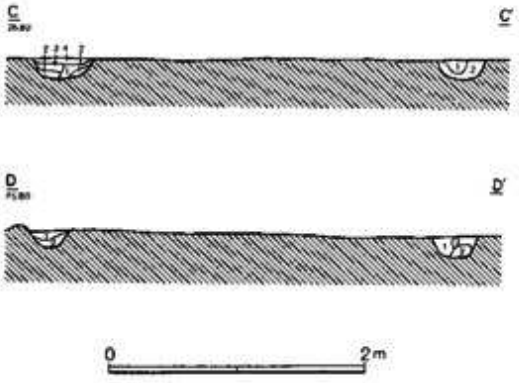
C－C′－D－D′
1　黒 褐 色：ローム・炭化物・焼土粒子，ロームブロック少量含み，しまり良い．
1′　暗 褐 色：ローム1より多く，明るい．
2　暗 褐 色：ローム・炭化物粒子少量含む，しまりやや有り．
3　黒 褐 色：ローム粒子多量，炭化物少量含む，やや砂質．
4　明 褐 色：ロームブロック，ローム・炭化物粒子多量含む，粘性有り．
5　貼 床 土
6　暗 褐 色：ローム粒子，炭化物少量含む．
7　暗 褐 色：ローム粒子少量含む．

F－F′，G－G′（貯蔵穴）
1　暗 褐 色：ローム質粘土多量，炭化物少量含む．
2　暗 褐 色：ローム質粘土，炭化物少量含む．
3　暗 褐 色：ローム質粘土のブロック．
4　黒 褐 色：ローム質粘土，炭化物少量含む．
5　黒 褐 色：ローム質粘土，炭化物微量含む．
6　暗 褐 色：ロームブロック少量含む．

E－E′（周堤帯）
1　灰 白 色：粘性の強いローム多量含む．
2　灰 白 色：粘性の強いローム極めて多量含む．
3　黒 褐 色：ローム粒子微量含む．
4　暗 褐 色：ローム粒子少量含む．
5　黒 褐 色：ローム粒子少量含み，やや暗い．
＊1，2が粘性強いロームで，壁際から住居の中心に向って落ち気味になっている．

第48図　第39号住居跡実測図(2)





土層説明

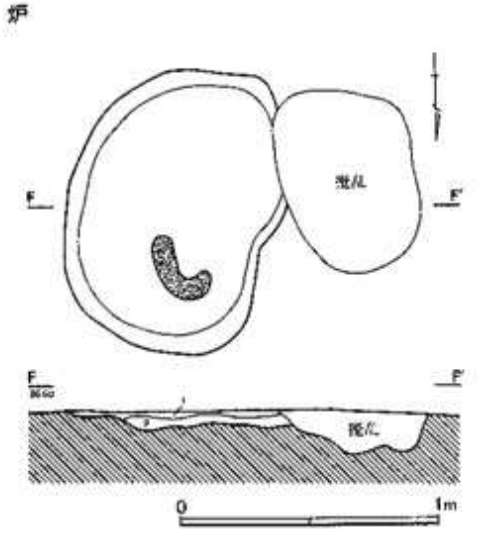
A－A′，B－B′

1　暗褐色：ローム粒子・ブロック，大粘土ブロック含む，しまり弱い．
2　茶褐色：中ローム粒子・ブロック均一に含む，炭化物・焼土粒子混在，しまりやや有り．
3　黄褐色：ローム粒子・ブロックを堆積，しまりやや有り．
4　黄褐色：ローム土主体，しまり，粘性有り．
5　黒褐色：きめ細かく，微粒の炭化物，焼土混在，しまり・粘性弱い．
6　黒褐色：炉，焼土・炭化物粒子含み，ローム粒子混在，しまり・粘性弱い．
7　黒褐色：炭化材・粒子混在，しまり弱い．

C－C′，D－D′

1　黒褐色：ローム粒子微量含む，炭化物粒子混在，しまり弱い．
2　黄褐色：ローム粒子・ブロック多く含む，しまり・粘性持つ．
3　褐　色：ローム粒子・ブロック混在，しまり持つ．
4　黒褐色：炭化物・焼土粒子含む．

第49図　第40号住居跡実測図(1)



E－E'（貯蔵穴）

1　褐　　色：ローム粒子混在．微量の炭化物・焼土粒子含む．しまり・粘性やや弱い．

2　黒 褐 色：小石含み．きめやや粗い．

3　褐　　色：ロームブロック．粘土含む．しまりやや有り．粘性有り．

4　褐　　色：ローム・粘土粒子含み．きめ細かい．しまりやや有り．

5　暗 褐 色：ロームブロック含み．きめやや粗い．しまり弱い．

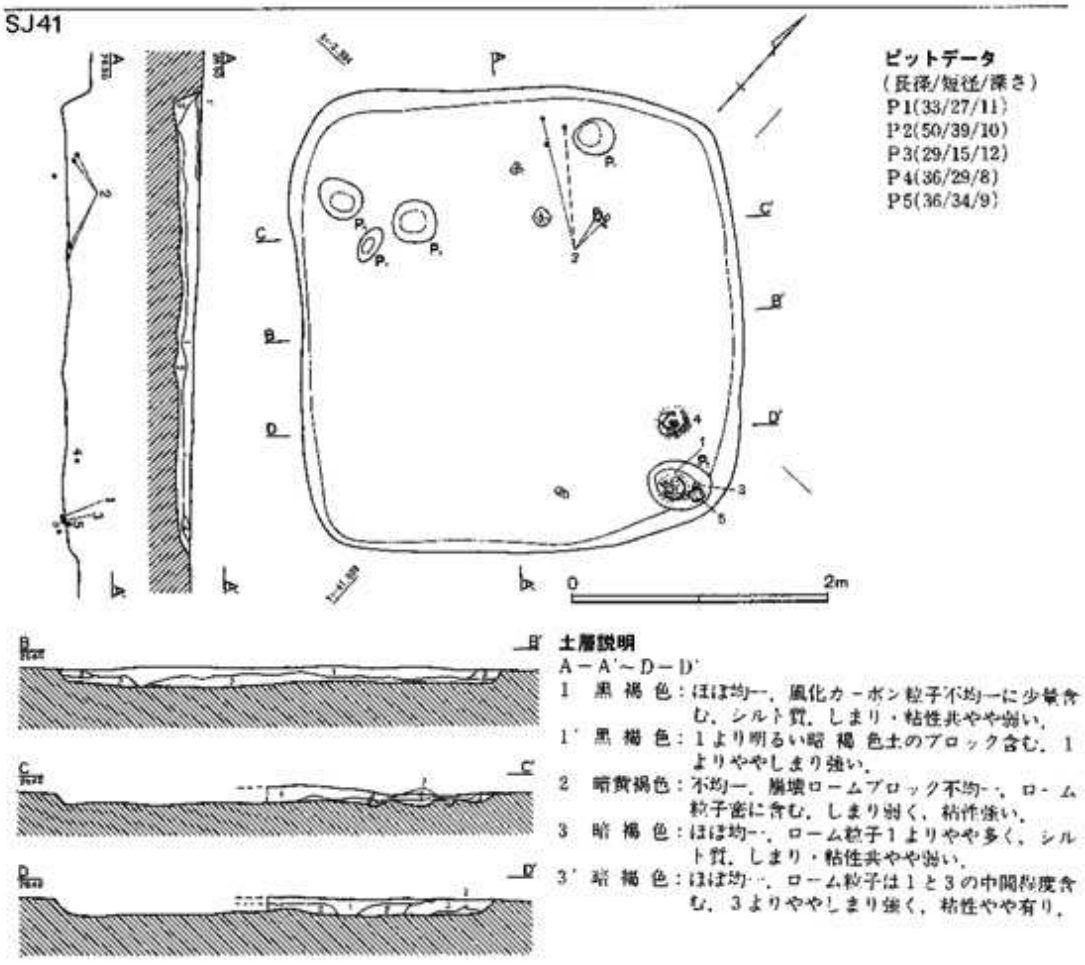
6　褐　　色：4に似るが．しまり・粘性共やや強い．

F－F'（炉）

1　黒　　色：炭化層．焼土粒子・ブロック．炭化材・粒子を含む．

2　黒 褐 色：焼土・炭化物粒子微量．ロームブロック多く含む．（炉床面の整地土層）

第49図　第40号住居跡実測図(2)



ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(33/27/11)
P2(50/39/10)
P3(29/15/12)
P4(36/29/8)
P5(36/34/9)

土層説明

A－A'～D－D'

1　黒 褐 色：ほぼ均一．風化カーボン粒子不均一に少量含む．シルト質．しまり・粘性共やや弱い．

1'　黒 褐 色：1より明るい暗 褐 色土のブロック含む．1よりややしまり強い．

2　暗黄褐色：不均一．崩壊ロームブロック不均一．ローム粒子密に含む．しまり弱く．粘性強い．

3　暗 褐 色：ほぼ均一．ローム粒子1よりやや多く．シルト質．しまり・粘性共やや弱い．

3'　暗 褐 色：ほぼ均一．ローム粒子は1と3の中間程度含む．3よりややしまり強く．粘性やや有り．

第50図　第41号住居跡実測図

(27) 第41号住居跡（第50図・第2-20図・図版33・157・158）

調査区中央部やや南よりのJ-13グリッドに位置する。

平面形態は北西コーナーがやや張出すが隅丸方形である。規模は確認面で南北軸（長軸）長が3.62m、軸偏差N－45°－W、東西軸（短軸）長3.45m、軸偏差E－45°－Nである。

覆土は上層が黒褐色土、下層が暗黄褐色土を基調としており、確認面から床面までは最高15cmの深さがある。床面はやや柔らかくあまり使用されていない感じを受ける。炉跡が検出されていないことからあるいは土壙の扱いとしたほうが妥当かもしれないが、一応住居の扱いとしておく。

床面にはピットが5基認められたがいずれも10cm以下と浅い。

出土遺物には台付甕、小形壺等の破片ある。1はP2の覆土内、5はP2上の覆土内出土、両者とも遺棄されたものであろう。3はP2底面付近の出土、遺留か遺棄されたのか判然としない。2・4は破片が床面からやや浮いた状況の出土であり、遺棄されたものと推定される。

(28) 第42号住居跡（第51図・第2-21図・図版34）

調査区中央部から北に偏したD-14グリッドに位置しており、南側の約1／3の部分が攪乱を被り遺存はあまりよくない。

平面形態は隅丸方形と判断され、規模は確認面で南北軸（短軸）長が3.6m前後になるであろうか、軸偏差はN－8°－E、東西軸（長軸）長3.79m、軸偏差E－8°－Sである。

覆土は上、下層とも暗褐色土だが下層は火災に起因する炭化物が多量に包含される。

床面にはピットが3基認められ、P1、P2は主柱穴となろう。両者とも深さは10cm以下と浅い。

出土遺物には台付甕、壺、高杯の破片等があり、いずれも投棄されたか流入した土器片であろう。

また、床面からやや浮いた状況で炭化材が出土し、本住居も火災を被っていることが明かである。

(29) 第43号住居跡（第52図・第2-12図・図版35・158・159）

調査区中央部やや北東よりのF-14グリッドに位置する。

平面形態は隅丸方形で、規模は確認面で南北軸（短軸）長が4.64m、軸偏差N－44°－E、東西軸（長軸）長5.03m、軸偏差E－31°－Sである。

覆土はローム粒を含む黒褐色土を基調とし、確認面から床面までは約25cm強の深さである。

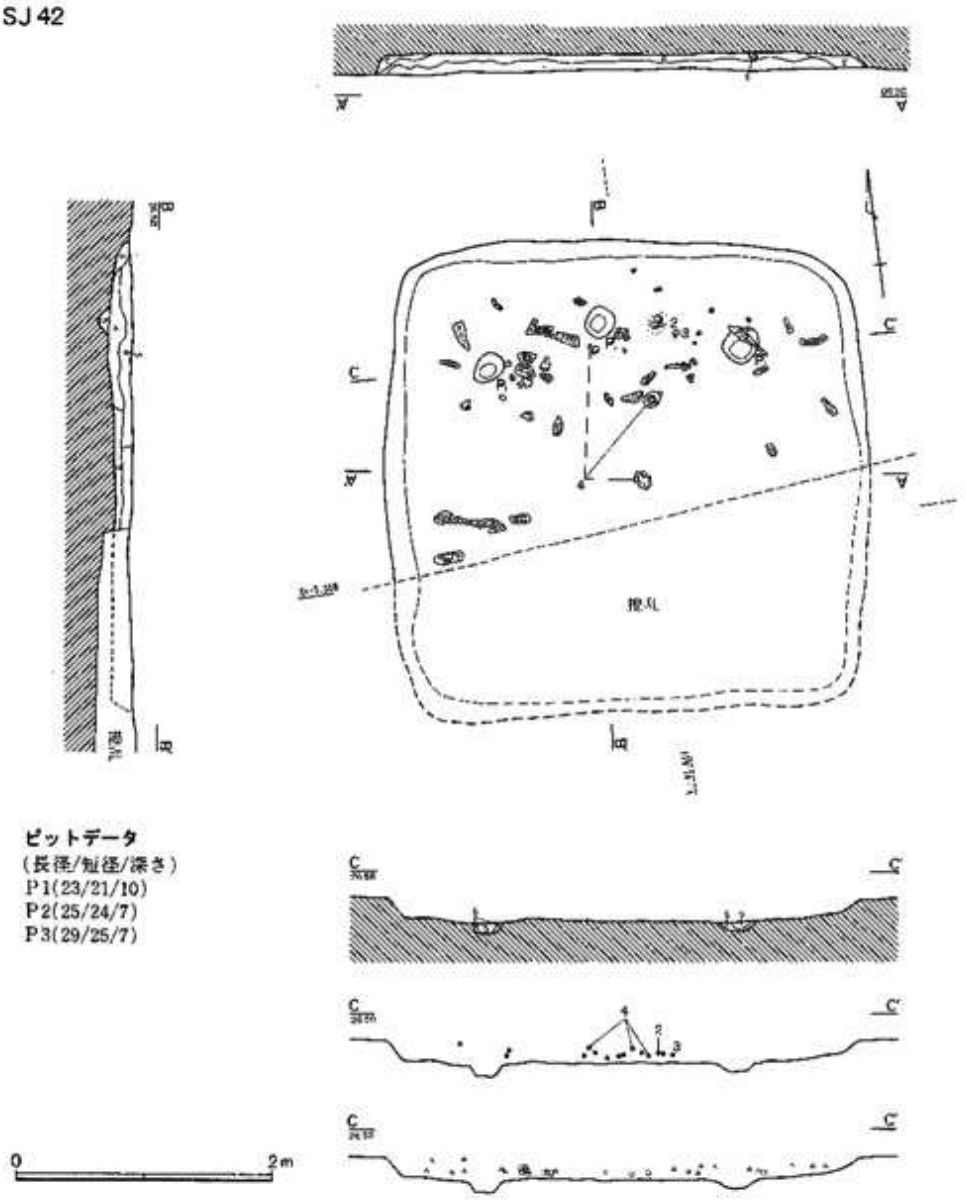
西壁部分に幅約60、高さ約12cmのベッド状遺構がロームを掘り残して造り付けられている。

床面にはピットが15基認められ、P1、P4、P5、P12が40cm以上の深さを有し主柱穴となろう。P10もその候補だが深さが浅い。これらピットの内側の床面は非常に硬く踏みしめられていた。

壁溝は南西コーナーから西壁北のベッド状遺構上、それに北壁沿いに部分的に、そして東壁の北部で壁から15cmほどはなれて検出された。

炉は中央から北東コーナーより、そして西壁に偏した位置の2基を検出した。北壁よりのものは38×35cmの不整形で約5cm掘りこまれており、暗褐色土とロームの混合土が堆積していた。そして、南側に自然礫の枕石が2個検出されたが、それとは反対側では、約25×25cm、厚さ約5cmで炉床面が焼土化していた。一方の炉はほとんど掘り込みは見られず炉床面が最高で厚さ4cmでレンズ状に焼土化し

SJ 42



ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(23/21/10)
P2(25/24/7)
P3(29/25/7)

土層説明

A－A'－，C－C'

1　暗 褐 色：シルト質，ローム微粒多量含む．
2　暗 褐 色：シルト質，ローム微粒多量含み，ほぼ同質だが，炭化物多量含む．
3　暗 褐 色：シルト質，焼土，炭化物微量含む，地山のシルトローム混合する．
4　暗 褐 色：炭化物多量含み，更に2より黒味増す，ローム微粒含む．
5　暗 褐 色：シルト質，崩壊ローム不均一に含む，しまり弱く，粘性やや有り．
6　明 褐 色：地山土に植物繊維，1の暗褐色土少量含む，シルト質，しまり・粘性共強い．

第51図　第42号住居跡実測図

ていた。

貯蔵穴はP6、P7が複合して形成する。52×42cm、深さは35cmである。

出土遺物には大形壺、小形の直口壺や高杯等の破片があった。出土位置は東南部が多く、1の体部上位に不整の山形文を有する壺はP5の南側の床面からやや浮いた位置、その他もその周囲からやや浮いた状況の出土で、いずれも投棄または流入の可能性が強いものである。

(30) 第44号住居跡（第53図・第2-12図・図版35・36）

調査区中央やや北東部のG-14グリッドに位置する。SR41の方台部下の旧表土面を精査中に検出したもので、当初は第1層のローム粒を含む褐色土が平面で弧を描くような溝状に観察された。そこでベルトを残して掘下げた結果、小形ながら住居と判明したものである。

平面形態は南壁が北壁に比べわずかに短いが隅丸方形と呼んでよいだろう。規模は確認面で南北軸長が3.23m、軸偏差N－0°－E、東西軸長3.23m、軸偏差E－0°－Nである。

覆土は上層部分で旧表土の暗褐色土と周堤に起因の考えられるロームを混じた層が互層にレンズ状に堆積し、下層はやはり同様のローム粒を含む黒褐色土が主体をなす。土層断面の観察から、住居の埋没が完了し、旧表土がほぼ上面に形成された段階でSR41の築造が行われていることがわかった。

床面の中央部の南北、ほぼ半分の面積が貼床となっており、一度最高で床面下15cm弱で荒掘りし、ローム、暗褐色土、黒色土を混合して水平に床面を調整している。

床面にはピットが3基認められた。P3の深さが20cmある以外はきわめて浅い。

炉は中央から北壁に偏して検出された。55×43cmの不整形でわずかに掘り込まれており、31×30cm、床面が厚さ約4cmでレンズ状に焼土化していた。中央とその南に自然礫の枕石2個を検出、また、炉の周囲は1.5m×1.25mの範囲で炭化物や灰が厚く散布していた。

出土遺物には台付甕の台部破片等があったが量的にはきわめて少なく、遺留土器はない。

(31) 第45号住居跡（第54図・第2-21図）

調査区中央部やや東よりのH-14グリッドに位置し、SR41南周溝の精査中に検出したもので同周溝墓に大半部分を削平され、覆土もほとんど残っておらず、P4付近で風倒木の攪乱も被っており、遺存は悪い。

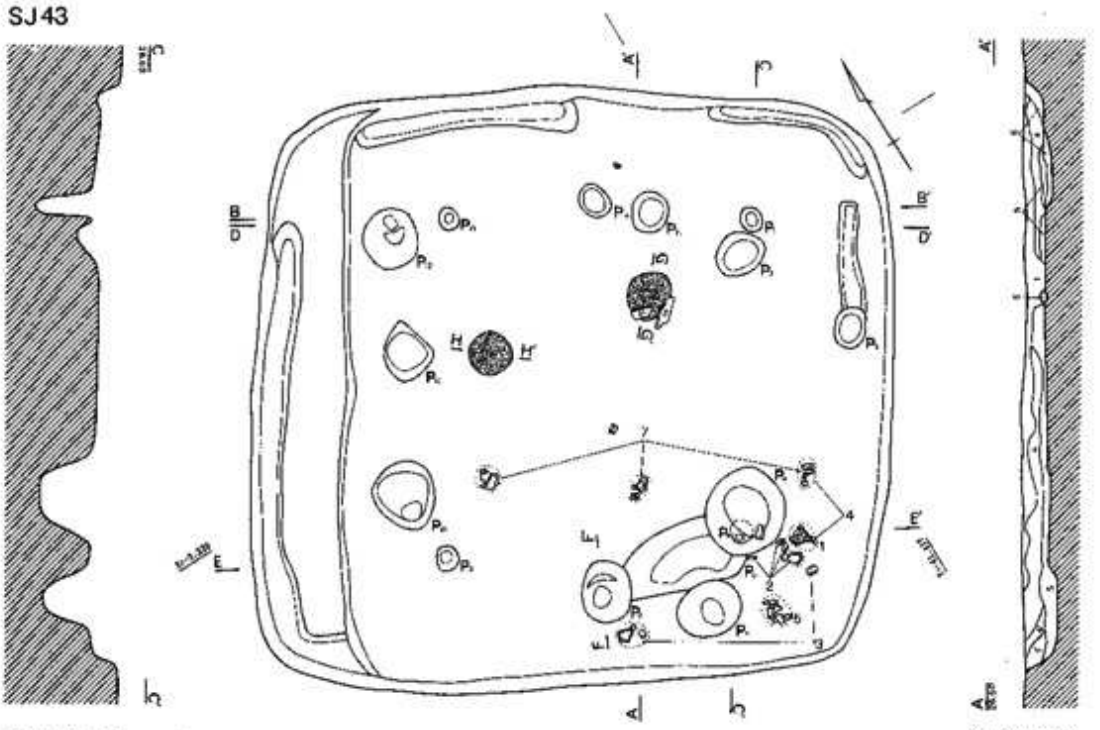
南半部分の遺存覆土は黒褐色土を基調としていた。

西壁の大部分と北東コーナー部分が遺存しないが、平面形態は隅丸方形と判断される。規模は南北軸が長軸になると思われ4.9m前後、軸偏差はN－15°－Eほど、東西軸長は4.75m前後となろう。

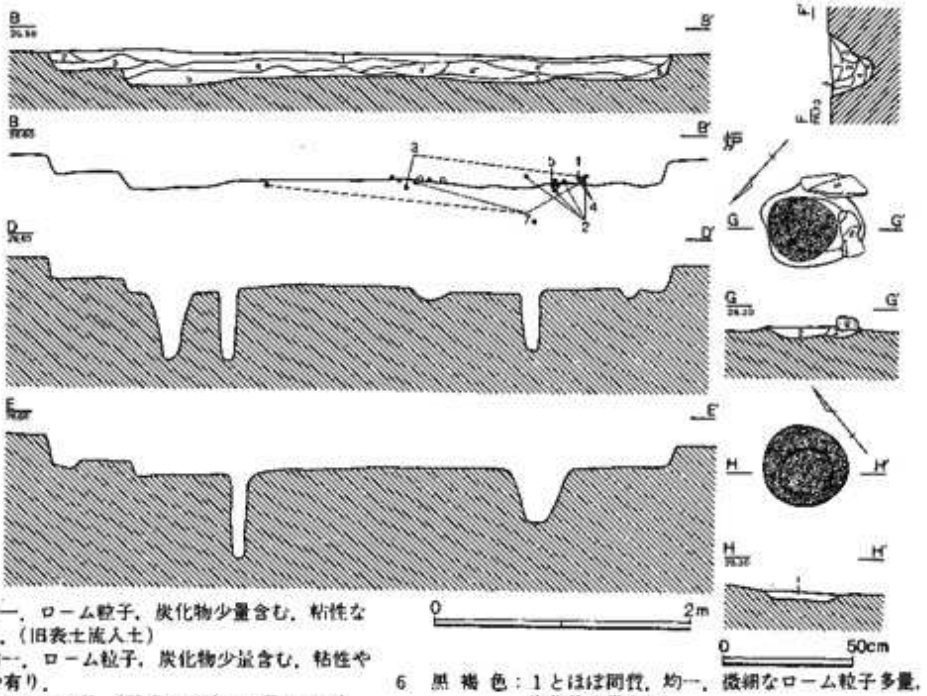
床面には主柱穴と考えられるピットが4基認められた。

出土土器は投棄されたか流入の破片のみで、台付甕、器台が確認できた。図示に耐えるのは覆土中出土の1のみである。

SJ43



ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(20/18/44)
P2(41/34/13)
P3(31/24/10)
P4(65/63/41)
P5(19/18/43)
P6(50/5/41)
P7(52/42/35)
P8(48/39/32)
P9(19/19/64)
P10(55/46/10)
P11(38/35/4)
P12(45/43/41)
P13(18/11/54)
P14(28/22/7)
P15(32/31/9)



土層説明

A－A′，B－B′

1　黒褐色：均一，ローム粒子，炭化物少量含む，粘性なし，（旧表土流入土）

1′黒褐色：均一，ローム粒子，炭化物少量含む，粘性やや有り，

2　黒　　色：1とほぼ同質，（周堤の崩壊土と思われる）

3　黒褐色：1とほぼ同質，ローム粒子やや多い，（周堤の崩壊土と思われる）

4　黒褐色：不均一，ローム粒子多量，炭化物少量含む，（周堤の崩壊土と思われる）

4′黒褐色：ローム粒子の径4よりやや大きい，（周堤の崩壊土と思われる）

4″黒褐色：ローム粒子4よりやや少ない，（周堤の崩壊土と思われる）

4‴黒褐色：ローム粒子4よりやや多い，（周堤の崩壊土と思われる）

5　黒褐色：1とほぼ同質，微細なローム粒子多量，炭化物少量含む，

6　黒褐色：1とほぼ同質，均一，微細なローム粒子多量，炭化物少量含む，

F－F′

1　黒褐色：ローム粒子，粘土ブロック，炭化物粒子含む，しまり弱い，

2　黒褐色：ローム粒子，粘土ブロック1より多い，しまりやや有り，

3　黄褐色：ローム粒子，粘土ブロック多量含む，しまり・粘性有り，

4　黄褐色：3に比べ褐色土やや多く含む，

5　黄褐色：粘土，ローム多量含み，しまり強い，

G－G′，H－H′（炉）

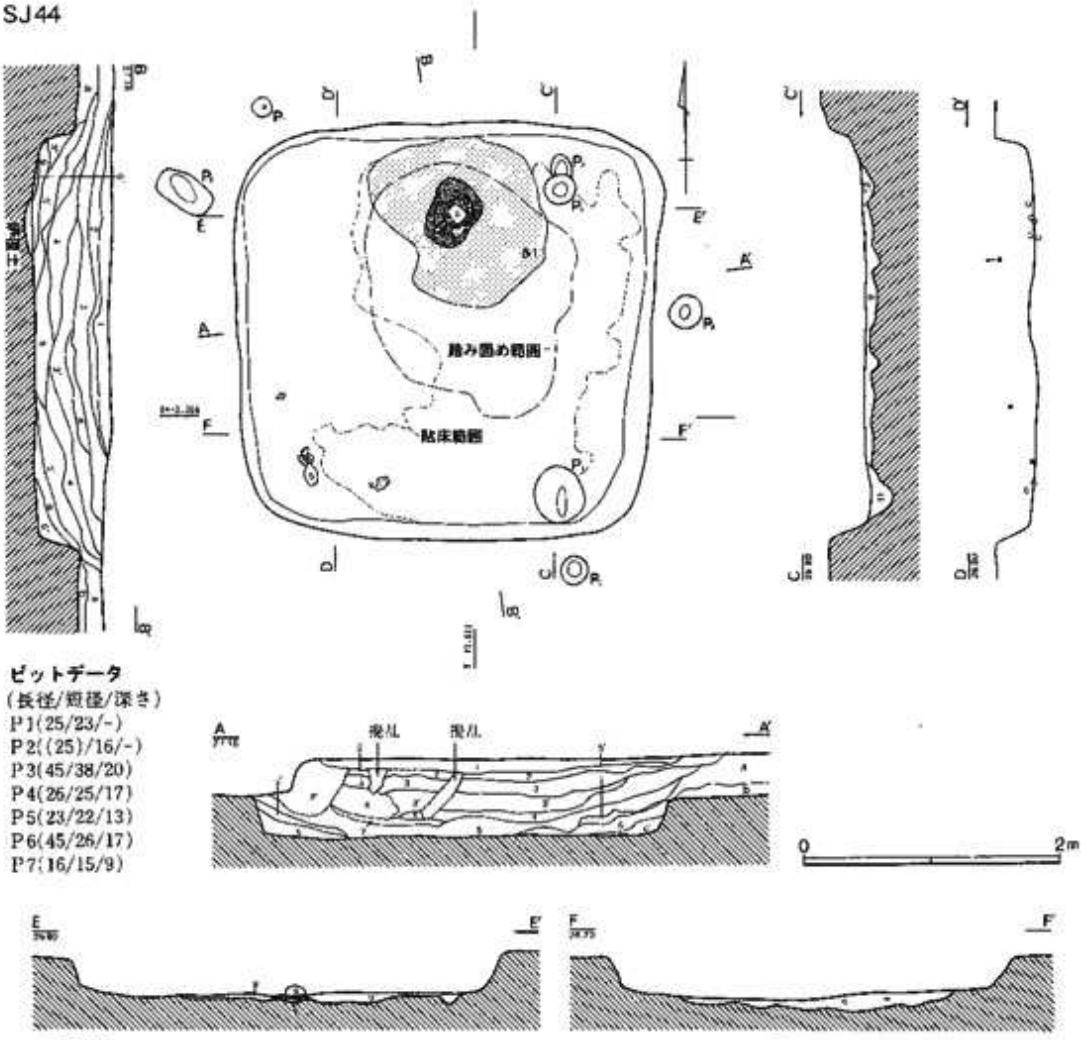
1　赤　　色：焼土化ローム，

2　暗褐色：ローム混合土，焼土化する，

3　暗褐色：ローム混合土，あまり焼土化していない，

第52図　第43号住居跡実測図

SJ44



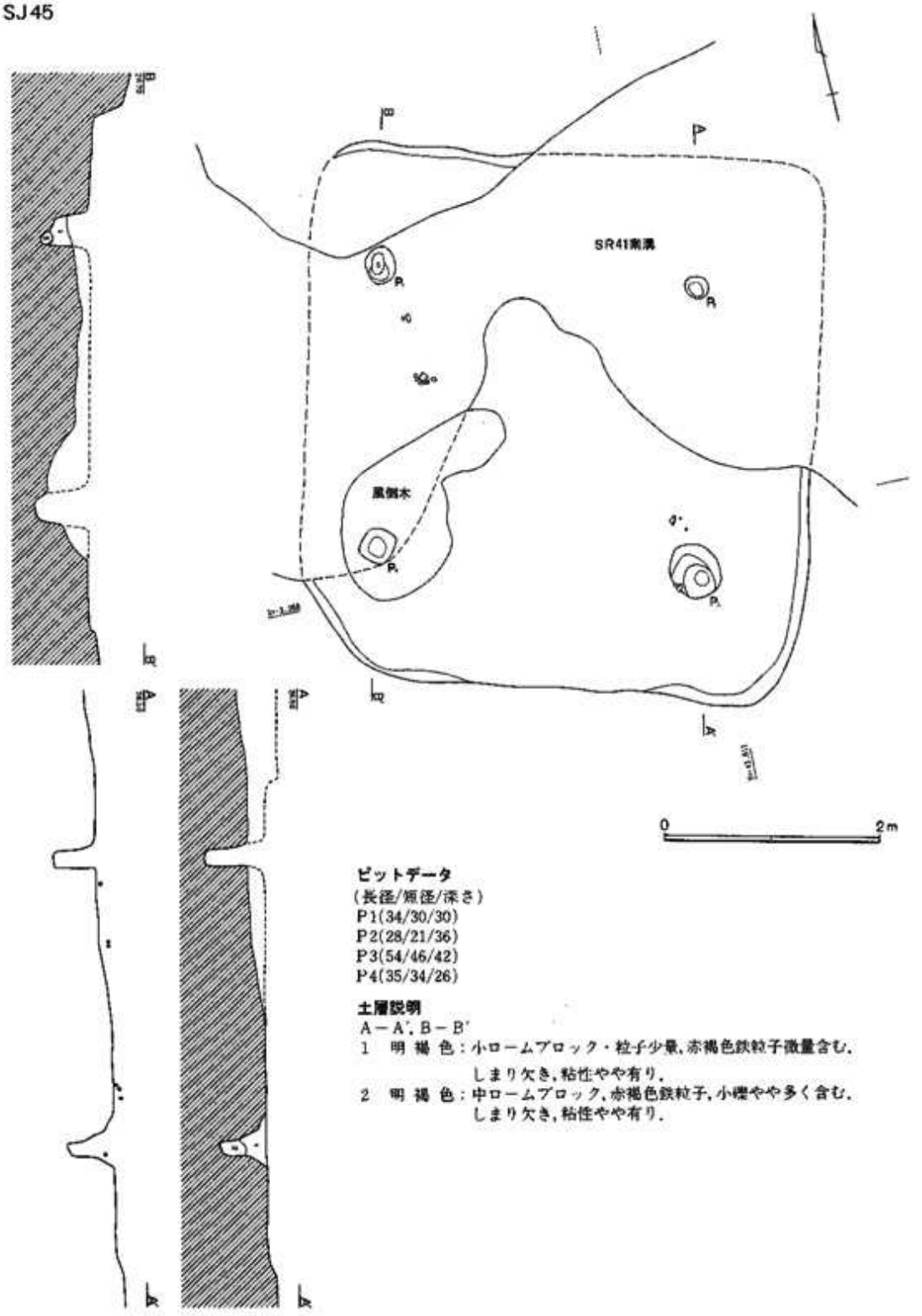
土層説明

A－A'～C－C', E－E', F－F'

1　暗 褐 色：均一，ローム微粒子，風化したカーボン粒子少量含む，しまり強い．
2　暗 褐 色：1～3の漸移層か，1よりローム微粒やや多い，しまりは1よりやや弱い．
2'　暗 褐 色：2より均質，しまりやや弱い．
＊1～2'はSR41の盛り土直下の旧表と対応するものと思われる．
3　灰黄褐色：不均一，小ロームブロック不均一，ローム粒子2よりやや多く均一，
　　微量の風化カーボン粒子含む，しまりやや有り．
3'　灰黄褐色：3より小ロームブロック多いが，ローム粒少なく色調は暗い．
3"　灰黄褐色：3，3'よりロームブロックやや小さく崩れるが，しまりは強くなる．
＊3－3"はSR41B－B'ベルト旧表中のローム粒子含有層と対応するものと思われる．
4　黒 褐 色：不均一，小ロームブロック3同様に含むが，ピュアなロームブロック不均一に含む．
　　上層よりしまり弱い．
5　黒 褐 色：ローム粒子3より少ないが，3，4同様の小ロームと共にそれが潰れたと思われる崩壊
　　ロームが住居中央方向に斜めにはいってくる．
5'　黒 褐 色：ロームブロック5より多い．(一見黄褐色土層の様に見えるが，基本は5と同質)
6　黒 褐 色：ローム粒子やや偏在気味に含む．(ロームブロックは無い) しまり弱い．
6'　黒 褐 色：やや不均一，ローム粒子6より多く，壁崩壊土層と思われる．しまり弱い．
＊明度　6＞6'＞5＞4
7　黄 褐 色：ロームブロック3より更に多いが，すべて潰れている．しまりやや有り，粘性強い．
8　黒　　色：径2mm程度の未風化ローム粒子まばらに含む，しまり弱く，粘性やや有り．
9 掘方埋戻土：黄褐色シルトローム，暗黒 褐 色土，黒色土小ブロックの混合土．
10　黒　　色：ロームブロック含む．
12　灰 褐 色：崩れたローム含む．
a　黒　　色：旧表土．
b　旧表土－ローム漸移層．

第53図　第44号住居跡実測図

SJ45



ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(34/30/30)
P2(28/21/36)
P3(54/46/42)
P4(35/34/26)

土層説明
A－A′, B－B′
1　明 褐 色：小ロームブロック・粒子少量，赤褐色鉄粒子微量含む，しまり欠き，粘性やや有り．
2　明 褐 色：中ロームブロック，赤褐色鉄粒子，小礫やや多く含む，しまり欠き，粘性やや有り．

第54図　第45号住居跡実測図

(32) 第46号住居跡（第55図・第2-22図・図版36・159）

調査区中央部やや東よりのＩ-14グリッドに位置する。ＳＲ42の西溝に東壁の上面をわずかに切られている。

平面形態は南壁が北壁に比べやや短いが隅丸方形の範疇に含めておく。壁が入子状に二段になるが、覆土の状況から建替えとは考え難く、上部の崩壊が考えられる。規模は確認面で南北軸（長軸）長が3.90ｍ、軸偏差Ｎ－2°－Ｅ、東西軸（短軸）長3.55ｍ、軸偏差Ｅ－4°－Ｓである。

覆土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色土を基調としており、確認面から床面までは約35cmの深さである。一部中位（第3層上面）に堅緻な部分が認められた。床面はＰ3付近が踏み固められ硬緻な面が見られたが、付近の地盤が軟弱なためか全体に柔かな部分が多く、やや凹凸が目立つ。

床面にはピットが6基認められたが、Ｐ4の深さ20cmを最高にみな浅い。Ｐ1、Ｐ2、Ｐ4、Ｐ6を主柱穴と推定しておく。

覆土中位には炭化物と焼土の顕著な分布が認められ、本住居が火災住居であることを物語る。

なお、炉については検出できていない。

出土遺物には台付甕や直口壺等の破片があるがほとんどが炭化物、焼土と同一レベルでの出土で、投棄または流入したものだろう。明かな遺留土器はない。

(33)第47号住居跡（第56図・第2-22図・図版37・159・160）

調査区中央部やや東よりのＩ-14グリッド、前述のＳＪ46の東南に3.5ｍの間隔で位置している。ＳＲ42の西周溝底を精査中に確認したもので、上方をその堆積土が覆っている。

平面形態は隅丸方形で、規模は確認面で南北軸（長軸）長が4.62ｍ、軸偏差Ｎ－33°－Ｗ、東西軸（短軸）長4.43ｍ、軸偏差Ｅ－36.5°－Ｎである。

覆土は上層がローム粒を密に含む暗黄褐色、下層が黒褐色土を基調とし、確認面から床面までは約30cmである。

床面にはピットが4基認められ、Ｐ1、Ｐ2、Ｐ3、Ｐ5が主柱穴と思われ、Ｐ1、Ｐ5が比較的西壁に近い位置にあるのに比べて、Ｐ2、Ｐ3は東壁からやや距離をおいている。

Ｐ4はやや小振りだが貯蔵穴と思われ、南壁下部面を切って深さ17cmに掘り込んでいる。

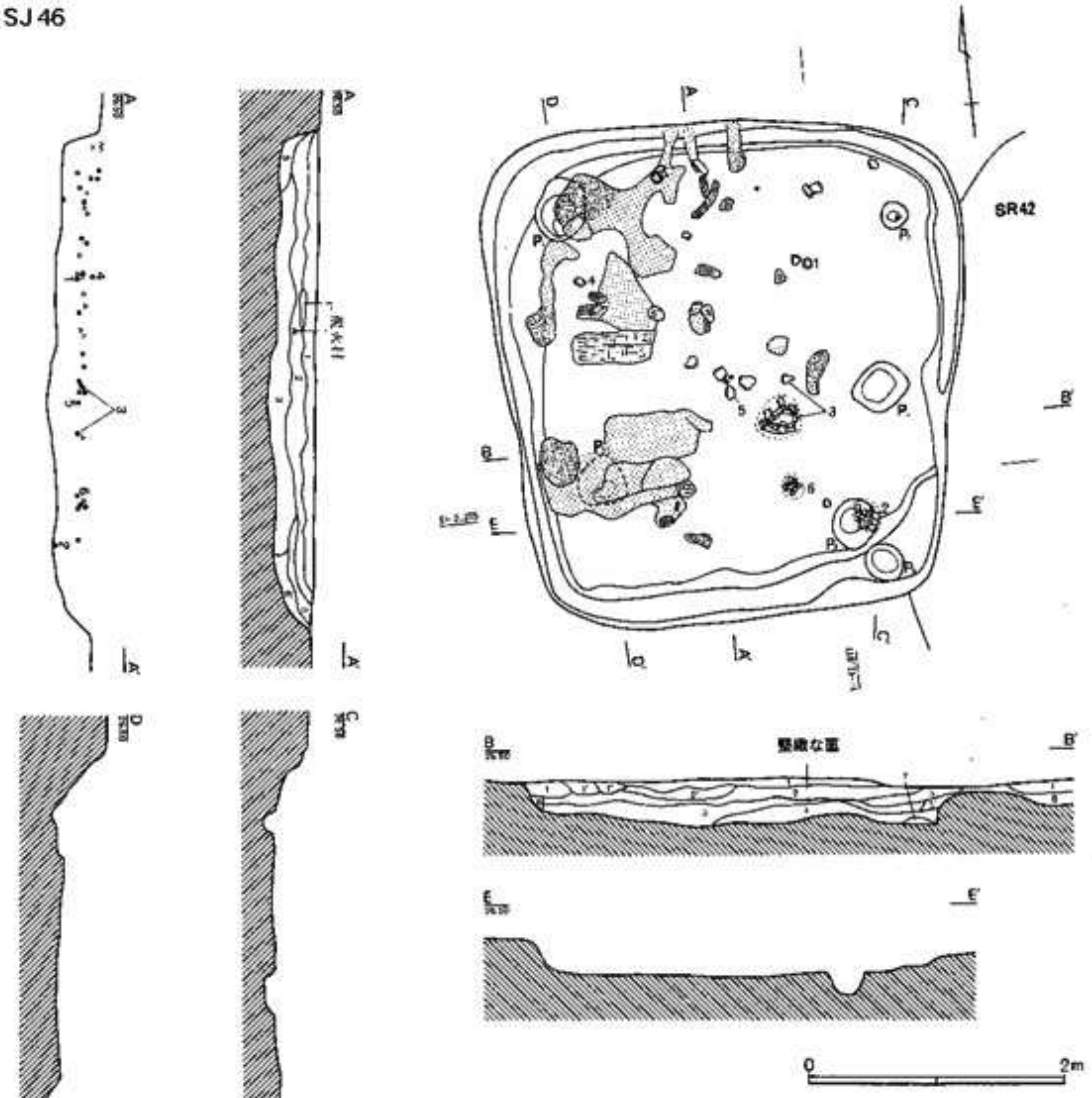
西壁の中央部に長さ1.3ｍにわたり壁溝が検出され、幅は最大20cm、深さは極めて浅い。

炉は中央から北壁に偏して検出された。55×27cmの不整長円形で約8cmの深さに掘りこまれており、灰色ないし暗灰色の粘質土で埋めて調整しており中央部の上面が40×20cm、厚さ約3cmで焼土化していた。

出土土器には台付甕や大形の壺等がある。1、3は北東コーナー付近の床面からやや浮いた状況の出土、5はＰ2上のやや浮いた位置で細片となって出土である。以上は埋没過程での比較的早い時点での投棄または流入の可能性が強い。また、6はＰ1上の、9は炉近辺の比較的覆土の高い位置からの出土で、埋没過程での流入であろう。

北壁に近い位置からの炭化材の出土は、住居外から廃棄された状況も考え難く、火災を被ったものと考えたほうがよいだろう。

SJ 46



ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(48/36/12)
P2(21/20/9)
P3(44/38/8)
P4(37/36/22)
P5(31/26/8)
P6(40/37/14)

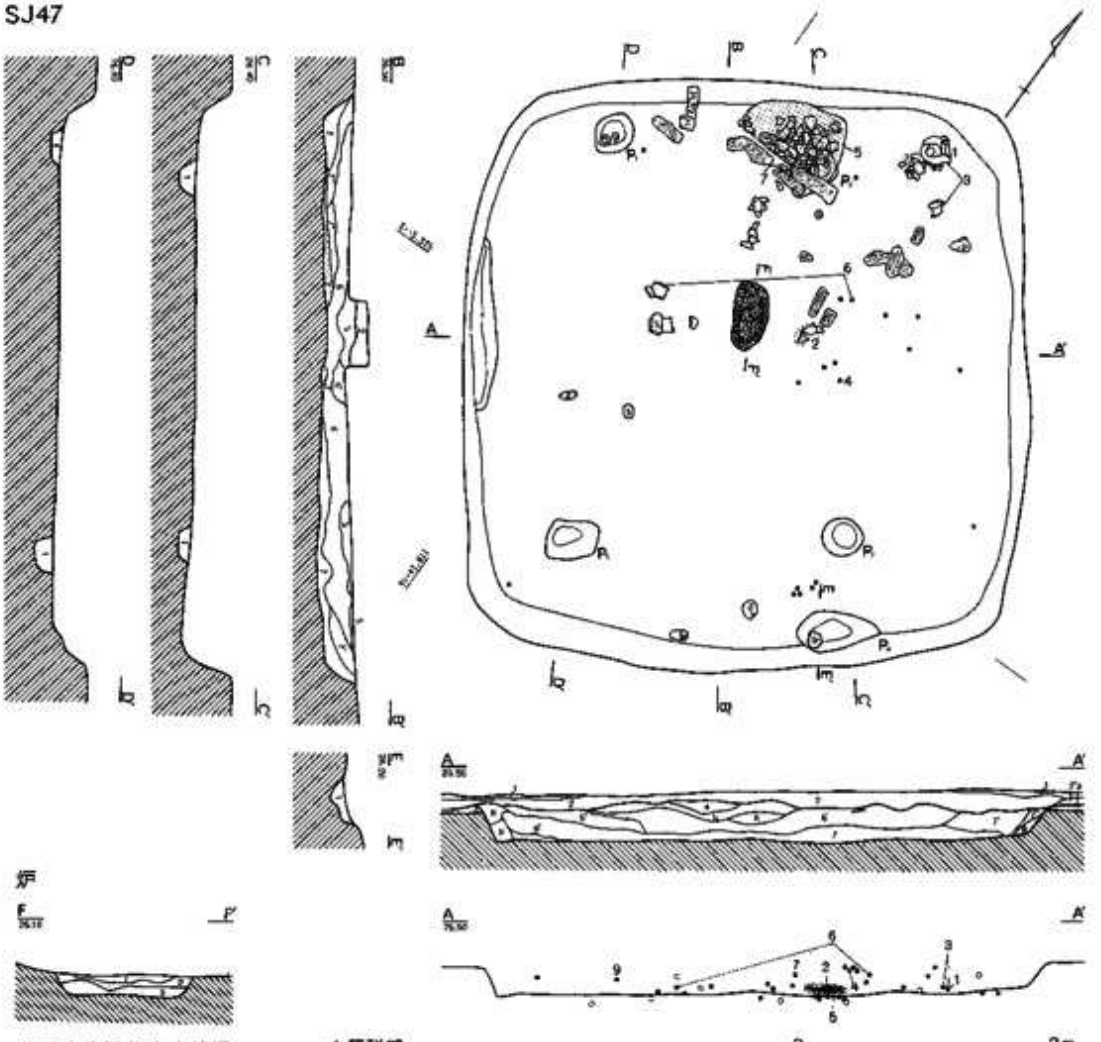
土層説明

A－A′，B－B′

1　暗 褐 色：ほぼ均一．ローム粒子，未風化カーボン少量含む．しまり強く，粘性やや有り．
1′ 暗 褐 色：焼土粒子多量に含むため，1よりしまり強い．
1″ 暗 褐 色：焼土粒子1′より少なく含む．
1‴ 暗 褐 色：ローム粒子が特に集中している部分．
2　暗 褐 色：ほぼ均一．ローム粒子1より少ない．未風化カーボン（径5mm～1cm）を不均一に含む．しまり・粘性やや有り．
2′ 暗 褐 色：特にカーボンが多い部分．
3　黒 褐 色：ほぼ均一．ややシルト質．ローム粒子微粒含む．しまり弱く，粘性有り．
4　黒 褐 色：不均一．ローム粒子多く含む．しまり弱く，粘性強い．
5　暗 褐 色：ほぼ均一．三角堆積土と思われる．ローム粒子微量（1，2，3よりも少）含む．しまり・粘性やや有り．
5′ 暗 褐 色：径2～5mmのローム粒子不均一に含む．
6　黄 褐 色：粘質土．均一．
6′ 黄 褐 色：粘質土．不均一．
7　灰黄褐色：粘質土．均一．しまり弱いが，粘性強い．
8　暗黄褐色：ほぼ均一．しまり強く，粘性やや有り．

第55図　第46号住居跡実測図

SJ47



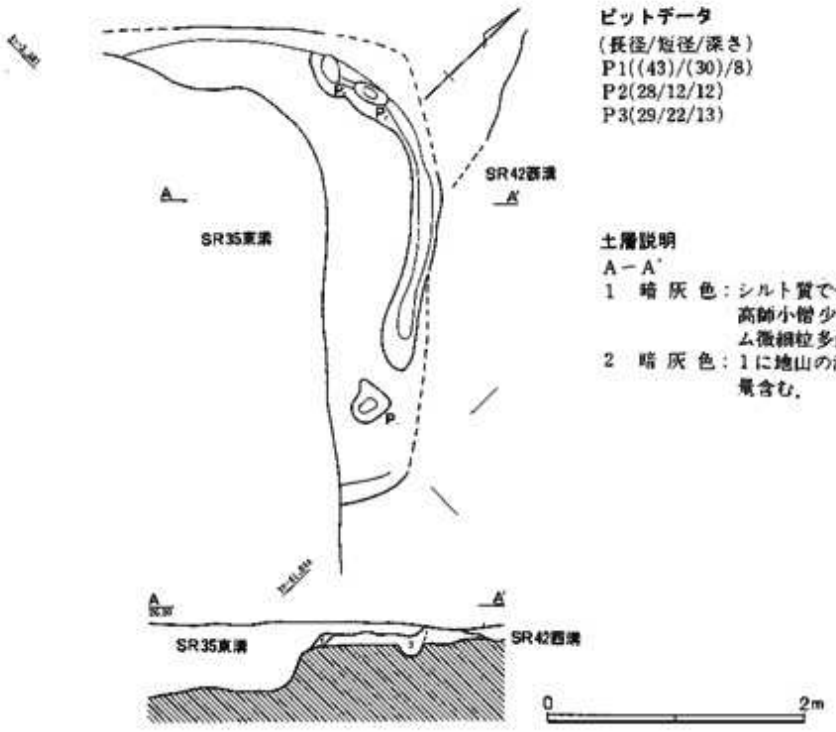
ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(62/30/13)
P2(36/31/9)
P3(45/34/12)
P4(50/38/17)

土層説明

A－A′，B－B′
1　灰　　色：粘土，ほぼ均一，1mm程の白色粒子含む，しまり非常に強い．
2　暗灰褐色：シルト質，ごく微量のローム粒子含む．
2′暗灰褐色：シルト質，ローム粒子やや多く，しまりはより強い．
3　黄 褐 色：粘質土，周溝地山と思われる，しまりやや有り，粘性なし．
4　黒 褐 色：不均一，微量のローム粒子含む，しまり弱く，粘性やや有り．
5　暗 褐 色：均一，ローム粒子1よりやや多く含む，しまり弱く，粘性やや有り．
6　暗黄褐色：不均一，ローム粒子密に含む，2～3cm大の崩壊ロームブロックも点在する，しまり弱く，粘性有り．
6′暗黄褐色：不均一，ローム粒子3よりやや少ない．
7　黒 褐 色：ほぼ均一，ローム粒子微量含む，水分を多く含み，しまりやや有る，粘性弱い．
7′黒 褐 色：ほぼ均一，4よりローム粒子やや多い．
7″黒 褐 色：ほぼ均一，4′よりローム粒子やや多い．
7‴黒 褐 色：ほぼ均一，4′よりしまりやや強い．
8　暗黄褐色：色調は2と9の中間を呈する，しまり・粘性共やや有り．
9　黄 褐 色：粘質土，均一，しまり・粘性共強い．
9′黄 褐 色：粘質土，ロームブロック微量含む．
＊明るさ　6＞6′＞8
＊明るさ　7＞7′＞7″
＊1，2はSR42覆土
C－C′，D－D′，E－E′（PIT，貯蔵穴）
1　青 灰 色：粘質土，ほぼ均一，しまり弱く，粘性強い，水性に近い．
F－F′（炉）
1　赤 褐 色：カーボンを不均一に含む焼土，パサパサでしまりない．
2　灰　　色：粘質土，しまり・粘性共強い．
3　暗 灰 色：粘質土，しまり・粘性共強い．

第56図　第47号住居跡実測図

SJ48

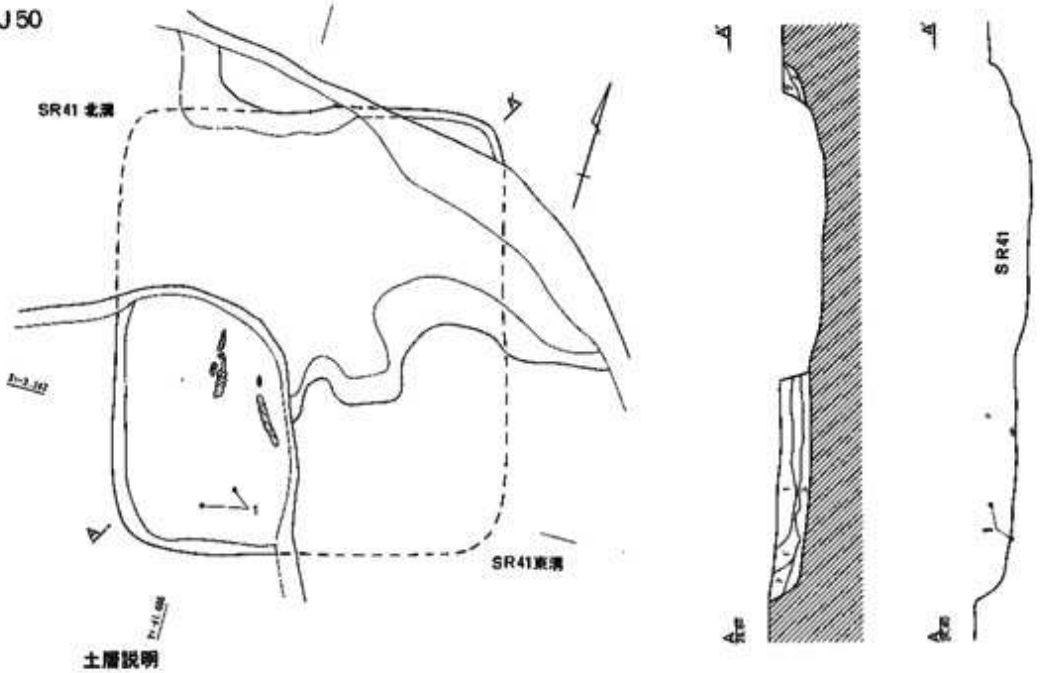


ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1((43)/(30)/8)
P2(28/12/12)
P3(29/22/13)

土層説明
A－A'
1　暗 灰 色：シルト質でやや粘性があり，高師小僧少量認める．ローム微細粒多量含む．
2　暗 灰 色：1に地山の淡黄褐色ローム多量含む．

第57図　第48号住居跡実測図

SJ50



土層説明
A－A'
1　暗 褐 色：不均一．ローム粒子不均一に含む．風化したカーボンが点在．しまり強いが，粘性なし．
1'　暗 褐 色：不均一．ローム粒子1より多く含む．
2　黒 褐 色：不均一．ローム粒子微量含む．しまり・粘性共やや有り．
3　黒 褐 色：ほぼ均一．ローム粒子微量含む．しまり弱く，粘性やや有り．

第59図　第50号住居跡実測図

(34) 第48号住居跡（第57図）

調査区中央部やや東南よりのI-14グリッドに位置する。中央から南壁にかけての大部分をＳＲ35の東溝に、北壁もＳＲ42の西溝に切られており、遺存は極めて悪く、検出できたわずかな壁のラインを本来の遺存状況と考えるのは困難である。

平面形態は一応隅丸方形と推定しておく。規模は東西軸長が3.5ｍ程度になろうか。軸偏差はＥ－45°－Ｓほどであろう。

覆土は暗灰色を基調としており、上部はＳＲ35、あるいはＳＲ42の覆土の暗灰褐色土が覆っている。床面はもともとの地盤が軟弱なためか硬い部分は見あたらない。

床面にはピットが2基認められたがＰ1、Ｐ2は壁溝に付随するものであろう。Ｐ3も柱穴かどうか判断がつかない。

東壁から北東コーナーに相当する部分から約2.7ｍにわたり壁溝が検出された。

出土遺物には土師器の小破片があるが形態の明瞭になったものはない。

(35) 第49号住居跡（第58図・第2-23図・図版38・160）

調査区中央部やや北東寄りのE-15グリッドに位置する。

ローム層上面で確認した段階で南壁の大部分はすでに失われていたが、遺存する壁溝を目安にすれば、平面形態は隅丸方形であり、規模は南北軸（長軸）長が6.8ｍ、軸偏差Ｎ－14°－Ｗ、東西軸（短軸）長6.22ｍ、軸偏差Ｅ－15°－Ｎである。当該期の規模の判明した住居跡中では第2位の面積を有する。

覆土は暗褐色土を基調にするがほとんど遺存していない。確認面から床面まではきわめて浅く、最高でも7cmほどの厚さしかなかった。

また、北西コーナーから北東コーナーをめぐり、東南コーナーの貯蔵穴に至る部分が貼床となっており、床面下約10cmまで荒掘りしてから黒色土とロームの混合土で埋め戻して水平に調整していた。

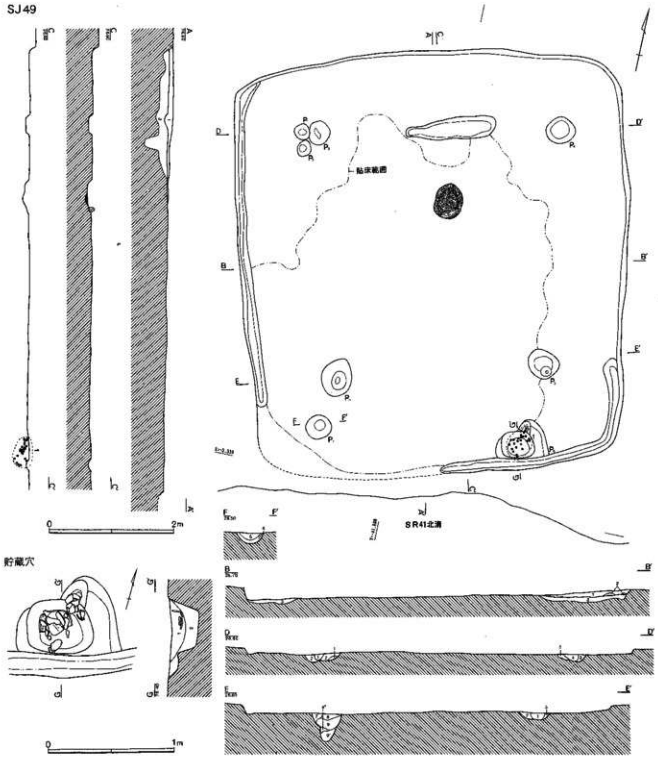
床面にはピットが8基認められた。Ｐ1－3はどれがメインとなるか判然としないが、Ｐ4、Ｐ5、Ｐ8は主柱穴を構成するものと考えられる。Ｐ6は貯蔵穴で、南壁の東南コーナー寄りに掘り込まれており、大小4基のピットが複合する。東西幅は84cm、深さは21cmである。

壁溝は西壁と東南コーナー部分で検出された。幅は最大24cmで深さは約5cmである。

炉は中央から北壁方向に偏して検出した。56×43cmの不整円形で約8cmの深さに掘りこまれており、底面のロームが24×24cm、厚さ約5cmでレンズ状に焼土化しており、南の縁に自然礫の枕石が検出されている。

炉の北側に長さ154cm、深さ7cmほどの溝が検出された。北壁に平行しており、覆土の断面を見ても本住居に伴うことは確実である。

出土土器は、覆土がほとんど遺存しなかったこともあり恵まれていない。図示した唯一の土器は台付甕で、貯蔵穴の覆土上層から破片となって出土したものである。貯蔵穴の埋没過程で投棄された可能性が強い。



ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(29/25/13)
P2(26/22/11)
P3(39/32/15)
P4(50/45/10)
P5(52/43/17)
P6(59/45/24)
P7(42/40/17)
P8(65/50/45)

土層説明
A－A′，B－B′
1　暗 褐 色：不均一，ローム粒少量不均一に含む，しまり強いが，粘性なし，
2　黄 褐 色：不均一，ブロック状に1の暗褐色土含む，しまりやや強く，粘性強い，
3　黒色土とロームの混合土：（貼床土，）
D－D′～F－F′
1　黒 褐 色：炭化物粒子，ローム粒子少量含む，ロームブロック混，（柱痕か）
2　黒 褐 色：ローム微砂僅かに含む，比較的均質，
3　2とロームの混合土，
4　灰 黒 色：ローム，黒色土の混合土，（柱痕か）
5　灰 褐 色：ローム細粒と少量の黒色土含む，
6　灰 褐 色：少量のロームと黒色土含む，
7　灰 褐 色：ローム細粒と黒色土含む，硬くしまる，
8　灰 褐 色：ローム微粒少量含む，しまりなし，
9　暗灰褐色：ローム微粒少量含む，（8と同質）しまり欠く，
9′暗灰褐色：ローム微粒9よりやや多い，
9″暗灰褐色：ローム微粒多量含む，
G－G′（貯蔵穴）
1　灰 褐 色：ローム微粒多量，炭化物微量含む，
2　灰 褐 色：ローム微粒1より少なく，暗い，1との境に炭化物混入，

第58図　第49号住居跡実測図

(36) 第50号住居跡（第59図・第2-23図）

調査区中央部やや北東寄りのF-15グリッドに位置しており、ＳＲ41の北東コーナー部分で確認された。

ＳＲ41に大部分を床面下まで切られておりＳＲ41の方台部分に南壁から西壁の中央にかけた部分が、さらにＳＲ41北東コーナー外方に本住居跡の北東コーナーがわずかに検出できた。

ＳＪ49の南1.2mに所在、ＳＪ52とはその西約2.4mに位置しており、近接した状況を示している。

平面形態は遺存部分から隅丸方形と推察され、南北にやや長い形態が予想できる。規模は確認面で南北軸（長軸）長が3.5m、軸偏差はN－15°－W程度、東西軸（短軸）長は3m、軸偏差E－15°－N前後と推定される。いまひとつ全容がつかめないが、規模の点から一応住居跡として報告する。

覆土は上・中層にローム粒子を含む均質な暗褐色土（第1・1'層）が、下層にはわずかにローム粒を含む均質な黒褐色土（第3層）の堆積が見られ、自然な堆積状況を示していた。

確認面から床面までは約25cm弱の深さがある。

出土遺物は住居そのものの遺存が悪いことに起因して、やはり僅少である。1の小形壺は南西部コーナー付近の床面と覆土中出土の破片が接合したが遺存率は30%ほどで、住居外から流入したものと思われる。

また、ＳＲ41の方台部下の部分の床面から上屋の構築材と考えられる炭化材が数点出土しており、火災を被っているものと考えられる。

(37) 第51号住居跡（第60図・2-23図・図版39・40・161）

調査区中央部北東寄りのF-15グリッドに位置、ＳＪ52、53と切り合っている。

土層の断面観察によるとＳＪ52の北壁の壁溝から連続した状況でＳＪ52の立上がりと考えられる土層が確認されている（上層に攪乱土層が覆い確認できた部分はわずかだが、第5－9層の間）。このためＳＪ51がＳＪ52より古いと判断される。

また、ＳＪ52の南部では、南壁溝から約95cmの範囲でＳＪ53の床面と考えられる硬化した層が確認されている。こうしたことから、3軒の住居跡の時間的序列は、ＳＪ51→ＳＪ52→ＳＪ53の順に築造されたものと考えられる。

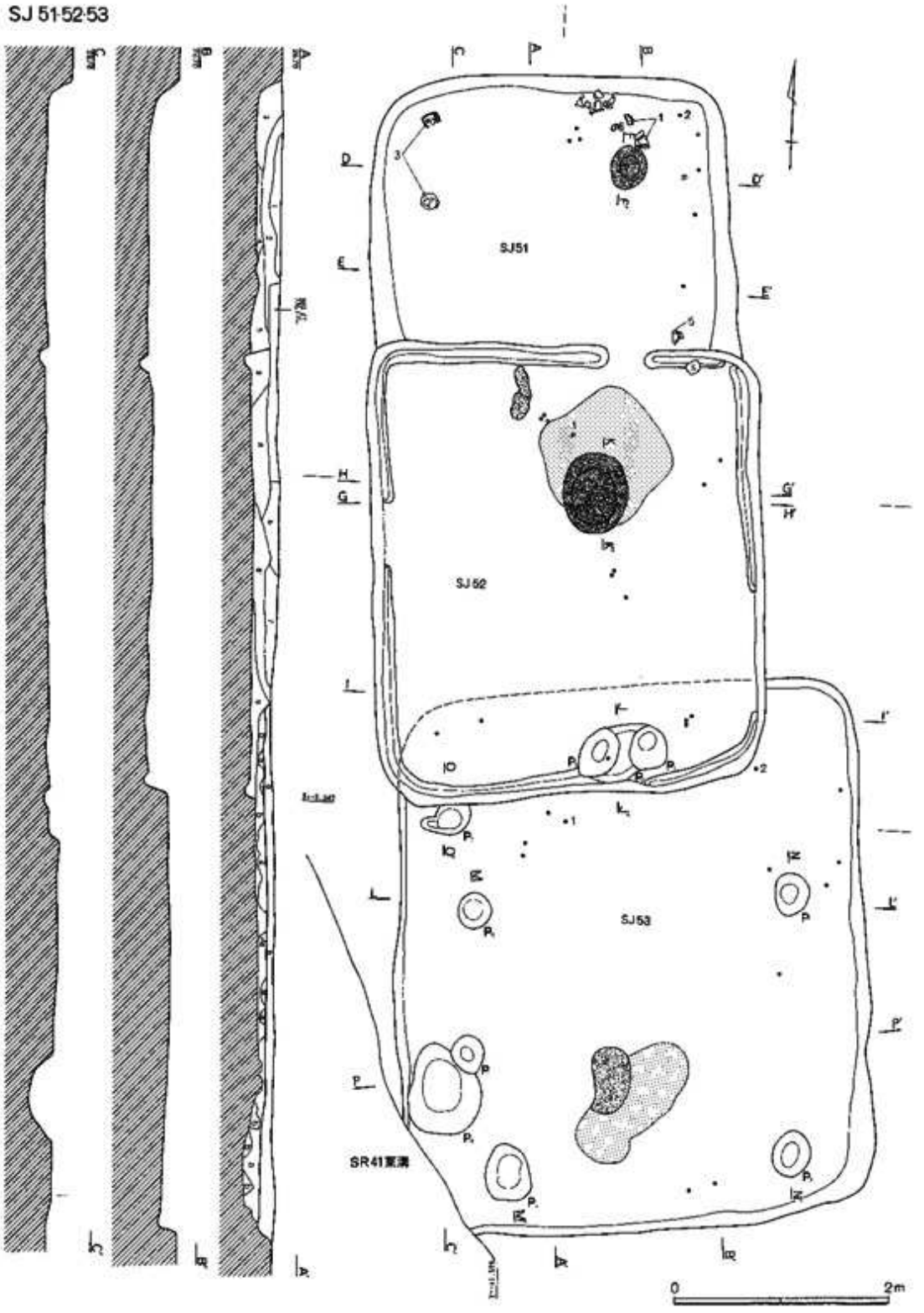
平面形態は隅丸方形である。規模は南北軸長は不明だが、南北の軸偏差はN－6°－Wほどと考えられ、東西軸長は3.35m、軸偏差E－4°－Nである。

覆土は上層に明褐色土（第1層）、中層に暗褐色土（第2層）、下層には明褐色土（第4・5層）が堆積し、自然な埋没状況を示す。

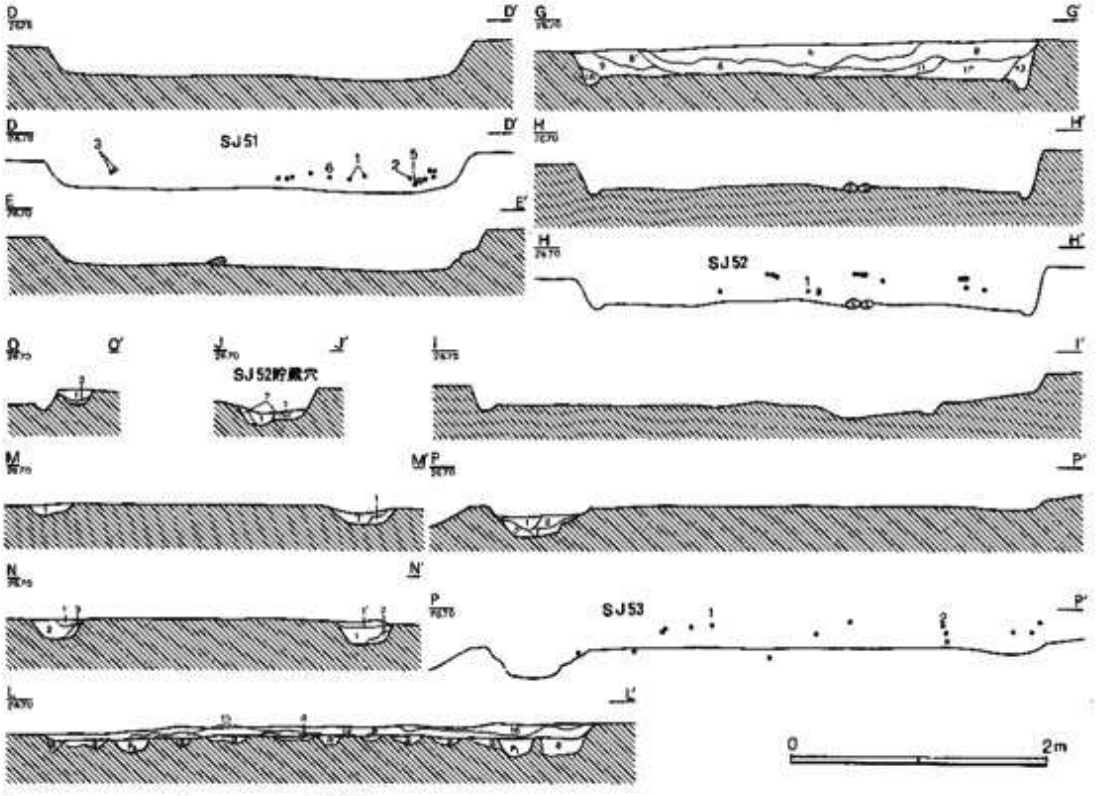
確認面から床面までは約25cm弱の深さであり、床面のレベルはＳＪ52よりわずかに浅いか、またはほぼ同一で、視覚的にはほとんど高低差はない。

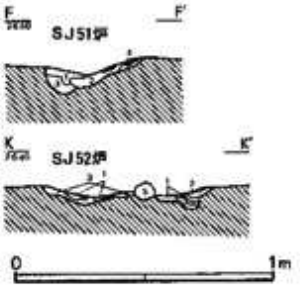
炉は北東のコーナー寄りで検出した。平面形態は40×33cmの不整円形で、最高約10cmの深さに掘りこまれ、黒褐色土、暗褐色土等でいったん埋め戻している。炉の上面は一部が焼土化しているのが観察できた。

出土遺物には壺、高杯等がある。1、2、6は炉の北側の覆土中の出土である。3は北西コーナー近



第60図　第51・52・53号住居跡実測図(1)





ピットデータ
(長径/短径/深さ)

SJ52
P1(44/36/14)
P2((80)/54/14)
P3(42/35/21)

SJ53
P1(40/32/13)
P2(44/36/16)
P3(52/41/11)
P4(85/68/22)
P5(37/30/-)
P6(33/31/8)
P7(42/33/12)

土層説明

A－A′, G－G′, L－L′
1 明褐色：ローム粒子少量含む，しまり欠き，粘性やや有り。
2 暗褐色：ローム粒子・ブロックやや多く，赤褐色粒子微量含む，しまり欠き，粘性やや有り。
3 暗褐色：ローム粒子・ブロック微量含む，しまり・粘性やや有り。
4 明褐色：ロームブロック少量含む，しまり欠き，粘性やや有り。
5 明褐色：ローム粒子・ブロック少量含む，しまり・粘性やや有り。
＊1～5はSJ51覆土
6 暗褐色：ローム粒子，黄灰色粘土ブロック微量含む，しまり良く，粘性やや有り。
7 暗褐色：ローム粒子・ブロック微量含み，1より暗い，しまり良く，粘性やや有り。
8 黒褐色：ローム粒子・ブロック微量，赤褐色粒子少量含む，しまり良く，粘性やや有り。
8′ 黒褐色：ローム粒子・ブロック少量含み，3より明るい，しまり・粘性高い。
8″ 暗褐色：ロームブロック少量，赤褐色粒子やや多く含み，3より明るい，しまり良く，粘性やや有り。
9 暗褐色：ローム粒子・ブロックやや多く，赤褐色粒子少量含む，しまり良く，粘性高い。
10 暗褐色：ローム粒子・ブロック少量含み，4より暗い，しまり良く，粘性高い。
11 明褐色：ローム粒子・ブロック少量含む，しまり良く，粘性やや有り。
12 暗褐色：きめ細かいローム粒子・ブロック微量含む，しまりやや欠き，粘性やや有り。
13 暗褐色：きめ細かいローム粒子・ブロック微量含む，ややしまり欠き，粘性やや有り。
14 暗褐色：ほぼ均一，ローム粒子不均一に少量含む，しまりやや有り，粘性なし。
15 明褐色：やや不均一，ローム小ブロック多く含む，しまり・粘性共やや有り。
16 灰暗褐色：不均一，ローム粒子不均一にやや多く含む，しまり強く，粘性なし。
a 黒褐色土とローム混合土，(結床土)
F－F′（SJ51炉）
1 黒褐色：やや不均一，粒子状の黄褐色粘土少量含む，しまり弱く，粘性やや有り。
2 暗灰褐色：均一，黄褐色粒子微量含む，上部が一部焼土化する，しまり・粘性共に強い。
3 暗黄褐色：不均一，1，2，4の土も混ざる，しまりやや有り，粘性強い。
4 黄褐色：均一，地山のロームを主体とし，非常にしまり良く，粘性強い。
J－J′（SJ52貯蔵穴）
1 黒褐色：やや不均一，ローム粒子・ブロック不均一に含む。
2 暗黄褐色：不均一，粘質土，1と逆に黒褐色土をブロック状に含む，しまり・粘性弱い。
K－K′（SJ52炉）
1 暗褐色：不均一，多量の灰と炭化物粒含む，しまり・粘性弱い。
2 暗灰褐色：ほぼ均一，黄褐色粒子少量含む，しまり・粘性強い
3 黄褐色：均一，地山土，非常にしまり良く，粘性強し。
M－M′，N－N′，O－O′（SJ53PIT.）P－P′（SJ53貯蔵穴）
1 黒褐色：ほぼ均一，ローム粒子極微量含む，しまり弱く，粘性有り。
1′ 黒褐色：ほぼ均一，ローム粒子不均一に少量含む，しまり弱く，粘性やや有り。
1″ 黒褐色：ほぼ均一，ローム粒子1よりもやや多く含む。
2 暗褐色：不均一，暗黄褐色粘質土ブロック含む，しまり・粘性共やや有り。
2 暗褐色：不均一，暗黄褐色粘質土ブロック，ローム粒子を少量含む。
3 黄褐色：粘質の地山土，粘性急激に強くなる。

第60図　第51・52・53号住居跡実測図(2)

くの覆土中の破片が完形に近い形に接合したが、投棄された可能性が強い。5は東南コーナー付近の床面からやや浮いた状況での出土で、これも投棄された可能性が強い。

(38) 第52号住居跡（第60図・図版39・40）

調査区中央部北東寄りのF-15グリッドに位置する。ＳＪ51、ＳＪ53と切り合っており、土層の断面観察による3軒の住居跡の時間的序列は、ＳＪ51→ＳＪ52→ＳＪ53の順であることはすでに述べたとおりである。

平面形態はやや南北に長い隅丸方形である。規模は確認面で南北軸（長軸）長が4.19m、軸偏差N－7°－W、東西軸（短軸）長3.66m、軸偏差E－6°－Nである。

覆土は上層がローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土（第6・7層）、中・下層は黒褐色土（第8－8″層、一部上層から確認できる）が基調となっており、壁に近い部分には暗褐色土（第9・13層）が堆積する。確認面から床面までは約25cm弱の深さで、ＳＪ51よりごくわずかに深い程度で、ほとんどレベル差はない。

床面には貯蔵穴以外のピットは認められない。P1－3は3個が連接して貯蔵穴を形成している。P1は44×34cm、深さ14cm、P2は長径は不明だがおよそ80cmほどと推定され、短径54cm、深さ14cm、P3は42×35cm、深さ21cmで全体としての大きさは84×51cmである。

壁溝は東壁では南の部分、南壁では貯蔵穴の東のわずかな部分を除き検出されており、西壁では中央から北寄りの部分、北壁では東寄りとコーナーのわずかな部分で切れている。幅は最高で20cm弱で、深さは約5－10cmである。

炉は中央から北東に偏して検出した。74×60cmの不整長円形で底面はやや凹凸を有し、最高で約10cmの深さの掘り込みである。土層の上面が部分的に焼土化しているのが観察でき、自然礫の枕石を2点検出した。

また、炉の北側の床面には1×1.2mの不整形の範囲に炭化物の薄い散布が認められたほか、北壁ぎわには焼土の散布もあった。おそらく炉の稼動の結果によるものだろう。

出土遺物は覆土の遺存が比較的よい割合に恵まれず、土器は図示に耐えるものがない。

土器のほかには石製の垂飾（第2-32図）が覆土中から出土している。茄子が平たく潰れたような形態をしており、長さ2.71cm、最大幅1.70cm、厚さは最大で3mmである。長軸方向の一端から6mmのところに径2.5mmの両面穿孔の小孔を有する。紅簾片岩製で重さは1.98gある。

(39) 第53号住居跡（第60図・第2-23図・図版39）

調査区中央部北東寄りのF-15グリッドに位置し、前述のＳＪ51、52と切り合い、時間的序列はすでに述べた。少なくともＳＪ52の覆土中位の埋没以降に構築された可能性が強く、床面がその南部を覆って存在する。また、南西コーナーはＳＲ41の東溝にわずかに切られている。

平面形態はやや南北に長い隅丸方形としてよいだろう。規模は確認面で南北軸（長軸）長が5m前後と推定され、軸偏差N－3°－W、東西軸（短軸）長4.43m、軸偏差E－5°－Nである。

覆土は暗褐色土（第6層）を基調とし、確認面から床面までは約10cm弱の深さである。

ほぼ全面が貼床で、最高で床面下20cmほどまで粗掘りしてから、黄褐色土と黒褐色土・ローム混合土（a・b層）で埋め戻している。

床面の7基のピットのうちP1、P2、P3、P6が主柱穴の可能性が考えられ、P4は貯蔵穴と思われ85×68cm、深さ22cmの規模である。なお、炉は検出されていない。

出土土器の点数は少なく、1、2は覆土上層からの出土であり、埋没過程での流入品と考えられる。

3（第2-32図）は覆土出土の性格不明の土製品で、外面にハケメ、内面にコグチナデがあり、甕の体部破片であろう。ある程度糸巻状に打欠いて整形し、その各木口面（側面）に2−7個所（合計18個所）の「V」字形の切れ込みを入れる。おそらく刀子状の工具で加工したものであろう。深さは、浅いものは側面から0.5mm、一番深いものは4.5mm程度ある。

また、床面南部に61×32cmの範囲で焼土の散布が認められ、その南西に110×60cmの範囲で炭化物の散布も見られた。

(40) 第54号住居跡（第61図）

調査区中央部東部寄りのG-15グリッドに位置、SR41の南溝に大部分を切られ南東コーナーのわずかな検出だが、壁面に接して貯蔵穴と考えられるピットが存在し、住居跡として報告する。

平面形態は隅丸方形と推定しておく。規模は不明である。

覆土は黒褐色土を基調としており、確認面から床面までは約10cmと浅い。

2基のピットのP1は柱穴の可能性があり、P2は貯蔵穴と考えられ45×37cm、深さ24cmである。

出土土器には外面にハケメのある甕の破片が1点、貯蔵穴底から出土している。

(41) 第55号住居跡（第62図・図版40）

調査区中央部東寄りのH-15グリッドに位置、大半をSR42の北溝に切られ遺存は悪い。

南部でわずかに貼床調整が認められたが、北半部分は貼床部分もSR42による削平が及んでいるものと考えられ、検出面は住居の最初の掘削面であろう。

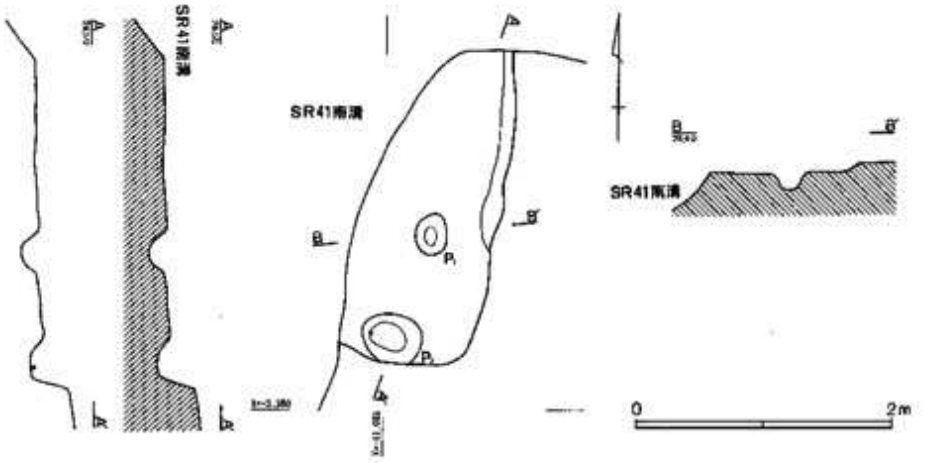
平面形態は隅丸方形と考えられ、規模は南北軸長は4.1m前後と推定され、軸偏差N−7°−W、東西軸が長軸となり4.25m前後、軸偏差はE−7°−Nである。

当初ごくわずかにSR42の周溝底の堆積土とほぼ同一の暗褐色土の覆土が認められた。

床面にはピットが7基認められたが柱穴と考えられるピットは判然としない。

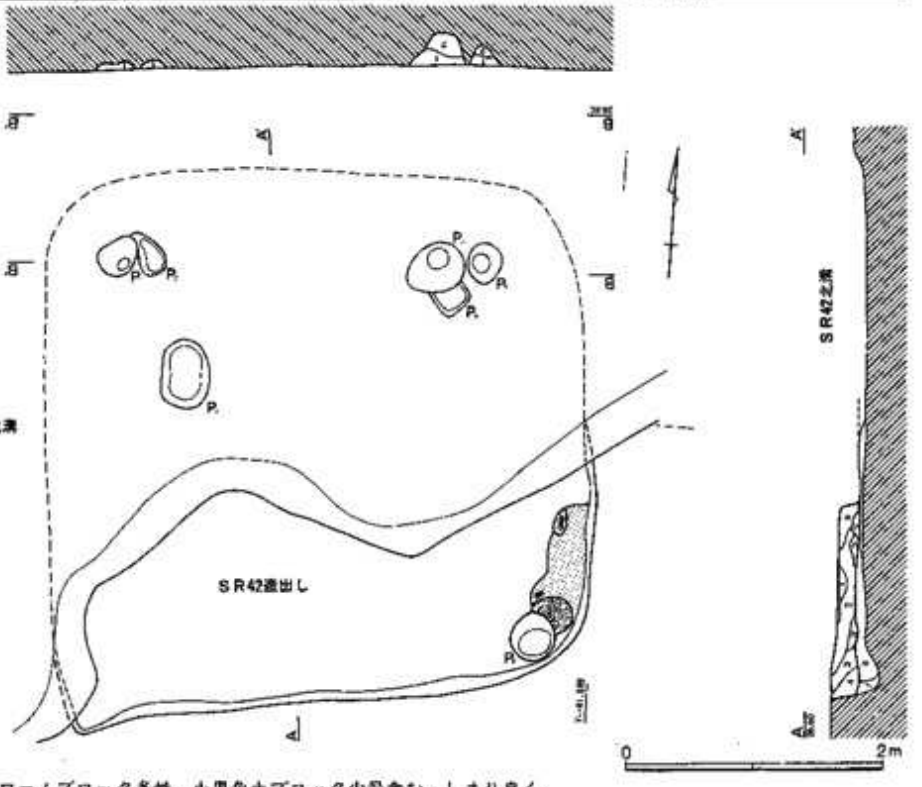
出土遺物には覆土中からの、外面にハケメを有する台付甕や壺の小破片が数片あるが、図示に耐えるものがない。その他、南コーナー付近の床面で炭化物と焼土の出土があった。

SJ54



第61図　第54号住居跡実測図

SJ55



土層説明

A－A'

1　明褐色：小ロームブロック多量，小黒色土ブロック少量含む．しまり良く，粘性強い．

2　明褐色：明褐色土をベース，小黒色土・中ロームブロック大量に含む．しまり良く，粘性強い．

3　明褐色：明褐色土をベース，小黒色土・小ロームブロック大量に含む．しまり良く，粘性強い．

3'　明褐色：黒色土の含有比3より多い．しまりやや欠くが，粘性強い．

4　黒褐色：ロームブロックの含有比少なく，3より暗い．しまりやや欠くが，粘性強い．

5　明褐色：ローム粒子微量含む．しまり良く，粘性やや有り．

5'　明褐色：ローム粒子微量含む．5より明るい．しまり非常に良く，粘性やや有り．

6　暗褐色：ローム粒子微量含む．しまり良く，粘性やや有り．

7　黒　色：小ロームブロック微量含む．しまりやや欠き，粘性強い．

8　黒　色：小ロームブロック，ローム粒子多く含む．しまり良く，粘性やや有り．

＊1，2，5，5'，6　造出築造時の埋戻土．3，4　造出築造前のＳＪ５５の埋没土．

7，8　貼床土．

B－B'

1　黒褐色：微小ロームブロック微量含む．しまりやや欠くが，粘性やや有り．

2　黒褐色：小ロームブロックやや多く含む．しまり非常に良く，粘性やや有り．

ピットデータ
（長径/短径/深さ）

P1(40/27/9)
P2(36/21/6)
P3(45/39/32)
P4(30/26/3)
P5(31/26/14)
P6(38/33/17)
P7(27/19/12)

第62図　第55号住居跡実測図

(42) 第56号住居跡（第63図・第2-24図・図版41・161）

調査区中央部やや東寄りのＩ-15グリッドに位置する。

ＳＲ42の方台部の南コーナー付近の旧表土下で検出したもので、当該期の遺構群ののる自然堤防状の南縁部にあたる。地山の傾斜は南に向い標高を減じており、この面で確認したため南壁の位置を確定できていない。

平面形態は南北にやや長い隅丸（長）方形で、規模は確認面で南北軸（長軸）長が3.8ｍ前後と推定でき、軸偏差はＮ－20.5°－Ｗ、東西軸（短軸）長3.44ｍ、軸偏差Ｅ－16°－Ｎである。

覆土は暗褐色土を基調としており、確認面から床面までは北部の遺存のよい部分で約20cm弱である。

床面にはピットが5基認められ、Ｐ1、Ｐ2、Ｐ5が主柱穴となろうか。Ｐ4は貯蔵穴で50×45cmで、深さは20cmほどである。

東壁と西壁北部から北壁東部にかけ壁溝が検出された。幅は20cm弱、広いところでは30cm弱で、深さは10cm強ほどである。

炉は中央から北壁に偏した位置に検出した。58×40cmの不整形で約15cm弱の深さに掘りこみ暗黄褐色、黄褐色土で埋めており、その中央部がレンズ状に盛上がるように焼土化しているのが確認できた。また、自然礫の枕石が1個、炉内の東の部分で検出された。

出土土器には台付甕や器台があった。1は貯蔵穴覆土中出土の破片、その他は主に覆土中位の出土である。いずれも投棄または流入の可能性が強い。

中央から北の床面上の広い範囲に炭化物（図の破線の範囲）、そして炉の北側から炭化材の出土があり、Ｐ1と炉の周囲には焼土の散布が認められており、本住居が火災を被っている可能性を指摘しておく。

(43) 第57号住居跡（第64図・第2-24図・図版41）

調査区中央部からやや東のＥ-16グリッドに位置する。

西壁とそれに近い一部分を検出したのみだが壁部分だけで3.4ｍほどあり、住居跡として報告する。北の部分をＳＲ48に南をＳＪ58にそして東を遊水池工事の水路に切られ、遺存は最悪である。

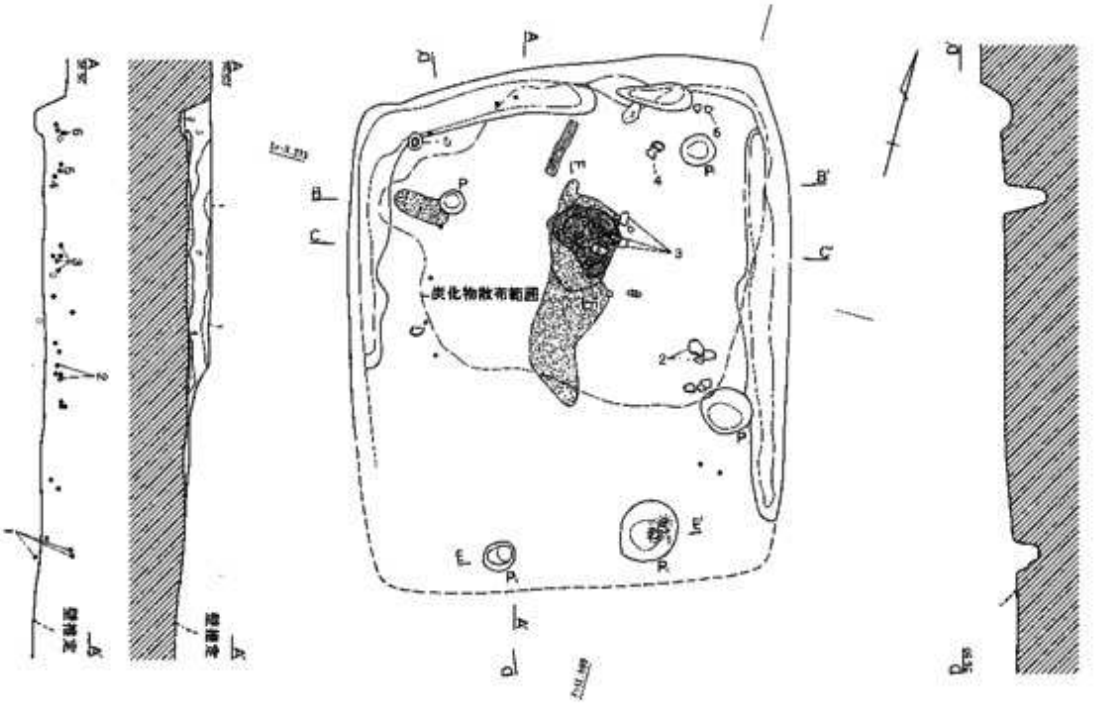
平面形態は隅丸方形を想定しておこう。規模は南北軸長が3.4ｍ以上である。軸偏差はＮ－19°－Ｅ程度となろう。東西軸長は水路の東に壁が確認されないので4ｍをはなはだしく超えることはない。

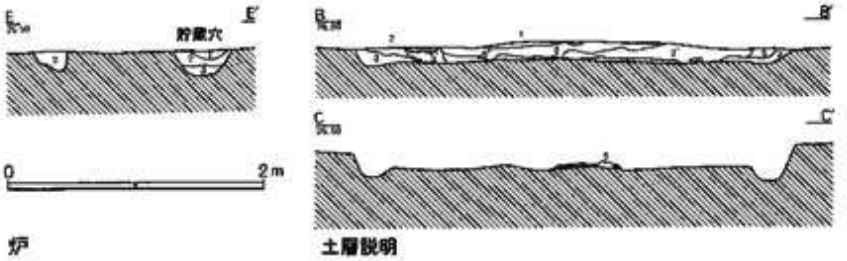
覆土は灰褐色土を基調とし、床面は軟弱な部分が多かった。

出土遺物には台付甕の破片が床面からわずかに浮いた位置で出土しているが、埋没の早い過程で投棄されたものと思われる。

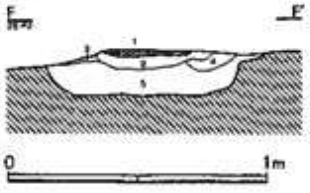
遺存部分で炉、貯蔵穴、柱穴は確認されていない。

SJ 56





炉



ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(20/18/45)
P2(27/24/11)
P3(40/34/11)
P4(50/45/20)

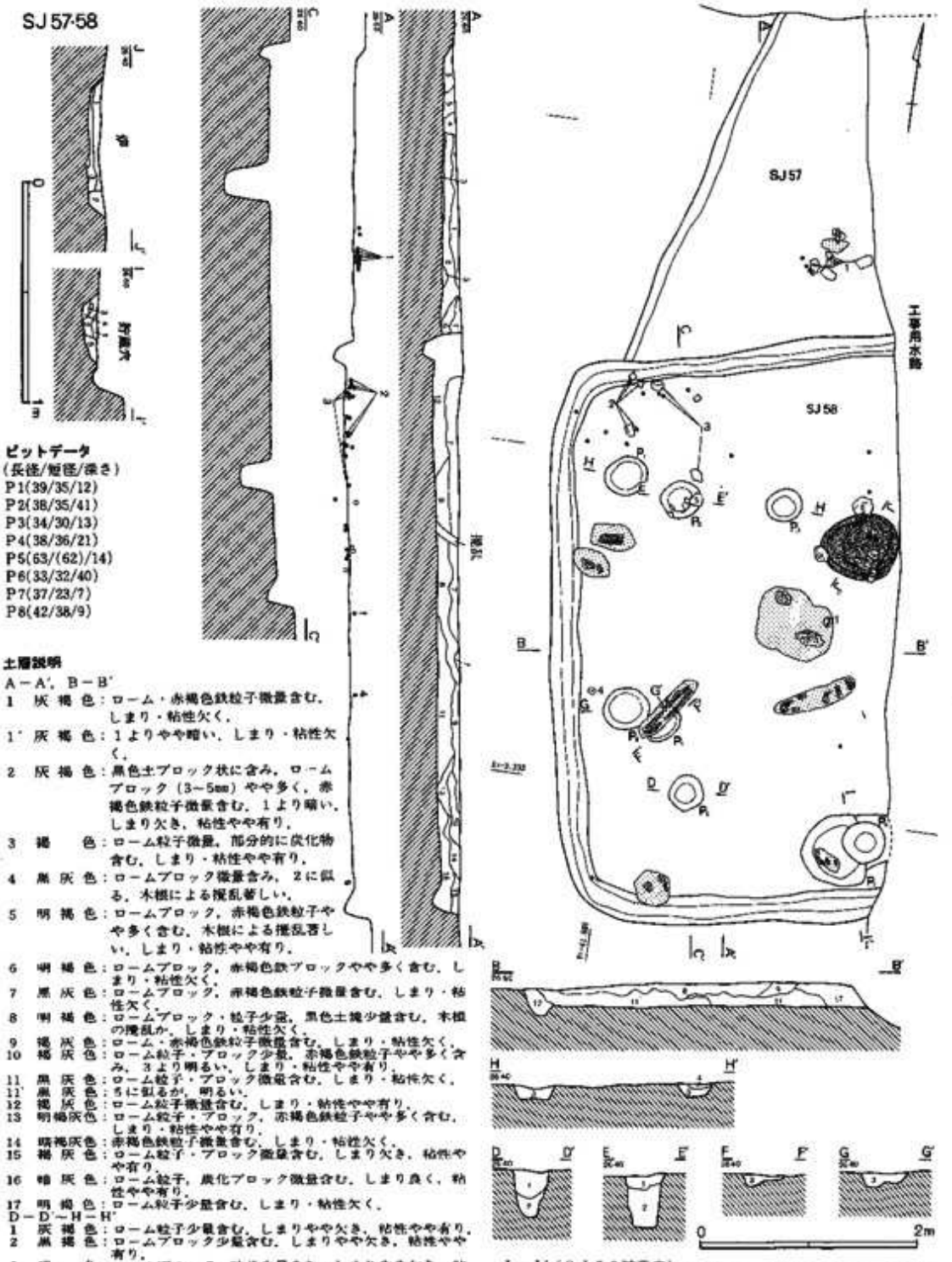
土層説明

A－A′，B－B′
1　暗 褐 色：均一，ローム粒子少量含む，しまり強く，粘性やや有り．
2　暗 褐 色：やや不均一，ローム粒子1よりやや多く含み，明るい，少量のカーボン含む，しまりやや強く，粘性やや有り．
2′ 暗 褐 色：ローム2より少なく，1に近い色調，は2に準ずる．
3　黒 褐 色：ほぼ均一，ローム粒子微量含む，しまり弱く，粘性やや有り，三角堆積土層．
3′ 黒 褐 色：やや不均一，ローム粒子3より多く含む，焼崩壊土．
4　灰 褐 色：炭化物と床面の間層，（厚さ21cm程）灰，炭化物含み，しまり強いが，パサパサした感じ．
5　灰暗褐色：不均一，ローム粒子微量含む，しまり弱く，粘性やや有り．
5′ 灰暗褐色：上層の焼土粒子を5に含む，しまり弱く，粘性やや有り．
5″ 灰暗褐色：上層の焼土粒子を5′より少なく含む，しまり弱く，粘性やや有り．

E－E′（貯蔵穴）
1　暗 褐 色：不均一，ローム粒子少量含む，しまり・粘性共やや有り．
2　黒 褐 色：ほぼ均一，ローム粒子微量含む，しまり・粘性共やや有り．
3　暗 褐 色：不均一，1より多くローム粒子含み，明るい，しまり弱いが，粘性強い．

F－F′（炉）
1　赤 褐 色：非常に硬化した焼土ブロック．
2　赤 褐 色：生焼けの状態で1ほど硬化していない，5が少量混在する．
3　暗赤褐色：2よりも5の混合比高い．
4　暗黄褐色：5中に炭化物が混在する．
5　黄 褐 色：均一，粘質土，粘性に富むが，しまり弱い．

第63図　第56号住居跡実測図



ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(39/35/12)
P2(38/35/41)
P3(34/30/13)
P4(38/36/21)
P5(63/(62)/14)
P6(33/32/40)
P7(37/23/7)
P8(42/38/9)

土層説明

A－A′，B－B′

1　灰褐色：ローム・赤褐色鉄粒子微量含む．しまり・粘性欠く．
1′　灰褐色：1よりやや暗い．しまり・粘性欠く．
2　灰褐色：黒色土ブロック状に含み，ロームブロック（3～5mm）やや多く，赤褐色鉄粒子微量含む．1より暗い．しまり欠き，粘性やや有り．
3　褐　色：ローム粒子微量，部分的に炭化物含む．しまり・粘性やや有り．
4　黒灰色：ロームブロック微量含み，2に似る．木根による攪乱著しい．
5　明褐色：ロームブロック，赤褐色鉄粒子やや多く含む．木根による攪乱著しい．しまり・粘性やや有り．
6　明褐色：ロームブロック，赤褐色鉄ブロックやや多く含む．しまり・粘性欠く．
7　黒灰色：ロームブロック，赤褐色鉄粒子微量含む．しまり・粘性欠く．
8　明褐色：ロームブロック・粒子少量，黒色土塊少量含む．木根の攪乱か．しまり・粘性欠く．
9　褐灰色：ローム・赤褐色鉄粒子微量含む．しまり・粘性欠く．
10　褐灰色：ローム粒子・ブロック少量，赤褐色鉄粒子やや多く含み，3より明るい．しまり・粘性やや有り．
11　黒灰色：ローム粒子・ブロック微量含む．しまり・粘性欠く．
11′　黒灰色：5に似るが，明るい．
12　褐灰色：ローム粒子微量含む．しまり・粘性やや有り．
13　明褐灰色：ローム粒子・ブロック，赤褐色鉄粒子やや多く含む．しまり・粘性やや有り．
14　暗褐灰色：赤褐色鉄粒子微量含む．しまり・粘性欠く．
15　褐灰色：ローム粒子・ブロック微量含む．しまり欠き，粘性やや有り．
16　暗灰色：ローム粒子，炭化ブロック微量含む．しまり良く，粘性やや有り．
17　明褐色：ローム粒子少量含む．しまり・粘性欠く．

D－D′－H－H′

1　灰褐色：ローム粒子少量含む．しまりやや欠き，粘性やや有り．
2　黒褐色：ロームブロック少量含む．しまりやや欠き，粘性やや有り．
3　褐　色：ロームブロック・粒子少量含む．しまりやや欠き，粘性やや有り．
4　黒灰色：炭化物多量含む．

J－J′（SJ58炉）

1　黒褐色：炭化物，焼土粒子少量含む．しまりやや欠き，粘性やや有り．
2　褐　色：炭化物，ロームブロック微量含む．しまり良く，粘性やや有り．
3　褐　色：炭化物ブロック少量，焼土ブロック多量，ロームブロック微量含む．しまり良いが，粘性ない．

I－I′（SJ58貯蔵穴）

1　褐　色：ローム粒子微量含む．しまりやや欠き，粘性やや有り．
2　褐　色：ローム粒子・ブロックやや多く含む．しまりやや欠き，粘性やや有り．
3　明褐色：ローム粒子微量含む．しまりやや欠き，粘性やや有り．
4　褐　色：ローム粒子・ブロックやや多く含む．しまりやや欠くが，粘性強い．
5　黒褐色：ロームブロック多く含む．しまりやや良く，粘性やや有り．

第64図　第57・58号住居跡実測図

(44) 第58号住居跡（第64図・第2-24図・図版41・42）

調査区中央部からやや東のF-16グリッドに位置し、北壁がＳＪ57を切り、東半部は遊水池工事の水路に切られ遺存は悪い。平面形態は隅丸方形と判断してよいだろう。規模は確認面で南北軸長が5.24m、軸偏差Ｎ－10°－Ｗで、東西軸長は水路東に東壁が確認できないので最大6.4mの想定が可能だが住居としての平面のバランスは悪い。軸偏差はＥ－9°－Ｎである。

覆土は上層が灰褐色土、下層が灰褐色土、明褐色土を主体としており、確認面から床面までは約20－25cm、ＳＪ57よりはやや深い掘り込みである。

床面にピットが8基認められた。P2、P6が主柱穴と考えられ、P4、P5は連接して貯蔵穴を形成する。東端を水路に切られるが90×65cm、深さは最深部で21cmほどである。

壁溝は壁に接し全周する。幅は12－25cm弱で、深さは約10cmである。

炉は中央からやや北に偏する位置となろうか。71×61cmの不整円形の平面形態で、約7cmの深さに掘り込まれており、47×40cmの範囲でその上面（確認面）が焼土化していた。また、大小の自然礫の枕石5個が検出され、被熱して赤変している状況が確認できた。

出土遺物には台付甕、壺、器台等の破片がある。1、2、4は床面からやや浮いた状況、3は直上とやや浮いた状況のものが接合したが投棄または流入である。

床面からわずかに浮いて炭化物、炭化材の出土が目立つ状況から、火災を被っていると思われる。

(45) 第59号住居跡（第65図）

調査区中央部からやや東のF-17グリッドに位置する。大半を遊水池工事の水路に切られ、木根等の攪乱もあって遺存は悪い。

平面形態は隅丸方形を想定しておこう。規模は確認面で南北軸長が4.15m（軸偏差Ｎ－26°－Ｗ）あるので一応住居跡として報告しておく。東西軸長は不明だが、軸偏差はＥ－28°－Ｎとなる。

覆土は上層が黒褐色土、下層が暗褐色土を主体としていた。

遺存部分では、貯蔵穴、柱穴は確認されていない。

出土遺物には甕と思われる細片が覆土中から2点出土したのみで図示に耐えるものがない。

(46) 第60号住居跡（第66図・図版42）

調査区中央部からやや東のF-16グリッドに位置する。

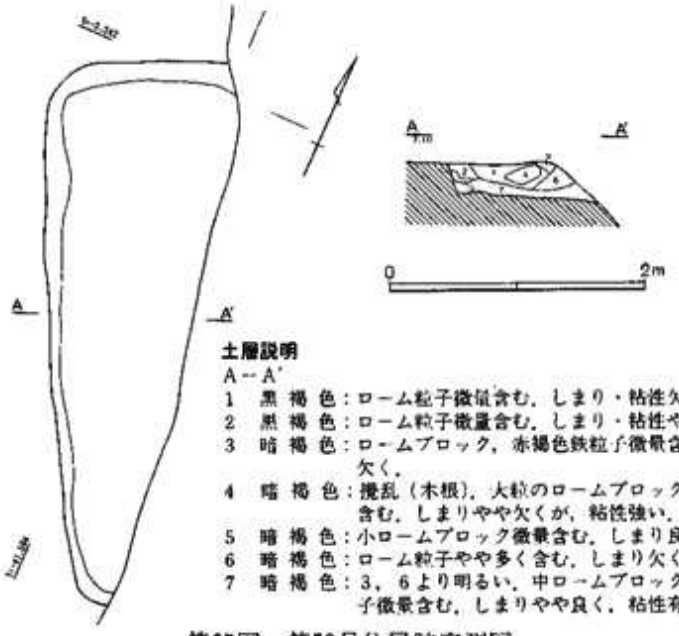
確認面からの掘り込みが極めて浅いため遺存が極めて悪く、東壁の大部分と北壁一部、それに南西コーナー部分の壁面が検出できなかった。出土土器はないが西壁に125cmにわたり壁溝があり、比較的床面も堅緻で覆土の色調も当該期のほかの住居と同様なので住居として報告する。

覆土は小径のロームブロックを微量含む暗褐色土がごく薄く遺存しているだけであった。

平面形態は隅丸方形で、規模は確認面で南北軸（長軸）長が4.39m、軸偏差Ｎ－9°－Ｅ、東西軸（短軸）長4.24mと推定され、軸偏差はＥ－11°－Ｓである。

床面にはピットが6基認められたが全て住居に伴うか判然としない。

SJ59



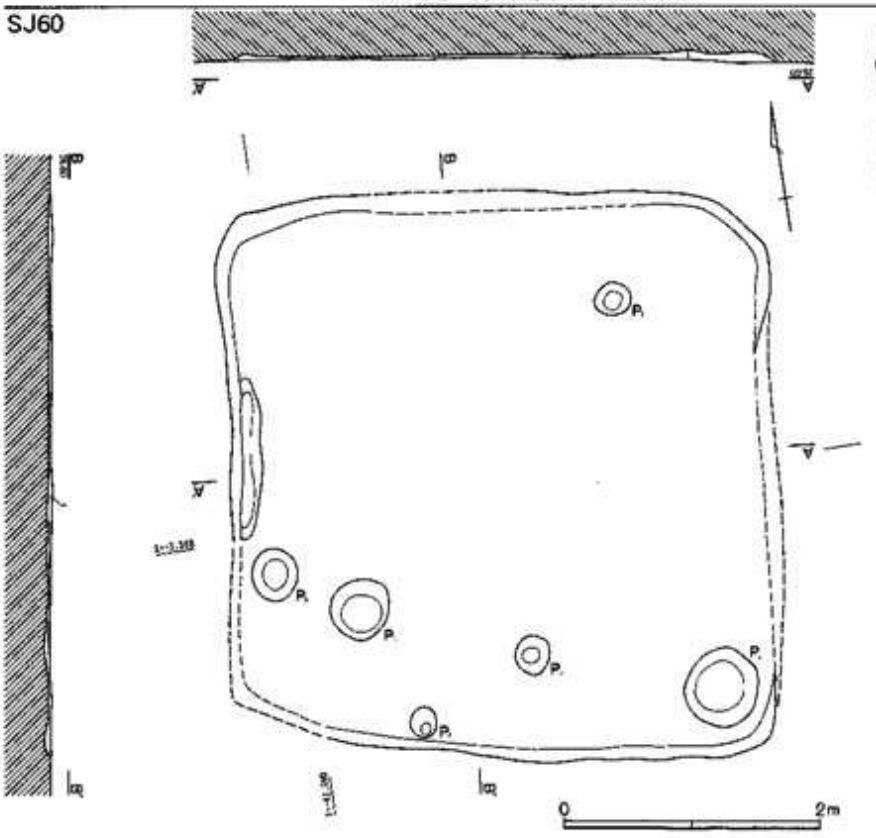
土層説明

A－A'

1　黒 褐 色：ローム粒子微量含む．しまり・粘性欠く．木根の撹乱著しい．
2　黒 褐 色：ローム粒子微量含む．しまり・粘性やや有り．
3　暗 褐 色：ロームブロック，赤褐色鉄粒子微量含む．しまり・粘性やや欠く．
4　暗 褐 色：撹乱（木根），大粒のロームブロック，赤褐色鉄粒子乱雑に含む．しまりやや欠くが，粘性強い．
5　暗 褐 色：小ロームブロック微量含む．しまり良く，粘性やや有り．
6　暗 褐 色：ローム粒子やや多く含む．しまり欠くが，粘性やや有り．
7　暗 褐 色：3，6より明るい．中ロームブロックやや多く，赤褐色鉄粒子微量含む．しまりやや良く，粘性有り．

第65図　第59号住居跡実測図

SJ60



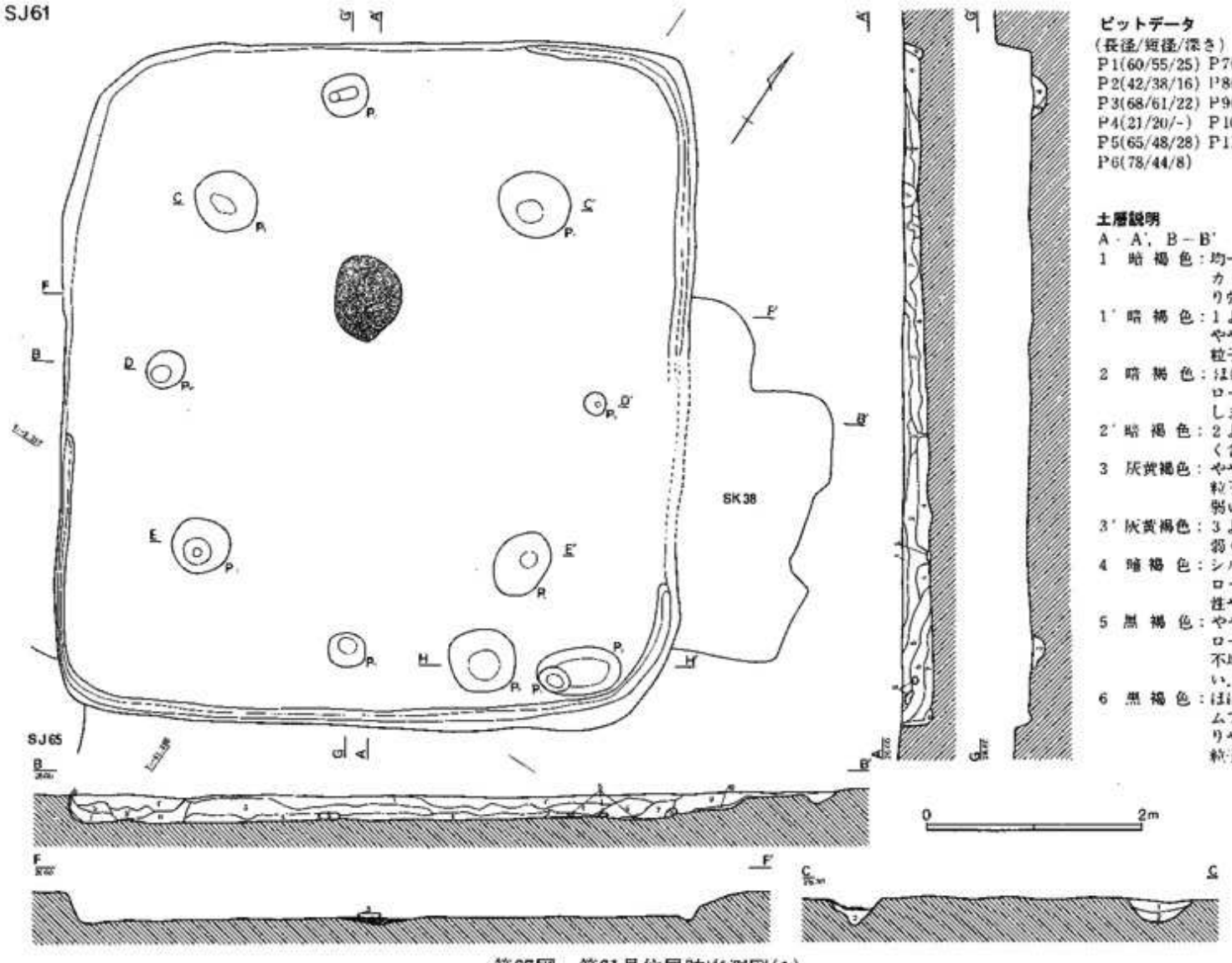
ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(29/25/11)
P2(61/59/6)
P3(31/27/17)
P4(24/20/12)
P5(47/47/7)
P6(40/35/15)

土層説明

A－A'，B－B'

1　暗 褐 色：小ロームブロック微量含む．しまり良く，粘性やや有り．

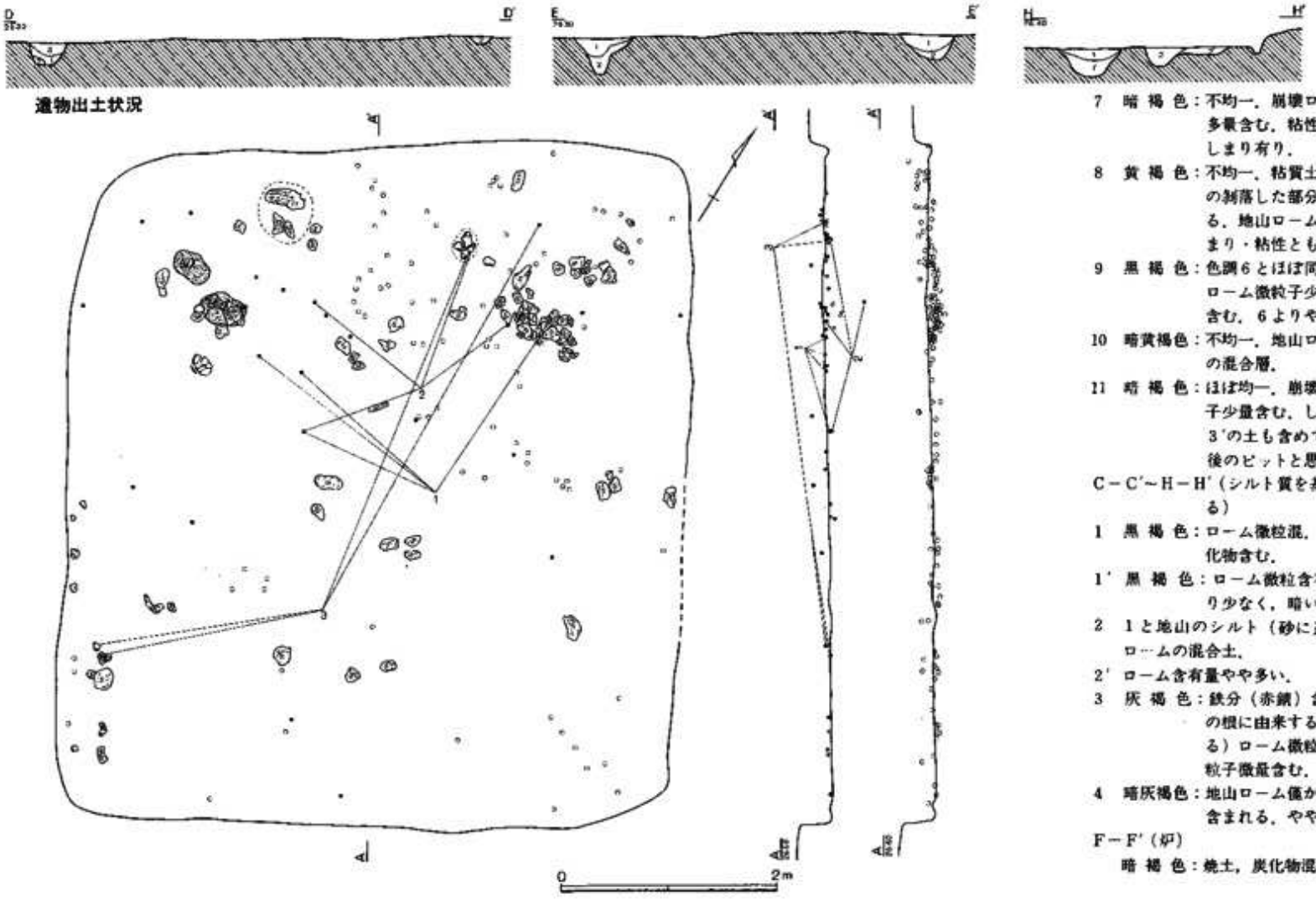
第66図　第60号住居跡実測図



ピットデータ
（長径/短径/深さ）
P1(60/55/25) P7(30/23/18)
P2(42/38/16) P8(65/61/26)
P3(68/61/22) P9(36/33/14)
P4(21/20/-) P10(52/51/34)
P5(65/48/28) P11(37/33/22)
P6(78/44/8)

土層説明
A－A′，B－B′
1 暗褐色：均一，崩壊ローム・風化カーボン粒子含む，しまり強い。
1′ 暗褐色：1よりローム粒子少なくやや暗い，風化カーボン粒子含む，しまり強い。
2 暗褐色：ほぼ均一，少量の崩壊ローム粒子含む，1よりしまり弱い。
2′ 暗褐色：2より崩壊ローム粒子多く含む。
3 灰黄褐色：やや不均一，崩壊ローム粒子多量に含む，しまり弱い。
3′ 灰黄褐色：3より不均一，しまりも弱くなる。
4 暗褐色：シルト質，均一，崩壊ローム粒子微量含む，粘性やや有り。
5 黒褐色：やや不均一，風化したロームブロック（径1cm）不均一に含む，しまり強い。
6 黒褐色：ほぼ均一，風化したロームブロック含まず，5よりやや暗い，崩壊ローム粒子少量含む。

第67図　第61号住居跡実測図(1)



7　暗 褐 色：不均一，崩壊ローム粒子多量含む，粘性は強く，しまり有り．

8　黄 褐 色：不均一，粘質土，住居壁の剥落した部分と思われる，地山ローム混入，しまり・粘性とも強い．

9　黒 褐 色：色調6とほぼ同じ，崩壊ローム微粒子少量均一に含む，6よりややしまる．

10　暗黄褐色：不均一，地山ロームと9の混合層．

11　暗 褐 色：ほぼ均一，崩壊ローム粒子少量含む，しまりない．3'の土も含めて住居埋没後のピットと思われる．

C－C'～H－H'（シルト質を基本とする）

1　黒 褐 色：ローム微粒混，若干の炭化物含む．

1'　黒 褐 色：ローム微粒含有量1より少なく，暗い．

2　1と地山のシルト（砂に近い）とロームの混合土．

2'　ローム含有量やや多い．

3　灰 褐 色：鉄分（赤錆）含む，（草の根に由来すると思われる）ローム微粒，炭化物粒子微量含む．

4　暗灰褐色：地山ローム僅かに浮いて含まれる，やや粘性有り．

F－F'（炉）

暗 褐 色：焼土，炭化物混合土．

第67図　第61号住居跡実測図(2)

(47) 第61号住居跡（第67図・第2-24図・図版42・43・161）

調査区中央部からやや東のG-16グリッドに位置し、ＳＪ65、ＳＫ38と切り合う。ＳＪ65との先後関係は切り合いが少なく判然としないが、ＳＫ38とは断面観察でＳＪ61のほうが新しい状況を示していた。平面形態は南北にやや長い隅丸方形で、規模は南北軸（長軸）長が6.37ｍ、軸偏差Ｎ－31°－Ｗ、東西軸（短軸）長5.76ｍ、軸偏差Ｅ－32°－Ｎである。

覆土は壁周辺が自然な埋没状況を示すが、中央付近は土層に不整合な部分があり、周堤の崩壊により急速に埋没が進んだ可能性を示す。確認面から床面最深部までは約25cm強である。

床面にはピットが11基認められた。Ｐ1、Ｐ3、Ｐ5、Ｐ10が主柱穴と考えられ、Ｐ2、Ｐ4、Ｐ9、Ｐ11もお互いに対称位置に存在しており上屋構造に関連があるものと思われる。Ｐ6、Ｐ8は貯蔵穴となろうか。

壁溝は北東コーナーから東壁中央、南東コーナーから西壁の中央にかけて検出した。幅は細い部分で5cmほど、平均的な部分では10cm強、深さは6－10cmほどである。

炉は中央からやや北に偏した位置に検出した。78×61cmの不整円形でわずかにくぼんでおり、5cmほどの厚さで暗褐色土と炭化物を混ずる焼土がレンズ状に堆積していた。

出土土器には台付甕や高杯等の破片がある。いずれも床面に近いレベルでの出土で、埋没過程の早い段階での投棄であろう。1は半分ほど遺存だが全体の状況がうかがえるまでに復原できた。

また北西コーナー付近の床面での炭化材や焼土の出土は本住居の火災に遭遇した可能性を物語る。

人工的な遺物ではないが、床面に比較的近いレベルで大量の自然礫が出土している。なかでも、北東コーナーに近い部分での出土が目立っている。屋根材として用いられていたものが住居の腐朽とともに落下した可能性も考えられる。

(48) 第62号住居跡（第68図・第2-25・26図・図版43・161・162・163）

調査区中央部からやや東のG-16グリッドに位置し、ＳＪ63・64と重複する。

付近は攪乱が多く先後関係を把握するのは容易ではないが、断面観察からすると両者のいずれより新しく、掘込みもいちばん深い。東壁が完全に遺存していないので、平面形態を完全に把握できていないが、隅丸方形としてよい。

規模は南北軸（長軸）長が4.44ｍ、軸偏差Ｎ－13°－Ｗ、東西軸長は3.9ｍ前後となろうか、軸偏差はＥ－12°－Ｎである。

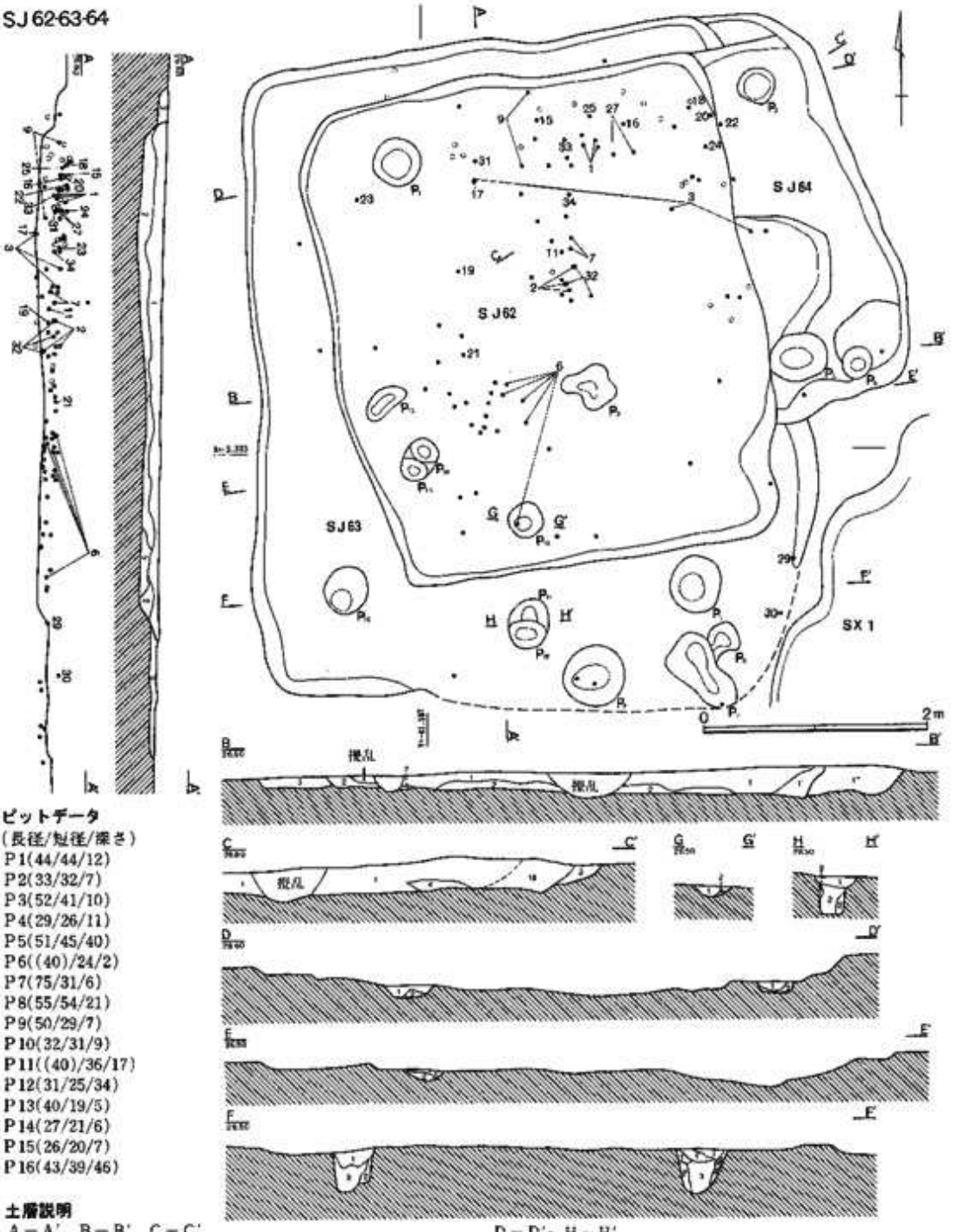
覆土は暗褐色土を基調としており、確認面から床面までは約25cm弱で自然な埋没状況である。

床面にはピットが5基認められた。Ｐ9、Ｐ13は攪乱であり、その他も住居に伴うか明確でない。

出土土器には台付甕、各種の壺、高杯等の破片に恵まれるが中－上層の出土が多く、埋没過程での流入、投棄されたものがほとんどである。図版にはＳＪ62－64出土遺物ということで、まとめて掲載したが、29、30以外は本住居に伴うものと考えられる。

完形にまで復原できたものは僅少だが、なかでも大小の台付甕の点数が多かった。口縁部は図示しなかったものも含め、確認できたもの全てにキザミメが認められない。

SJ62·63·64



ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(44/44/12)
P2(33/32/7)
P3(52/41/10)
P4(29/26/11)
P5(51/45/40)
P6((40)/24/2)
P7(75/31/6)
P8(55/54/21)
P9(50/29/7)
P10(32/31/9)
P11((40)/36/17)
P12(31/25/34)
P13(40/19/5)
P14(27/21/6)
P15(26/20/7)
P16(43/39/46)

土層説明

A－A′，B－B′，C－C′
1　暗 褐 色：ローム微粒，炭化物微量含む．
1a 暗 褐 色：ローム粒子多く含む．1より灰色味帯びる．
1′ 暗 褐 色：ローム粒子の含有多い．
1″ 暗 褐 色：やや灰色味強い．
2　1と床面から浮いたと思われる地山ロームの混合土．
3　暗灰褐色：ローム粒子・小ブロック，若干の炭化物粒子含む．
4　地山ローム中の小径礫が浮いて1と混合する部分．
5　黒 褐 色：ローム微粒含む．
撹　　乱：ローム微粒含み，1より暗い．

D－D′～H－H′
1　黒 褐 色：ほぼ均一．ローム粒子少量含む．粘性なし．しまりやや有り．
1′ 黒 褐 色：ローム粒子1よりやや多い．
2　暗 褐 色：不均一．1の黒 褐 色土と地山の黄褐色粘質土を不均一に含む．粘性・しまりやや有り．
2′ 暗 褐 色：黄褐色粘質土2より少ない．粘性ややあり．しまり強い．
3　黒 褐 色：ほぼ均一．ローム粒子1よりやや多く含む．粘性ややあり．しまり弱い．
＊明度　3＞1′＞1　2＞2′

第68図　第62·63·64号住居跡実測図

(49) 第63号住居跡（第68図・第2-25・26図・図版43・161・162・163）

調査区中央部からやや東のG-16グリッドに位置し、ＳＪ62・64と重複する。

断面観察からＳＪ62以前の築造であるが、ＳＪ64との先後関係は明確にできていない。

平面形態は南壁の遺存が悪く、東壁も不明瞭な立上がりがわずかに確認できたのみで、完全につかめていないが、やや南北に長い隅丸方形である。規模は確認面で南北軸（長軸）長が6mほど、軸偏差はN－6°－W、東西軸（短軸）長は5mほどと推定され、軸偏差はE－2°－Nであろう。

覆土はローム粒、ロームブロック、炭化物を含む暗灰褐色がわずかに遺存していた。

床面にはピットが7基認められた。P5、P16は主柱穴と考えられ、P11、P12も本住居に伴うものだろう。P7、P8は貯蔵穴の可能性がある。

出土土器は覆土の遺存が悪いためか点数も少ない。29は床面直上の出土で遺留品の可能性が、30はやや浮いた状況で、直接伴うのか投棄されたのか判断しがたい。

(50) 第64号住居跡（第68図・第2-25・26図・図版43・161・162・163）

調査区中央部からやや東のG-16グリッドに位置し、ＳＪ62・63と重複する。

断面観察（B－B′の1と1′、C－C′の1と1ａの部分：あまり明確でない）からするとＳＪ62以前の築造だが、ＳＪ63との先後関係は明確にできていない。掘り込みが浅いうえに大半の部分をＳＪ62に切られ遺存は悪い。

平面形態は、わずかに遺存する北東、南東コーナーからひとまず隅丸方形を推定しておこう。規模は確認面で南北軸長が3.3m、軸偏差はN－18°－W、東西軸長は不明だが、軸偏差はE－19°－Nである。

床面にはピットが3基認められ、P2、P4は柱穴になる可能性がある。

出土遺物には覆土中から土師器の細片の出土が数点あったが図示に耐えるものがない。

(51) 第65号住居跡（第69図・第2-27図・図版43・44）

調査区中央部東寄りのH-16グリッドに位置、北東コーナーをＳＪ61と、南部分がＳＪ66と切り合うが、重複が少ないか覆土が浅く先後関係がつかめない。また、床面中央から西壁にかけてＳＲ42の北溝に切られ（破線は掘方埋戻し土の遺存による推定）、東壁の南部は同じくＳＲ42の東溝が覆土を覆っている。

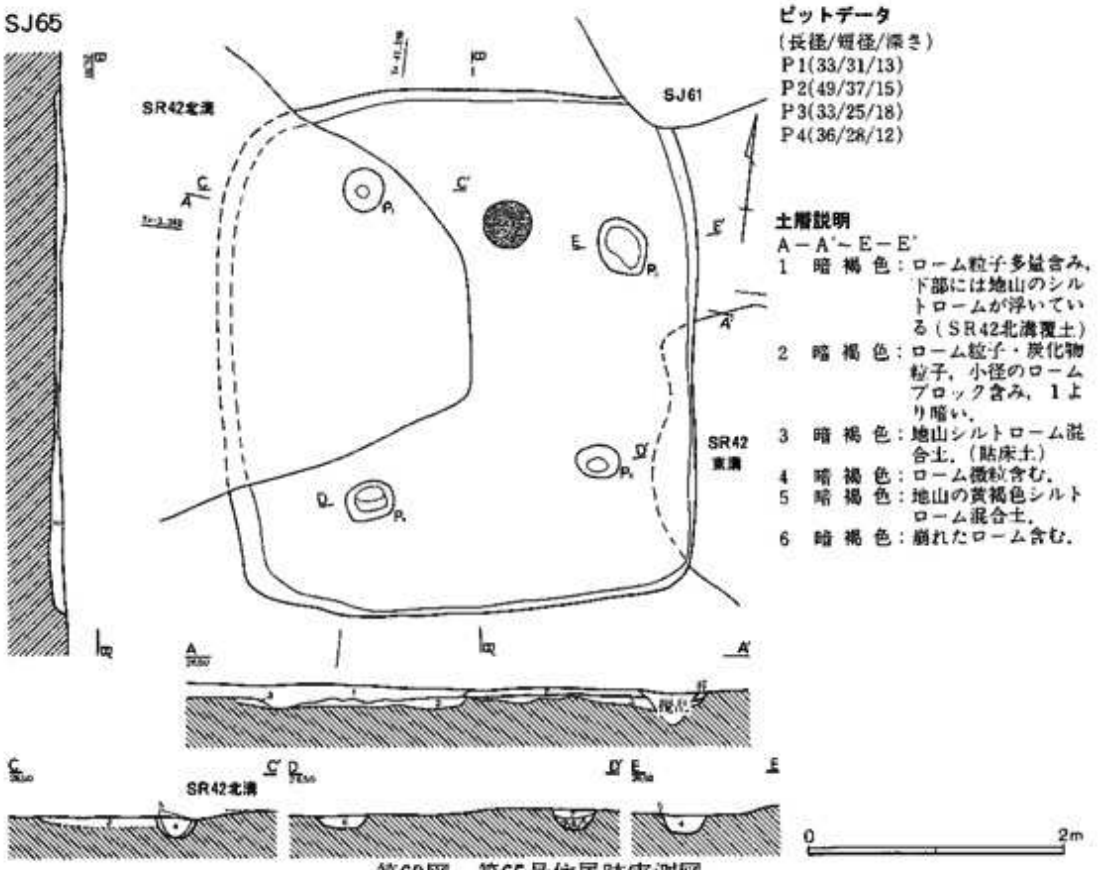
平面形態は隅丸方形と判断してよいだろう。規模は確認面で南北軸（長軸）長が4.10m、軸偏差N－8°－W、東西軸（短軸）長は推定で3.7m、軸偏差はE－11.5°－Nである。

覆土は暗褐色土を基調とし、厚さは5cm前後と極めて浅い。一部暗褐色土と地山ローム混合土の貼床となっている。

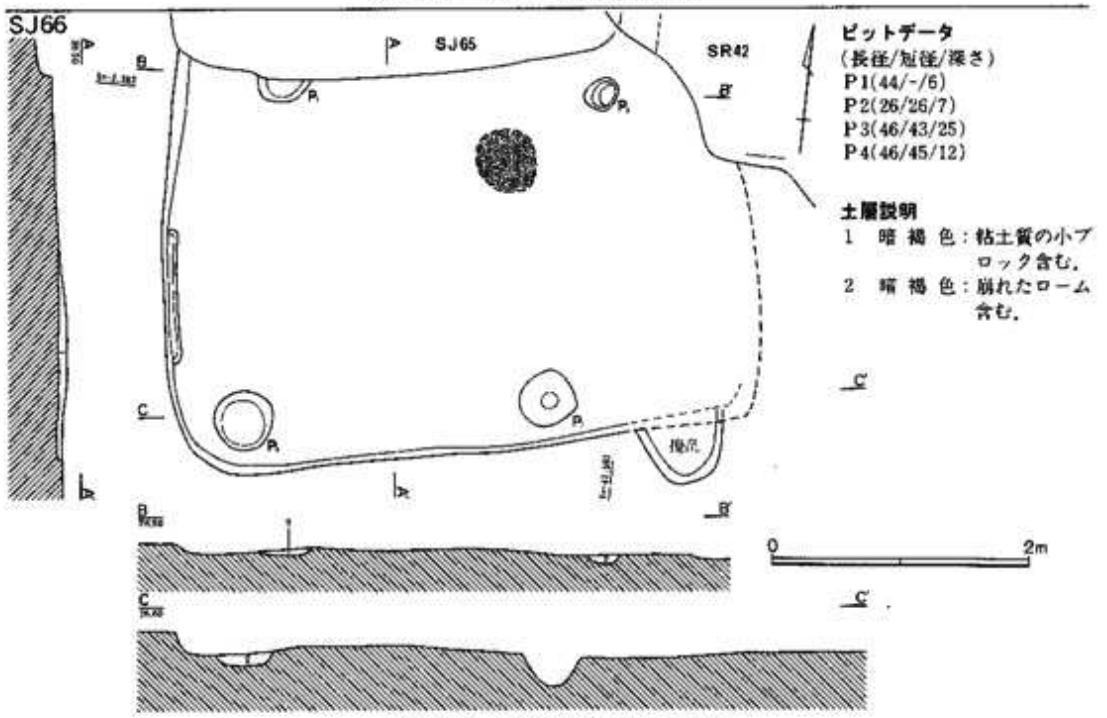
床面にはピットが4基認められ、主柱穴と考えてよいだろう。

炉はP2の北西約60cmの所に検出、直径約35cmの円形で、明確な掘り込みはなく床面がわずかに焼土化しており、北側の縁にわずかな隆起が認められた。

出土土器は覆土の遺存が悪く僅少である。図示した台付甕破片、小形壺は覆土中の出土である。

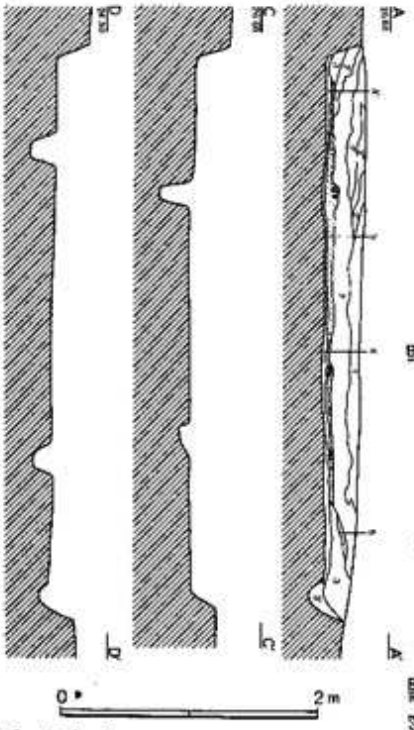


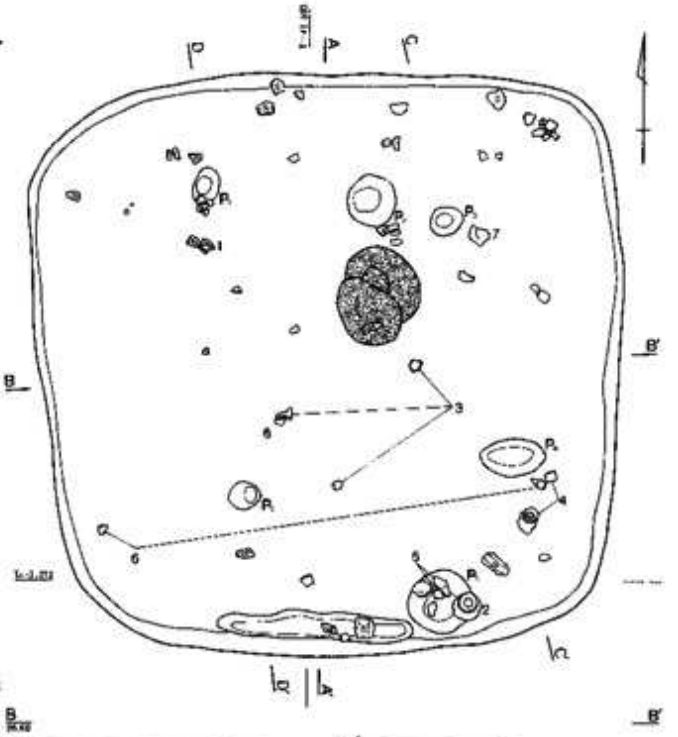
第69図　第65号住居跡実測図

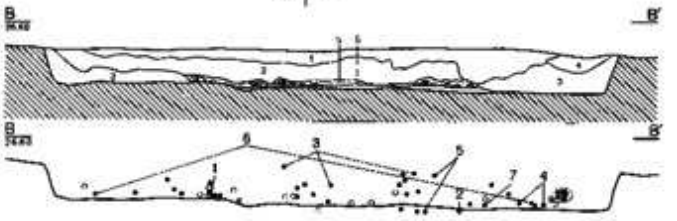


第70図　第66号住居跡実測図

SJ67







炭火材等出土状況

ピットデータ

（長径/短径/深さ）

P1(30/20/19)	P4(52/29/12)
P2(38/37/25)	P5(50/48/31)
P3(25/21/25)	P6(25/20/15)

土層説明

A－A′，B－B′

1　茶 褐 色：ローム多量含む．

2　茶 褐 色：ローム粒子・ブロック多量含む．住居の西壁，北壁西側からの傾斜が顕著．上屋構造物の焼失直後に堆積している．

2′ 茶 褐 色：暗 褐 色土の含有比高い

2″ 茶 褐 色：ロームの含有比高い．

3　茶 褐 色：ローム微粒，炭化物粒子微量含む．住居廃絶後から火災発生までの間に堆積した層．

3′ 茶 褐 色：灰褐色粘土が堆積する．

3″ 茶 褐 色：ローム粒子少なく，黒色味強い．．

4　灰 褐 色：ローム微粒多量含む．

5　灰茶褐色：焼け落ちた住居上屋構造物の堆積層．最大で約8cmの厚さに焼土及び炭化物・材が堆積する．焼土は主に土層の上部に認められる．

6　灰 褐 色：灰を多量含む土層．主に火災時の形成と思われる．（火災初期の段階で上屋が崩壊する前の灰か？）

第71図　第67号住居跡実測図

(52) 第66号住居跡（第70図・第2-27図・図版44）

調査区中央部からやや東寄りのH-16グリッドに位置する。北部をＳＪ65、ＳＲ42と切り合うが、覆土平面から判断する限りＳＪ65、ＳＲ42のほうが本住居より新しい。

また、炉から東南コーナーにかけての部分は床面が失われており、明確にできなかった。

平面形態は一応隅丸方形と推定しておく。規模は東西軸長が4.5m前後だろうか、軸偏差はＥ－11°－Ｎである。南北軸長は不明だが軸偏差はＮ－11°－Ｗである。

床面にはピットが4基認められた。Ｐ3は貯蔵穴と考えられる。

炉はＰ2の南西約60cmの位置に検出したが、地山のロームがわずかに焼土化している程度の遺存状況である。

なお、西壁の南部で長さ1mにわたる壁溝を検出している。

出土土器には台付甕や高杯の破片があるがいずれも細片で、流入によるものだろう。

(53) 第67号住居跡（第71図・第2-27図・図版44・45・163）

調査区中央やや東部のH-16グリッド、ＳＲ42の方台部下に検出した。前述のＳＪ66の南約3mの位置に所在する。

平面形態は北壁が南壁に比べやや長いが隅丸方形としておく。規模は確認面で南北軸（短軸）長が4.52m、軸偏差Ｎ－3°－Ｗ、東西軸（長軸）長4.53m、軸偏差Ｅ－3°－Ｎである。

覆土は茶褐色土を基調としており、確認面から床面までは約30cmほどで、床面に灰を多量に含む灰褐色土の薄い堆積が見られ、その上部に炭化材（物）と焼土層（一部は焼土塊となる）が最高で厚さ約8cmに堆積し、本住居が埋没のごく初期の段階で火災を被っていることを示している。

また、この焼土層は各壁ぎわを除く床面の広範囲で検出した（図の破線の範囲）。

残念なことに炭化材は屋根材がそのまま焼け落ちた状況ではないが、多量の焼土の共伴は屋根材として土が用いられていたことを物語る（一部西壁付近では粘土が焼けない状況で出土しておりあるいは粘土が使用されていたかも知れない）。

床面にはピットが6基認められた。全て本住居に伴うものと考えられ、Ｐ1、Ｐ3、Ｐ4、Ｐ6は主柱穴と考えられる。

南の壁ぎわ、やや南東コーナー寄りのＰ5は貯蔵穴と考えられ、50×48cm、深さは31cmを測る。内部の東肩部分から底部を欠く壺が出土、遺棄されたものが落込んだ可能性がある。

壁溝は南壁の中央部分に長さ約1.5mにわたり検出された。幅は最高24cm、深さは約10cmほどである。

炉は中央から北東コーナーに偏して検出した。不整の円形が2基連なるような平面形態で、77×62cm、深さは最高約3cmの浅い掘りこみで、床面が薄くレンズ状に焼土化していた。南の底面からは長さ約18cmの自然礫の枕石が1点検出されている。

出土土器には壺の破片等が目立つが台付甕もある。2は前述の貯蔵穴内出土、5は同じく貯蔵穴内の高い位置の出土、1はＰ1南、4はＰ4南の床面直上出土で投棄された可能性が強い。3は覆土の上部からの出土である。

(54) 第68号住居跡（第72図・図版45）

調査区中央部からやや東南よりのＩ-16グリッドに位置する。当該期の遺構群ののる微高地の東南縁部に当る。

平面形態は隅丸方形で、規模は確認面で南北軸（短軸）長が2.99ｍ、軸偏差Ｎ－8°－Ｅ、東西軸（長軸）長3.1ｍ、軸偏差Ｅ－3°－Ｓである。規模の明確となっている住居跡中ではＳＪ23に次いで最も小規模であるが、炉が設置されていることや床面がしっかりしている状況から住居と認定するに十分である。

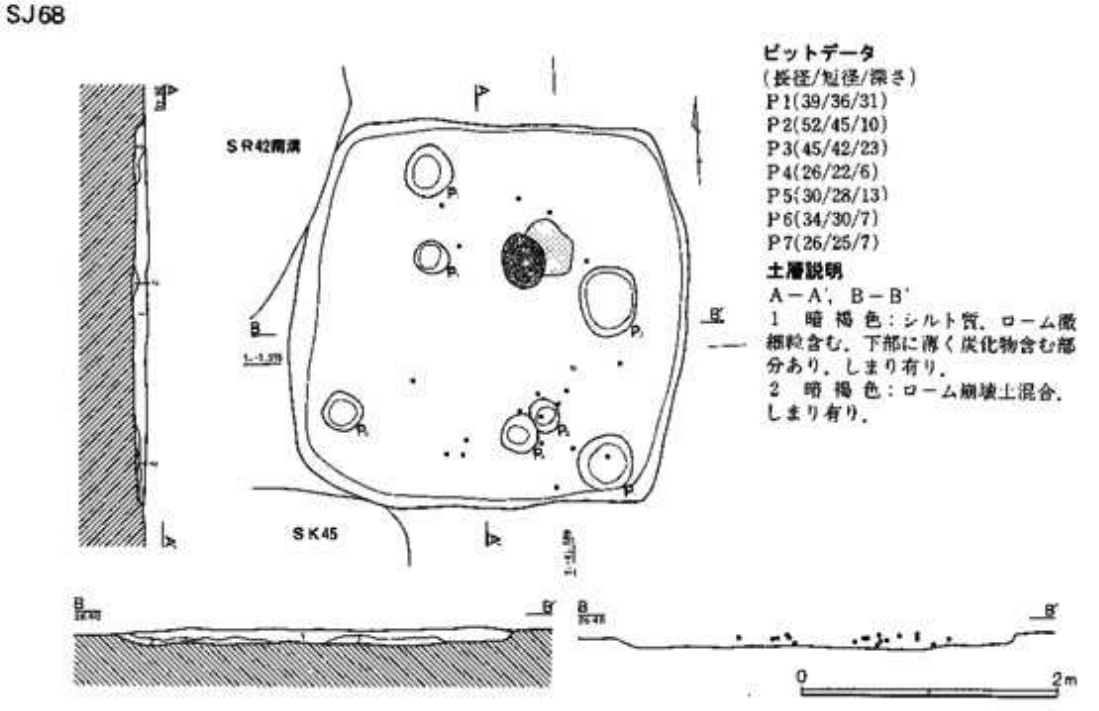
しかしながら、ローム層に達していないもののＳＲ42の南溝が西部の覆土上部を削り、攪乱も付近に多く遺存状況は決して良くない。

覆土は暗褐色土が確認面からわずかに10cmほど遺存していた。なお、南壁がＳＫ44とわずかに切り合うが先後関係は不明である。

床面にはピットが7基認められたが、いずれが住居に伴うのか、また柱穴なのか判断しがたい。覆土はいずれもローム粒を含む暗褐色土であった。

炉は中央からやや北東コーナーに偏して検出した。径約35cmの不整円形の部分が、わずかにくぼんでおり、底面が薄く焼土化していた。北側には炭化物の散布も認められた。

出土遺物には土師器破片が10数片あるが、遺留土器はなくいずれも細片で、図示に耐えるものがない。



第72図　第68号住居跡実測図

SJ69

土層説明

A－A′，B－B′，C－C′

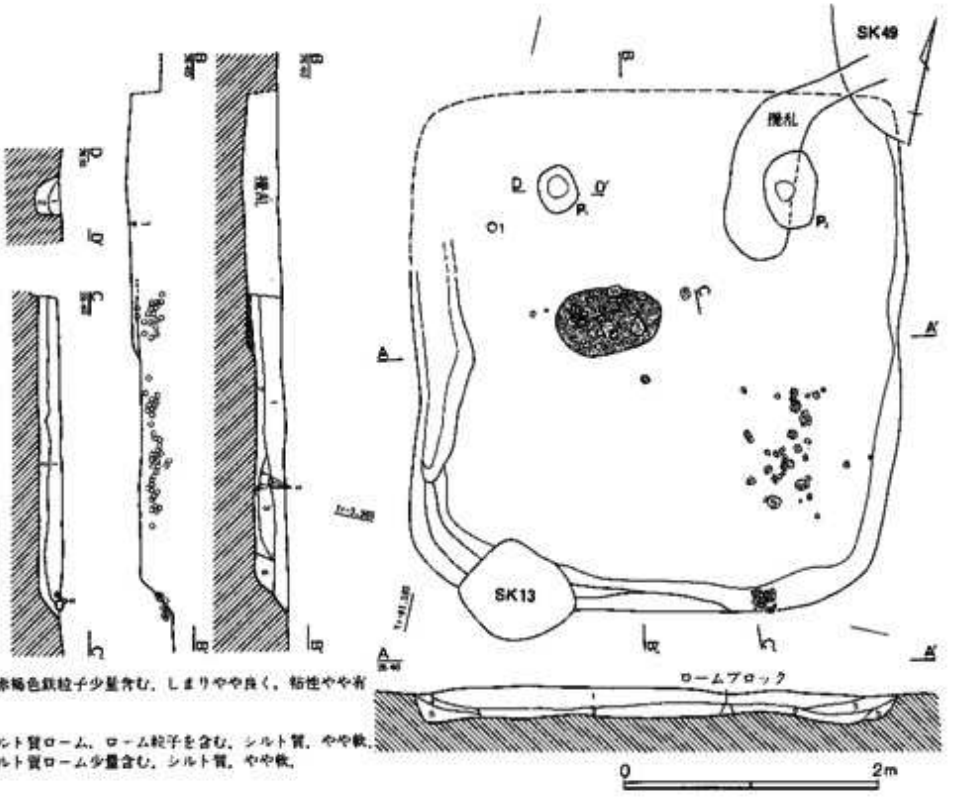
1 暗黒褐色：ローム・赤褐色鉄粒子微量含む，しまりやや欠き，粘性やや有り。
2 暗黒褐色：1より明るい，小ロームブロックやや多く，赤褐色鉄粒子多く含む，しまりやや欠き，粘性やや有り。
3 暗黒褐色：ローム粒子微量，赤褐色鉄粒子少量含む，しまりやや欠き，粘性やや有り。
4 暗黒褐色：小ロームブロック少量，赤褐色鉄小ブロックやや多く含む，1より明るい，しまりやや欠き，粘性やや有り。
5 黒褐色：小ロームブロック多量，赤褐色鉄粒子少量含む，しまりやや良く，粘性やや有り。
6 暗黒褐色：ローム・赤褐色鉄粒子少量含む，しまりやや良く，粘性やや有り。

D－D′（P1）

1 黒褐色：崩れたシルト質ローム，ローム粒子を含む，シルト質，やや軟。
2 黒褐色：地山のシルト質ローム少量含む，シルト質，やや軟。

ピットデータ

（長径/短径/深さ）
P1(37/30/21)
P2(60/42/25)



第73図　第69号住居跡実測図

SJ70·71

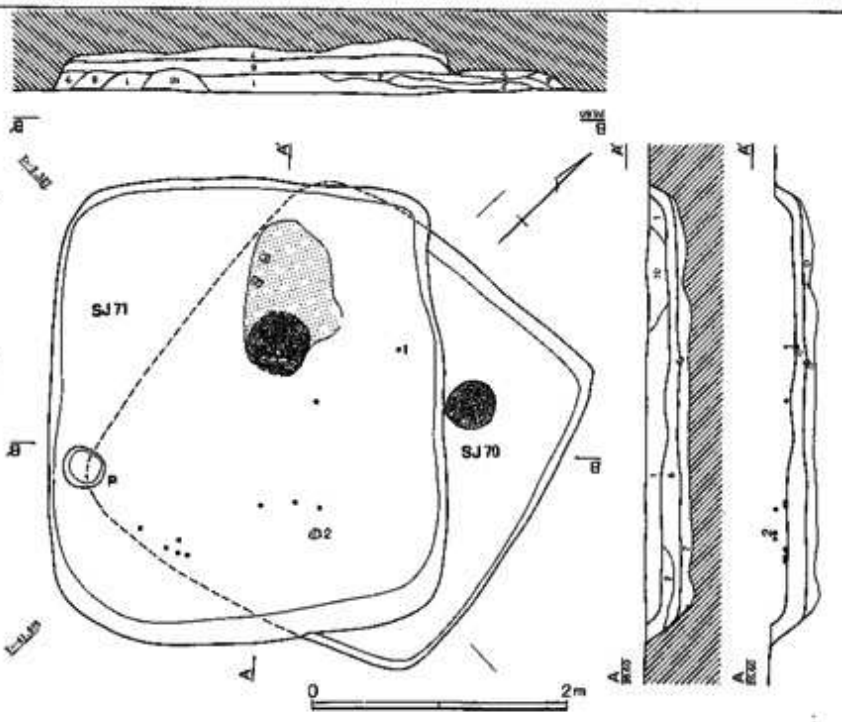
土層説明

A－A′，B－B′

1 黒褐色：ローム粒子含む。
2 黒褐色：ローム粒子1より多く含む。
3 灰褐色：炭化物含む。
4 黒褐色：粘性・しまりやや有り。
5 灰褐色：炭化物多い。
6 黒褐色：ローム粒子含む。（SJ71の堆積土？）
7 暗褐色土と黄褐色土の混合混合。（SJ71の崩落土）
8 黒褐色：ローム粒子含む。
9 黒褐色：ローム粒子8より少なく含む。
10 黒褐色：ローム粒子含むが，8，9より暗い。（撹乱土？）

ピットデータ

（長径/短径/深さ）
P1(33/31/5)



第74図　第70·71号住居跡実測図

(55) 第69号住居跡（第73図・第2-28図・図版45）

調査区北東部のC-17グリッドに位置する。当該期の遺構群ののる微高地の北東縁部に当り、すでにローム層上面は低い標高レベルにある。また、北半部分は広範囲に攪乱を受けており遺存が悪く、南壁西部がＳＫ13を切っている。

北壁の位置とその両コーナーが確認できないが、平面形態は隅丸方形と推定しておく。規模は南北軸長が4ｍ前後となろうか、軸偏差はＮ－7°－Ｗ、東西軸長は3.82ｍ、軸偏差Ｅ－10°－Ｎである。

覆土は暗黒褐色土を基調とし、確認面から床面までは約25cm弱で自然な埋没状況である。

床面は踏みしめによる硬化が認められ、わずかな凹凸が目立つ。

床面にはピットが2基認められ、柱穴と考えられる。

壁溝は南壁中央から西壁にかけて検出された。幅は最大40cmと広い部分があり、深さは約5cmほどと浅い。

炉は中央からわずかに北西コーナー方向に偏すると思われる位置に検出した。82×52cmの不整長円形でわずかに床面を掘りくぼめて、厚さ5cmほどに床面がレンズ状に焼土化しており、上面かあるいはやや浮いた状況で20数個の大小の自然礫（最大径12cm）が検出されている。全てではないがこれらのうちの何個かは枕石と考えて良いだろう。

出土土器にはあまり見るべきものがない。図示したのは攪乱土器中からの台付甕口縁部破片である。また、北東コーナー付近の覆土中の多量の礫は屋根材として使用されたものだろうか。

(56) 第70号住居跡（第74図・第2-27図・図版46・163）

調査区北東部のE-17グリッドに位置する。ＳＪ71と重複しており、土層断面からするとローム粒を含む黒褐色土でＳＪ71を埋め戻して構築されたふしがある。平面形態は北西、南西コーナーが明確となっていないが隅丸方形であろう。規模は確認面で南北軸（長軸）長が3.21ｍ、軸偏差Ｎ－10°－Ｗ、東西軸（短軸）長3.16ｍ、軸偏差Ｅ－11°－Ｎである。

覆土は黒褐色土を基調としており、確認面から床面までは約15cmと浅い。

炉は北東コーナーに偏して検出した。40×37cmのほぼ円形でほとんど掘り込みは認められず、わずかに床面がレンズ状に焼土化していた。

出土土器には椀や高杯の破片があった。1は床面直上、2は覆土上層の出土だが、投棄または流入品であろう。

(57) 第71号住居跡（第74図・第2-28図・図版46）

調査区北東部のE-17グリッドに位置する。ＳＪ70と重複し、土層断面からＳＪ70の構築に際し埋め戻されているものと思われる。

平面形態は隅丸方形で、規模は確認面で南北軸（長軸）長が3.62ｍ、軸偏差Ｎ－44°－Ｅ、東西軸（短軸）長3.08ｍ、軸偏差Ｅ－43°－Ｓである。

床面はほぼ全面が貼床となっており、床面下10cmほど粗掘りし、暗褐色土と黄褐色土を混合して埋め戻している。

床面にはピットが1基認められた。

炉は中央から北西コーナー寄りに偏して検出した。約50cmの不整円形で掘りこみはほとんどなく床面の焼土化もほとんど認められなかった。南部上面に枕石と思われる自然礫が数点検出されており、炉の西方の床面には炭化物の薄い散布が認められた。

出土土器は僅少で図示できたのは覆土中の高杯の脚部破片のみであった。

(58) 第72号住居跡（第75図・第2-28図・図版46）

調査区北東部のE-17グリッドに位置し、SR50に北東コーナーと西壁の多くの部分を切られている。また、北壁と北西コーナーが明確な状況でつかめていない。

平面形態は一応隅丸方形としておく。規模は南北軸（短軸）長が3.59m、軸偏差N－11°－W、東西軸は西壁が未確認だが長軸となり3.6m前後、軸偏差はE－13°－Nである。

覆土は暗褐色土でわずかな遺存状況であった。

北壁にピットが2基連接するように検出されている。

炉は中央から東壁に偏して検出した。径約70cmの不整形の掘り込みを行い、これを黒褐色土とローム混合土で埋めており、この上面が59×35cmの長円形で焼土化していた。

出土遺物には折返口縁の壺破片があるが、覆土中の出土である。

(59) 第73号住居跡（第76図・第2-28図・図版46・163・164）

調査区北東部のF-17グリッドに位置する。

北西コーナーと南壁をSR50に切られたうえ付近は攪乱も多く、西壁については完全に確定できておらず、北壁も明瞭に検出できていない。

平面形態は一応隅丸方形と推定しておく。規模は南北軸（長軸）長が4.5m前後となろうか、軸偏差はN－16°－Eである。東西軸長も推定の域をでないが、貼床の遺存部分からすると4m以上はあるものと考えられ、軸偏差はE－12°－Sである。

覆土は暗褐色土を基調としており厚さは10cm強、床面はほぼ全面が貼床となって最高で床面下20cmほどである。

床面にはピットが6基認められたがいずれが伴うのか判然としない。

炉は中央から北東コーナーに偏する位置と思われる場所に検出され、27×25cmの不整円形の平面形態で約5cmの厚さに床面が焼土化していた。

また、炉の南の外縁に沿って枕石と思われる自然礫が4個検出されている。

出土遺物には台付甕や折返口縁の大形壺等の破片等がある。1は炉の北側のと、西部の床面直上出土の破片が接合した。2は南部の床面からやや浮いた位置の出土で、いずれも口縁部にキザミメを持っている。3は炉の北側のやや浮いた位置、4は炉の北側の床面直上の破片が接合した。同形態の壺の中では明瞭にハケメを残しておりやや特異な存在である。いずれも遺留土器の可能性は薄く、埋没の比較的早い段階での投棄または流入の可能性が強い。

(60) 第74号住居跡（第77図・第2-28・29図・図版47・164・165）

調査区北東部のH-17グリッドに位置、西半部を工事用水路に切られ遺存はあまり良くない。

平面形態は隅丸方形と考えられ、規模は確認面で南北軸長が6.88m、軸偏差N－4°－W、東西軸長は不明で、軸偏差はE－5°－Nとなろう。仮に東西軸長が6.8mならば、当該期の住居の中では第2位の面積となる。

覆土は黒褐色土を基調として褐色土を包含し、床面付近にはローム粒を含む暗褐色土が堆積する。確認面から床面までは約10－15cmで自然な埋没状況といえる。

床面はその多くの面積が貼床となっており、最高で床面下10cmまで組掘りしてから、ロームと黒褐色土を混合して埋め戻し水平に調整している。

床面にはピットが2基認められ、いずれも主柱穴と考えられる。

北東コーナーから東壁、そして南東コーナーにかけて壁溝が検出された。幅は最高で25cmほどの部分があるが概ね20cm前後、深さは5－10cmほどの部分が多い。

炉は中央から北に偏すると思われる位置から検出した。38×24cmの不整形に、床面から6－7cm土を平らに盛上げており、その上面が部分的に焼土化している状況が観察できた。

出土土器には比較的恵まれ、台付甕のほか各種の壺類、高杯の破片等がある。1は南寄りの床面からやや浮いて、2は東壁北部の周部、4は東壁寄りの床面からやや浮いて、3は南東コーナー付近の床面直上から潰れた状況での出土で、表面に篭目が確認できた。10は同じく南東コーナー付近のやや浮いた状況での出土である。3が遺留土器の可能性が高いほかは投棄または流入であろう。

また、炭化材の出土状況から、本住居跡は火災を被っているものと思われる。

(61) 第75号住居跡（第78図・第2-29図・図版47・48・165）

調査区北東部のD-18グリッドに位置する。平面形態はやや南北に長く隅丸（長）方形である。規模は確認面で南北軸（長軸）長が5.47m、軸偏差N－30°－W、東西軸（短軸）長4.33m、軸偏差E－29°－Nである。

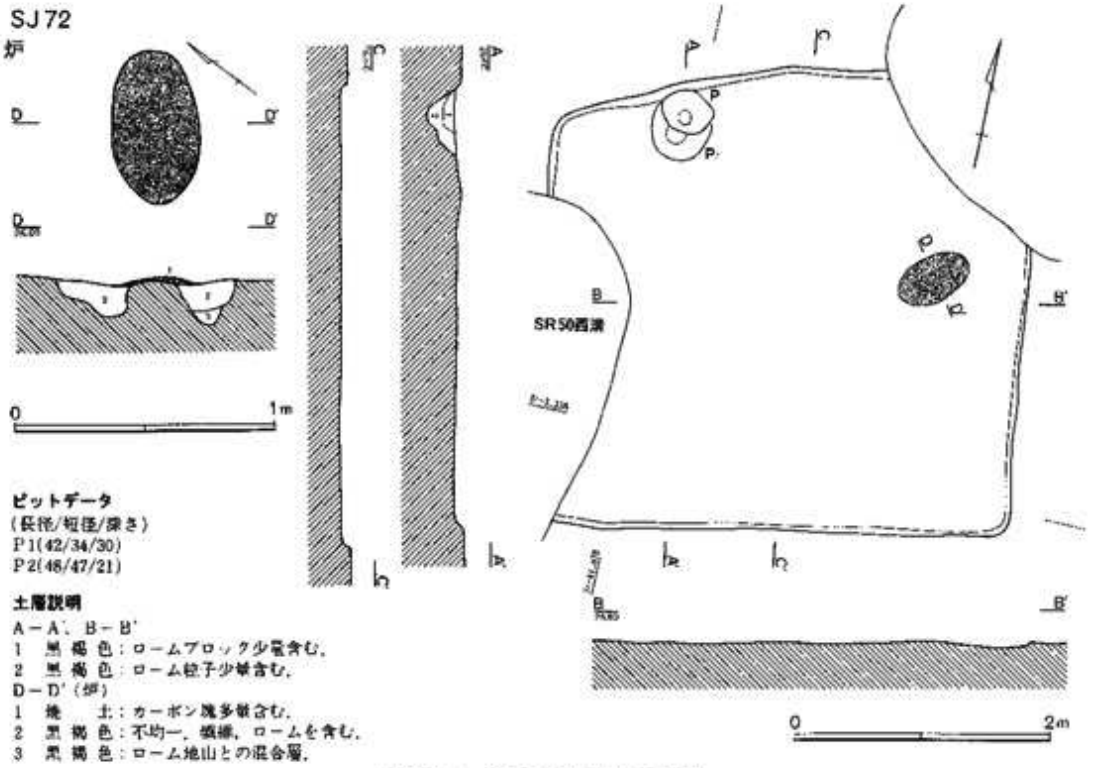
覆土は上－中層が灰褐色土と褐色土、下層が炭化物（材）や焼土を含む褐灰色土ないし褐色土を基調としており、自然な埋没状況で、確認面から床面までは約35cm強と本遺跡の当該期住居中では最も深く遺存状況も最良の部類である。

床面にはピットが5基認められ、P1－P3、P5が主柱穴である。P4は貯蔵穴で60×60cmの円形で深さは23cmほどである。

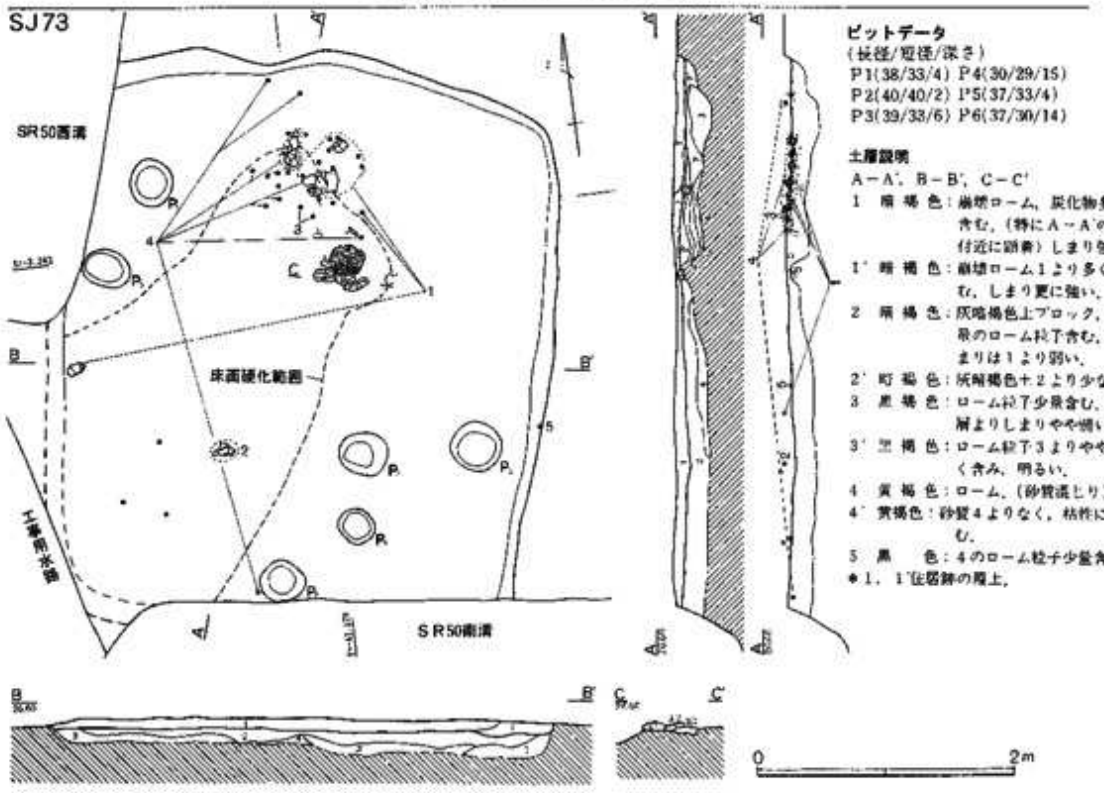
炉は床面中央とその北に40cmほど離れた位置、2個所に検出した。南の炉は22×20cmの不整形で掘り込みの深さは僅かでブロック状の焼土の堆積がみられた。一方北側の炉は遺存が悪く、住居の廃絶段階には機能していなかった可能性が強い。

出土土器には台付甕や壺等がある。1は口縁部にキザミメを持ち中央から東寄りの覆土上層、2は北東コーナーの壁立上がり部分と覆土中の破片が接合した。いずれも投棄または流入であろう。
炭化材や覆土最下層の炭化物、焼土の出土から、本住居跡は火災を被っている可能性が強い。

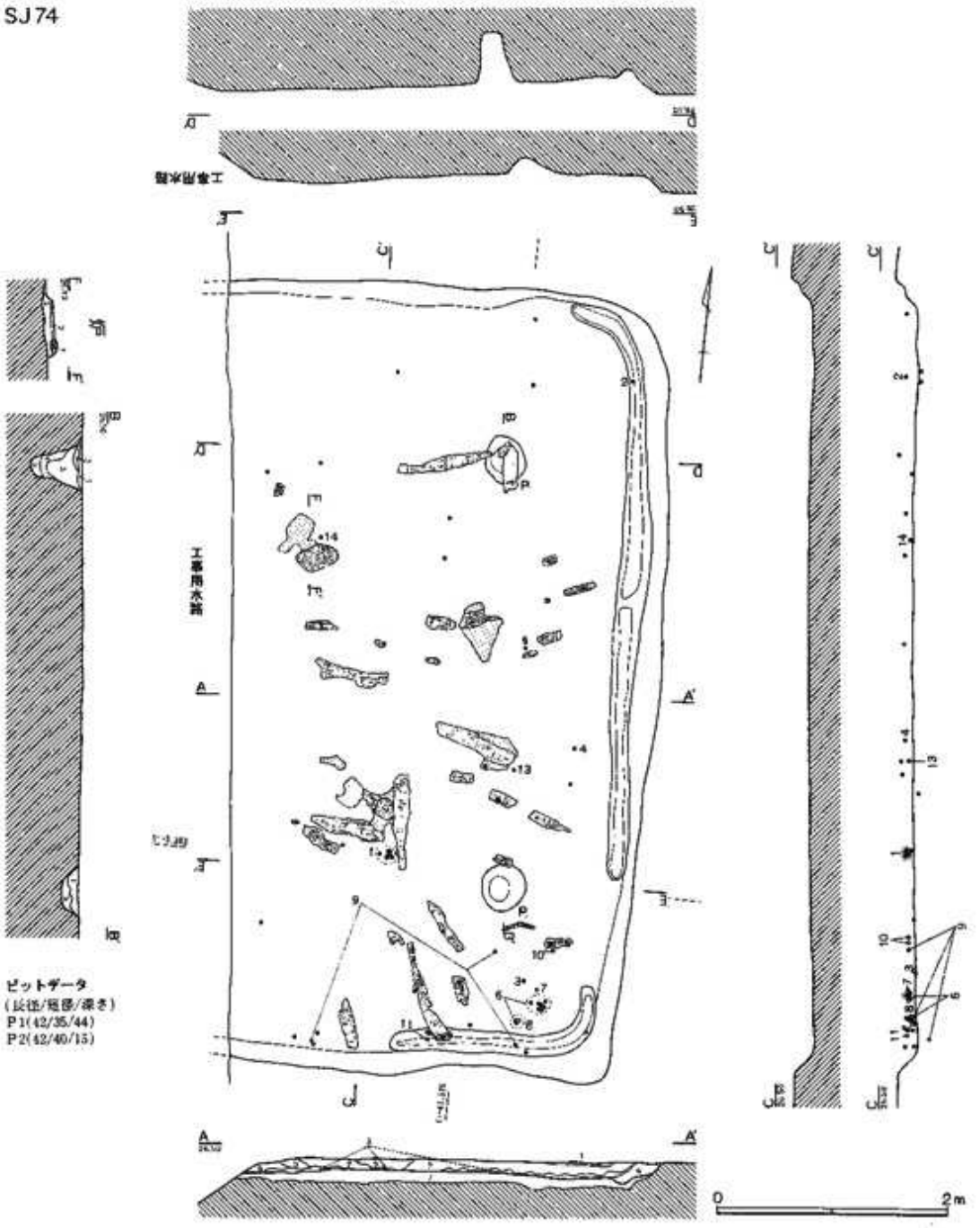
また、炉の付近からは礫の多量の出土があったが屋根材として利用されていたものだろうか？



第75図　第72号住居跡実測図



第76図　第73号住居跡実測図



土層説明

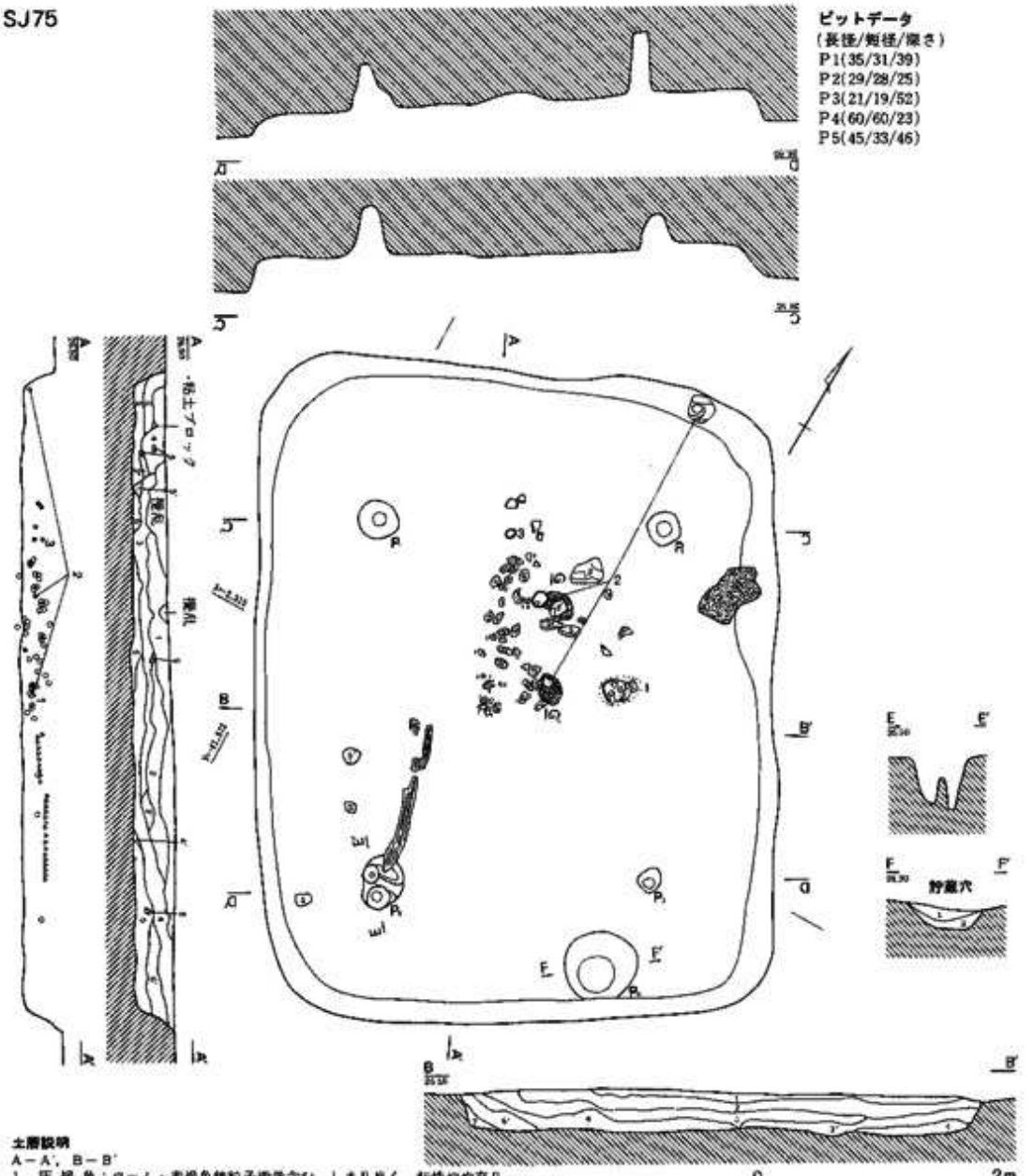
A－A'
1　黒褐色：ローム粒子不均一に含む。
2　黒褐色：ローム粒子，炭化物粒子均一に含み，1よりも黒色味帯びる。
3　暗褐色：ローム粒子多く含み，2よりも明るい。
4　黄褐色：ローム粒子と黒褐色土が混在。
5　褐　色：ローム粒子3より多い，炭化物も含む。
6　褐　色：ローム粒子多く含み，3よりやや明るい。
7　黄褐色：ローム粒子と黒褐色の混合土。（貼床土）

B－B'
1　黒褐色：ローム粒子微量含む，均質で，しまりやや有り。
1　黒褐色：ローム粒子多量含む，均質で，しまりやや有り。
2　黒褐色：ローム塊含む，均質で，しまりやや有り。
3　黒褐色：均一，植物繊維含み，1，2より明るい。
4　暗褐色：3と5の漸移層，ローム塊含む，しまりやや弱い。（P1の底の調整土？）
5　黄褐色：しまり・粘性共強い。（地山？）

F－F'（炉）
1　焼土層
2　炭化物層
3　黄褐色：植物繊維少量含む，しまり・粘性共強い。

第77図　第74号住居跡実測図

SJ75



土層説明

A－A′，B－B′

1　灰褐色：ローム・赤褐色鉄粒子微量含む，しまり良く，粘性やや有り。
2　褐　色：ローム・赤褐色鉄粒子やや多く，小礫少量含む，しまり良く，粘性やや有り。
3　褐　色：中ロームブロック，赤褐色鉄粒子やや多く，小礫少量含む，2より暗い，しまり良く，粘性やや有り。
3′　黒褐色：中ロームブロック，赤褐色鉄粒子少量含む，3より暗い，しまりやや欠き，粘性強い。
3″　褐　色：小ロームブロック，赤褐色鉄粒子少量含む，しまり・粘性やや欠く。
3‴　褐　色：ローム・炭化物小ブロック，赤褐色鉄粒子少量含む，3より暗い，しまり・粘性やや有り。
4　灰褐色：炭化材，焼土少量，中ロームブロック，小礫多く含む，しまり・粘性やや欠く。
4′　灰褐色：ロームの混入が4より少ない。
5　黒褐色：小ロームブロック，赤褐色鉄粒子少量，礫やや多量，炭化物微量含む，しまり・粘性欠く。
5′　褐　色：5が粘土質になっている。
6　明褐色：ローム・赤褐色鉄粒子微量含む，しまり良く，粘性やや有り。
6′　黒褐色：6より暗い，しまりやや欠き，粘性やや有り。
7　褐　色：小ロームブロック・粒子やや多く含む，しまり・粘性欠く。（埋戻崩壊土）

F－F′（貯蔵穴）

1　黒褐色：シルト質，ローム微量含み，軟質。
2　黒褐色：シルト質，ロームの含有1よりやや少なく，暗い。

G－G′（炉）

1　赤褐色：ローム・焼土粒子やや多く含む，しまり・粘性欠く。
1′　暗褐色：焼土小ブロック多く含む，しまり欠き，粘性やや有り。
2　明褐色：ローム・赤褐色鉄粒子少量含む，しまり・粘性欠く。
3　明褐色：炭化物粒子多く含む，しまり欠き，粘性やや有り

第78図　第75号住居跡実測図

(62) 第76号住居跡（第79図・第2-30図・図版48・165）

調査区東部やや北寄りのE-18グリッドに位置する。南壁をSR50に僅かに切られる。

壁がやや外方に膨らむ部分があるが、平面形態は隅丸方形としてよい。規模は確認面で南北軸が長軸になると思われ約4.6m、軸偏差N－14°－E、東西軸長4.17m、軸偏差E－16°－Sである。

覆土は暗褐色土を基調とし、最下部に部分的に灰褐色土の堆積がみられる。確認面から床面までは約10cm前後と浅い。

床面にはピットが4基認められ主柱穴と判断されるものである。

炉は明確な形で検出できなかったが、P2の西側に120×90cmの不整形の炭化物の散布が認められている。

出土土器には高杯等の破片があった。1はP3東の床面直上の出土で埋没初期の投棄土器であろう。

また、東南コーナー付近の覆土中に粘土の薄い堆積が見られた。

(63) 第77号住居跡（第80図・第2-30図・図版49）

調査区東部やや北寄りのE-18グリッドに位置する。大部分をSR50北溝に切られ、明確に検出できたのは南東コーナー部分にすぎないが、当該期の住居の貯蔵穴が南壁東部に設置されることからP2を貯蔵穴と判断して、住居跡として取扱っておく。

僅かに遺存した覆土は暗褐色土であった。

床面にはピットが2基認められP1が柱穴の可能性を有し、P2は貯蔵穴で40×35cm、深さは27cmである。

出土土器には壺の破片等がある。1は貯蔵穴内部のものと東南コーナーでやや床面から浮いて出土した破片とが接合したもので埋没初期の投棄土器であろう。

(64) 第78号住居跡（第81図・第2-30・31図・図版49・50・165・166）

調査区東部のG-18グリッドに位置し、南東コーナーはSR54に切られ確認できていない。

平面形態は南北にやや長い隅丸方形で、規模は確認面で南北軸（長軸）長が6.72m、軸偏差N－3°－E、東西軸（短軸）長5.90m、軸偏差E－3°－Sである。

覆土は黒褐色土を基調としており、確認面から床面までは約20cmで、東の部分が一部貼床となっている。基盤層は礫を含んだシルト質のローム土で、完掘した地山面に礫が目立っている。

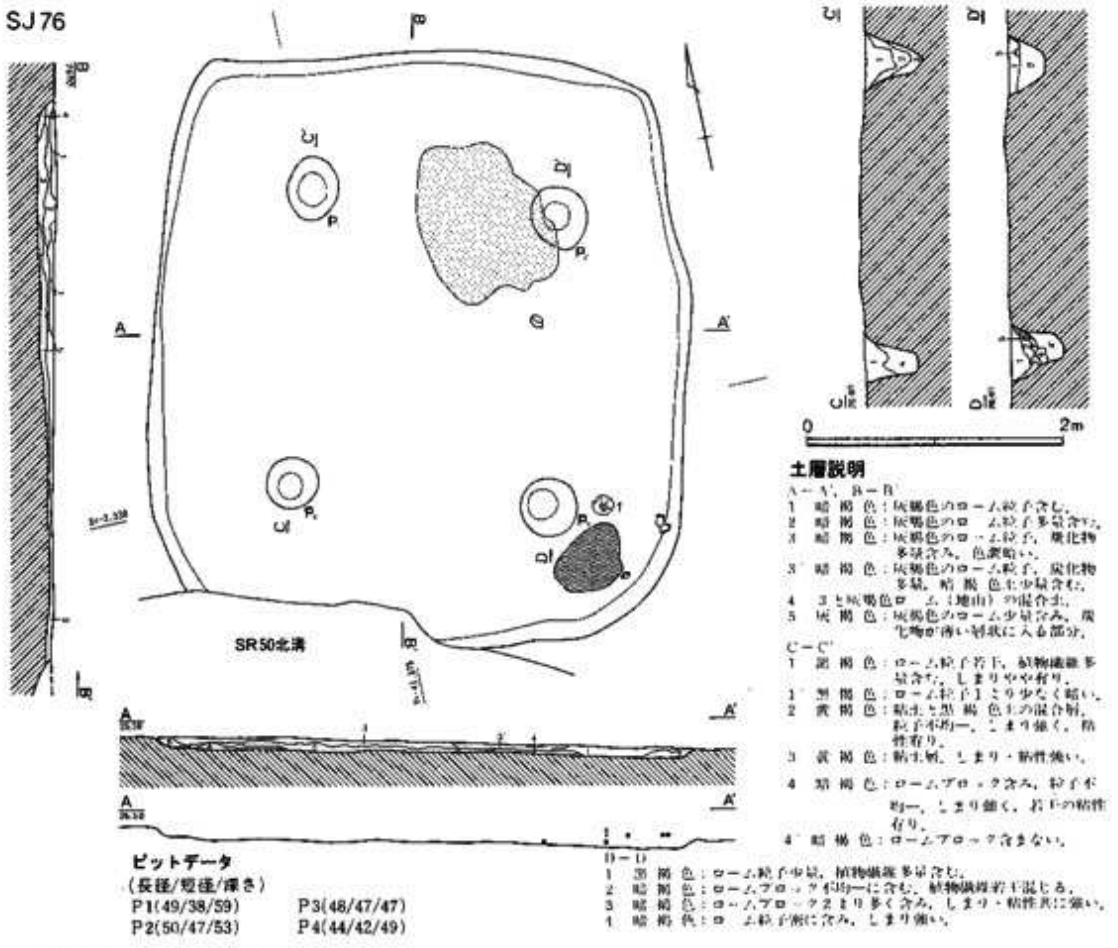
床面にはピットが4基認められた。P1、P3が柱穴、P2が貯蔵穴となろうか。

壁溝は東壁と南壁東部から西壁を経て北壁中央部に検出された。幅は広い所で30cmを越える部分があり、深さは最高約10cmである。

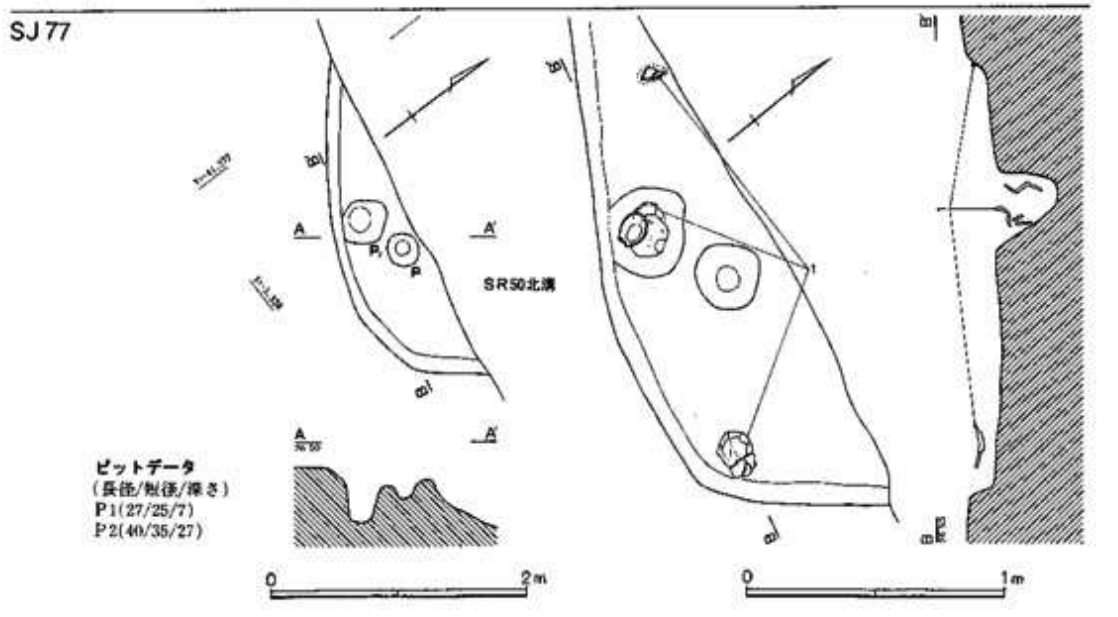
炉は中央から北壁に偏した位置に検出した。直径約90cmの範囲で深さ10cmに掘り込みがありその上面が45×37cmの不整形に焼土化する部分がある。また、この掘り込みの南側には自然礫の枕石2個が置かれており、北西側に炭化物の散布が認められた。

出土土器には恵まれており、台付甕、壺、高杯等が出土し、出土位置はP4付近に集中する。

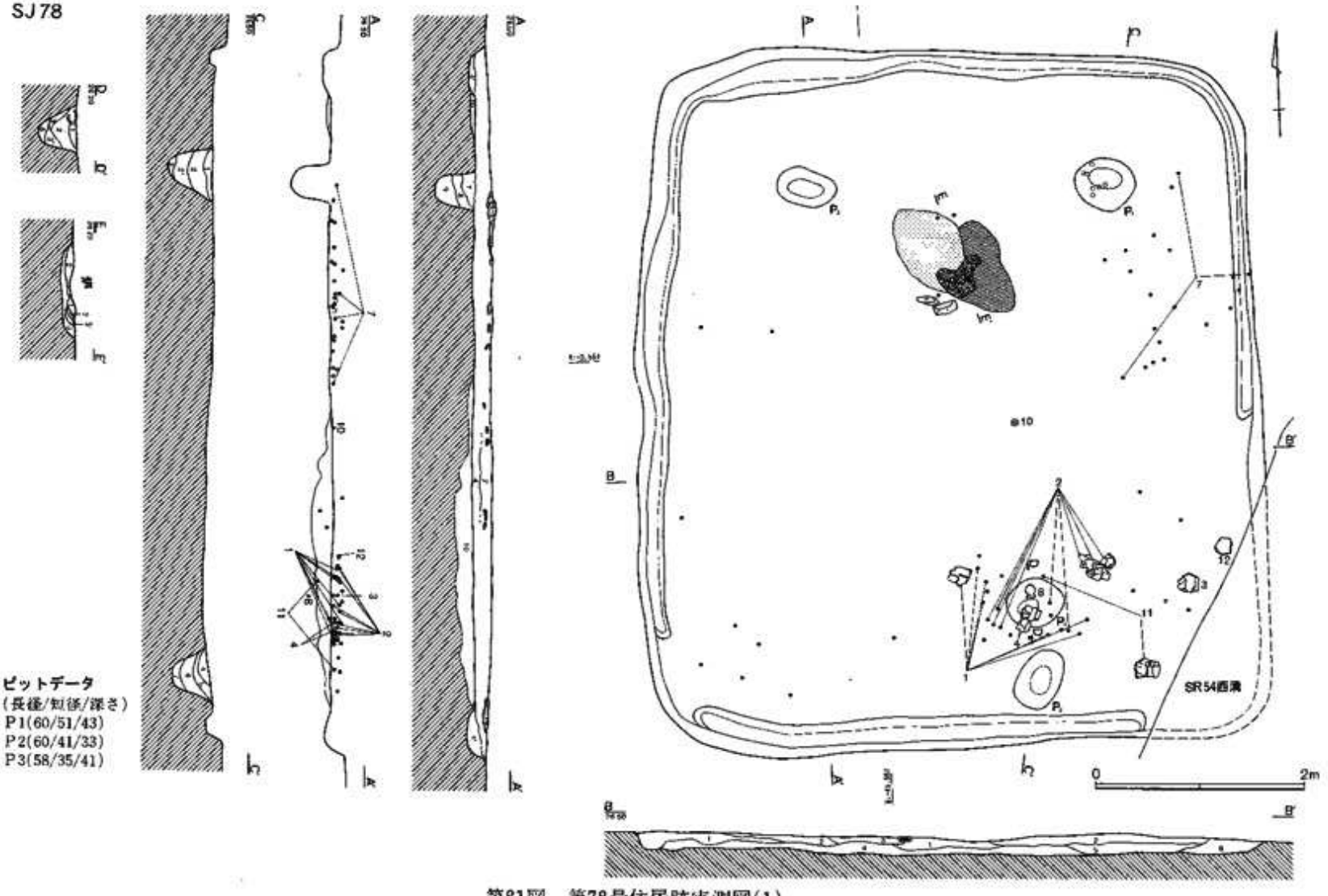
1・2・4はP2の周囲床面からやや浮いて、8はP4の北部の覆土上位出土、3・11・12は南東コーナー



第79図　第76号住居跡実測図



第80図　第77号住居跡実測図



第81図　第78号住居跡実測図(1)

土層説明

A－A′，B－B′

1　黒 褐 色：ローム粒子不均一に含む．
2　黒 褐 色：ローム粒子多いが，1よりやや暗い，一部に焼土含む．
3　黒 褐 色：ローム粒子，炭化物含む．
4　黒　　色：均一，黒色味強い．粘性・しまり強い．
4′　黒　　色：4にロームブロック含む．
5　褐　　色：4より明るいが，2よりローム粒子少ない．
6　暗 褐 色：ローム粒子多く含む．
7　黒 褐 色：繊維均一に含む．しまりやや有り．（P3覆土）
8　黒 褐 色：ローム粒子少量含む．粘性やや有り．（P3覆土）
9　黒 褐 色：ローム粒子2より少ない．粘性やや有り．（P3覆土）
10　黒　　色：ロームブロック混入．（貼床土）

C－C′

1　黒 褐 色：ローム粒子少量含む．しまりあり．
2　黒 褐 色：ローム塊1より多くなり，明るい色調．しまりやや有り．
2′　黒 褐 色：ローム塊2より少ない．
3　褐　　色：粘土質．
4　黒 褐 色：赤色焼土不均一に含み，しまり有り．
5　黒 褐 色：1より焼土多く，しまりやや有り．
6　黒 褐 色：繊維不均一に含み，粘性有り．しまりやや有り．
7　暗 褐 色：崩壊ローム塊含む．粒子粗い．

D－D′

1　黒 褐 色：ローム粒子少量含む．しまり有り．
2　黒 褐 色：ローム粒子少量，繊維多量に含み，しまりやや有り．
3　暗 褐 色：ローム塊多く，繊維均一に含む．
3′　暗 褐 色：ローム粒子を3に含む．
4　褐　　色：粘土質．（C－C′の3と同じ）

E－E′（ガ）

1　赤 褐 色：しまり弱く，もろい．不均一に炭化物混入．
2　黒　　色：炭化層．3，3′の粘土の焼けたもの．
3　黄 褐 色：ブロック状で粒子粗く，粘性強い．

第81図　第78号住居跡実測図(2)

付近のやや浮いた位置、10は中央部床面からやや浮いた状況の出土である。
8が遺留土器の可能性がある以外は投棄または流入の可能性が強い。炭化材と焼土が覆土の中ー上層にかけて出土している状況を図示しておいたが、やや埋没した後に火災を被ったものと思われる。

(65) 第79号住居跡（第82図・第2-31図・図版51）

調査区中東部やや南のJ-18グリッドに位置し、北側を工事用水路に切られている。当該期の遺構群ののる微高地の縁部から低位方向にはずれており、最も近い住居のSJ68まででも約20mほどあって集落内では孤立してかけ離れた位置に所在する。

平面形態は隅丸方形と考えられるが西壁が東壁よりやや短く僅かに台形状を呈すると思われる。

規模は確認面で東西軸長5.18m、軸偏差E－26°－N、南北軸長は明かでないが、軸偏差はN－29°－Wである。

覆土は黒褐色土を基調としており、10cmほどの薄い遺存である。

床面はほぼ全面が貼床となっており、黄褐色土と黒褐色土を混合して埋め戻して調整している。

床面にはピットが1基認められたが住居に伴うものか判断しがたい。

壁溝は東壁（南の一部で切れる）および南東コーナーから南壁を経て南西コーナー部にかけて検出した。幅は最大で30cmほどあり、深さは10cm強の部分が多い。

出土土器にはあまり恵まれず、土師器の破片が散漫に出土している。1は覆土中、2は同じく西壁ぎわの覆土中の出土でいずれも流入の可能性が強い。

また、西壁と東壁ぎわで床面からやや浮いた状況で灰白色の粘土の堆積が見られた。屋根材として用いられたものが落下した可能性を指摘しておく。

(66) 第80号住居跡（第83図・第2-31図・図版51・166）

調査区東部の部のF-19グリッドに位置する。SR52・53両周溝墓に切られ遺存が悪く、北壁、東壁はほとんど把握できておらず、覆土と考えられる僅かな暗褐色土の広がりで推定した範囲を破線で示しておく。

平面形態は隅丸方形を推定しておく。規模は南北軸長が4.2m、東西軸長が4.5m前後となろうか。南北軸偏差はN－42°－W、東西軸偏差はE－43°－N程度となろう。

覆土は暗褐色土を基調としていたが、きわめて薄い遺存状態であった。

床面にはピットが3基認められた。P1、P2は柱穴と考えられるが、いずれも浅い掘り込みである。ほかの柱穴は前述の周溝墓の溝内にかかるものと思われ検出できていない。

P3は貯蔵穴で81×51cm、深さは最高で23cm、西壁南部に接して掘り込まれている。

住居そのものの遺存が悪いせいもあり出土土器は僅少である。1は貯蔵穴の東側（住居内方）の立上がり部分の底面からやや浮いた状況で出土した小形平底坩で、遺存も良く遺留土器の可能性が強い。これ以外には貯蔵穴内で自然礫が数点出土したほか、見るべき遺物は無い。

(67) 第81号住居跡（第84図・第2-31図・図版52・166）

調査区東部のG-19グリッドに位置し、住居の南西部分約1／3をＳＲ54の北溝に切られる。

平面形態は隅丸方形と考えて良く、規模は南北軸は正確には不明だが長軸となり3.6mほど、軸偏差はＮ－0°－Ｅ、東西軸長は3.5m、軸偏差Ｅ－0°－Ｓである。

覆土は黒褐色土と明褐色土の混合土を基調としており壁周囲には黒褐色土が堆積する。確認面から床面までは最大15cmと浅い。床面はほぼ全面が貼床となっており、最高で床面下15cmまで粗掘りし比較的均質な褐色土で埋め戻している。床面はあまり踏み固められておらず全般にやや軟弱な状況にある。

床面にはピットが2基認められた。覆土除去後の検出だが、はたして住居に伴うか判然としない。

炉は中央から北に偏して検出した。28×23cmの不整円形で僅かに掘りくぼめられており、床面が薄くレンズ状に焼土化していた。

出土土器には台付甕や高杯等の破片がある。1・2は覆土中、3は東南コーナーの床面直上、6は東南部の床面からやや浮いた状況の破片が接合したもの、7は中央付近の床面直上出土の破片が接合した。いずれも投棄または流入の可能性が強く確実な遺留土器はない。

8（第2－32図）は覆土中出土の垂飾と考えられる石製品で、大きさは2.2×1.92cm、厚さは最大で2.9mm、縁に寄った位置に直径2.3mmの穿孔がある。穿孔は両側から行われており、その周囲に穿孔と同心円の浅いくぼみが形成されている。側面部に軽く磨いた痕跡があり一部僅かに破損するる。緑泥片岩製で重さは1.53ｇである。

また、炉の周囲と北の床面から126×118cmの範囲で炭化物粒を検出している。稼動時の炉に起因するのだろう。そして、炉のすぐ南の床面から4－5cmの覆土中2個所で粘土を検出している。こちらは屋根材に使用されたものと推定しておく。

(68) 第82号住居跡（第85図・第2-32図・図版52・53）

調査区東部H-19グリッドに位置する。北西コーナー部をＳＲ54に、南東部を工事用水路に切られ遺存が悪い。やや北壁が外方に膨らむが平面形態は隅丸方形と推定しておく。規模は南北軸が不明だが、軸偏差はＮ－7°－Ｗ、東西軸長5.45m、軸偏差Ｅ－8°－Ｎである。

覆土の掘下げ過程の比較的浅いレベルで59×43cmの不整円形の焼土を検出したので、そのレベルで周辺を精査した結果、僅かな硬化面を検出したのでこの面を床面と判断した。その後、この床面下の貼床ではないかと考えられた暗褐色・黒褐色の床面下の土を除去したところ再び75×52cmの焼土が検出され、これも炉と判断された。結局の所、古い住居を何らかの理由で少し埋戻して新たに住居を造り直しているのではないかと考えられたのである。(1)に示したのが新住居の、(2)が旧住居の状況である。埋戻された住居の埋戻し土の色調が新住居の覆土と似ていることもあり検出されたピットのうち柱穴の可能性を有すＰ1のほかは新住居との共伴の決め手がない。一方旧住居の床面からは新住居と重複するＰ1、Ｐ7のほか新たに5基のピットが検出できた。Ｐ2、Ｐ3はＰ1と共に主柱穴を構成するものだろう。

また、これも旧住居に伴うものだが検出面の大部分で壁溝を確認した。壁とやや離れた位置で、

幅は10－25cm、深さは10cm前後の部分が多い。

新住居の炉は17cmの深さの掘方を有しており、北西側の表面が8cmほどの厚さで焼土化していた。旧住居の炉は75×52cmの大きさで18cmほど深さの掘方を有し、中央部分の表面が径60×40cmの範囲で焼土化していた。

出土土器は僅少で、図示できたのは旧住居の床面から出土した1の壺口縁部のみである。一部ＳＲ54の周溝内の破片が接合したがもともとは本住居への投棄土器であろう。

(69) 第83号住居跡（第86図・第2-32図・図版53）

調査区東部のＧ-20グリッドに位置する。

平面形態は隅丸方形である。規模は確認面で南北軸（短軸）長が3.18ｍ、軸偏差Ｎ－32°－Ｗ、東西軸（長軸）長3.85ｍ、軸偏差Ｅ－32°－Ｎで、当該期の住居中やや小形の部類に属す。

覆土は黒褐色土が西半部分に僅かに遺存、東半部分は確認時に床面がすでに露出していた。

床面はほぼ全面が貼床で、深さ最高で床面下10cmほどあり、地山のシルトロームと黒褐色土を混合して埋め戻している。

床面にはピットが2基認められ、Ｐ1の性格は不明だが、Ｐ2は位置的に貯蔵穴の可能性が残る。

炉は中央から東壁寄りに偏して検出したが遺存が良くない。長さ39cmの不整のＵ字形に床面が薄く焼土化している状況が確認できた。

出土土器は当然のことながら少ない。1は大形の壺の口縁部破片、2は底部である。いずれも西壁寄りのＰ2周辺の出土で、いずれも投棄された土器であろう。

(70) 第84号住居跡（第87図・第2-32図・図版53）

調査区東端部のＦ-23グリッドに位置する。住居の西半部分を工事用の遊水池とＳＲ57の東溝に切られたうえに覆土も浅く、東西に攪乱がはしり遺存が悪い。

平面形態は遺存する北東、南東コーナーからすると隅丸方形である。規模は南北軸長が5.76ｍ、軸偏差Ｎ－44°－Ｅとわかるが、東西軸長は不明、軸偏差はＥ－41°－Ｓである。

覆土は黒褐色土が最高でも約10cmの厚さに遺存するのみである。床面全体に僅かに浅い貼床を形成する。

床面にはピットが3基認められたが、Ｐ2、Ｐ3は柱穴の可能性を残す。

炉は遊水池の削平部分に僅かに検出された。遺存最大幅は25cmで、床面が僅かに焼土化する。

出土土器は少なく図示できたのは1の壺の口縁部で、Ｐ1の覆土中の出土である。

(71) 第85号住居跡（第88図）

調査東端部のＦ-23グリッドに位置する。工事用水路とＳＲ59に大部分を削平されて遺存が悪い。遺存部分から推定される平面規模の軸長が少なくとも3.4ｍ以上を有し、住居跡に通有の貼床状の施設が認められるので一応住居と判断して記述を進める。

平面形態は北西コーナーから隅丸方形と推定しておく。規模はは確認面で南北軸長が最低3.4ｍ以

上で、軸偏差はN－38°－Eである。工事用水路の南に本住居の一部が確認できないので4mを越える軸長にはならないと考えられる。

覆土は当該期の住居に通有の黒褐色土を基調とし、深さ10cm前後に貼床を施している。

床面には柱穴の可能性があるピットが1基確認できた。出土土器は僅少で図示できるものがない。

(72) 第86号住居跡（第89図・図版54）

調査区東端部のG-24グリッドに位置し、南西コーナー部分をSR59の東溝に、北東コーナーをSR62に切られる。確認面から床面まできわめて浅く壁の遺存が悪いが、平面形態は隅丸方形としてよく、規模は確認面で南北軸（短軸）長が5.23m、軸偏差N－45°－E、東西軸（長軸）長6.20m、軸偏差E－42°－Sで当該期の住居としては大形の部類に属する。

覆土は暗褐色土を基調としていたがほとんど遺存していない。深い部分で10cmほどであった。

床面にはピットが3基認められ、いずれも住居に伴うものと思われる。また、中央やや南の部分から北壁にかけての床面は踏み固めによるものか小さな凹凸が形成されている。

炉は中央から西壁にかなり偏した位置に検出、45×33cmの不整長円形で僅かな掘りくぼめられ表面が薄く焼土化していた。南北90cm、東壁側に100cmほど、幅20－30cm、平面T字で粘土を主体にした高さ2－3cmの高まりが炉を取巻くように検出された。枕石の代用となる施設かと思われる。

出土土器には台付甕等の細片があるが図示に耐えるものがない。土器以外にはP2の南西の床面直上から出土した石包丁を彷彿とさせる石製品がある（第32図）。長さ4.65cm、最大幅2.58cm、最大厚5.0mmで両側穿孔の2個の小孔を有す。緑泥片岩製で重さ10.64g。

また、P1の南側から自然石が8個まとまって出土している。重さはそれぞれ235g、207g、186g、182g、154g、122g、112g、62gである。少々軽いかもしれないが、8個という数を重視して、編物石、所謂八人坊主（ハチニンボウズ）の可能性を指摘しておく。

(73) 第87号住居跡（第90図・第2-32図・図版54）

調査区東端部のF-24グリッドに位置し、北壁をSR61に、南部分をSR62北溝に切られる。東南コーナーが僅かにSR62の方台部で確認されている。

平面形態は隅丸（長）方形で、規模は南北軸（長軸）長が5.9m前後となろうか、軸偏差はN－8°－W、東西軸（短軸）長は4.86m、軸偏差E－11°－Nである。

覆土は黒褐色土を基調としていたがほとんど遺存していない。

床面にはピットが6基認められ、P1、P5、P6は主柱穴の、P3は貯蔵穴の可能性がある。

炉は中央から北壁に偏して検出した。42×30cmの不整円形で焼土化する部分があり、床面より僅かに盛上がるように遺存していた。

出土土器には台付甕等があるが、いずれも小破片辺で点数も僅少である。

炉の北西側に床面に薄く粘土が堆積していたが、屋根材に起因するものだろうか。

SJ 79

土層説明

A－A′，B－B′

1　黒褐色：ローム粒子，植物繊維少量含む．均一で，しまりやや有り．

2　黒褐色：ローム粒子，植物繊維少量含む．（貼床土）

2′　2と3の混合土層．粘性やや有り．

3　黄褐色：ローム粒子，植物繊維少量含む．しまり・粘性強い．

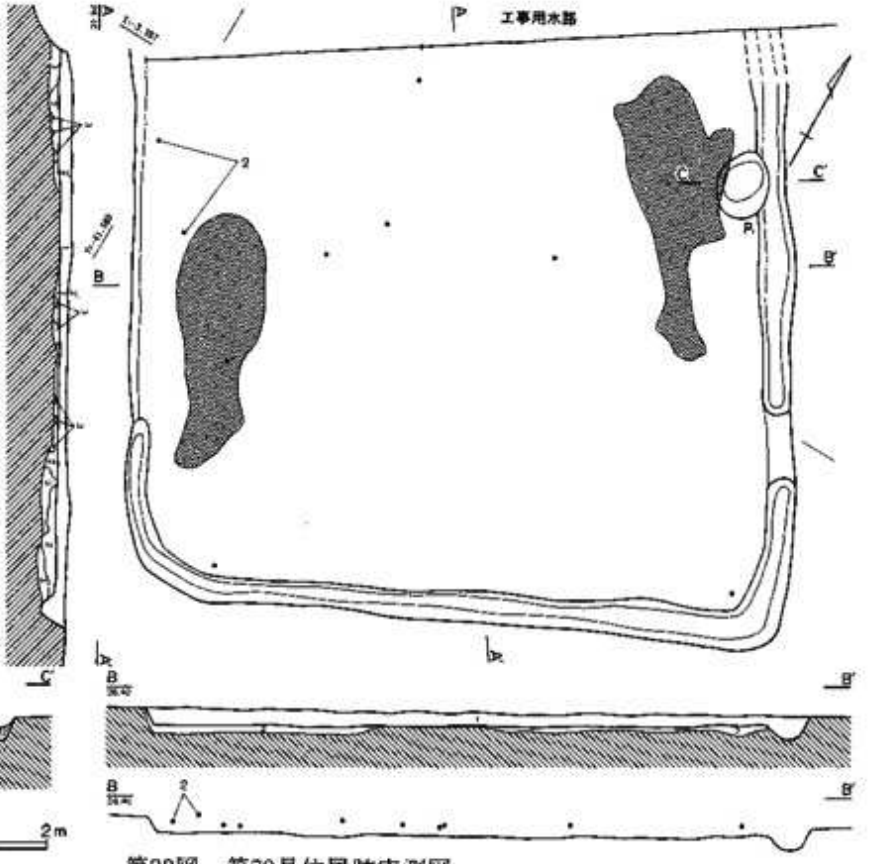
C－C′

1　黒褐色：ローム粒子，植物繊維少量含む．しまりなし．

2　暗褐色：ローム粒子，植物繊維1より多い．不均一．しまり・粘性やや有り．

2′　暗褐色：2より均質．（壁溝覆土）

3　明褐色：地山と2の混合土層．しまり・粘性共強い．



第82図　第79号住居跡実測図

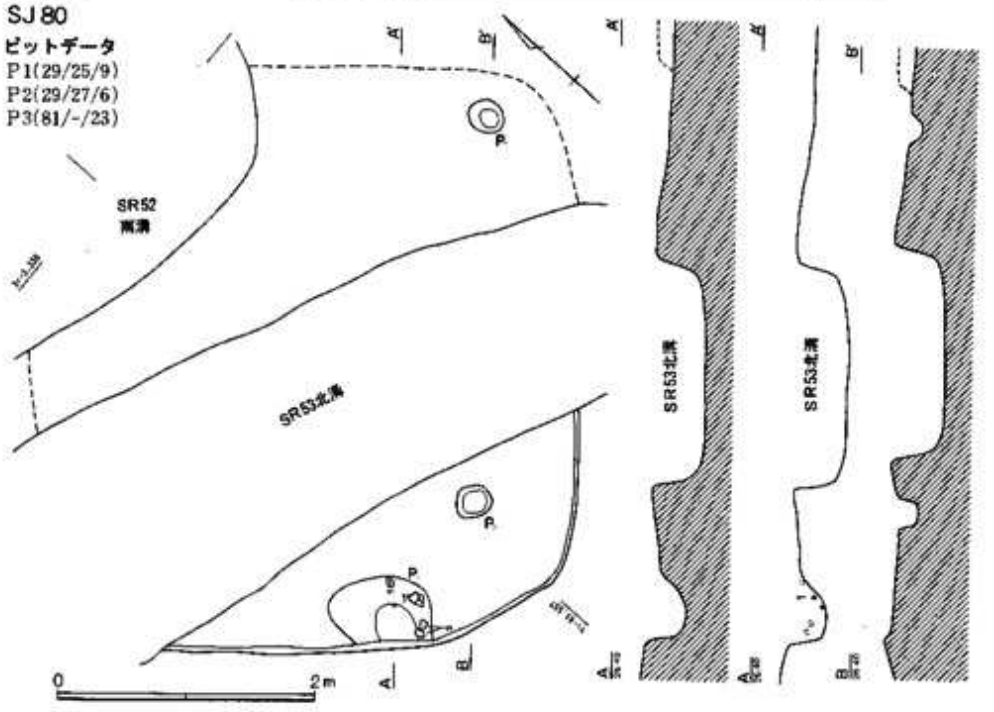
SJ 80

ピットデータ

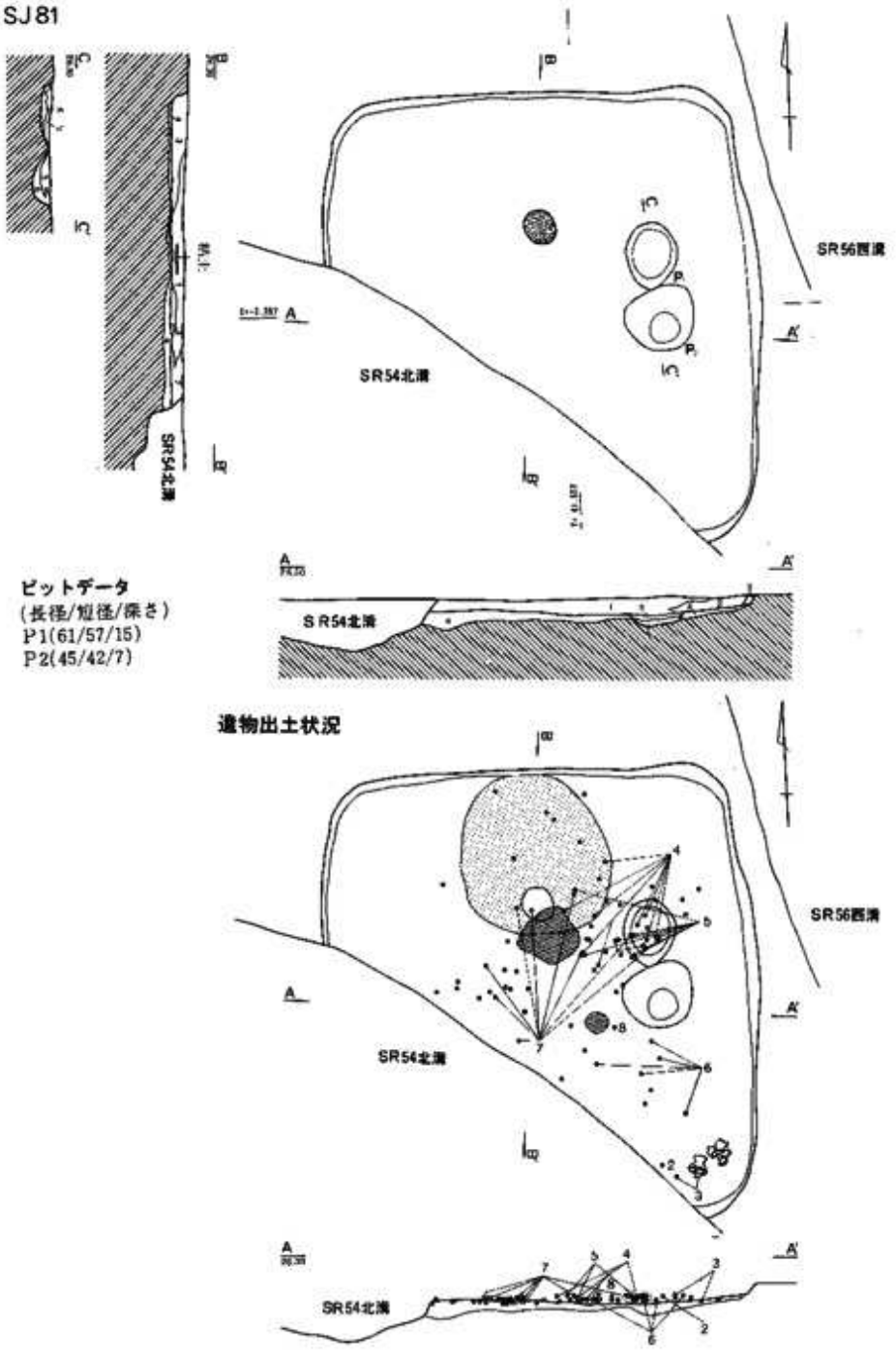
P1(29/25/9)

P2(29/27/6)

P3(81/-/23)



第83図　第80号住居跡実測図



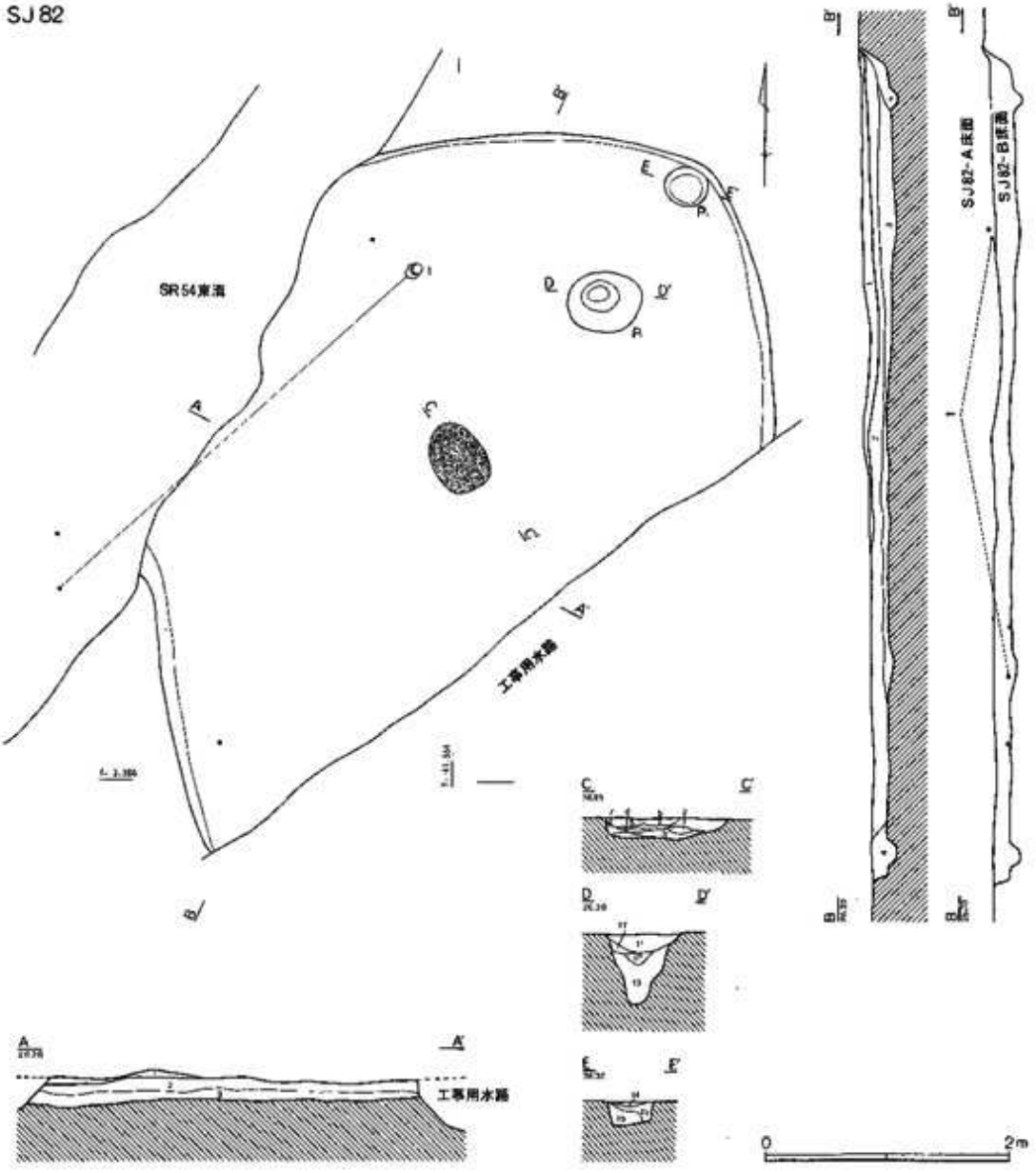
土層説明

A－A'～C－C'

1　黒褐色と明褐色の混合層：不均一，ローム粒子，繊維不均一に分布，しまりやや有り．
2　黒 褐 色：均一，粘しまり・粘性共1よりやや強い．
3　黒 褐 色：黒褐色土主体に，明褐色土1同様不均一に混ざる，しまり・粘性やや有り．
4　褐　　色：均一で，しまり・粘性共有り．(粘床土)
5　黒 褐 色：少量のローム粒子，繊維含む，しまり弱い．
6　灰 褐 色：粘質土，砂質の青灰色土不均一に含み，粘性強い．

0　2m

第84図　第81号住居跡実測図



土層説明

A－A′，B－B′

1　暗灰褐色：ローム崩壊土粒多量含み，2との境に一部薄く炭化物の層が入る．床面直上の層と思われ，下位は部分的に硬質．

2　暗褐色：ローム微粒子多量含み，硬質．

3　黒褐色：ローム微粒子少量含み，硬質．

4　灰褐色：暗黄褐色粘質土（壁崩壊土）

D－D′

4　暗灰色：少量の繊維含む．しまりないが，粘性強い．

4′　暗灰色：1に2～5mmの礫含む．

G－G′

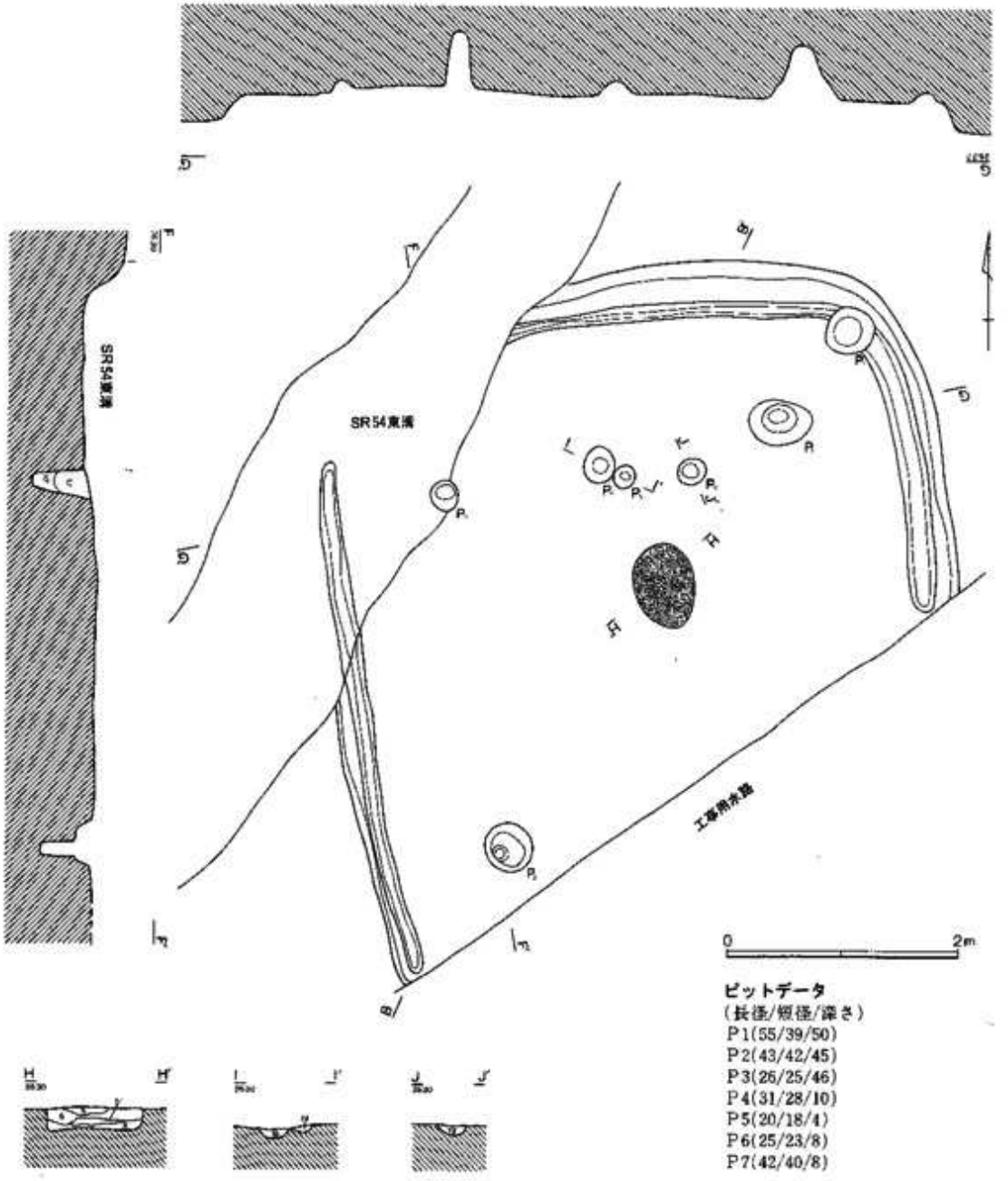
1　灰褐色：ローム粒子多量含む．

1′　灰褐色：ローム粒子1より少なく，暗い．粘性強くなる．

2　暗灰褐色：1に近いが，繊維を1，1′より多く含み，粘性更に強くなる．

3　暗灰褐色：粘質土．不均一に少量の礫（5mm大）を含む．下部から植物遺存体（黒色化）を検出．含水率が高く，粘性最も強い．

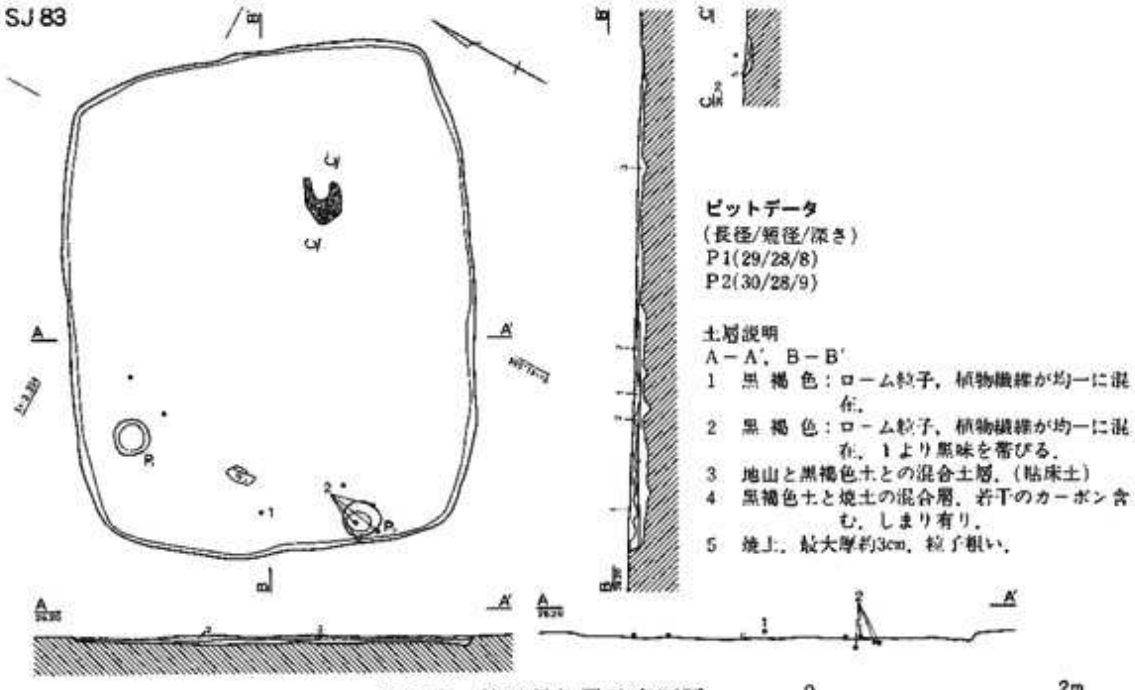
第85図　第82号住居跡実測図(1)



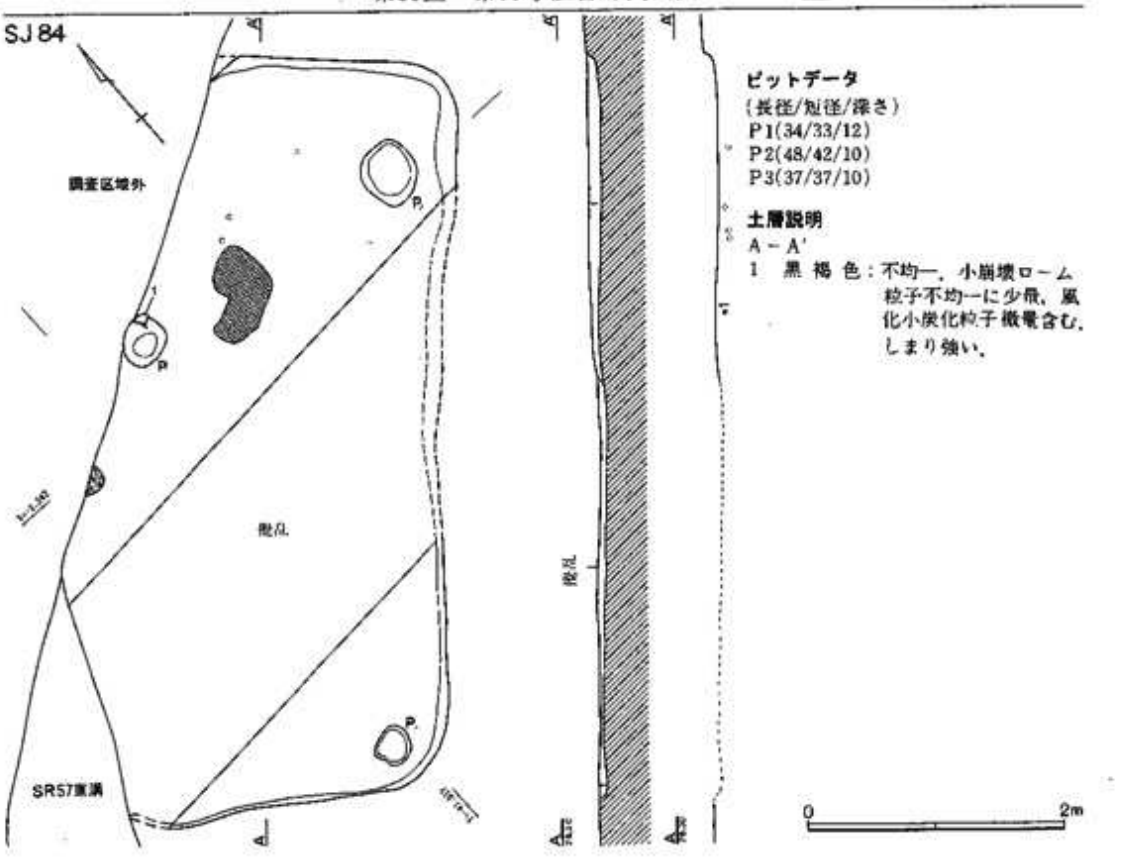
H－H'
5　黒　　色：カーボン少量含む．しまりないが，粘性強い．
6　暗 灰 色：P4覆土に似るが，色調やや明るい．
I－I'
6' 暗 灰 色：P4覆土に似るが，褐色砂質土微量混入．
J－J'
7　黒 褐 色：均質，非常によくしまる．
8　暗 褐 色：ローム粒子少量含む．しまり・粘性共やや有り．
9　暗灰褐色：1，2より粘性増し，しまり有り．

E－E'，F－F'（炉）
1　焼　　土：若干のカーボン含む．（旧住居炉）
1' 焼　　土：若干のカーボン含む．（新住居炉）
2　灰暗褐色：1と3の中間色．しまり・粘性共強い．
3　黒　　色：黒色味強い．しまり弱く，粘性やや有り．
4　黄 褐 色：焼土粒子僅かに含む．しまり・粘性共強い．
5　黄褐色粘質土と黒褐色土の混合層．
6　黒 褐 色：若干のカーボン，焼土不均一に含む．しまり・粘性共やや有り．

第85図　第82号住居跡実測図(2)

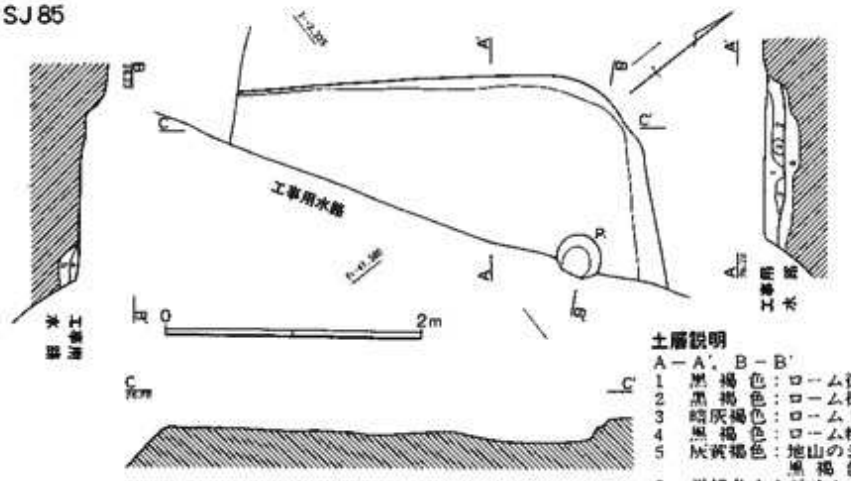


第86図　第83号住居跡実測図



第87図　第84号住居跡実測図

SJ 85

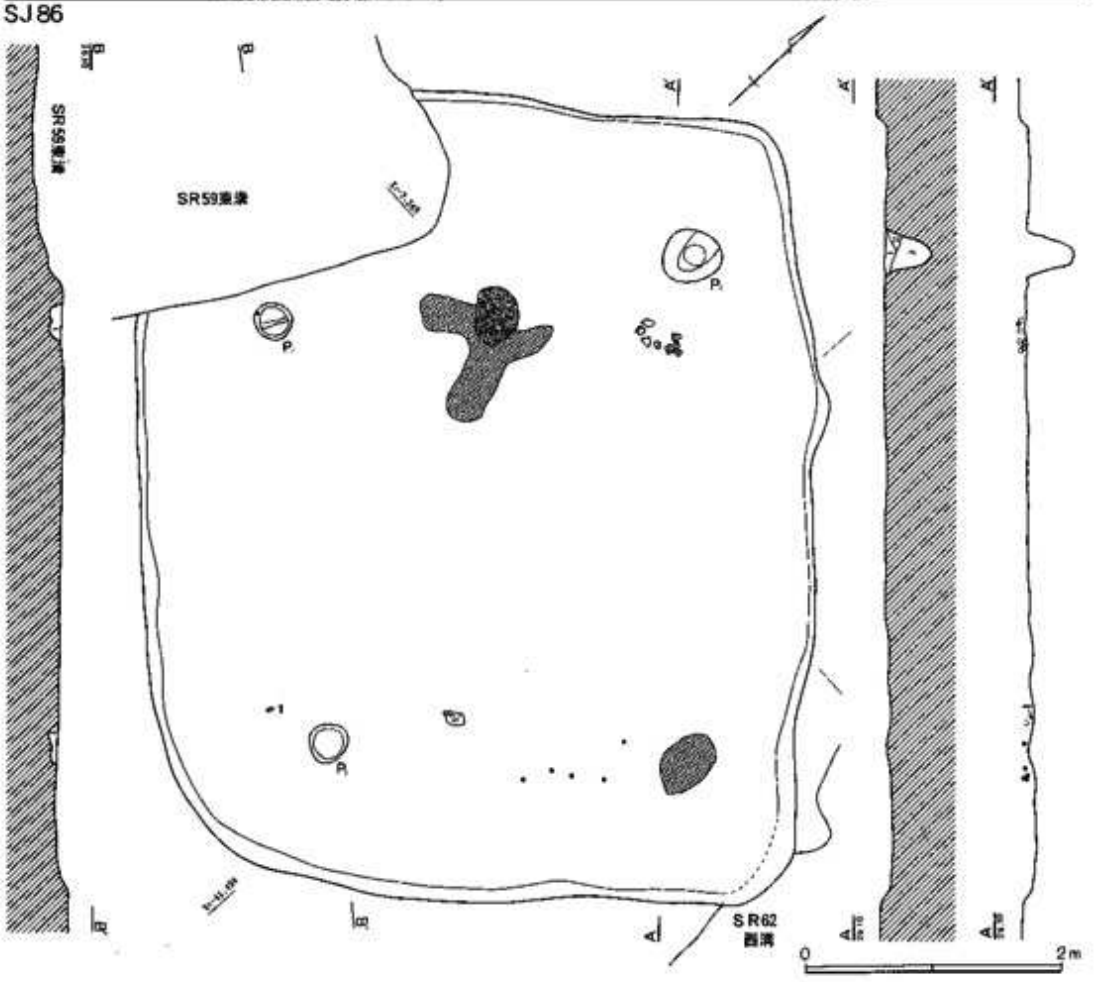


ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(35/-/14)

土層説明
A－A', B－B'
1 黒 褐 色：ローム微粒含む，シルト質，
2 黒 褐 色：ローム微粒少量含む，やや軟質，
3 暗灰褐色：ローム上面の漸移上の崩壊したもの，
4 黒 褐 色：ローム粒子多量含む，軟質，
5 灰黄褐色：地山のシルトローム主体として少量の黒 褐 色土を含む，
6 黒褐色土と地山シルトロームの混合土，(貼床土)

第88図　第85号住居跡実測図

SJ 86

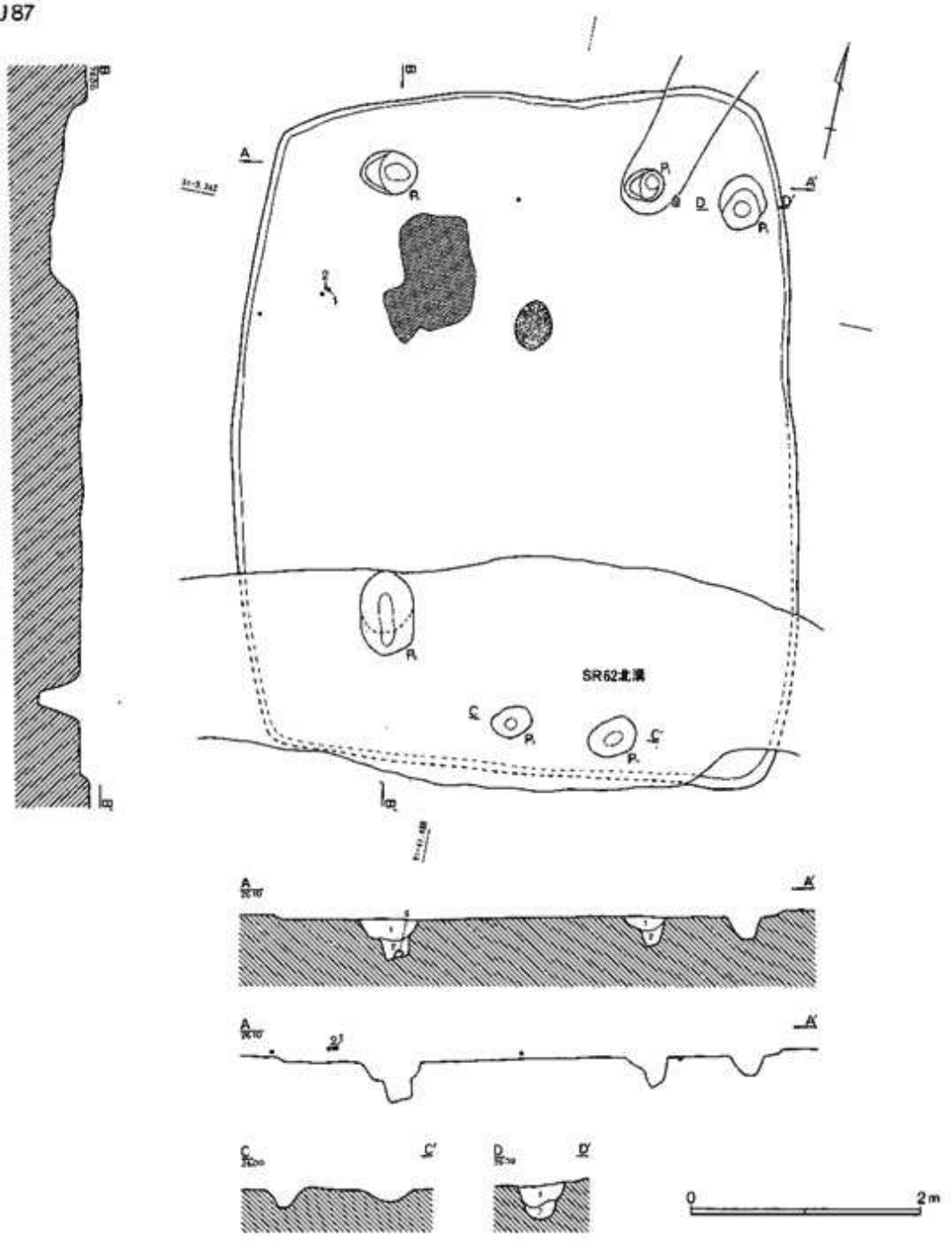


ピットデータ
(長径/短径/深さ)
P1(45/42/32)
P2(32/29/8)
P3(30/28/8)

土層説明
A－A', B－B'
1 黒 褐 色：ローム微粒子少量含み，軟質，
2 淡黄灰色：シルト質ロームを主体とし，1を微量含む，
3 灰 褐 色：シルト質ローム(地山崩壊土)含む，

第89図　第86号住居跡実測図

SJ87



土層説明

A－A′, D－D′,
1　灰 黒 色：粘性を帯び, 軟質.
2　灰 黒 色：ややシルト質で, 1より明るい.
＊壁立ち上がり不明瞭で, 床面凹凸目立つ

ピットデータ

（長径/短径/深さ）

P1(32/28/27)	P4(35/25/15)
P2(48/38/22)	P5(73/46/2)
P3(43/31/8)	P6(49/36/35)

第90図　第87号住居跡実測図

2．方形周溝墓

本遺跡の方形周溝墓の発見、調査数は68基にのぼった。先行して実施済みの公団による遊水池工事（調査区北東部）部分、あるいは既存の道路下に遺構の存在が予想でき、周溝墓の全容を明らかにするに至っていない。また、調査区南部外方域はトレンチを入れたが遺構を確認できなかった。

周溝の平面形態は、四隅の切れるタイプ（以下、各周溝墓の記述の中では「四隅切れ型」と呼称）、全周するタイプ（「全周型」）、一隅のみ切れるタイプ（「一隅切れ型」）、一辺の中央をブリッジとして掘り残すタイプ（「中央切れ型」）、それに前方後方型と推定されるものがあった。

前節で記述した古墳時代前期集落との時間的関係は、周溝と重複する部分の断面観察では竪穴住居跡が周溝墓群に先行する例ばかりである。そして、周溝墓群中での形態による時間的な先後関係は、四隅切れ型が当該地域での周溝墓の初現型式で、全周型がその後出形態である。これは本遺跡でも同様の出現順序を考えてよく、土器の型式的な先後関係からも首肯できる。

そこで四隅切れ型の分布状況を見ると、いくつかの群を形成して分布する。それらの間に築造開始時期の時間的な格差を認めるのは不合理な状況にあるから、集落の廃絶後そのほぼ全域を一括して墓域として確保し、周溝墓の築造が開始されたとみられる。

これら周溝墓は、出土土器から古墳時代前期段階のもので、はなはだしく先行するかまたは下る時期のものは確認されていない。ほとんど出土土器がなく詳細な時期判定の下せないものも、他の周溝墓を意識して造られている場合が多く、著しく時期が前後するとは考えにくいので、やはり古墳時代前期のうちにおさえて誤り無かろう。

細かな先後関係は次章以下にゆずることにして、以下に記述する方形周溝墓の時期については、いちいち記述しないでおく。

(1) 第１号方形周溝墓（第92図、2-3図・図版55・167）

調査区西部のK-2グリッドに位置する。遺跡の主要部分ののる再堆積ローム自然堤防の西部には微小な谷地形が形成され、この西側部分にＳＲ2－4とともに4基で群を構成する。西溝から南壁東部を工事用の水路に削平され、遺存はあまり良くない。

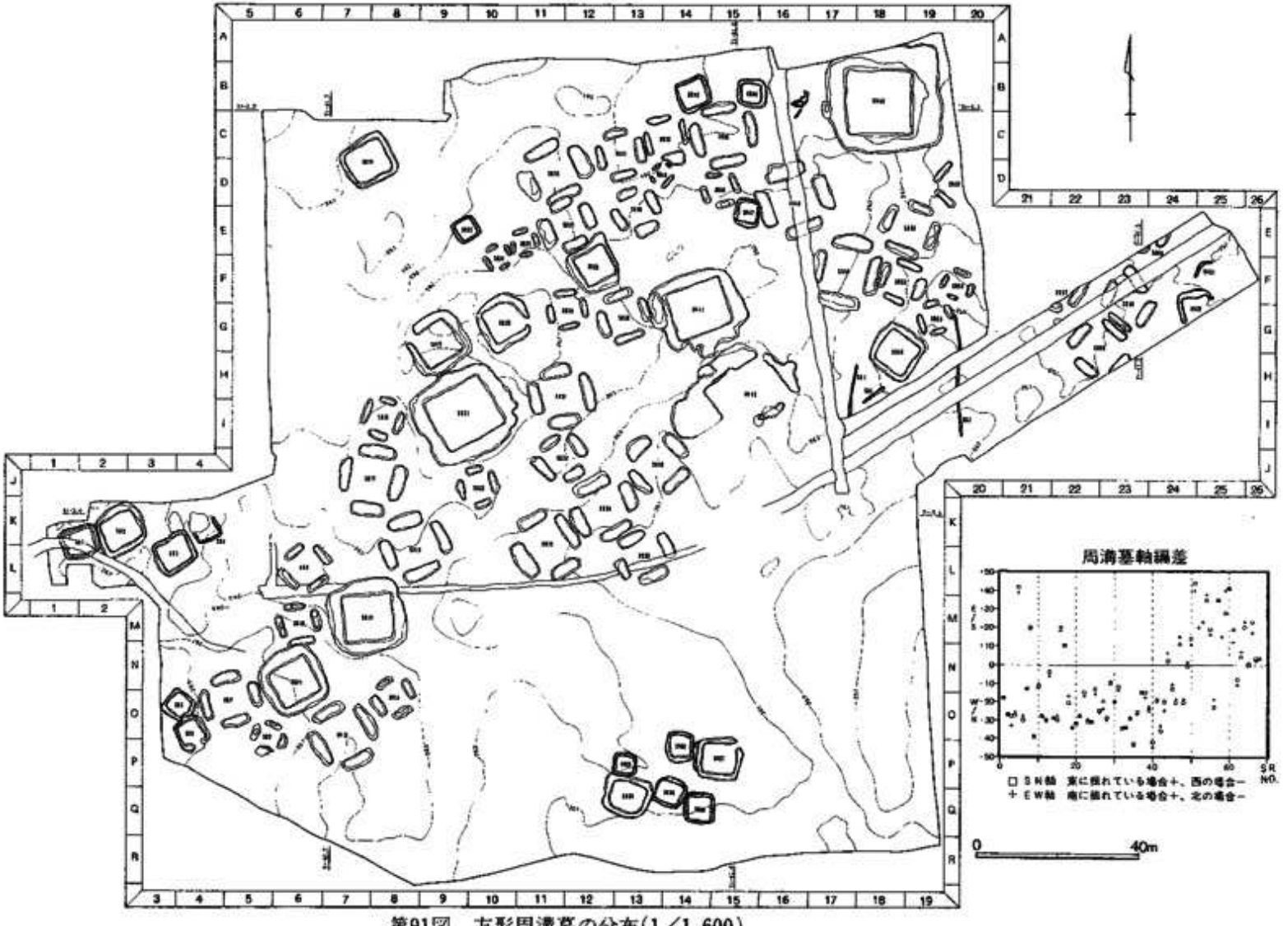
東溝とＳＲ2の西溝が双方の外方立上がりで重複するが、土層断面から本周溝墓の方が新しい。

平面形態は全周型で、方台部は東西方向にやや長く造られている。方台部の規模は、その上面の計測で南北軸（短軸）長が5.65ｍ、軸偏差Ｎ－18°－Ｗ、東西軸（長軸）長6.88ｍ、軸偏差Ｅ－18°－Ｎである。

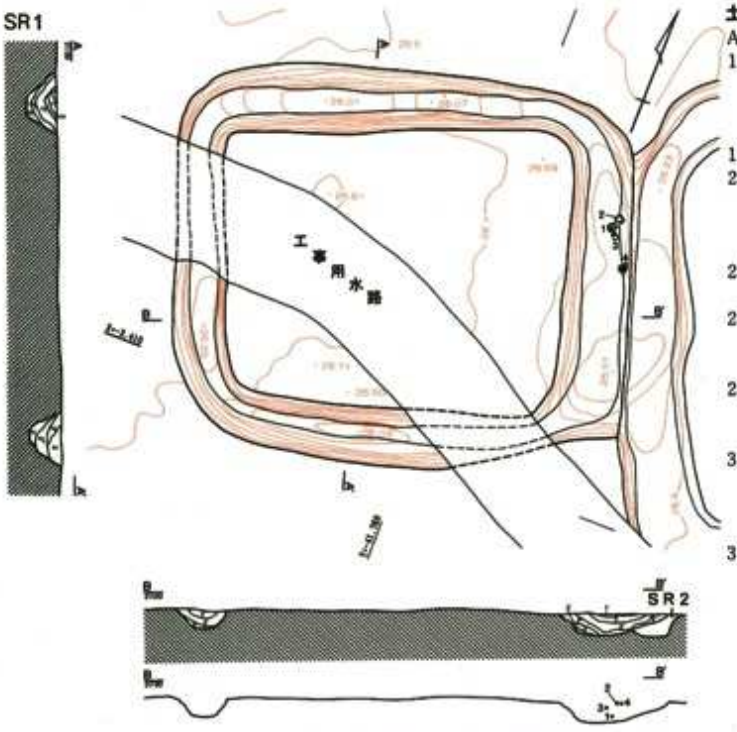
溝の状況は、東溝が完掘状態での遺存部分の最大幅1.45ｍ（土層断面からすると2ｍをわずかに越える幅があったことが確実）で最も広い。溝底は東溝が中央がわずかに高くなり、南溝は中央やや西寄り、北溝がその西の部分が深くなるがいずれも段のつくような凹凸部分は認められない。

覆土は上－中層に方台部盛土の崩壊に起因の考えられる土が自然な埋没状況で堆積する。

出土土器は東溝北部の覆土中から壺と甕が計4点出土している。互いに近接した位置で、レベル差はあるが共伴すると思われ、埋没中に外方から転落してきた可能性が強い。



第91図　方形周溝墓の分布(1／1,600)



土層説明

A－A′，B－B′

1　黒　　色：掘削土再流入土か？均一．旧表土を基とし，ローム粒（1mm）少量，亜円礫（5～10mm）微量含む．

1′黒　　色：亜円礫1より多い．

2　茶褐色：掘削土再流入土．均一．地山を基とし，ローム粒（1～2mm）少量，亜角礫（5～10mm）多少含む．

2′黒茶色：旧表土と地山を基とし，2より大きい亜角礫多量含む．

2″黒茶色：土質2′に準ずるが，ローム粒やや多く，亜角礫更に多量含む．

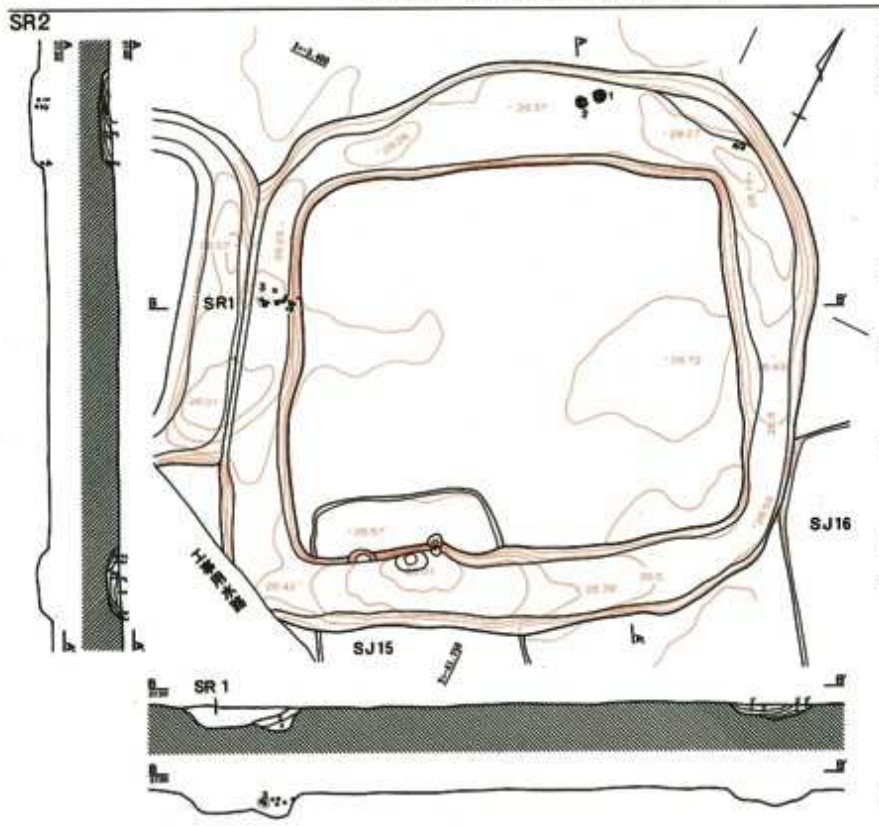
2‴黒茶色：土質2′に準ずるが，ローム粒，亜角礫共に2″より少なく含む．

3　灰茶色：壁崩壊流入土．均一．地山を基とし，旧表土も混じる．ローム粒（1～3mm）微量，亜角礫（5～10mm）多少含む．

3′灰茶色：3より黒色土の含有少ない．

0　4m

第92図　第1号方形周溝墓実測図



土層説明

A－A′B－B′

1　黒　　色：掘削土再流入土？均一．旧表土を基とし，ローム粒（1mm）少量含む．

2　茶褐色：掘削土再流入土？均一．地山を基として，ローム粒（1mm）多少含む．

2′茶　　色：ローム粒2よりやや少なく，砂若干含む．

2″黒茶色：ローム粒2よりやや多く，砂も更に多く含む．旧表土起源の黒色土含む．

3　灰茶色：肩部崩壊流入土．均一．地山を基とし，風化した黒色土多量含む．

3′灰茶色：黒色土やや少ない．

3″灰茶色：黒色土3′よりやや多い．

0　4m

第93図　第2号方形周溝墓実測図

(2) 第2号方形周溝墓（第93図、2-33図・図版55・56・167・168）

調査区西部のK-3グリッドに位置する。ＳＲ1・3・4と共に一群を構成する。

他遺構との重複関係はＳＲ1に西溝外方立上がり部分を切られ、その中央付近では底部がＳＲ1の底部とほとんど連続していて、ＳＲ1築造時、すでに本周溝墓がある程度埋没していた状況を窺い知ることができる。南東部コーナーはＳＪ16を、南溝西半部がＳＪ15を切っている。基盤は小径礫を混ずるローム層である。

平面形態は全周型で、方台部の形態は東西にわずかに長い方形で、規模は上面で南北軸（短軸）長が7.7m、軸偏差Ｎ－27°－Ｗ、東西軸（長軸）長8.8m、軸偏差Ｅ－27°－Ｎである。

各溝の状況は北溝の中央から東溝の北半部にかけ外方に膨れ広くなる。最大幅はこの北溝部分で2.10mあり、南東、北西コーナー付近では80－90cmと最も狭くなっている。

また、南溝の西部は方台部に食込むようにやや深く掘られていて、最深部がここにあるが、段が形成されるほどではなく極端な凹凸はない。

覆土は溝底側面に壁崩壊土の灰茶褐色土、上層に墳丘崩壊に起因が考えられる黒色、茶褐色土等が堆積しており自然な埋没状況を示す。

出土土器は1、2が北溝覆土内の近接した出土で共伴が確実である。埋没がある程度進んだ段階で遺棄されたものと思われる。北東コーナー部出土の4も1・2と同様なレベルで、共伴の可能性が高く、同様に溝の埋没過程での遺棄が考えられる。西溝北部からは溝の埋没途中で投棄されたと思われる土器片がまとまって出土したが、3のみ図示に耐える状態に復原できた。

(3) 第3号方形周溝墓（第94図、2-34図・図版168）

調査区西部のL-4グリットに位置する。ＳＲ1・2・4と共に一群を構成する。

他遺構との重複関係は南西コーナーがＳＪ17を、北溝がＳＪ16を切っている。

平面形態は全周型で、方台部規模は上面で南北軸（短軸）長が6.48m、軸偏差Ｎ－28°－Ｗ、東西軸（長軸）長7.63m、軸偏差Ｅ－33°－Ｎで東西にわずかに長い方形である。

各溝の状況については、確認面での最大幅は西溝にあり1.30mで、北溝は攪乱で不明だが、その他は1－1.24mとほぼ同じレベルにある。

東溝の溝底は南部に2段、北に1段、緩い段をもって南、北溝より深く掘られているが極端な深さではない。南溝は中央部分がなだらかに深くなるように掘らている。

また、西溝の北部にわずかな段を有して高くなり溝幅も狭く掘られる部分があった。

覆土は上、下層とも墳丘の崩壊に起因の考えられるローム粒混じりの土が堆積しており、自然な埋没状況を示す。

出土土器としては前述の西溝底北部の浅くなった部分のすぐ南の溝底から、1の壺（口縁部を欠くが薄い折返口縁となろうか？）が破片となって出土している。この浅い部分は方台部に至る通路にあたる可能性があろう。1の壺は埋葬に関連して使用され、その後この通路の南の低い場所を選んで投棄されたことも考えられる。2・3については覆土中の一括品である。

(4) 第4号方形周溝墓（第95図、2-34図）

調査区部のK-4グリッドに位置し、ＳＲ1－3と共に一群を構成する。北西部分に大きな攪乱を被っており遺存が悪く、平面形態がいかなるものか確定できないが、遺跡内で溝の一辺が欠如する形態は稀なので、一隅切れ型を推定しておく。基盤層は小径礫を混ずる再堆積ロームである。

方台部の形態は群在するＳＲ1－4がいずれも東西に長いことから、東西にやや長い方形と見られ、方台部上面で東西軸長が5.25ｍ、軸偏差Ｅ－26°－Ｎ、南北軸長は5ｍを若干欠ける規模が推定でき、軸偏差はＮ－28°－Ｗで、ＳＲ3とほぼ同じ数値を示す。

遺存部分に関しての各溝の状況は最大幅が東溝の北部にあり65cmで、その他の部分も60cm前後の部分が多く、コーナー部分では45－50cmである。

各溝底は極端な段や凹凸はなく、最深部は南溝中央部で方台部からは約40cmである。

覆土は周溝の掘削土（墳丘盛土）に起因する土を主体に旧表土に起因の考えられる土を交え、ほぼ自然な埋没状況で堆積する。

出土土器はきわめて少なく覆土中から破片の出土を見たのみである。1は西溝南部の覆土上層出土の小破片で埋没過程での流入と思われる。

(5) 第5号方形周溝墓（第96図、図版56）

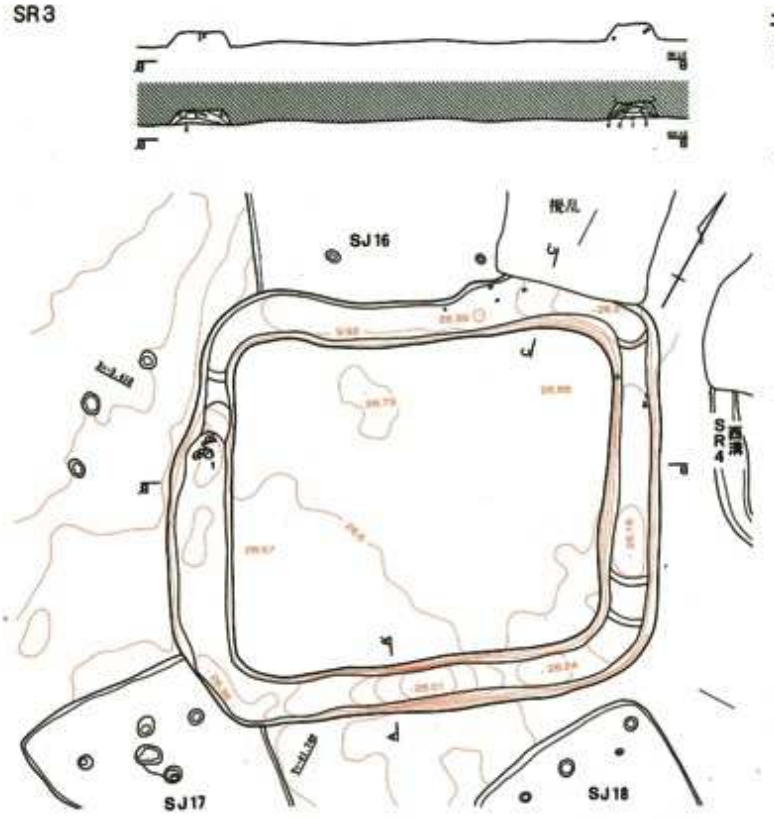
調査区南西部のO-4グリッドに位置する。本周溝墓はＳＲ12・14等を核としてＳＲ7・10等が生起し、そして最終的にＳＲ11・13が構築されて終焉する10基からなる周溝墓のグループが想定できるが、そのなかのＳＲ11等と共に新しい時期の所産と推定しておく。西側の南北に走る道路下は未調査で、その下に周溝墓の存在を否定しきれない。（ちなみに、調査区南方の水路南側は表土を除去したところ、基盤層の標高はほぼ同様であったが、遺構の存在を確認できなかった。）

東溝の南部コーナーはＳＲ6との重複関係にあり、断面観察によると本周溝墓の覆土がＳＲ6に切られており、本周溝墓の方が古いことが明かである。また、方台部の精査中に炉が検出され住居と重複する事が判明している。東溝底のピットはこの住居の貯蔵穴と判断した。

平面形態は全周型で、方台部の形態は東西にわずかに長い方形で、規模は方台部上面で南北軸（短軸）長が4.38ｍ、軸偏差Ｎ－42°－Ｅ、東西軸（長軸）長4.59ｍ、軸偏差Ｅ－39°－Ｓである。至近の周溝墓で本周溝墓に主軸偏差が最も近い数値を有するのはＳＲ8である。方台部の東中央部分は60×35cmで造出状に地山が掘り残されている。確認面から周溝底まで浅く、本来の高さはわからないが、南のＳＲ6の南溝がブリッジとして掘り残される状況から、本周溝墓でもブリッジとして形成されたものが取除かれた遺存部分の可能性も考慮しておく必要がある。

各溝の状況は最大幅が東溝にあり遺存部分で1.74ｍ、北溝の西半部分の方台部がわずかに外方に膨れて幅が狭い。南溝は外方部分が一段深く掘られ（土層観察からは明確にできないが、埋没の早い段階での掘り直しの可能性も指摘できる）、さらにその南半部分がわずかな段を有して深く掘られている。周溝最深部分はこの中にあり、方台部上面からは35cmほどの深さである。

覆土は黒色土を基調とし、壁崩壊のローム粒を混ずる部分があるが、西溝以外きわめて浅い。出土土器は図示できる土器がない。



土層説明

A－A′～C－C′

1　黒茶色：掘削土再流入土．均一．旧表土を基とし，ローム微粒・炭化物粒少量含む．礫は含まない．やや粘土質．

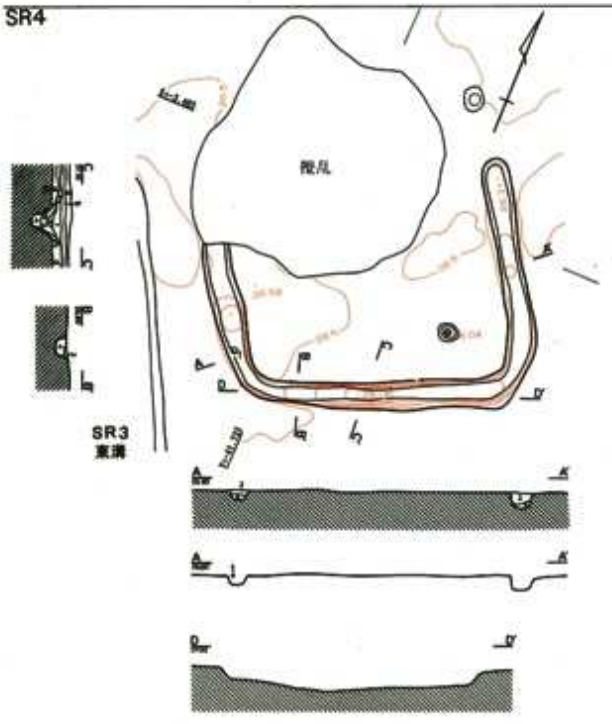
2　茶褐色：掘削土再流入土．均一．旧表土を基とし，ローム微粒多少，炭化物粒微量含む．礫は含まない．やや粘土質．

3　茶褐色：掘削土再流入土．均一．旧表土を基とし，ローム微細粒２より多く含む．炭化物，礫は含まない．やや粘土質．

4　茶褐色：掘削土再流入土．均一．旧表土を基とし，ローム微粒多少，炭化物微量，亜角礫（小径）少量含む．

5　黒褐色：肩部崩壊流入土．やや不均一．地山を基とし，ローム細粒多量含む．炭化物，礫は含まない．

第94図　第３号方形周溝墓実測図



土層説明

A－A′～C－C′

1　灰褐色：掘削土再流入土．均一．遺構の切込み面の土を基とし，ローム細粒多量，炭化物粒少量含む．礫は含まない．

2　灰褐色：掘削土再流入土．均一．遺構の切込み面の土を基とし，ローム細粒１より多量，炭化物少量含む．

3　黒　色：旧表土流入土．均一．旧表土を基とし，炭化物粒多少含む．礫は含まない．

4　灰褐色：掘削土再流入土．均一．遺構の切り込み面の土を基とし，ローム細粒１より多量，炭化物粒少量含む．礫は含まない．

5　黄褐色：壁崩壊流入土．不均一．ローム２次堆積を基とし，旧表土起源の黒色土も混じる．

a　灰　色：粘土層．均一．

b　茶　色：均一．ローム粒（1～2mm），礫（5～10mm）少量含む．僅かに粘土質．

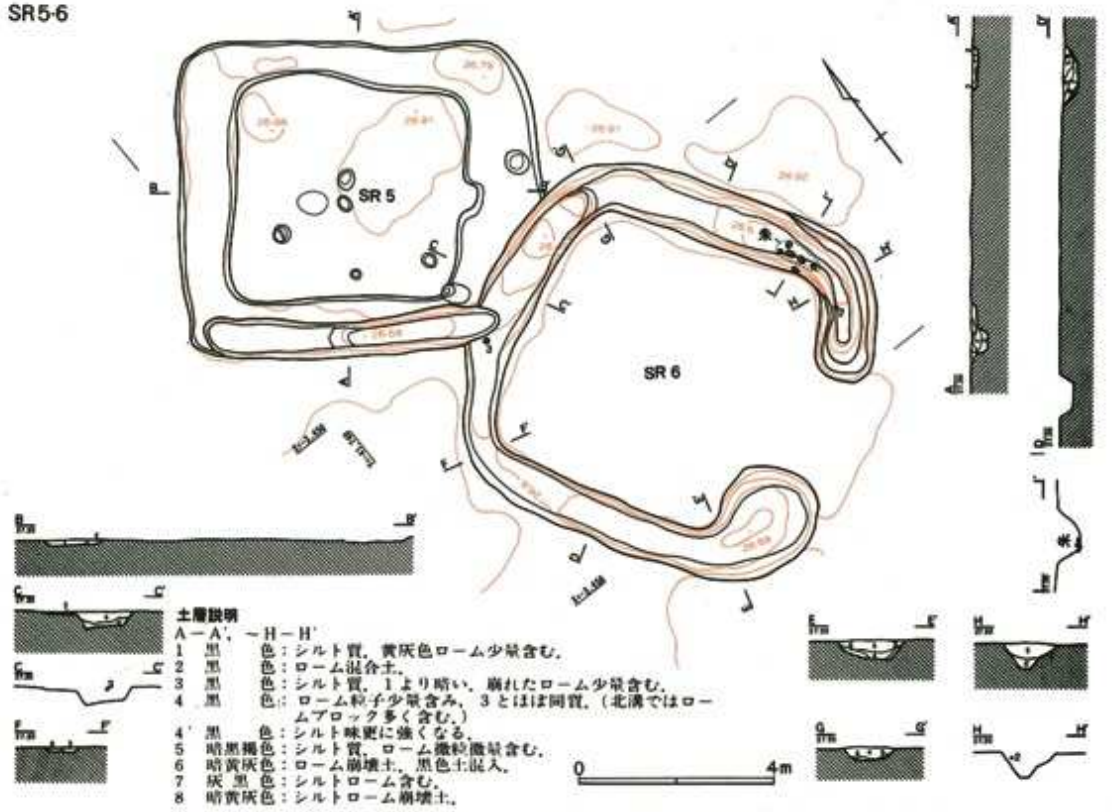
c　茶　色：均一．ローム粒（1～2mm），礫（5～10mm）少量含む．僅かに粘土質．bより黒色味帯びる．

d　茶褐色：均一．ローム粒（1mm）多少含む．他は含まない．

e　黄茶色：均一．ローム粒（1mm）多量，炭化物（1～2mm）多少含む．

0　4m

第95図　第４号方形周溝墓実測図



第96図　第5・6号方形周溝墓実測図

(6) 第6号方形周溝墓（第96図、2-34図・図版56・57・168）

調査区南西部のO-4グリッドに位置し、ＳＲ5と同じ周溝墓グループ中の1基である。

平面形態は一辺の中央にブリッジを有する中央切れ型で、ブリッジ部分の外方に向って右の周溝が外方にやや発達を見せるが、前方後方型とするには発達状況は僅かである。ブリッジも直線的な状況とは断定しがたい。

方台部北側部分（周溝を含め）がやや外方に膨れ、視覚的には南北方向にやや長い感を受けるが、実際は東西にわずかに長い。方台部上面の規模は南北軸（短軸）長が5.30ｍ、軸偏差Ｎ－30°－Ｗ、東西軸（長軸）長5.50ｍ、軸偏差Ｅ－28°－Ｎである。至近の周溝墓ではＳＲ11やＳＲ12と軸偏差の親縁性を示す。

各溝の状況は南溝のブリッジ西側部分が僅かな発達をみせ最大幅で2.0ｍあるほかは0.75－1.20ｍの範囲にある。底面は北溝がコーナー付近で段を有して深くなるほか、東南コーナー付近が壁面に段をもち深く掘られ、方台部上面から約50cmを測る。また、東南コーナーの北の溝底・壁立上がり部分の暗黒褐色土中から酸化鉄系の朱の検出があり、土層断面からは明確にできなかったが、埋葬施設の存在していた可能性を指摘しておく。

覆土は黒色土を基調にするが、北溝ではロームブロックの含有が多く認められている。

出土土器は、2の椀が南溝コーナー部方台部肩部から出土した。埋没過程で方台部上方からの転落が考えられる。3の高杯（または器台）脚は北溝底の西部寄りの出土で、投棄されたものだろうか。1は覆土中の出土、埋没過程での流入が考えられる。

(7) 第7号方形周溝墓（第97図、2-34図・図版57・58・168・169）

調査区南西部のO-5グリッドに位置し、ＳＲ12・14等を核とする周溝墓グループの1基である。他の周溝墓との重複関係はないが、東溝が小形の住居跡ＳＪ22・23を切っている。

平面形態は四隅切れ型で、東溝は定かでないが各溝の方台部側は僅かに外方に膨らむ状況が看取できる。方台部の形態は東西にやや長い方形で、規模は上面で南北軸（短軸）長が8.48ｍ、軸偏差Ｎ－13°－Ｗ、東西軸（長軸）長9.54ｍ、軸偏差Ｅ－13°－Ｎである。

各溝の状況は東溝が長さ6.17ｍ、幅2.70ｍ、方台部上面からの深さ0.58ｍ、南溝が長さ7.25ｍ、幅2.60ｍ、深さ0.50ｍ、西溝は長さ7.27ｍ、幅2.58ｍ、深さ0.52ｍ、最大幅、長さを有するのが北溝で幅3.08ｍ、長さ7.31ｍ、深さも北溝が最も深く方台部上面から65cmを測る。各溝底はほぼ平坦で、極端な凹凸は認められず、底面はシルトローム下の基盤層である砂層の上面に達している。

覆土は黒色土、黒褐色土を基調にしており、ほぼ自然な埋没状況を示す。方台部側の堆積土には崩壊した盛土に起因の考えられるローム粒を含む層が確認できる。

出土土器は南溝中央方台部寄りの覆土上層黒褐色土中から2の坩が、西溝の中央から北寄りの外方の覆土上層から9の椀形土器が出土している。両者とも埋没過程での遺棄または転落したものだろう。その他は1が南溝覆土中出土で、全体が何とかわかる程度に復原実測できたが、いずれも覆土中出土の破片で流入品の可能性が強い。

(8) 第8号方形周溝墓（第98図、2-35図・図版58・168）

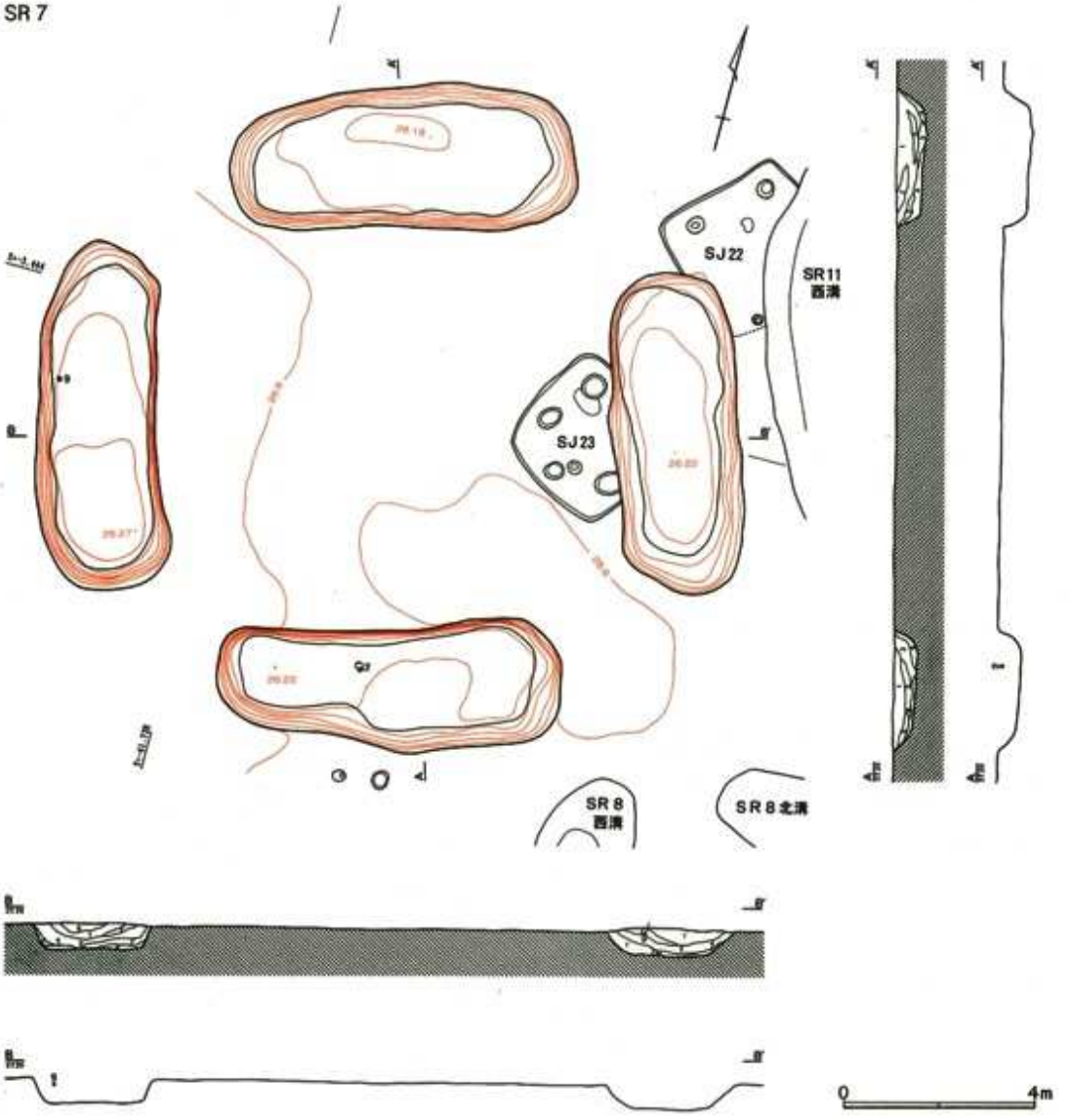
調査区南西部のO-6グリッドに位置、ＳＲ12・14等を核とする周溝墓グループの1基である。南溝とＳＫ26が重複関係にあるが、ＳＫ26は風倒木と思われる攪乱を被り、さらに本周溝墓の南溝がこれを切っているのが断面観察から確認できる。

平面形態は四隅切れ型で、方台部の形態は東西にやや長く、規模は上面で南北軸（短軸）長が4.90ｍ、軸偏差Ｎ－20°－Ｅ、東西軸（長軸）長5.50ｍ、軸偏差Ｅ－19°－Ｓである。グループ中の四隅切れ型周溝墓中では規模は最小で南北軸偏差の親縁性はＳＲ5に近い。

各溝の状況は上端の方台部側が南溝がやや揺らぎがあるが、その他の溝は、ほぼ直線的である。外方は東溝がやや外側に膨れる状況がある。東溝は長さ3.80ｍ、最大幅1.88ｍ、最深部が方台部上面から0.41ｍ、南溝は長さ3.54ｍ、幅（1.90ｍ）、深さは少なくとも0.59ｍ、西溝は長さ4.00ｍ、最大幅1.86ｍ、深さ0.70ｍ、北溝は長さ3.84ｍ、最大幅1.50ｍ、深さ0.66ｍであった。各溝とも極端な凹凸や段差は認められない。

覆土は各溝とも黒褐色土ないし暗灰褐色土層が主体で自然な埋没状況を示しており、暗灰褐色土には墳丘盛土の崩壊に起因の考えられる、シルトローム粒を多量に含む部分があった。各溝とも溝底は基盤のシルトローム層中にある。

出土土器は東溝の南部の覆土上層の黒褐色土中から破片がまとまりを見せて出土した。埋没過程で外方から投棄された可能性が強い。器種としては台付甕、大形の坩、高杯や器台が確認できたが、全体を窺えるほどに復原できたものはない。



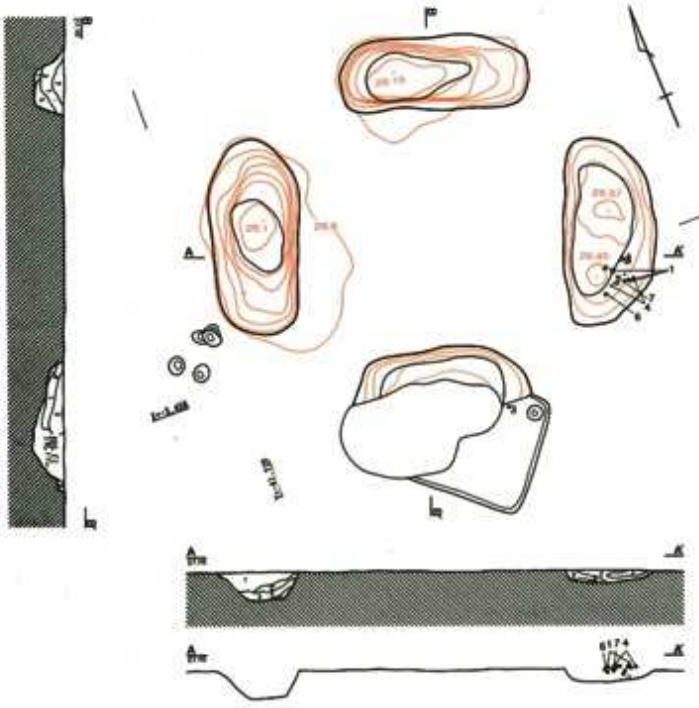
土層説明

A－A', B－B'

1　黒 褐 色：シルト質，微細ローム粒少量含む．
1'　黒 褐 色：方台部崩壊が起因と思われるローム粒やや多く含む．
2　黒　　色：シルト質，微細ローム粒少量含む．
3　黒　　色：シルト質，砂質ローム少量混入．
4　灰 黒 色：2の黒色土と砂質ローム混合土．
5　黒　　色：青灰色粘土少量混入．
6　黒 褐 色：シルト質，ローム粒含む．
7　灰 黒 色：シルト質，青灰色粒僅かに混入．

第97図　第7号方形周溝墓実測図

SR8



土層説明

A－A′，B－B′

1　黒 褐 色：シルト質，シルト質ローム少量含む．

2　暗灰褐色：シルト質，シルト質ローム含む．

2′　暗灰褐色：方台部崩壊が起因と思われるシルトローム粒多量含む．

3　灰 黒 色：シルト質ローム（地山）混合土．

4　灰 黒 色：シルト質ローム（地山）混合土．

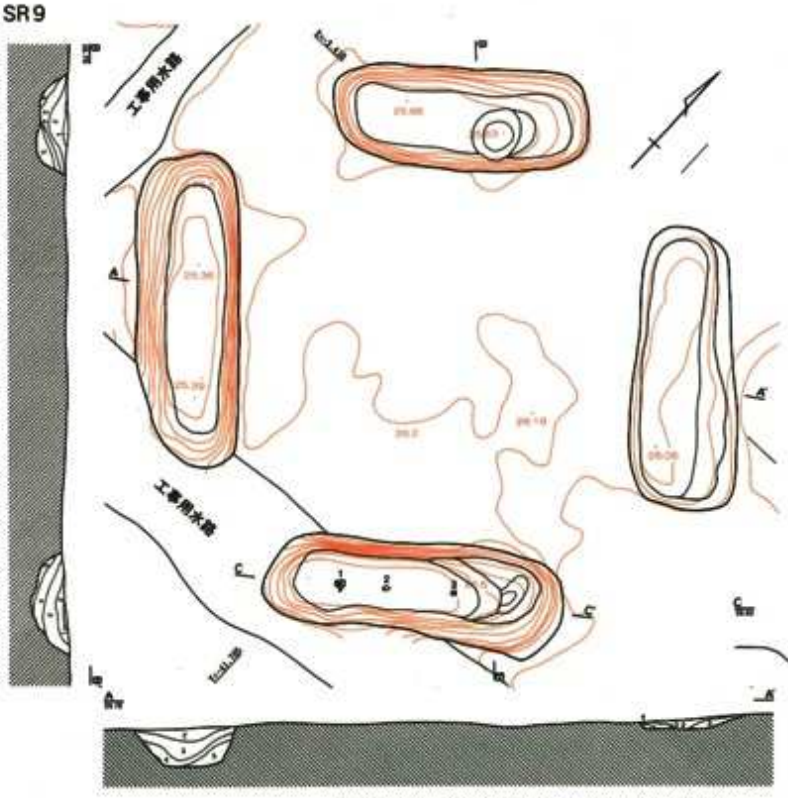
5　暗黄灰色：シルト質ローム（地山）崩壊土．

6　黒　　色：ＳＫ26覆土．

第98図　第８号方形周溝墓実測図

0　4m

SR9



土層説明

A－A′，B－B′

1　褐　　色：方台部崩壊流入土．やや不均一．地山ローム漸移層を基とし，ローム粒（1～2mm）多量，亜角礫（5～20mm）少量含む．やや固くしまる．

2　灰 黒 色：方台部崩壊流入土．均一．旧表土を基とし，ローム粒（1～2mm）多少含む．礫・炭化物・焼土は含まない．

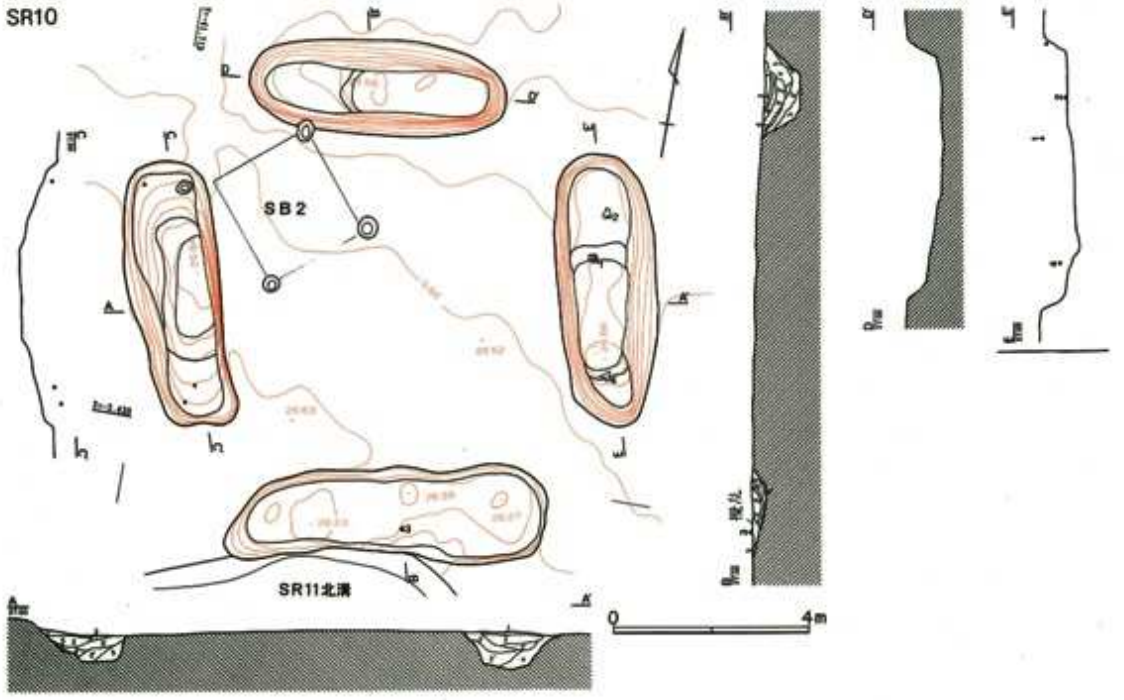
3　黒　　色：旧表土流入土．均一．旧表土を基とし，ローム粒（1mm）２より少なく含む．

4　青 灰 色：～黄色．肩部崩壊流入土．やや均一．ローム粒（2～10mm）多量含む．礫，炭化物，焼土は含まない．

5　黒　　色：肩部崩壊流入土．均一．ローム粒（2～10mm）多量含む．礫・炭化物・焼土は含まない．４より旧表土が多く混じる．

0　4m

第99図　第９号方形周溝墓実測図



土層説明

A－A′，B－B′

1　黒灰色：粘土を主体とする。
2　暗褐色：ローム粒炭化物粒子混在。
2′暗褐色：焼土粒，炭化物含む，2より暗い。
3　黄褐色：ローム粒子含み，しまりやや弱い。
3′黄褐色：ローム粒子多量含み，青灰色粘土，炭化物粒子，若干の焼土が混在。
3″黄褐色：ローム粒子3′より少ない。
4　黒褐色：粘土粒子，ローム粒子含む，しまり弱い。
4′黒褐色：4よりやや明るい。
4″黒褐色：4よりやや暗い。
5　青褐色：粘土ブロック，ローム粒子を含む。
6　黒褐色：きめ細かく，ローム粒子，微量の焼土粒子を含む，しまり弱い。

第100図　第10号方形周溝墓実測図

(9)　第9号方形周溝墓（第99図、2-35図・図版59・169）

調査区南西部のL-6グリッドに位置する。ＳＲ12・14等を核とする周溝墓グループの1基である。南・西溝は一部工事用水路に削平を受ける。

平面形態は四隅切れ型で方台部の形態は東西にやや長く、規模は上面で南北軸(短軸)長が7.72m、軸偏差N－39°－W、東西軸（長軸）長8.13m、軸偏差E－39°－Nである。同一グループ中ではＳＲ11・12・14と親縁性を示す。

各溝の状況は東溝が長さ5.74m、最大幅2.15m、方台部上面からの深さ0.22mと他の溝より極端に浅い。南溝が長さ6.20m、最大幅2.05m、深さ0.82m、西溝が長さ6.38m、最大幅2.16m、深さ0.85m、北溝が長さ5.24m、最大幅2.06m、深さ0.58mである。東溝は他の溝より浅く外方がダラダラと浅く掘られる。南溝は溝底の東寄り部分に段を有し最深部が西の端にある。北溝は溝底中央東にごく浅いピット状の掘り込みが認めれれた。

覆土は方台部盛土の崩壊に起因すると思われる灰黒色土や黒色土を基調にしており、自然な埋没状況を示す。各溝とも溝底は基盤の粘性の強いシルトローム層中にある。

出土土器は南溝に東西に並び3点の坩が出土した。溝底からやや浮き、出土レベルの近似性や直線上に並び、互いに共伴するものと思われる。土層断面からは確認できないが、一段深い部分であり、溝内埋葬に係わる土器群の可能性も否定しきれない。いずれも底部に焼成後の穿孔を有する。

(10) 第10号方形周溝墓（第100図、2-35図・図版59・60・169・170）

調査区南西部のM-6グリッドに位置、ＳＲ12・14等の周溝墓グループの1基である。南溝がＳＲ11と重複するが、重複部分が少なく覆土から新旧は確認できない。形態から本周溝墓が古いものと推定しておく。西・北溝がＳＢ4とも重複するが、ピットの輪郭が溝底面で確認されたのでＳＢ4が古いものと思われる。

平面形態は四隅切れ型で方台部の形態は東西に僅かに長く、規模は上面で南北軸(短軸)長6.74m、軸偏差Ｎ－12°－Ｗ、東西軸（長軸）長6.97m、軸偏差Ｅ－11°－Ｎである。

各溝の状況は東溝が長さ5.45m、最大幅2.00m、方台部上面からの深さ0.74m、南溝が長さ6.62m、最大幅1.96m、深さ0.40m、西溝が長さ5.43m、最大幅1.86m、深さ0.70m、北溝が長さ5.34m、最大幅1.93m、深さ0.84mである。

東溝の溝底は中央から南が、北溝は中央から東の部分が僅かだが一段深く掘り込まれる。西溝も中央部が方台部に接し一段低く掘られ溝内壙の可能性がある。南溝は他の溝と比して浅く掘られる。

覆土は各溝の最上層部に黒灰色の粘土層が見られ、その下に暗褐色土や墳丘盛土に起因の考えられる黄褐色土が堆積する。先に溝内壙の可能性を指摘した部分で、土層による明瞭な掘り込みは確認できていない。各溝とも溝底は基盤のシルトローム層中にある。

出土土器2の台付甕は赤彩がみられ特異である。東溝底から僅かに浮いての出土で焼成後穿孔を有した遺棄品、4は溝底から15cmほど浮くが2とほとんど同じレベルで、同じく遺棄品であろう。1は出土レベルが高く流入、3は細片での出土で投棄品の可能性が強い。

(11) 第11号方形周溝墓（第101図、2-36・37図・図版60－62・170－172）

調査区南西部のN-6グリッドに位置、ＳＲ12・14等の周溝墓グループの1基である。北西コーナーでＳＪ22と、北東コーナーがＳＲ10と重複する。ＳＪ22とは覆土の切合いで本周溝墓のほうが新しいとわかったが、ＳＲ10とは重複部分も少なく確認時の覆土の状況からは先後関係は判然としない。ひとまず平面形態の型式変化から本周溝墓のほうが新しいものと推定しておく。

平面形態は全周型で、方台部の形態は東西にやや長く、規模は方台部上面で南北軸（短軸）長が9.08m、軸偏差Ｎ－28°－Ｗ、東西軸（長軸）長10.00m、軸偏差Ｅ－28°－Ｎである。軸偏差は近接する周溝墓ではＳＲ12・14・6と親縁性を示し、次いでＳＲ7やＳＲ10等とも比較的近い数値を示す。

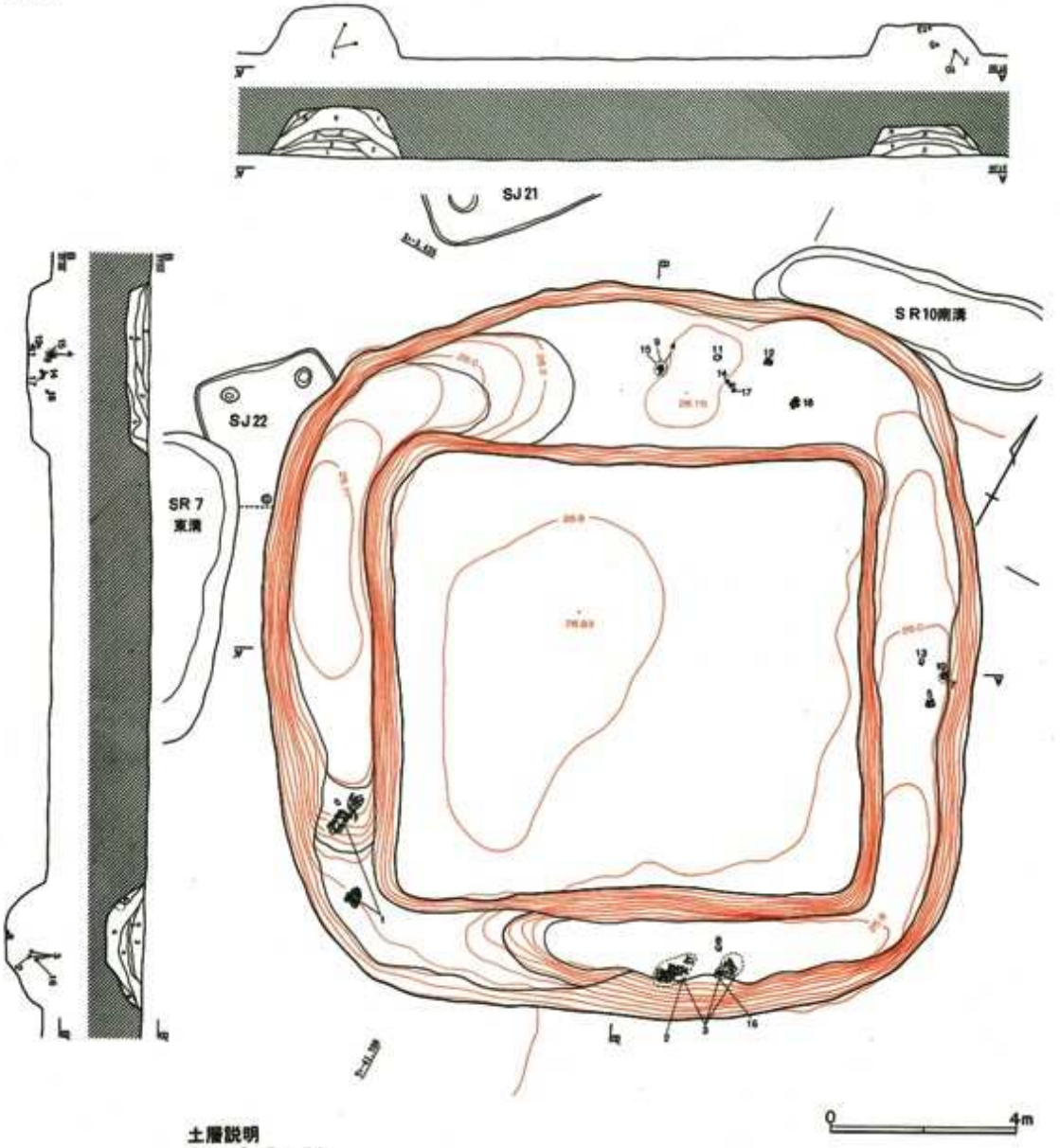
各溝の状況はいずれも方台部側が比較的直線的にきちんと掘られるが、北溝ではやや外方に膨れて広く掘られ、その他の溝も僅かに外方に膨れる状況が看取できよう。

東溝は最大幅2.65m、方台部上面からの深さ0.70m、南溝が最大幅2.88m、深さ0.90m、西溝が最大幅2.88m、深さ1.20mである。

北溝は外方が広く掘られ、最大幅3.90mと幅が広くなるが、深さは0.55mと浅く、底面は平坦である。南溝は中央部やや西寄りで段がつき東側が深い。西溝も南部で緩い段を持ち深く掘られ北溝の西部の緩い段で浅くなる。この間の南西コーナーは溝底中最も浅く、仮に遺構確認面の標高が26.3m前後と低ければ、周溝墓の平面形態も一隅切れ型と認識されることになるだろう。

覆土の状況は自然な埋没状況を示す。西・北溝の最上層部で淡青灰色の粘土（第1層）の堆積がみ

SR11

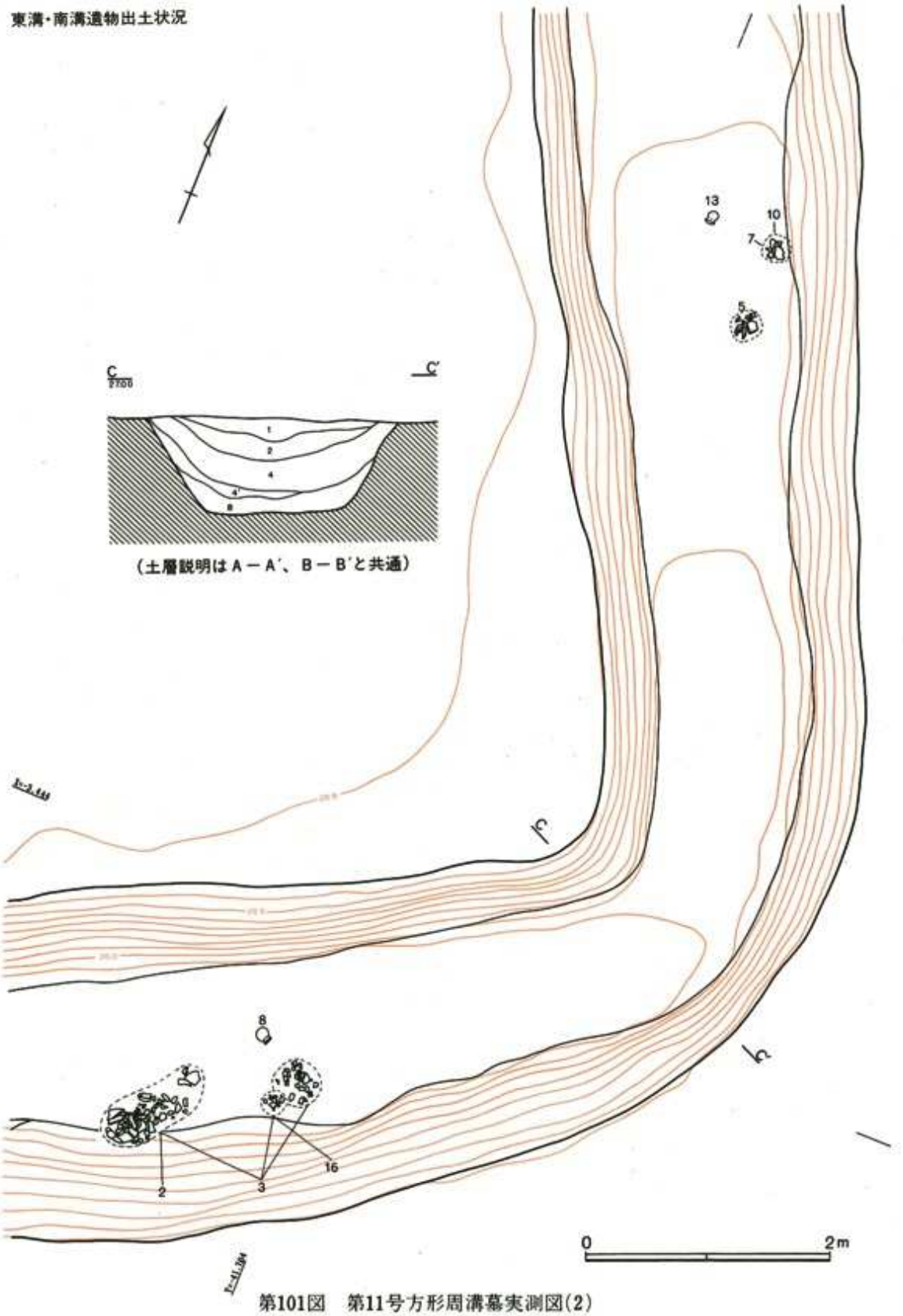


土層説明

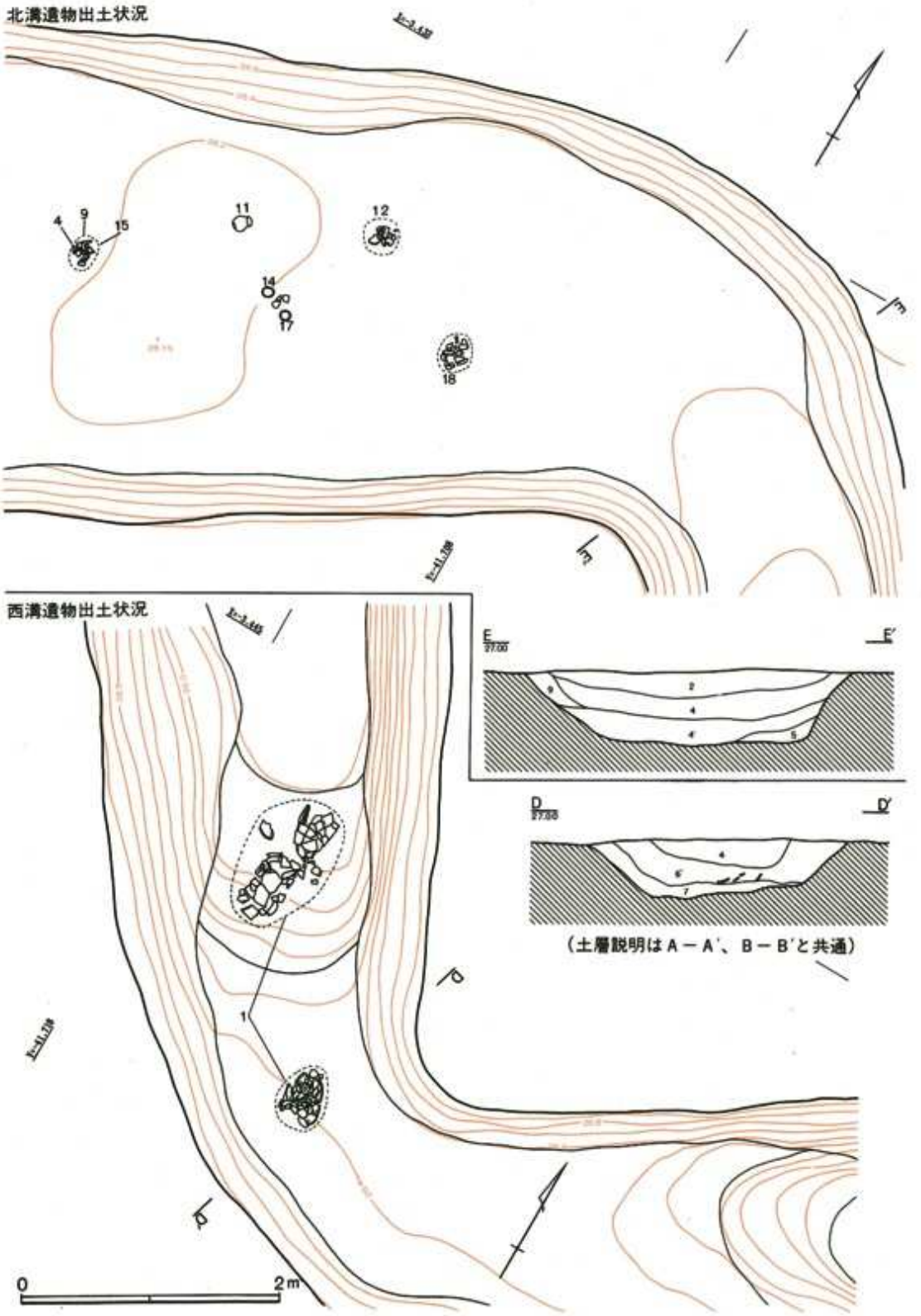
A－A′，B－B′

1　淡青灰色：硬くしまる粘土，ロームブロック含む．
2　暗青灰色：硬くしまる粘土，粘性強い．
2′暗青灰色：硬くしまる粘土，粘性帯びる．
2″暗青灰色：シルト質でしまり欠く．
3　暗 褐 色：方台部崩壊が起因と思われるローム粒多量含む．硬くしまる．
3′暗 褐 色：方台部崩壊が起因と思われ径15mm程度の礫を含む．しまり欠く．
4　黒 褐 色：シルト質でしまり欠く．
4′黒 褐 色：しまり欠く．
5　黒 褐 色：粘土ブロック多く含む．
6　黒　　色：シルト質でしまり欠く．
6′黒　　色：粘土ブロック含み，粘性強い．
6″黒　　色：ローム粒含む．
7　暗 灰 色：粘土ブロック含み，粘性強い．
8　淡青灰色：粘土多量含む．
9　暗 褐 色：シルト質，ローム粒含む．

第101図　第11号方形周溝墓実測図(1)



第101図　第11号方形周溝墓実測図(2)



第101図　第11号方形周溝墓実測図(3)

られた。各溝の方台部側の上層に見られるローム粒を多量に含む暗褐色土（第3、3'層）は墳丘の崩壊に起因の考えられる土である。中層から溝底面にはシルト味の強くしまりを欠く黒褐色土（第4、5層）ないし黒色土（第6－6"層）が堆積していた。

北溝の大部分と東溝の北部、そして南西コーナー部分は掘り込みが浅く溝底がシルトローム中にとどまるが、その他の深い部分はその下の砂質味の強いシルト層中に達しており、壁立上がりが必ずしも明瞭に把握できたわけではない。こうした部分では調査中、湧水の排水を繰返すうちに壁面が崩壊することがしばしばであった。

土器は各溝から出土している。東溝中央からは13の坩が溝底から出土したほか、覆土の中層から坩や小形の壺の破片が出土している。13は遺棄された可能性が高く、穿孔はされていない。他の土器は埋没時の流入または投棄だろう。南溝中央の土器は8の坩が溝底の出土で遺棄の可能性が強い。やはり穿孔はされていない。その他2、3、16は中層の出土で埋没過程の投棄品であろう。

西溝の南部の溝底から間層をはさみ1の大形壺が出土した。コーナーに近いブロックが口縁－体部上部、一段深い掘り込みへの傾斜部分上のブロックが体－底部破片である。周溝埋没の過程での破砕、投棄が考えられる。底部は完形に復原できておらず、焼成後の穿孔かどうか判断できない。北溝からは11が溝底から10cmほどの間層をはさんでの出土で、穿孔はされていない。ほかの土器はいずれも覆土の中－上層にかけて破片となっての出土で埋没時の投棄が考えられよう。

(12) 第12号方形周溝墓（第102図、2-38図・図版62・63・172・173）

調査区南西部のO-7グリッドに位置、ＳＲ5－14で群を構成するうちの1基である。

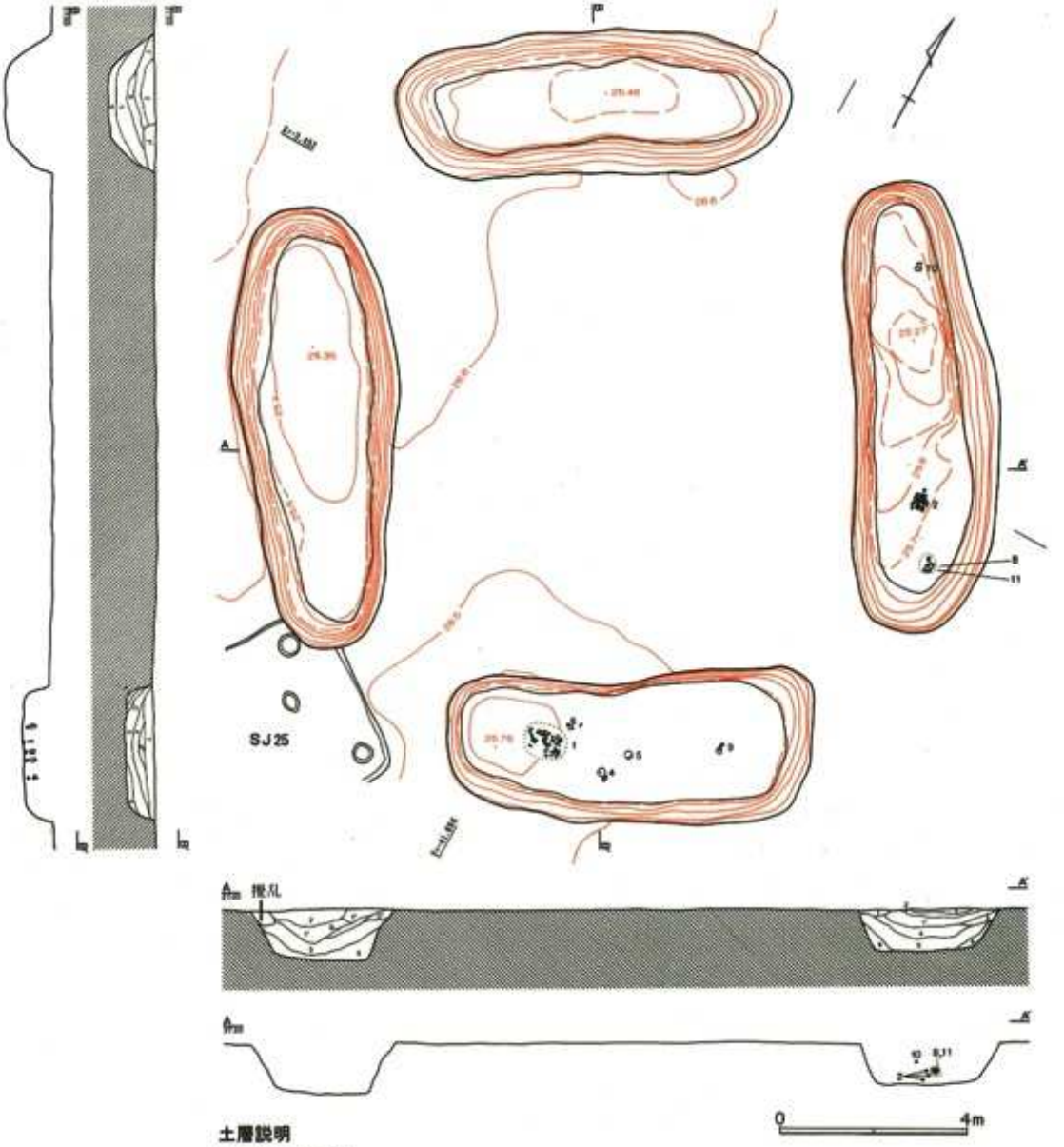
平面形態は四隅切れ型で、方台部は南北にやや長く、東に隣接するＳＲ14と共に群中では異質である。規模は方台部上面で南北軸（長軸）長が10.94ｍ、軸偏差Ｎ－30°－Ｗ、東西軸（短軸）長9.95ｍ、軸偏差Ｅ－30°－Ｎで、群中の四隅切れ型周溝墓中最大規模である。

各溝の状況は東溝が長さ9.61ｍ、最大幅3.06ｍ、方台部上面からの深さ1.25ｍ、南溝が長さ7.85ｍ、最大幅3.22ｍ、深さ0.75ｍ、西溝が長さ9.40ｍ、最大幅3.55ｍ、深さ1.25ｍ、北溝が長さ8.48ｍ、最大幅3.05ｍ、深さ1.14ｍである。西溝の方台部側がやや膨れて掘られ、他の溝の方台部側は逆に僅かに外方に膨れる状況が看取できる。外側は東溝では外方にやや膨れて掘られる。
溝底は東溝が最深部に向いやや傾斜が認められるが、他の溝ともほぼ平坦で極端な凹凸はない。

覆土は各溝とも上層に暗青灰色ないし淡青灰色の粘土層、以下には黒褐色土が堆積する。南溝以外は掘り込みが深く、溝底はシルト層に達し、溝底付近には地山の遊離した淡青灰色土が堆積する。

出土土器は東溝では器台（10・11）、有段口縁壺(2)等があった。2はもともと破損品が投棄されたものと思われ、底面直上と間層をはさみで出土した破片が接合したが完形に復原できなかった。底部は故意に打欠かれたのか判断できない。その他の土器も比較的高いレベルの出土で、埋没過程での遺棄または投棄が考えられる。南溝では大小の壺、坩が出土した。図示したのはいずれも溝底直上の出土で、1は破損品が投棄された、4、5、6は遺棄された可能性が強い。

SR12



土層説明

A－A′，B－B′

1　暗青灰色：粘土．硬くしまる．
1′ 暗青灰色：ローム粒含む部分．
1″ 暗青灰色：方台部崩壊が起因と思われるローム粒多く含む部分．
2　淡青灰色：粘土．硬くしまる．
3　暗 褐 色：方台部崩壊が起因と思われるローム粒多く含む．
4　黒 褐 色：ローム粒少量含み．硬くしまる．
4′ 黒 褐 色：ロームブロック少量含み．硬くしまる．
4″ 黒 褐 色：粘性あり．硬くしまる．
5　黒 褐 色：シルト質．炭化物粒含む．
5′ 黒 褐 色：やや暗い部分．
5″ 黒 褐 色：方台部崩壊によるローム粒多く含む．しまり欠く．
6　暗 褐 色：ローム粒・ブロック多量含む．
7　灰 褐 色：ロームブロック含む．
8　淡青灰色：シルト質．ややしまり欠く．
9　淡青灰色：シルト質で軟弱．

第102図　第12号方形周溝墓実測図

(13) 第13号方形周溝墓（第103図、2-39－43図・図版64－67・172－177）

調査区南西部のM-8グリッドに位置、ＳＲ5－14の群中、方台部の規模は最大である。

方台部南東でＳＢ7と重複するがおそらく本周溝墓の方が新しい。また、方台部上面でその他ピットが検出されているが本周溝墓に伴うのか不明である。

平面形態は全周型で、方台部の形態は東西にやや長く、規模は上面で南北軸（短軸）長11.10ｍ、軸偏差Ｎ－4°－Ｗ、東西軸（長軸）長11.90ｍ、軸偏差Ｅ－6°－Ｎで、ＳＲ7・10と親縁性を示す。

各溝の状況は東溝が最大幅3.58ｍ、方台部上面からの深さ0.77ｍ、南溝が最大幅3.96ｍ、深さ1.09ｍ、西溝が最大幅3.88ｍ、深さ1.25ｍ、北溝が最大幅4.20ｍ、深さ0.47ｍである。各溝とも方台部側は直線的だが外方はかなりゆらぎがある。

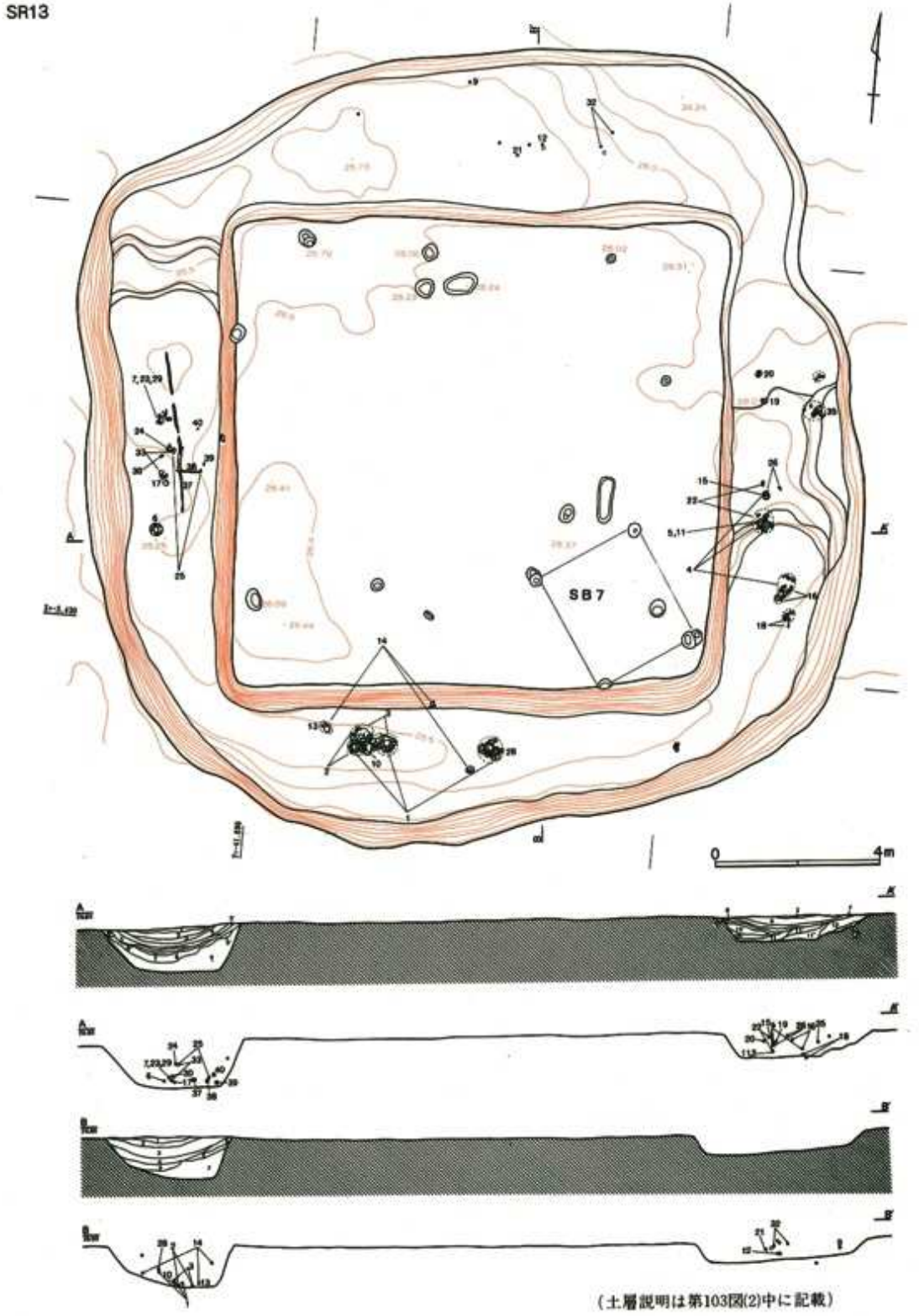
東溝底は北部でくびれて浅くなり（確認面が20cmほど低ければ一隅切型と認識されたろう）、中央外方部に不整台形のテラス状の僅かな高まりが見られ、この北で屈曲を有して南に向い深くなり、さらに南で一段深く掘られる。南溝は中央から西寄りで最大幅を有しており、深さもこの部分で最大である。全体に方台部側が深く、外方に向い浅くなる。さらに南溝は南西コーナーで狭まり、深さも浅くなり西溝に連続する。西溝は北部で最大幅を有しておりこの部分で小さな二つの段差を持って浅くなり北溝に連なる。北溝は幅が広いが深さは浅く、北東コーナーに向い浅くなる。

覆土は南・西溝では確認状況でその中央部に灰－灰褐色、または青灰色粘土層が見られた。溝底は南・西溝では基盤の砂質味の強いシルト層に達している。

出土遺物は溝底のシルト質青灰色土中にはほとんどなく、その上の灰褐色土（Ａ－Ａ'の7層）中が多い。東溝では4の大形壺や11・15・16・19の坩、18・20の壺、22の器台がこの層最下部（16・18）又は下部の出土で遺構に伴うと思われ、他は流入の可能性が強い。南溝では大形壺（1－3）、有段口縁壺（10）、坩（13・14）が溝底とわずかな間層を挟んだ暗黒褐色土（東溝の灰褐色土相当層）最下部の出土で埋没の初期の遺棄が考えられる。西溝では同じく灰褐色土層の最下部から壺(6)、坩（17）、器台（23－25）、高杯（29・30・33）が出土（24・25・33は一部覆土中層の破片が接合するが同一土層中である）、やはり埋没初期の遺棄が考えられる。

西溝では他に竿状の木製品が出土した。37は遺存状態は悪く、20－50cmに分断されて出土しているため、途中欠落した部分もある。推定長3ｍ90cm、最大径7.3cmで、広葉樹原木の樹皮を剥いただけの材を使用している。出土状況では、他に、本体に直行する位置に棒材が一点出土しているが、本体に伴って使用されたものかは不明である。

加工痕らしきものは、本体ほぼ中央の約70cmの範囲内に2－5cmのえぐりがほぼ等間隔に3箇所、先端部約1ｍの範囲内にほぞ穴状の加工が2箇所確認できる。いずれの加工もかなり劣化し、明瞭でない。これらの加工が何のためになされたものか、またはどのように機能したかは不明である。38はその西端部が33の直下からほとんど直角に重なり出土した。層位は土器類と同じく灰褐色土層（第7層）の最下部である。39－41の小木片は37の一部の可能性がある。北溝では坩（12）や脚付椀（21）、高杯（32）が遺構に伴うものだろう。（木製品の記述：野中　仁）



第103図　第13号方形周溝墓実測図(1)

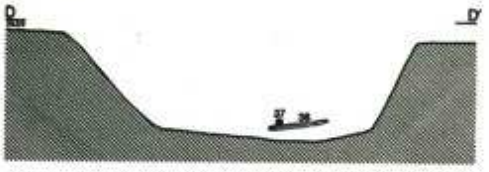
土層説明

A－A′

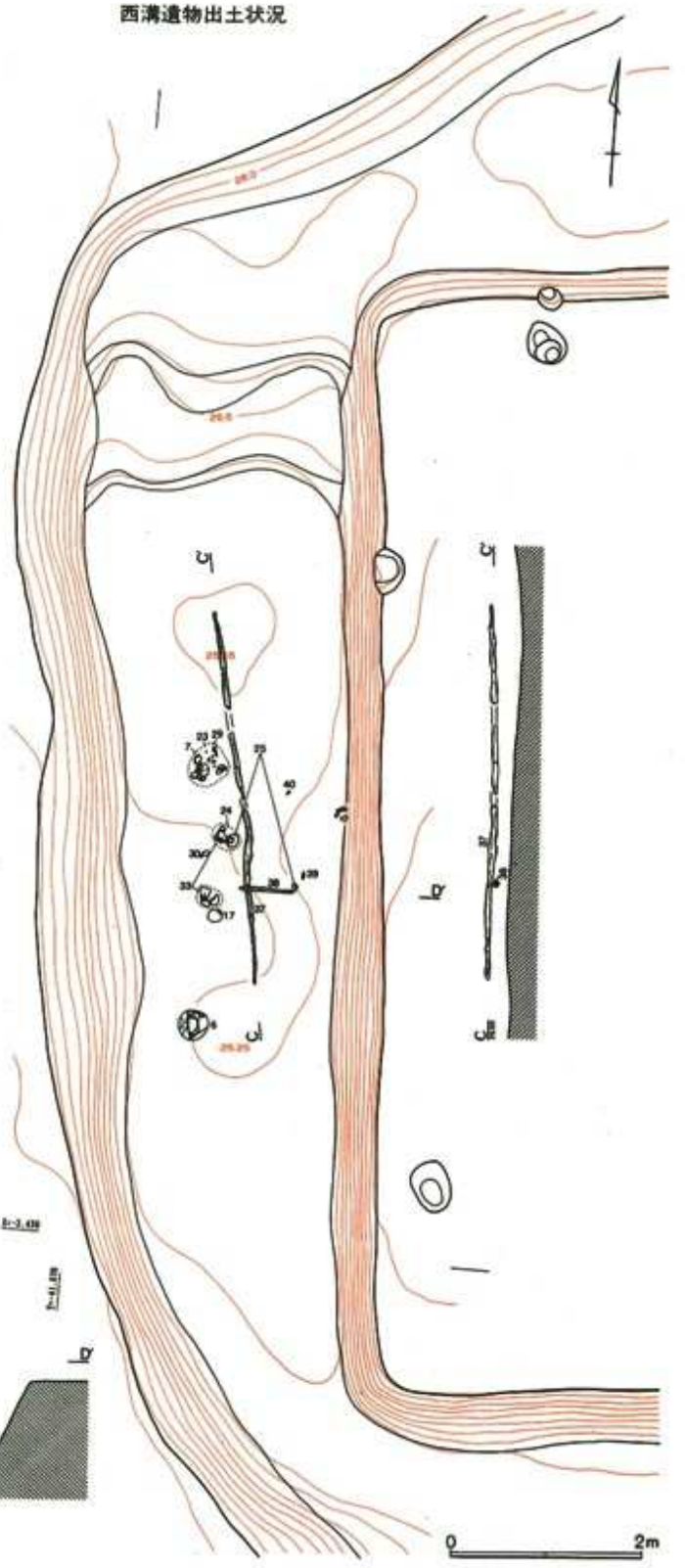
1　灰 褐 色：粘土，均質で葉理が発達する．炭化物を層状に多量含む．
2　灰　　色：粘土，炭化物，小角礫を多量含む．
3　灰 褐 色：粘土，旧表土ベースに葉理がやや発達，炭化物少量，ローム粒含む．
4　灰 褐 色：方台部崩壊流入土，旧表土を基とし，炭化物粒多少，ローム粒多量含む．
5　明灰褐色：方台部崩壊流入土，旧表土を基とし，均一，炭化物少量，ローム粒4より多量含む．
5′　明灰褐色：5のローム粒少ない部分．
6　灰 褐 色：方台部崩壊流入土，5とほぼ同質だが，ローム粒やや多い．
7　灰 褐 色：方台部崩壊流入土，5とほぼ同質だが，ローム粒多い．
8　灰 褐 色：方台部崩壊流入土，5とほぼ同質だが，ローム粒少ない．
8′　灰 褐 色：8と同質，旧表土量やや多い．
9　青 灰 色：粘土，（地山ロームの崩壊堆積土？）一部に黒色土含む．
9′　青 灰 色：粘土，9の黒色土少ない部分．粒子不鮮明．
10　青 灰 色：土質9に準ずるが，ローム粒多量含む．
10′　青 灰 色：土質9に準ずるが，ローム粒少量，黒色土少量含む．
10″　青 灰 色：土質9に準ずるが，ローム粒少量，黒色土多量含む．
11　青 灰 色：土質9に準ずるが，ローム粒・小ロームブロック，黒色土多量含む．
11′　青 灰 色：土質9に準ずるが，ローム粒少量，黒色土小ブロック多量含む．
11″　青 灰 色：11′とほぼ同質，ローム粒，黒色土ブロックやや大きい．
12　青 灰 色：旧表土を基とし，黒色土ブロック少量，ロームブロック大量に含む．
12′　青 灰 色：12のロームブロックのほとんどない部分．

B－B′

1　青 灰 色：淡灰～暗青灰色の粘土
1′　青 灰 色：1より明るく，酸化鉄粒子含む．
2　淡 灰 色：粘土．
3　青 灰 色：2に近似，粘性やや弱く，暗い．
4　暗黒褐色：黒褐色土主体でしまる．
5　暗黒褐色：4より粘性弱く，しまり欠く．
6　暗黒褐色：6より暗く，しまり欠く．
7　青 灰 色：粘土．



西溝遺物出土状況



第103図　第13号方形周溝墓実測図(2)

(14) 第14号方形周溝墓（第104図、2-43図・図版68・69・178）

調査区南西部のN-8グリッドに位置、ＳＲ5--14で群を構成するグループ中の1基である。北溝がＳＪ28と重複しており土層平面から本方形周溝墓のほうが新しいものと判断した。

平面形態は四隅切れ型で、方台部の形態は西に隣接するＳＲ12同様南北にやや長く、規模は方台部上面で南北軸（長軸）長が6.76ｍ、軸偏差Ｎ－29°－Ｗ、東西軸（短軸）長6.41ｍ、軸偏差Ｅ－29°－Ｎである。

各溝の状況は東溝が長さ5.03ｍ、最大幅1.95ｍ、方台部上面からの深さ0.70ｍ、南溝が長さ5.08ｍ、最大幅2.10ｍ、深さ1.10ｍ、西溝が長さ5.76ｍ、最大幅2.40ｍ、深さ0.83ｍ、北溝が長さ4.27ｍ、最大幅1.65ｍ、深さ0.70ｍである。東溝の南部の溝底に緩い段が認められる他、各溝底ともほぼ平坦で極端な凹凸は認められない。南溝の方台部側の壁上部はかなり古い時期に崩壊を起していると思われ、抉られるように脱落している。

覆土はほぼ自然な埋没状況で、上層に粘土層（第1層）が見られ、その下に墳丘崩壊に起因するローム粒・ブロックを含む褐色土・暗褐色土（第3・4層）、溝底面付近には有機質を含む黒褐色土（第6層）が堆積する。

出土土器のうち1の坩は南溝の底部出土で遺棄されたもの、3の器台は北溝の上層出土で溝底からのレベルはかなり高く、埋没過程での方台部からの転落だろうか。

(15) 第15号方形周溝墓（第105図、図版69）

調査区北西部のD-8グリッドに位置する。付近は主要遺構群ののる微高地北西の谷地形であり、確認当初は黒褐色土に溝の覆土の灰色の粘土が方形に見えており、平面精査して周溝墓と判断したものである。なお、本周溝墓の周囲は勿論、西方の調査区外の地区についてもトレンチを設定して遺構の検出につとめたが、他に遺構は確認できず本周溝墓は単独で構築されている。

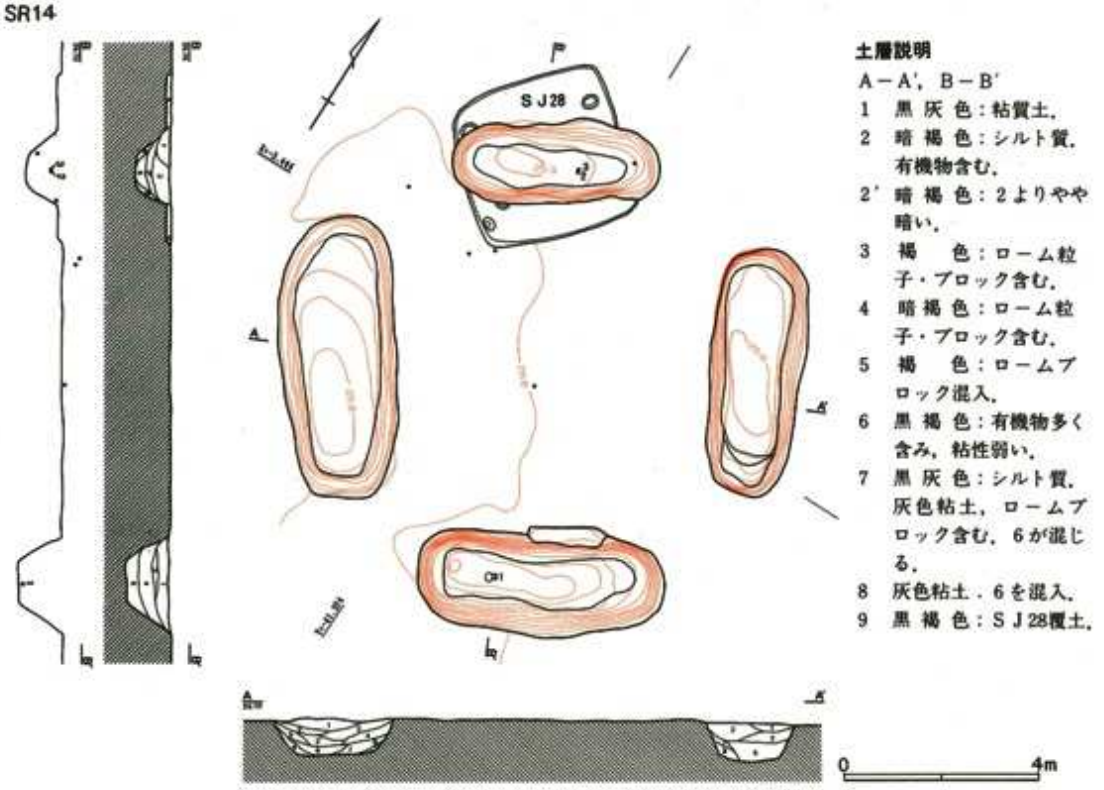
平面形態は全周型で、方台部の形態は東西にやや長く、規模は方台部上面で南北軸（短軸）長が8.43ｍ、軸偏差Ｎ－30°－Ｗ、東西軸（長軸）長9.87ｍ、軸偏差Ｅ－28°－Ｎである。西溝が東溝に比してやや長さが短く掘られているので、わずかに台形状を呈しており、軸偏差については、近い数値のものをあえて至近に所在する周溝墓から拾うとＳＲ19－21・23等がある。

各溝の状況は東溝が最大幅1.30ｍ、方台部上面からの深さ0.40ｍ、南溝が最大幅1.48ｍ、深さ0.56ｍ、西溝が最大幅1.28ｍ、深さ0.54ｍ、北溝が最大幅1.54ｍ、深さ0.64ｍである。東・西溝は方台部側壁上部が直線的に掘られるのに対し南・北溝はやや方台部側壁上端が揺らいで掘られている。外方はいずれの溝もほぼ直線的といえる。

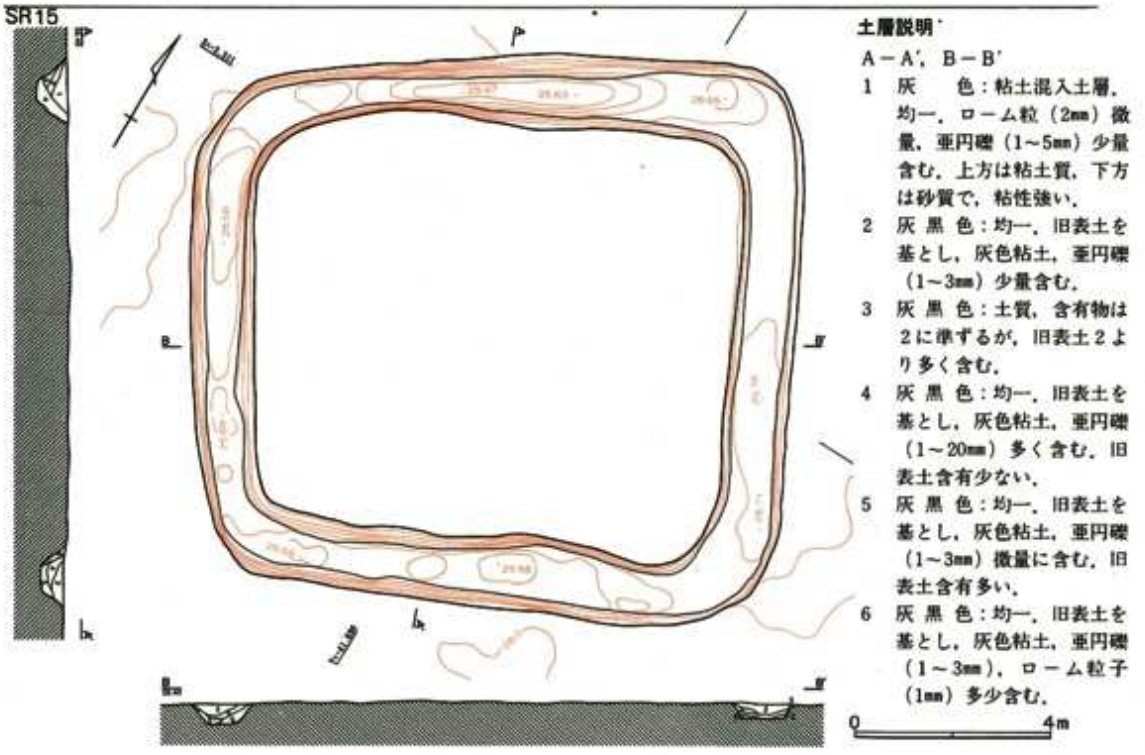
断面については各部分とも逆台形を呈する。溝底は北溝中央部がなだらかに深くなるが、各溝ともほぼ平坦で極端な凹凸は認められない。

覆土は各層とも礫を含む粘土層で、上層の一部が灰色を呈するほか旧表土を主体とする灰黒色土で壁との見分けがつけにくい。各溝とも溝底では基盤の礫を混ずるシルトローム層に達している。

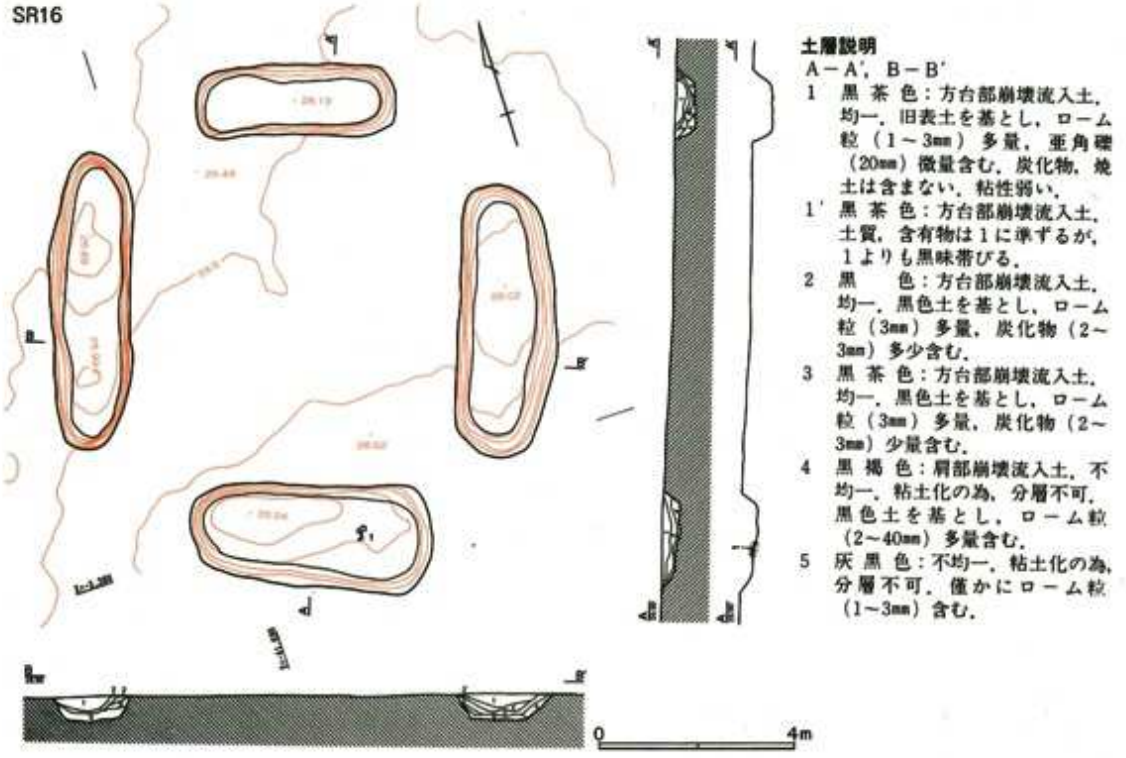
出土土器には見るべきものが無い。



第104図　第14号方形周溝墓実測図



第105図　第15号方形周溝墓実測図



第106図　第16号方形周溝墓実測図

(16) 第16号方形周溝墓（第106図、2-44図・図版69・70・178）

調査区中央西部のⅠ-8グリッドに位置する。四隅切→全周型への周溝墓の型式変化を前提に、付近の周溝墓群の構成を見ると、先にＳＲ5－14が一群を構成するのではないかということはすでに述べたが（ＳＲ9と17・18とは空間があり、かつ13と18には型式が変化するほどの時間差が存在することがその理由である）、同様に南北に連なるＳＲ20・31・35とＳＲ24・29・30の間には微妙な空隙が存在していることがわかる。そこでＳＲ16－22、ＳＲ31－36をもってひとまず一つの群として把握しておこう。さらに群内ではＳＲ21・22とＳＲ31－33の間にも空隙が存在し、同じ群内でさらに小群の構成が看取できよう。ＳＲ42についても軸偏差の点で本群中と理解しておこう。前置が長くなったが本周溝墓について記述していこう。平面形態は四隅切れ型で方台部の形態は南北にやや長く、規模は方台部上面で南北軸（長軸）長が7.12ｍ、軸偏差Ｎ－20°－Ｅ、東西軸（短軸）長6.73ｍ、軸偏差Ｅ－18°－Ｓである。

各溝の状況は東溝が長さ5.50ｍ、最大幅2.03ｍ、方台部上面からの深さ0.50ｍ、南溝が長さ4.90ｍ、最大幅2.18ｍ、深さ0.38ｍ、西溝が長さ5.93ｍ、最大幅1.63ｍ、深さ0.50ｍ、北溝が長さ4.06ｍ、最大幅1.43ｍ、深さ0.37ｍである。北・南溝は方台部側が外方にごく僅かに膨らむ。溝底は各溝ともほぼ平坦で極端な凹凸はなく、断面は緩い逆台形を示す部分が多い。

覆土は上・中層に方台部墳丘崩壊に起因の考えられる黒茶－黒色土が堆積する。

出土土器は貧弱で、図示したのは南溝東部よりの溝底からの坩が1点である。溝底に密着した状況の出土で、遺棄された可能性が強い。穿孔は行われていない。

(17) 第17号方形周溝墓（第107図、2-44・45図・図版71・178－180）

調査区中西部のＪ-8グリッドに位置する。前述のＳＲ16のすぐ南に隣接して所在する。東溝がＳＪ30を切っており、方台部にはＳＸ2が所在する。このＳＸ2との切り合いはないが方台部の精査中に明確となったもので本周溝墓より古い時期が想定できよう。

平面形態は四隅切れ型で、方台部の形態は南北にやや長く、規模は方台部上面で南北軸（長軸）長が11.06ｍ、軸偏差Ｎ－10°－Ｅ、東西軸（短軸）長9.71ｍ、軸偏差Ｅ－10°－Ｓである。各軸の振れ方からは北のＳＲ16と親縁性を有しているのがわかる。

各溝の状況は東溝が長さ9.00ｍ、最大幅3.86ｍ、方台部上面からの深さ0.82ｍ、南溝が長さ8.33ｍ、最大幅3.65ｍ、深さ0.45ｍ。西溝が長さ8.38ｍ、最大幅3.05ｍ、深さ0.80ｍ、北溝が長さ9.30ｍ、最大幅3.20ｍ、深さ0.62ｍである。東溝は方台部側が南側でやや内側に狭くなる。

東溝の溝底は中央部方台部側のやや北寄りが最も深くなっており不整形の段が認められ、さらにその南に段が2つ連なる。南溝底も西部中央から南東部にかけ北側が緩い段を持ち深くなり、浅い落ち窪みが2個所認められる。北溝もこれと対称をなすように溝底北西に緩い段が認められ、西溝も北西に緩い段がつく。各溝とも方台部側の壁面は角度をもって平坦に掘られているが、外方はダラダラと浅くなる個所が多い。

覆土は東・南・西溝上部に灰色粘土（第1・1'層）の堆積が見られるほか、各溝とも方台部墳丘の崩壊に起因の考えられる灰褐色土（第2・2'・3・3'層）が主体となり、ほぼ自然な埋没状況を示している。各溝底は西溝がローム層中にとどまるが、東・南・北溝とも再堆積ローム下の小径礫を含む層にまで掘り込まれている。

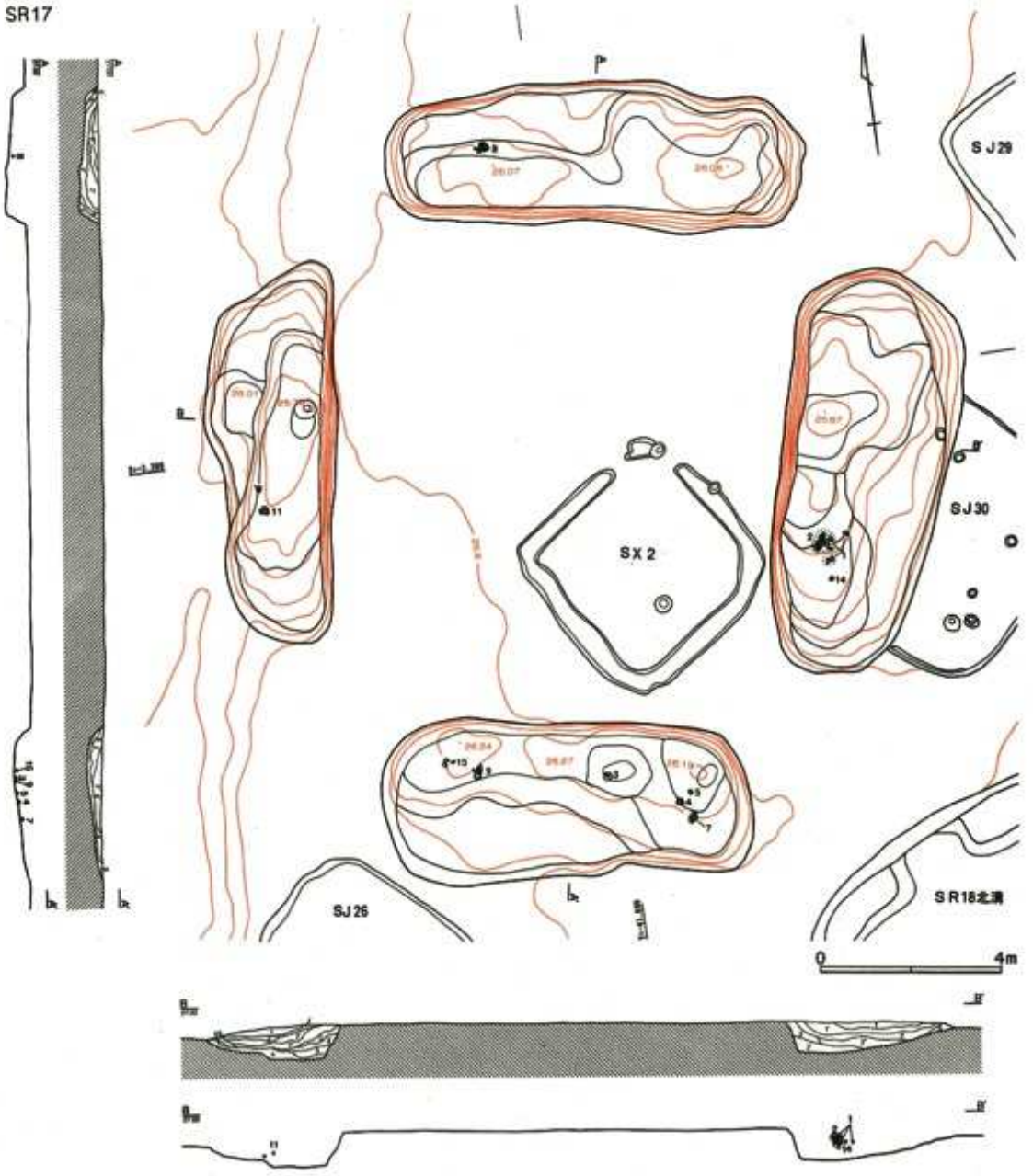
土器は各溝から出土する。東溝では中央やや南寄りの位置から大形の壺（1・2：おそらく同一個体）、台付甕の台部破片（14）がある。出土レベルは溝底からやや浮いており、埋没過程での投棄、または流入であろう。南溝からは中央北東寄りの溝底からやや浮いた状況で折返口縁壺(3)が、東部からは同じく折返口縁壺の破片(4)や単口壺(7)が、西部方台部寄りからは大形の坩(9)と器台（15）がいずれも溝底面とは10－15cmほどの間層をはさんで出土、埋没の早い段階での遺棄が考えられよう。10の坩は南溝の出土だが覆土中一括品である。西溝からは11の台付甕破片が中央南西部の溝底から20cmほど浮いての出土で、埋没途中に流入または投棄が考えられる。北溝西部からは8の大形坩が破片となって溝底からやや浮いて出土しており、埋没の早い段階での投棄が考えられよう。

(18) 第18号方形周溝墓（第108図、2-45図・図版72・180）

調査区中西部やや南よりのＬ-9グリッドに位置、ＳＲ17の南東、ＳＲ13の北東に近接する。西溝とＳＪ27の北東半が重複し、土層断面から本方形周溝墓のほうが新しいと判断した。

平面形態は四隅切れ型で、方台部の形態は東西にやや長く、規模は方台部上面で南北軸（短軸）長が9.88ｍ、軸偏差Ｎ－21°－Ｗ、東西軸（長軸）長11.03ｍ、軸偏差Ｅ－17°－Ｎである。近接する方形周溝墓ではＳＲ22と主軸の親縁性が認められる。

各溝の状況は東溝が長さ8.54ｍ、最大幅3.14ｍ、方台部上面からの深さ0.39ｍ、南溝が長さ9.16ｍ、最大幅3.20ｍ、深さ0.30ｍ、西溝が長さ7.80ｍ、最大幅3.14ｍ、深さ0.52ｍ、北溝が長さ8.95ｍ、



土層説明

A－A′，B－B′

1　灰色粘土：均一，ローム粒（1～2mm）・亜角礫（5～20mm）多少，炭化物（1～2mm）多量含む．
1′　灰色粘土：均一，ローム粒，炭化物共1より少ない．
2　灰 褐 色：均一，掘削土再流入土，ローム粒（1～2mm），炭化物（1mm）少量含む．
2′　灰 褐 色：均一，掘削土再流入土，ローム粒2よりやや大きく，炭化物含まない．
2″　灰 褐 色：均一，掘削土再流入土，ローム粒2より少なく，炭化物少量含む．
3　灰 褐 色：均一，掘削土再流入土，ローム粒2より多い．
3′　灰 褐 色：均一，掘削土再流入土，ローム粒2より少ない．
4　灰 褐 色：均一，旧表土流入土，旧表土を基とし，ローム粒（1～3mm）少量含む．
5　青 灰 色：均一，壁崩壊流入土，地山を基とし，旧表土ブロック（2～20mm）多く含む．
6　暗 褐 色：均一，壁崩壊流入土，旧表土を基とし，ローム粒（1mm）含む．
6′　暗 褐 色：均一，壁崩壊流入土，旧表土を基とし，ローム粒（1mm）多く含む．

第107図　第17号方形周溝墓実測図

最大幅3.84m、深さ0.50mである。

東溝はその南部溝底がわずかに深くなる部分が認められる他、西溝では中央部から北が緩い段を有して深くなり、北部が不整形の浅い土壙状に深くなっている。また、南溝と北溝は方台部側の壁面は比較的きちんと掘られるが外方はダラダラと浅く掘られている。

覆土は黒色土を主体とし、溝底面付近に砂質味の強い灰白色土の堆積する部分もあった。

出土土器は東溝からは台付甕（10）と高杯（13）の破片があり、いずれも外方の壁にかかる高い位置からの出土で埋没過程での流入が考えられる。南溝では小形の壺（3・4）や脚付壺（12）等、破片を含め比較的多数の土器の出土を見た。溝底とは間層をはさみ、埋没の早い過程で外方から流入または投棄された状況にある。3・4は底部に焼成後穿孔され、本方形周溝墓に伴う可能性が強い。西溝では台付甕の破片が2点（6・8）あるが、これも出土レベルが高く流入または投棄の可能性が強い。北溝でも台付甕の台部破片（9・11）が北東部で出土したが、やはり流入の可能性が強いだろう。

(19) 第19号方形周溝墓（第109図、2-46図・図版72・180）

調査区中西部のG-9グリッドに位置する。

南溝がＳＲ21とわずかに重複するが、ローム層の上面では新旧関係の把握は不可能である。土層断面の観察からするとＳＲ21の周溝覆土が本方形周溝墓の埋没土の上部を覆って堆積している。このことで直ちに先後関係は判断できないが、ＳＲ21の下層の土が堆積する頃には本周溝墓の南溝埋没はかなり進んでいたということができよう。

そのほかＳＪ1・2・32とも重複するが、いずれよりも本方形周溝墓のほうが新しい。

平面形態は一隅切れ型で、方台部の北西のコーナーが浅くなりブリッジ状を呈している。方台部の形態は東西にわずかに長く、規模は方台部上面で南北軸（短軸）長が9.12m、軸偏差Ｎ－34°－Ｗ、東西軸（長軸）長9.80m、軸偏差Ｅ－34°－Ｎである。

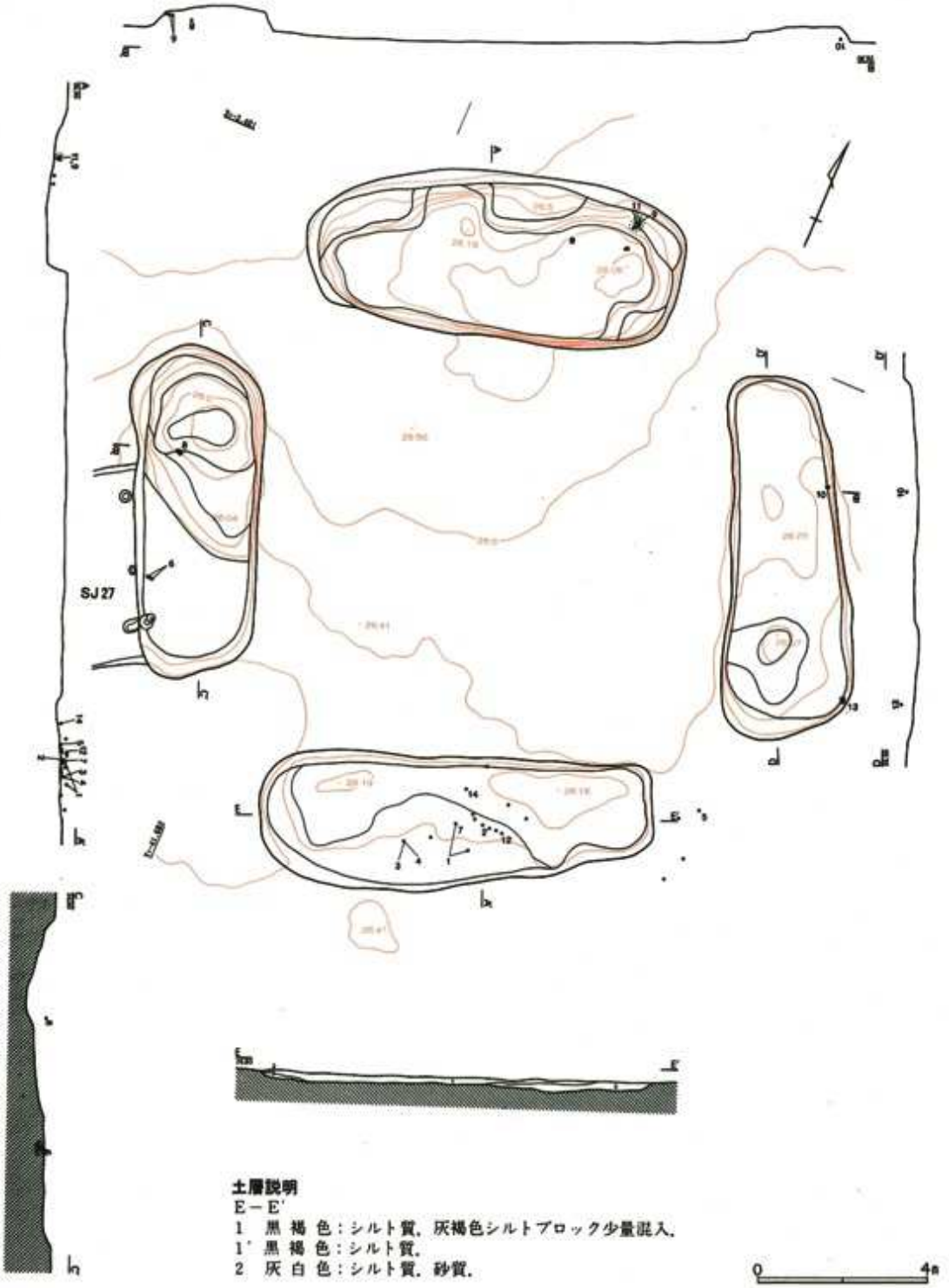
各溝の状況は東溝が最大幅2.72m、方台部上面からの深さ0.67m、南溝が最大幅2.48m、深さ0.76m、西溝が最大幅2.34m、深さ0.50m。北溝が最大幅2.60m、深さ0.22mである。

東溝は中央付近で段差を有し南が深く、コーナー付近にわずかな土壙状の掘り込みが認められる。南溝は中央付近に同様の浅い掘り込みがあり、西部に周囲から15－25cm深い掘り込みがあり、所謂溝内壙の可能性があるが、覆土中で明確な掘り込みは把握できなかった。西溝はほぼ平坦だが北に向い徐々に浅くなり、北溝も深さが西に向い浅くなり溝が消失するように途切れている。

覆土は上、下層とも方台部の墳丘崩壊土と思われるローム粒を含む灰黒色・灰茶色土が主体をなして堆積する。

出土土器は少なく、図示できたのは南溝西部からの有段口縁と思われる壺(1)があるのみである。出土レベルが高く、溝がかなり埋没した段階での流入または投棄された可能性が考えられる。

SR18



第108図　第18号方形周溝墓実測図